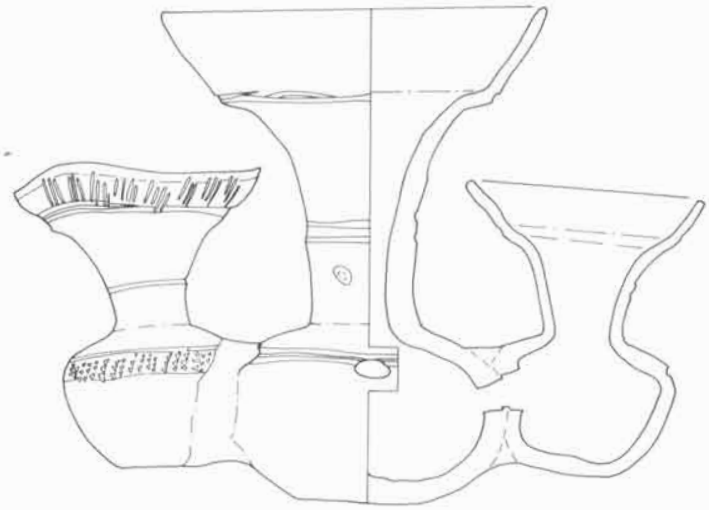
富士見地区遺跡群

陣場（じんば）・庄司原（しょうじはら）古墳群

平成元年度県営ほ場整備事業富士見地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1991

群馬県勢多郡富士見村教育委員会

陣場遺跡全景（陣場1・2号古墳）

上庄司原１号古墳全景

上庄司原１号古墳石室入口及び前庭

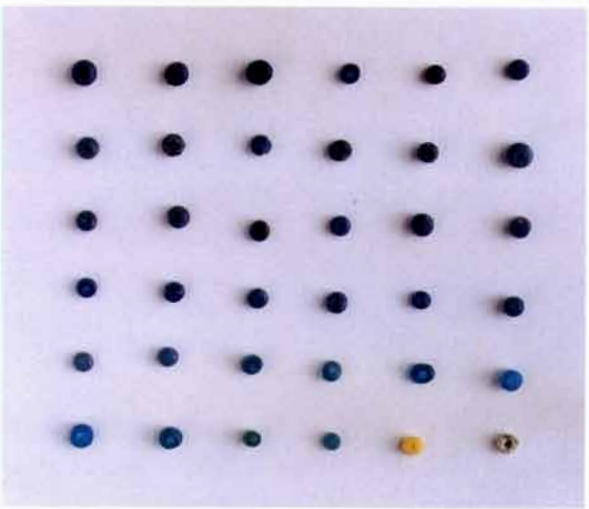
上庄司原４号古墳石室及び前庭

上庄司原２号古墳玄室遺物出土状況

上庄司原西遺跡１号方形周溝墓　赤色顔料出土状況

下庄司原東遺跡３号方形周溝墓　出土土器

上庄司原２号古墳　玄室出土土器



上庄司原２号古墳　玄室出土ガラス小玉

上庄司原４号古墳　墳丘盛土断面

序　　文

富士見村では昭和58年度から本村の南西部を中心に県営ほ場整備事業富士見地区を実施しています。本報告書の陣場・庄司原古墳群の調査は平成元年度に行いました。

陣場・庄司原遺跡群は大字横室に所在し、古くから本村の中でも最も遺跡が濃密に分布するといわれておりました。特に陣場遺跡の畑地表面には多量の遺物が散布しており、群馬大学の学生や土器・石器の収集家がたびたび訪れていたと聞いております。

発掘調査では部分的な調査にもかかわらず、古墳７基･方形周溝墓５基の他、縄文時代から平安時代の竪穴住居跡200軒以上が検出され､これまで行われた調査の中でも最も大規模な調査となりました。多量の遺物も出土しています。

都合により今回は古墳時代の墳墓だけの報告となりましたが、できるだけ早い時期に集落部分の報告も行いたいと考えています。

地権者を初めとする土地改良関係者、村議会などのご尽力により幸いにも上庄司原１号古墳は現地で保存されることになりました。保存整備の具体的な検討はこれからの課題ですが、地域学習の一助として活用していきたいと考えています。

酷暑・酷寒の中発掘調査に従事された作業員の皆様、厳しい条件の中調査の遂行に助力していただいた多くの皆様に心より感謝申し上げ序といたします。

平成３年３月

富士見村教育委員会

教育長　鈴　木　清　茂

例　　言

1．本書は県営圃場整備事業に伴い事前調査を行った陣場・庄司原遺跡群のうち、古墳時代の墳墓についての発掘調査報告書である。

2．遺跡の所在地は群馬県勢多郡富士見村大字横室字陣場・上庄司原・下庄司原である。

3．発掘調査および整理事業は、国宝重要文化財等保存整備費国庫補助金、群馬県文化財保存事業費補助金、村費、及び前橋土地改良事務所委託金を使用して行った。

4．発掘調査及び整理事業の期間は以下のとおりである。

　発掘調査　平成元年４月15日～平成２年１月10日

　整理期間　平成２年４月１日～平成３年３月31日

5．調査組織は以下のとおりである。

事 務 局

　教　育　長　　鈴木清茂

　社会教育課長　　狩野　透

　社会教育係長　　本多幸一

調査担当

　社会教育課主事　羽鳥政彦

6．本書の編集・執筆、遺構・遺物の写真撮影は羽鳥が行った。遺物実測、遺構・遺物の図版トレース・版組は舩津かほるを中心に阿久沢志津子、木暮朱実、斎藤正子、田村節子、平沢小夜子が行った。

7．発掘調査及び整理作業、さらに本書の作成にあたり下記の方々よりご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略）

群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県埋蔵文化財調査事業団　群馬県埋蔵文化財センター
前橋土地改良事務所　富士見村役場土地改良課　富士見・北橘土地改良区
相京建史　秋池武　麻生敏隆　飯塚誠　井上唯雄　梅沢重昭　加部二生　木津博明　小島敦子
小島純一　近藤尚嗣　坂口一　桜場一寿　鹿田雄三　白石太一郎　津金沢吉茂　徳江秀夫　富沢敏弘
西田健彦　飛田野正佳　細野高伯　真下高幸　松本浩一　右島和夫　山下歳信　綿貫鋭次郎

8．発掘調査作業員は以下のとおりである。

阿久沢志津子　和泉沢三重子　伊藤ふさ枝　大川悦子　大友里江　大友美耶子　金沢とみ子　金子和也
金子さよ子　狩野富美枝　狩野正子　狩野光江　狩野かほる　樺沢登美江　木暮朱実　木暮くに子
木村利男　小林たく　近藤千恵子　坂庭けい子　斎藤和子　斎藤正子　塩沢雪江　下田ともみ
鈴木朋茂　高山以津子　田村節子　田村テイ　田村十三江　中島伸幸　中野きよえ　奈良半平　林京子
平沢小夜子　蛭川桂子　福田松江　舩津かほる　船津憲一郎

9．発掘調査によって出土した遺物は富士見村教育委員会で保管している。

10．発掘調査にご協力いただいた地元地権者、工事役員をはじめ、関係諸機関に感謝申し上げるとともに、上庄司原１号古墳の現地保存についてご尽力いただいた方々及び諸機関に感謝申し上げます。特に村議会総務常任委員関口隆正氏のお力添えと、土地所有者である大友正男氏のご協力がなければ果たせなかったことであり、改めて心より感謝申し上げます。

凡　　例

1．本書の挿図の方位は座標北を示す。

2．挿図縮尺は基本的に以下のとおりであるが、例外もあるので図中のスケールを参照していただきたい。

遺構

遺跡群全体図	1/5000
方形周溝墓全体図	1/100、1/120
周溝土層断面図	1/40
古墳全体図	1/200、1/240
石室展開実測図	1/40
前庭部実測図	1/60
周堀土層断面図	1/80
墳丘断割土層断面図	1/80
石室遺物出土状態図	1/40、1/60

遺物

土器		1/3、1/4
		1/5（須恵器甕）
鉄器	刀類	1/5、1/4
	鉄鏃・馬具	1/2
	ガラス小玉	1/1
	帯金具	2/3

3．巻末の遺物写真の縮尺は統一していない。

4．遺構図の出土遺物及び出土位置ドットに付けられた数字は遺物実測図の番号と一致する。

5．第1図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図「渋川」を一部加筆して使用した。
第2図は富士見村役場発行の2千5百分の1原形図を1/5000に縮尺して使用した。

6．石室の左・右は入口側から奥壁へ向かっての左・右である。前庭部も同様である。

7．古墳の墳丘法面等の石積については、葺石、貼石、外護列石などと呼称されているが、本書では葺石、石積の両者を用いている。但し、検出状況や性格を厳密に規定して使い分けているわけではない。

目　　次

序文
例言
凡例
目次・図版目次・表目次・写真図版目次
I　発掘調査の経緯
1．発掘調査に至る経緯……1
2．発掘調査の経過……1
II　地理的・歴史的環境
1．遺跡の位置……3
2．周辺の遺跡……3
3．遺跡の立地と陣場・庄司原遺跡群の概要……3
III　調査の方法……6
IV　土層堆積……6
V　検出された遺構と遺物
1．方形周溝墓
(1)　下庄司原東遺跡1号方形周溝墓……9
(2)　下庄司原東遺跡2号方形周溝墓……9
(3)　下庄司原東遺跡3号方形周溝墓……12
(4)　下庄司原東遺跡4号方形周溝墓……15
(5)　上庄司原西遺跡1号方形周溝墓……15
2．古　　墳
(1)　陣場1号古墳……21
(2)　陣場2号古墳……28
(3)　下庄司原1号古墳……35
(4)　上庄司原1号古墳……39
(5)　上庄司原2号古墳……51
(6)　上庄司原3号古墳……63
(7)　上庄司原4号古墳……67
3．遺物観察表……76
VI　発掘調査の成果と課題
1．方形周溝墓のまとめ……86
2．古墳の構築工程について……86
3．陣場・庄司原古墳群の変遷について……88
4．古墳の外観（外部構造）について……93
5．その他の問題と課題……96

図版目次

第1図　遺跡の位置及び周辺の遺跡図……2
第2図　陣場・庄司原遺跡群全体図……4
第3図　基本土層模式図……6
第4図　下庄司原東遺跡1～3号方形周溝墓……8
第5図　下庄司原東遺跡1号方形周溝墓全体図(1)……10
第6図　〃　全体図(2)……11
第7図　〃　出土遺物……12
第8図　下庄司原東遺跡2号方形周溝墓全体図……13
第9図　〃　出土遺物……13
第10図　下庄司原東遺跡3号方形周溝墓全体図……14
第11図　〃　出土遺物……14
第12図　下庄司原東遺跡4号方形周溝墓全体図……16
第13図　下庄司原東遺跡4号方形周溝墓及び甕棺墓……17
第14図　〃　出土遺物…18
第15図　上庄司原西遺跡1号方形周溝墓全体図……19
第16図　〃　出土遺物……20
第17図　陣場1号古墳全体図(1)……22
第18図　〃　全体図(2)……23
第19図　〃　石室展開図(1)……24
第20図　〃　石室展開図(2)……25
第21図　〃　前庭部……26
第22図　〃　出土遺物実測図(1)……27
第23図　〃　出土遺物実測図(2)……28
第24図　陣場2号古墳全体図……29
第25図　〃　石室及び葺石検出状況……30
第26図　〃　石室展開図……31
第27図　〃　出土遺物……32
第28図　下庄司原1号古墳全体図……33
第29図　〃　前庭部石積み……35
第30図　〃　石室展開図(1)……36
第31図　〃　石室展開図(2)……37
第32図　〃　全体図(1)……40
第33図　〃　全体図(2)……41
第34図　〃　前庭部……41
第35図　上庄司原1号古墳墳丘葺石展開図……42
第36図　〃　羨道部閉塞状況……43
第37図　〃　石室展開図(1)……44
第38図　〃　石室展開図(2)……45
第39図　〃　石室展開図(3)……46
第40図　〃　遺物出土位置図……47
第41図　〃　遺物実測図(1)……48
第42図　〃　遺物実測図(2)……49
第43図　〃　遺物実測図(3)……50
第44図　〃　遺物実測図(4)……51
第45図　上庄司原2号古墳全体概念図……52
第46図　〃　墳丘断ち割り、周堀土層断面図…53
第47図　〃　石室展開図(1)……54
第48図　〃　石室展開図(2)……55
第49図　〃　遺物出土位置図……57
第50図　〃　出土遺物(1)……58
第51図　〃　出土遺物(2)……59
第52図　〃　出土遺物(3)……59
第53図　〃　出土遺物(4)……60
第54図　〃　出土遺物(5)……61
第55図　〃　出土遺物(6)……62
第56図　上庄司原3号古墳全体図……63
第57図　〃　石室及び裏込検出状況……63
第58図　〃　石室展開図(1)……64
第59図　〃　石室展開図(2)……65
第60図　〃　出土遺物……65
第61図　上庄司原4号古墳前庭部……68
第62図　〃　石室及び葺石検出状況……68
第63図　〃　全体図……69
第64図　〃　石室展開図……71
第65図　〃　沓石及び掘り方……74
第66図　〃　出土遺物……75
第67図　墳丘推定復元図……95

表目次

第1表　陣場・庄司原遺跡群概要表……7
第2表　下庄司原東遺跡1号方形周溝墓遺物観察表……76
第3表　下庄司原東遺跡2号方形周溝墓遺物観察表……76
第4表　下庄司原東遺跡3号方形周溝墓遺物観察表……76
第5表　下庄司原東遺跡4号方形周溝墓遺物観察表……77
第6表　上庄司原西遺跡1号方形周溝墓遺物観察表……77
第7表　陣場1号古墳出土土器観察表……78
第8表　陣場1号古墳出土鉄製品計測表……78
第9表　陣場2号古墳出土土器観察表……78
第10表　陣場2号古墳出土鉄製品計測表……78
第11表　上庄司原1号古墳出土土器観察表……79
第12表　上庄司原1号古墳金属製品計測表(鉄鏃以外)……80
第13表　上庄司原1号古墳出土鉄鏃計測表……81
第14表　上庄司原2号古墳出土土器観察表……82
第15表　上庄司原2号古墳出土ガラス小玉計測表……83
第16表　上庄司原2号古墳金属製品(鉄鏃以外)計測表……83
第17表　上庄司原2号古墳鉄鏃計測表……84
第18表　上庄司原3号古墳出土土器観察表……85
第19表　上庄司原3号古墳出土鉄製品計測表……85
第20表　上庄司原4号古墳出土土器観察表……85
第21表　上庄司原4号古墳金属製品計測表……85
第22表　古墳概要表……91
第23表　墳丘・石室規模一覧表……91
第24表　石室構成比一覧表……91

写真図版目次

巻頭図版

巻頭1　陣場遺跡全景
巻頭2　上庄司原1号古墳全景
　　上庄司原1号古墳石室入口及び前庭
巻頭3　上庄司原4号古墳石室及び前庭
　　上庄司原2号古墳玄室遺物出土状況
巻頭4　上庄司原西遺跡1号方形周溝墓　赤色顔料出土状況
　　下庄司原東遺跡3号方形周溝墓　出土土器
　　上庄司原2号古墳　玄室出土土器
　　上庄司原2号古墳　玄室出土ガラス小玉
　　上庄司原4号古墳　墳丘盛土断面

写真図版

PL 1　1　下庄司原東遺跡と下庄司原1号古墳
PL 2　1　下庄司原東遺跡方形周溝墓群
　　2　上庄司原4号古墳と上庄司原西遺跡
PL 3　調査前現況
PL 4・5　下庄司原東遺跡　1・2・3号方形周溝墓
PL 6　下庄司原東遺跡　4号方形周溝墓
PL 7　上庄司原西遺跡　1号方形周溝墓
PL 8～10　陣場1号古墳
PL11　陣場2号古墳
PL12・13　下庄司原1号古墳
PL14～17　上庄司原1号古墳
PL18～21　上庄司原2号古墳
PL22　上庄司原3号古墳
PL23～27　上庄司原4号古墳
PL28　方形周溝墓出土遺物
PL29　下庄司原東遺跡4号方形周溝墓出土土器・上庄司原1号古墳出土土器
PL30　陣場1号古墳・上庄司原2号古墳出土土器
PL31　古墳出土遺物（鉄器等）
PL32　上庄司原2号古墳出土遺物（鉄器等）

Ⅰ　発掘調査の経緯

1．発掘調査に至る経緯

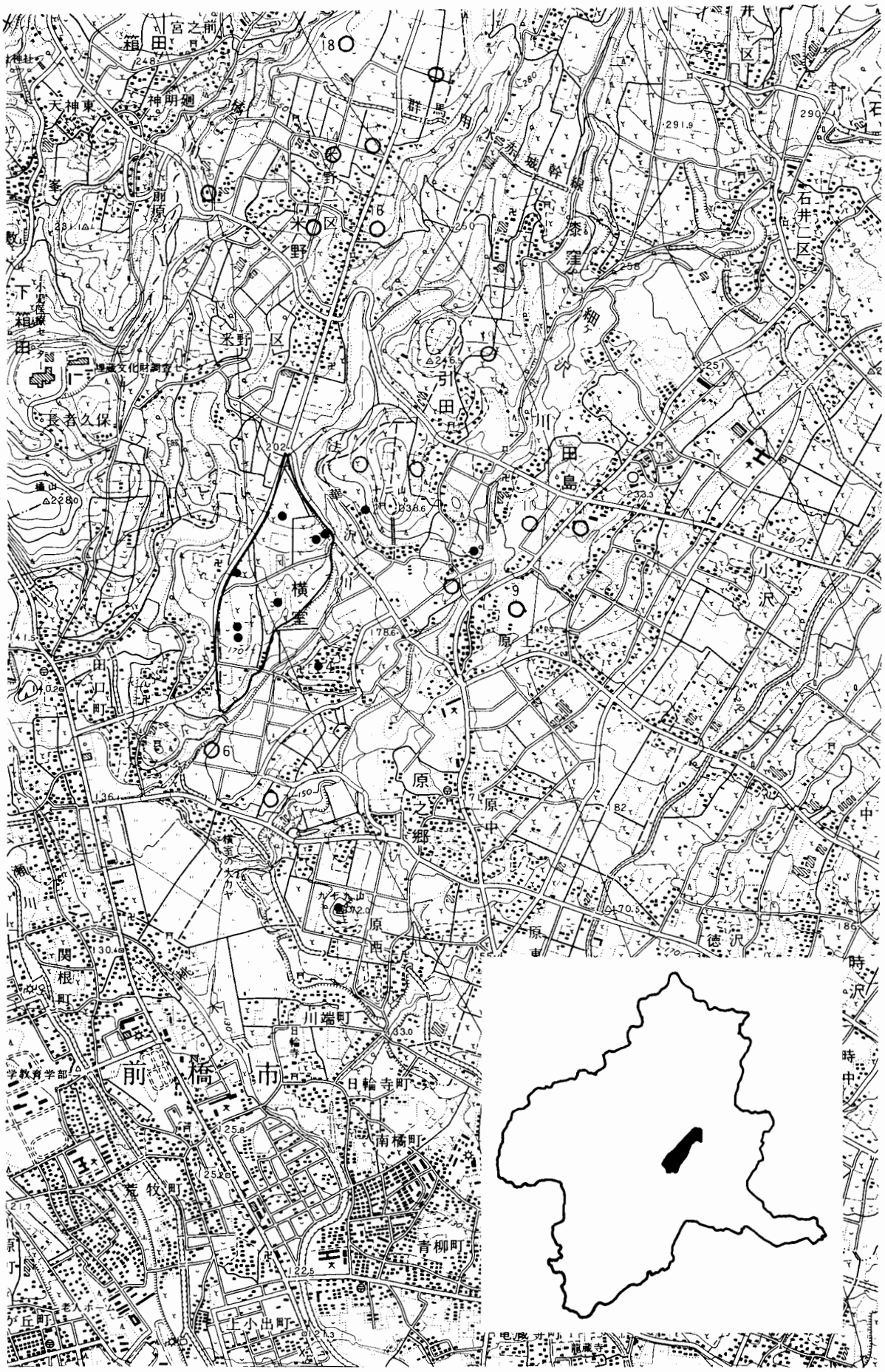
富士見村では昭和58年度から県営ほ場整備事業富士見地区に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行っている。昭和64年度には大字横室の字陣場、字上庄司原、字下庄司原で面工事が予定されていたが、本地域は富士見村でも有数の遺跡地帯として周知されていたため、年度当初から発掘調査に着手できるように、昭和63年度の早い段階から関係機関と協議を行った。昭和63年度の発掘調査は大字米野において６月から10月まで行ったが、調査終了後のできるだけ早い時期に試掘調査を行い、調査計画を立てることとなった。試掘調査は主に道水路予定地部分について行うこととなったが、面工事実施年度以前の調査であるため上作物補償が必要となり、その物件調査と遺物散布調査を合わせてまずおこなった。約24haの工事予定面積のうちの過半部、約15haに遺物の散布が認められた。試掘調査は平成元年１～３月に行い、この結果を元に前橋土地改良事務所、富士見村役場土地改良課、富士見・北橘土地改良区、村教育委員会で協議を行い本調査の区域、調査期間等が決定された。

2．発掘調査の経過

発掘調査は平成元年度当初から調査準備を行い、ほ場整備事業の工事工程に合わせて、４月中旬にまず陣場遺跡から開始した。

陣場遺跡の調査はまず南北の支線の平安時代集落の調査から開始し、順次横幹線から縦幹線およびその東の切土部分へと進んだ。縄文時代集落の調査は切土部分と縦幹線から開始し、平安時代集落とはほぼ逆の工程で進んでいった。古墳の調査には長期間かかると予想されたため、集落の調査と並行する形で当初から着手した。まず陣場１号古墳の立木の伐採を行ったが、終了間際に樹上で小鳥が営巣中であったため一旦伐採を中止し、２号古墳の調査を先行し、１号古墳はひな鳥の巣立ちを待って調査を再開した。８月中旬に現地説明会を行い、９月中旬には終了した。下庄司原西遺跡の調査は９月初旬から表土剝ぎを開始した。縄文時代の遺構・遺物が少なかったため、平安時代集落と並行して調査を行った。この間、陣場１・２号古墳の墳丘断割調査、下庄司原１号古墳の調査も並行して進めた。下庄司原西遺跡の集落部分の調査が終了した段階で下庄司原東遺跡の調査を開始した。下庄司原東遺跡はおおむねＡ～Ｄ区の順に方形周溝墓を優先する形で、平安時代～縄文時代へと調査を進めたが、この間に下庄司原１号古墳の調査を終了し、さらに上庄司原４号古墳・２号古墳の調査を開始した。下庄司原東遺跡の調査の終了後、上庄司原２号古墳・４号古墳の石室調査が一段落した段階で上庄司原西遺跡１号方形周溝墓・平安時代集落の調査を行い、上庄司原１号古墳の調査も着手した。さらに、上庄司原２・４号古墳の外部施設調査から上庄司原東遺跡集落調査へと進み、この間上庄司原３号古墳の調査も並行して行った。

上庄司原１号古墳の調査は記録保存の予定で開始したが、予想以上に残りが良かったため現状保存も視野にいれての調査となった。紆余曲折はあったが、最終的には現地保存と決定されたため、墳丘の断ち割り、解体調査は行っていない。上庄司原２号古墳と４号古墳も現地保存を目指し協議を行ったが、最終的に記録保存と決定されたため、不十分ではあるが解体調査を行った。なお、石室石材については移築の予定で上庄司原１号古墳脇に保存した。



第１図　遺跡の位置及び周辺の遺跡図

II　地理的・歴史的環境

1．遺跡の位置

富士見村は群馬県のほぼ中央部に位置する。上毛三山の一峰赤城山の南西麓から赤城山頂までを含む狭長な村である。県庁所在地である前橋市の北側に隣接しており、さらに西側には北橘村・赤城村、東側には宮城村・大胡町など赤城山麓の勢多郡の各町村が隣接している。

陣場・庄司原遺跡群の所存する字横室は富士見村の南西端部に位置する。遺跡群はさらにその西端に位置し、道路を隔てて前橋市田口町と接している。北西約１kmには㈶群馬県埋蔵文化財調査センターがある。

2．周辺の遺跡

陣場・庄司原遺跡群（第１図１）周辺には様々な時代、種類の遺跡が分布しているが、ここでは古墳時代（特に古墳）を中心に説明したい。

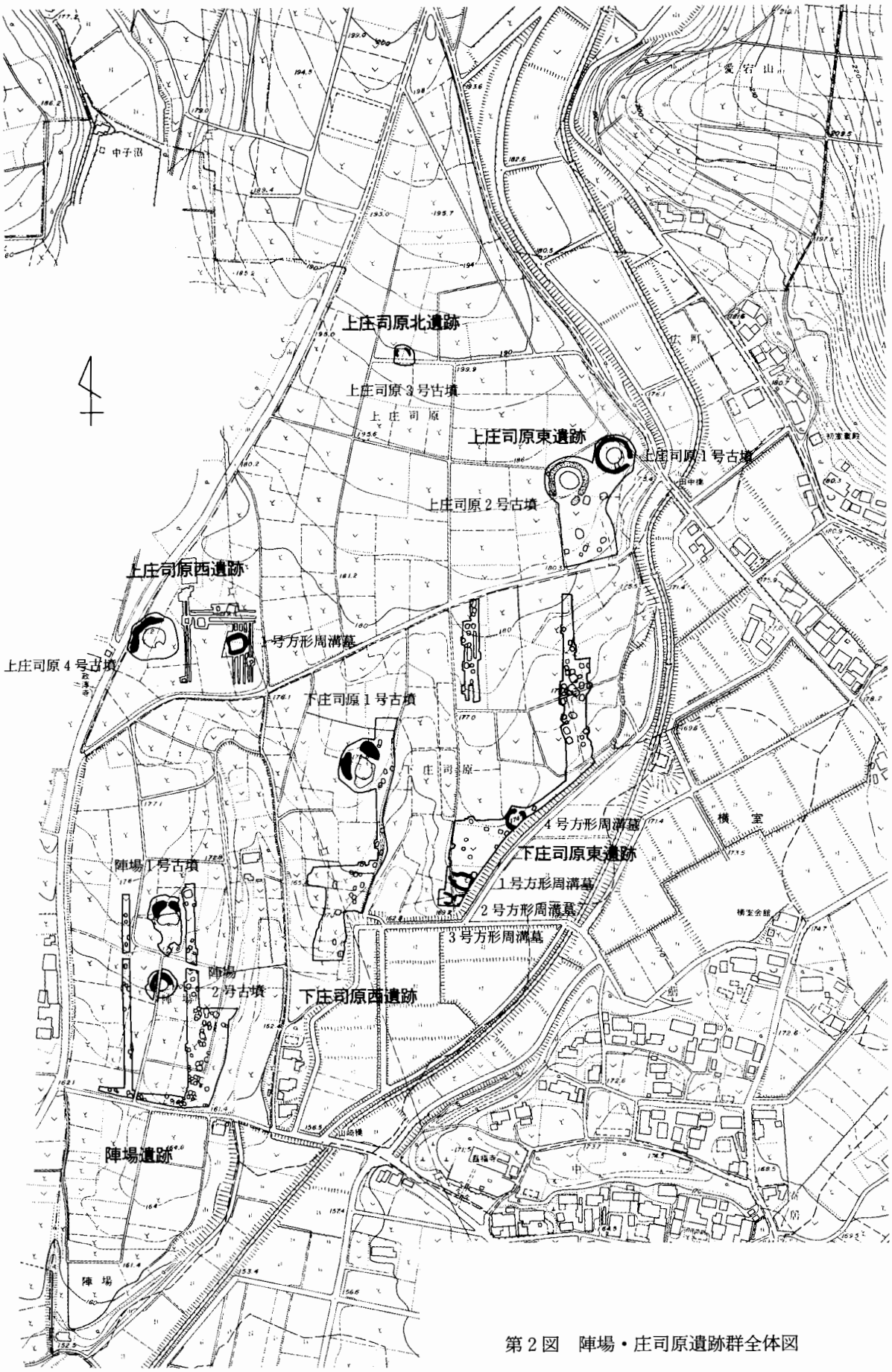
上庄司原１号古墳の北東約200mに本年度調査を行った初室古墳（同図２）がある。墳丘径約15m（周堀を含めて約35m）の円墳で、自然石乱石積みの両袖型横穴式石室を有す。遺物の大半は盗掘されていたが、金銅製の頭椎大刀柄頭、馬具などが出土した。３は道上古墳で、台地の崖端に２基の山寄墳があり、未盗掘の可能性もある。４は中古墳で河原石積みの両袖型横穴式石室が開口する。５は九十九山古墳である。独立丘上に占地する本村唯一の前方後円墳である。全長約66mを測り袖無型横穴式石室が開口する。

このほか、北東約１kmの字引田に数基、北約１kmの字米野～山口、南方約２kmの原之郷に数基～十数基、東方約2.5kmの時沢古墳群に数十基の後期～終末期古墳が存在したが、現在ではほとんど平夷されている。西方約0.7kmの前橋市田口町には角閃石安山岩削石積両袖型横穴式石室である塩原塚古墳が現存する。

古墳時代の集落遺跡は法華沢川を挟んで陣場遺跡のすぐ南方に田中田遺跡（同図６）がある。古墳時代前期から後期までほぼ間断無く継続する集落で、陣場・庄司原古墳群と密接に関連しているものと思われる。南方約0.5kmには岩之下遺跡（同図７）がある。古墳時代後期から奈良･平安時代の集落跡である。字田中から字道上にかけては古墳時代後期の集落が展開する(同図８)。９の原之郷久保田遺跡は平安時代主体であるが、古墳時代前期の住居跡と土坑も調査した。11の田島白川遺跡では埋土にFA火山灰・軽石を堆積する古墳時代後期の住居跡を多数調査している。奈良･平安時代の集落でもある。12～18の字米野の各遺跡は奈良･平安時代の集落が多く、古墳時代は最終末期のものがわずか検出されているだけである。これらの遺跡は時期の相違や規模の大小はあるが、いずれも縄文時代の遺跡でもある。６～７、９～11でも縄文時代の遺構・遺物が検出されている。

3．遺跡の立地と陣場・庄司原遺跡群の概要

富士見村は標高400m前後を境として、北側の山岳地と南側の山麓地におおむね分けられる。南側の山麓地はさらに中央部から東側にかけては赤城白川扇状地であり、西側は丘陵地形となっている。遺跡群はこの丘陵性台地の東端に扇状地に面して位置するが、また南西約300mは旧利根川の崖端となっており、旧利根川と



第2図　陣場・庄司原遺跡群全体図

赤城白川の合流点に面して位置するともいえる。大まかに見れば遺跡群の東側は赤城山から南西流する法華沢川、西側は北方約1km付近を谷頭とする谷地形により深く浸食され、この二谷に挟まれて旧利根川に向かって延びる樹枝状の細長い丘陵性台地南端である。さらに、この遺跡群の周辺は樹枝状に小支谷が発達しており、舌状台地等の微地形を形成している。部分的には空白部があるものの、この台地上のほぼ全面に遺跡が展開しており、遺跡の時期や性格により単純に区分できないが、小字名や遺跡の内容、地形的条件等を加味して遺跡を分けている。

陣場遺跡は小字陣場に所在する。遺跡群の中では最も南西に位置する。東側には法華沢川に流れ込む小河谷が発達しており、比高5m程の急崖となっている。台地全体は南傾斜面であるが、この東崖端の標高が比較的高いため、西側にも緩傾斜している。縄文時代前期・中期の集落、平安時代の集落はこの崖沿いの台地東側の部分に広い範囲で占地している。陣場1・2号古墳は陣場遺跡の北端近くに位置している。

下庄司原西遺跡は小字下庄司原に所在する。陣場遺跡とは谷地を挟んで東側に位置している。下庄司原西遺跡の東側も小河谷となっており、この谷地を挟んで東側に下庄司原東遺跡が位置する。下庄司原西遺跡は2本の小河谷に挟まれた舌状台地上に占地する。陣場遺跡と同様に縄文時代前期と平安時代の集落が主に台地の東側に展開している。舌状台地の北端部で遺構・遺物は薄くなるが、遺跡の北側の範囲を明瞭に確認できたとは言い切れず、下庄司原東遺跡等と連続している可能性もある。下庄司原1号古墳は調査区域の北端に占地しており、すぐ東側にも平安時代の住居跡などが近接して検出されている。

下庄司原東遺跡は法華沢川と下庄司原西遺跡との間の谷地とに挟まれた舌状台地上に位置している。小字境の農道で遺跡の境としているが、北に位置する上庄司原東遺跡へも平安時代集落は連続している様相が伺われる。下庄司原東遺跡の場合は台地西寄りを頂部としそれぞれ西と東に向かって緩斜面となっているが、東半部には比高差は余り無いものの、比較的広い範囲に凹地状の地形が形成されている。遺跡の中央部は未調査のため不明であるが、台地のほぼ全面が遺跡となっていると思われる。縄文時代前期の住居は法華沢川に沿った崖端に散在して占地する。中期の住居跡は凹地部分に単独で占地していた。方形周溝墓は台地の先端に3基が近接して位置する。残りの1基は法華沢川に沿った崖端でさらに凹地の縁にあたる高所に占地している。尚、この部分は調査範囲が狭いため、未調査区域にも他の周溝墓が存在する可能性はある。古墳時代後期の集落は凹地部分に位置する。平安時代の集落は先述したように台地のほぼ全面に展開するが、先端部にはまばらであり、北西部に比較的濃い密度で住居が検出されている。なお、本遺跡の主に南半部から中近世の陶磁器が出土しているが、遺構は検出されていない。

字上庄司原は4遺跡に分けているが、西端に位置する西遺跡を除くと地形的には一面となった台地上に位置しており、時代によっては区別できるものの、とくに平安時代の集落については明確な境をとらえることはできない。上庄司原東遺跡は下庄司原東遺跡の北に位置する。台地がもっとも東に張り出す部分である。縄文時代前期の集落は調査範囲のほぼ全面に展開しており、法華沢川に沿った崖沿いに北側に伸びている。古墳2基が調査範囲の北端に並んで占地している。平安時代の集落は古墳の南側から調査範囲を越えて西側に伸びている。密度的には余り濃くない。中世の土坑墓は1基だけが古墳の裾から出土した。

上庄司原中遺跡は上庄司原東遺跡と上庄司原西遺跡の間で上庄司原北遺跡の南側を便宜的に呼称したものである。ここからは試掘調査の際に古墳時代前半の住居跡が数軒検出されている。平安時代の集落は上庄司原東遺跡、下庄司原東遺跡と一連の可能性がある。他に古墳時代の溝なども検出されているが、諸般の事情により調査を行っていないので、詳細は不明である。

上庄司原北遺跡は遺跡群の最北部に位置する。法華沢川に沿った台地東端に位置する主に縄文時代前期・

中期の遺跡であるが、ここも事情により古墳を除いて調査を行っていない。古墳は遺跡の南端に位置する。

上庄司原西遺跡は小字上庄司原の西端に位置する。東側は谷地となっており、南側にも谷地が入り込む。方形周溝墓は東側の谷地寄りに位置している。古墳は遺跡の西端に占地しており、平安時代の集落は古墳と谷地との間に展開している。北側の範囲は不明であるが比較的規模の小さな集落と思われる。

各遺跡で検出された遺構と遺物の概要については第1表に記す。

III　調査の方法

方形周溝墓は重機による表土剝ぎ後、基本的に東西南北に土層観察用のベルトを残し掘り下げた。土層断面・断面は1/10、1/20で記録した。平面図は基本的に平板実測を行い、1/20、1/40で記録した。

主体部の検出作業は、掘り込みが認められなかったため、すべての周溝墓が地山面下まで削平されていると判断し、下庄司原1号方形周溝墓で断ち割り調査を行っただけである。

古墳の表土剝ぎは周堀周辺は基本的に重機で行ったが、墳丘部分は人力で行った。周堀埋土の掘削については、試掘調査により埴輪の樹立―崩落はないと予想されたため、ある程度重機で掘り下げを行った後人力で精査した。墳丘及び周堀の平面実測は1/40、石室の展開実測は1/10、土層断面・断面実測は1/20～1/40で行った。墳丘の断ち割りは重機で行った。基本的にトレンチ調査であり、上庄司原4号古墳だけは、石室移築保存のための石材搬出作業を兼ねて、盛土あるいは地山まで墳丘部の全面排土を行い、石室の掘り方調査も行った。上庄司原2号古墳については移築保存の可能性も考えて、墳丘を除去し、石材の搬出作業を行ったが、調査期間の都合もあり石室解体調査などはほとんど行えなかった。上庄司原1号古墳は現地保存となったため、墳丘の断ち割りなどは行っていない。

石室展開実測、墳丘全体図の作成は基本的に業者委託した。土層断面実測等は直営で行った。

写真はモノクロ・カラースライドともに35㎜だけで記録した。

古墳・方形周溝墓の全景写真は気球撮影を行ったが、上庄司原3号古墳・上庄司原西遺跡1号方形周溝墓については調査工程の関係で撮影を行えなかった。

IV　土層堆積

調査地の台地部分では各遺跡ともに基本的に同様な堆積状況である。

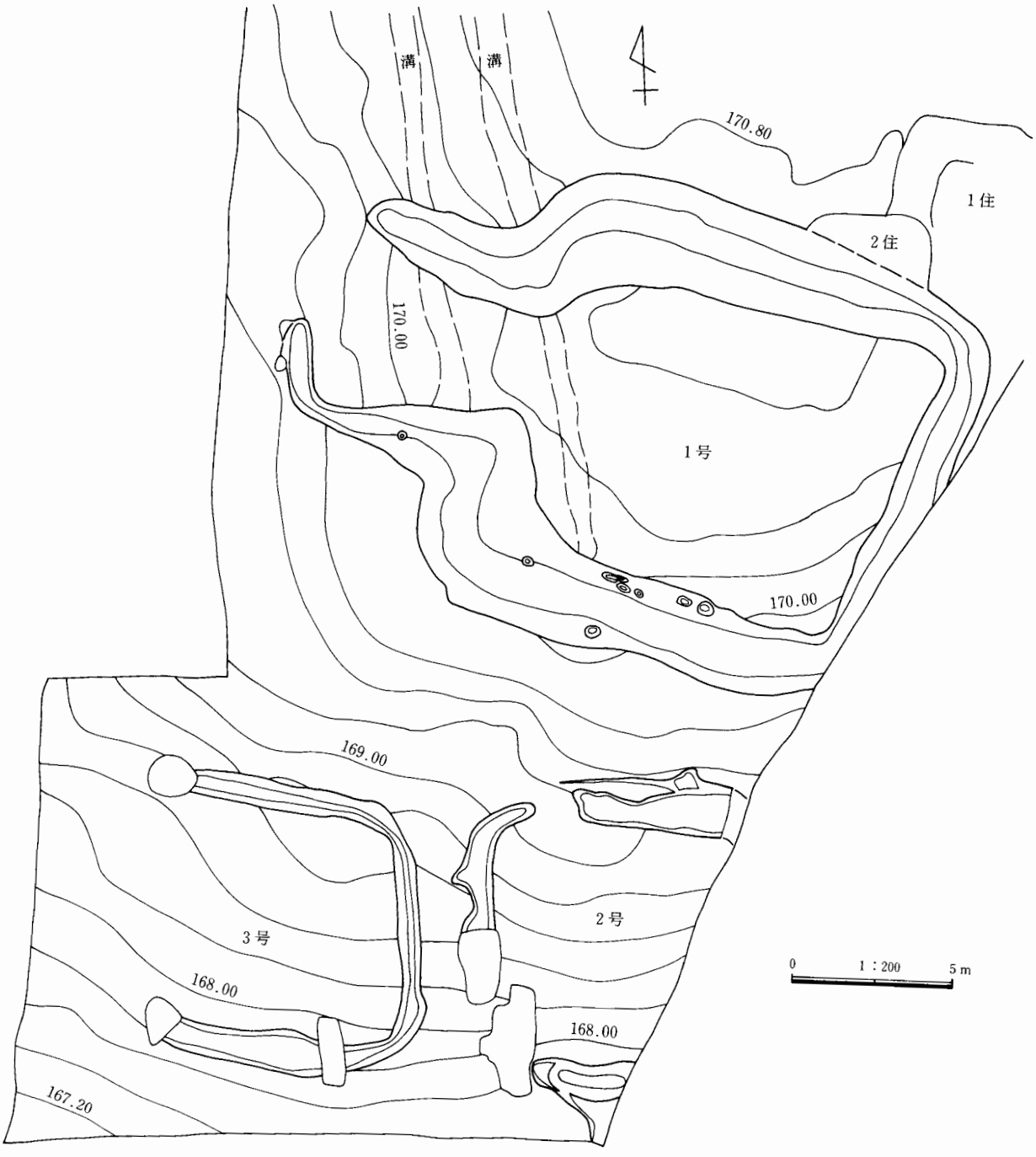
表土（耕作土―浅間B・C軽石、榛名山二ツ岳FP軽石を含む砂質暗褐色土）の下にすぐローム漸移層あるいはローム層が現れる。

台地傾斜面の下方や谷地部分では古墳時代以降、あるいはそれ以前の火山噴出物（示準層）を堆積する場所もあるが、台地上では遺構の埋土中に認められるだけである。ここでは、模式的に本地域の堆積層順を示したい。

第3図　基本土層模式図

第1表　陣場・庄司原遺跡群概要表

遺　跡　名	調査期間	調査面積	検出された遺構	備考（検出された遺物など）
陣　場　遺　跡	元年4月15日 ～ 元年9月15日	約6,000㎡	縄文時代竪穴住居跡 関山・黒浜式　3軒 諸磯c式　4軒 加曽利E式　15軒 称名寺式　2軒 時期不詳　1軒 縄文時代土坑　50基以上 古墳時代終末期古墳　2基 平安時代竪穴住居跡　73軒 時期不詳　土坑・溝その他	縄文時代の出土遺物では諸磯c新式期の土器が比較的まとまって出土している。また、白色凝灰岩製の小型石棒も出土している。 加曽利E式期は住居軒数も多く、良好な資料である。称名寺式期は敷石住居跡で、良好な一括資料が出土している。また土坑から注口土器が出土している。 本報告書 平安時代の遺物では鉄製品が多いことが特記される。1軒の住居から鋤鍬先・鋏が出土している。また、銅製帯金具や刻字紡錘車が出土している。平安時代集落は9～11世紀まで続く。
下庄司原西遺跡	元年9月10日 ～ 元年11月15日	約5,000㎡	縄文時代竪穴住居跡 前期（諸磯期他）　4軒 縄文時代土坑　5基 古墳時代終末期古墳　1基 平安時代竪穴住居跡　20軒 土坑・ピット　多数 溝　2条	本報告書 平安時代の竪穴住居跡の1軒から土錘350点以上が出土した。同跡からは灰釉陶器瓶子（小瓶）1点と鉄製鎌も出土している。隣接する住居からも灰釉陶器瓶子（小瓶）が出土している。
下庄司原東遺跡	元年10月1日 ～ 元年11月30日	約6,500㎡	縄文時代竪穴住居跡 前期（花積下層、黒浜、諸磯a式期）　5軒 中期（加曽利E式期）　1軒 古墳時代前期竪穴住居跡　1軒 方形周溝墓　4基 後期竪穴住居跡　9軒 奈良・平安時代竪穴住居跡　41軒 土坑・溝など	本報告書 古墳時代後期、奈良・平安時代ともに良好な一括遺物が出土している。鉄滓も出土している。
上庄司原西遺跡	元年11月1日 ～ 2年1月10日	約1,800㎡	古墳時代前期方形周溝墓　1基 中期溝　1条 終末期古墳　1基 奈良・平安時代竪穴住居跡　6軒	本報告書 本報告書
上庄司原東遺跡	元年11月5日 ～ 2年3月15日	約5,000㎡	縄文時代竪穴住居跡 前期（関山、黒浜、諸磯b式期）　4軒 古墳時代後期古墳　2基 平安時代竪穴住居跡　7基 土坑墓　1基 中世　土坑墓　1基	小型石棒が2点出土している。このうち1点は諸磯b式期であるが、1点は黒浜式期の可能性がある。 本報告書 平安時代土坑墓から灰釉陶器の長頸瓶が出土している。
上庄司原北遺跡	元年11月15日 ～ 元年12月5日	約300㎡	古墳時代終末期古墳　1基	本報告書 試掘調査では縄文時代前・中期の遺物包含層・土坑群、時期不明の溝などが多数検出されている。
上庄司原中遺跡 （試掘調査のみ）				古墳時代中期頃の住居跡 古墳の周堀の可能性のある溝



第4図　下庄司原東遺跡1～3号方形周溝墓

V　検出された遺構と遺物

1．方形周溝墓

(1)　下庄司原東遺跡１号方形周溝墓（遺構第５・６図、遺物第７図、PL ４・５・28）

下庄司原東遺跡の台地突端部に２・３号方形周溝墓と近接して位置する。全体的に後世の浅い攪乱が激しく、西側の溝先端部の形状は不確実である。ほぼ同時代と思われる１号住居跡、平安時代の２号住居跡、時期不詳の２・３号溝が重複する。後方部南東端部は崖際の為調査を行えなかった。構築場所の地形は全体的には南傾斜面であるが、前方部はさらに西傾斜面にかかって位置する。標高は169.40～170.70mを測る。

平面形状は中心軸を東西方向にとる前方後方形を呈する。方台部の形状は、後方部は北辺と南辺がほぼ平行し、西辺がこれに直交するが、南辺が北辺より若干短いため台形気味の隅丸長方形状を呈する。前方部は北西端部で溝が途切れるが、全体的には西辺を底辺とする縦に長い台形状を呈する。ただし、西溝は外方に向かって孤状を呈する傾向にある。規模は方台部全長が中心軸で18.8m、後方部最大長約12.0m、前方部長7.2m、後方部幅約9.6m、前方部最大幅5.5m、くびれ部幅2.9mを測る。周溝外側の形状は後方部は方台部の形状と相似するが、前方部はくびれ付近の溝幅が最も広く、西へ行くに従い漸減するため、台形ではなくほぼ方形状を呈する。溝幅は最大3.7m、深さ1.4mを測る。断面形状は逆台形状を呈し、東溝が若干浅くなるものの、全体的には平坦に掘り込まれている。周溝も含めた規模は東西約20.7m、南北14.4mを測る。

前方部の周溝は前述したように北西部が途切れるが、傾斜面でもあり原状も途切れていたかどうかは不詳である。しかし、北溝の西端部の立ち上がり方から推察するとやはり途切れていた可能性が強い。

覆土上層にはFA層が純層堆積する。南溝の縁辺にピットが検出されており、覆土等の様相から本跡に伴う可能性も考えられる。主体部は検出されていない。

遺物はくびれ部の両側の溝埋土を中心に出土している。器種は全て壺型で、南側の溝埋土下層から完形と胴下半部の２点が、北側溝中に完形１点、後方部肩上に焼成後底部穿孔したもの１点が出土した。また、くびれ部北側の溝底部から少量ではあるが赤色顔料が検出された。

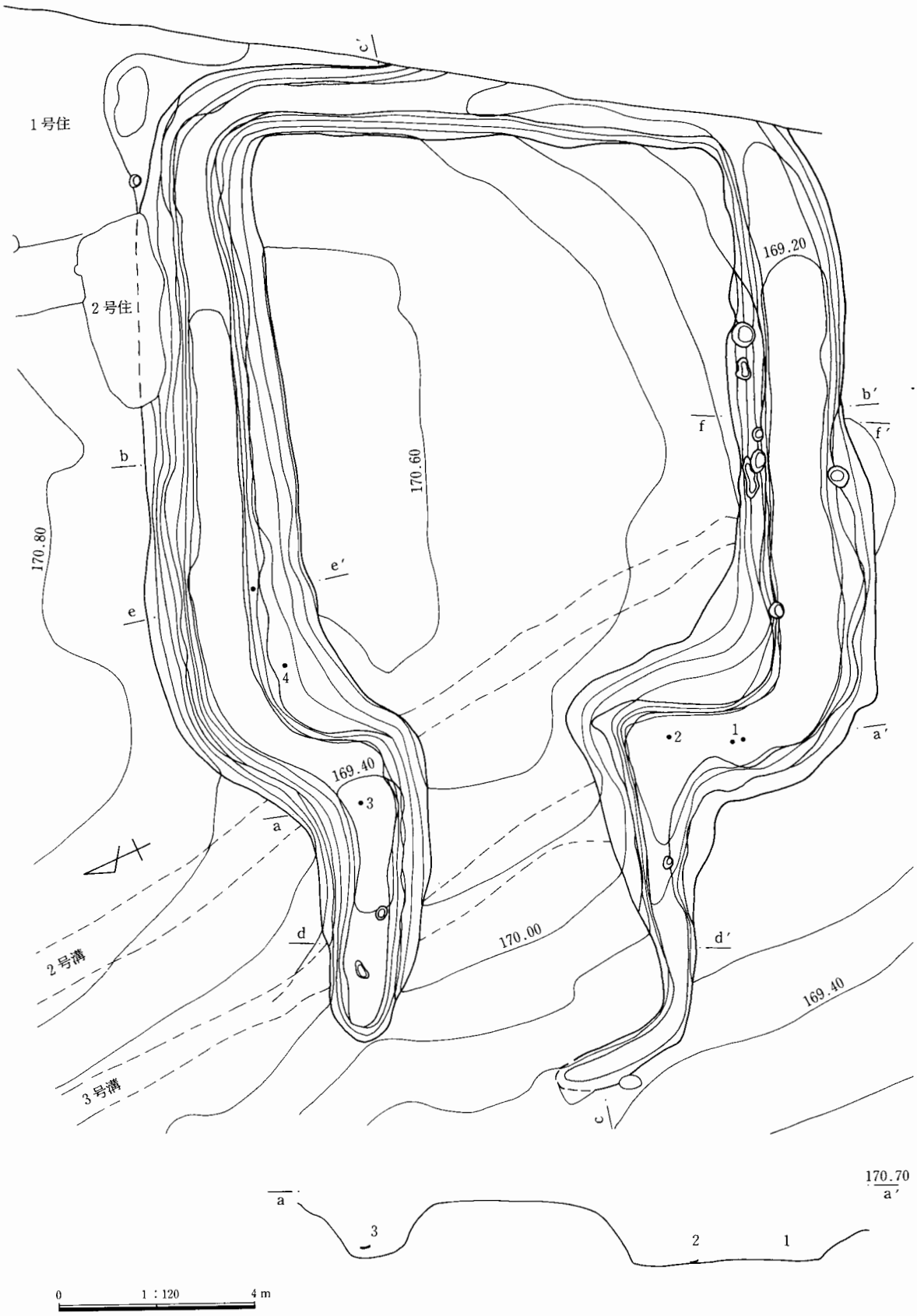
(2)　下庄司原東遺跡２号方形周溝墓（遺構第８図、遺物第９図、PL ４・５・28）

１号方形周溝墓の南側に３号方形周溝墓と東西に並んで位置する。東側は崖際の為調査を行えなかった。全体の２/３ほどが調査できたと思われる。後世のカマボリ等の耕作により攪乱されているため、全体の調査ができなかったこととも合わせ、不明確な部分が多い。標高は167.50～169.40mを測る。

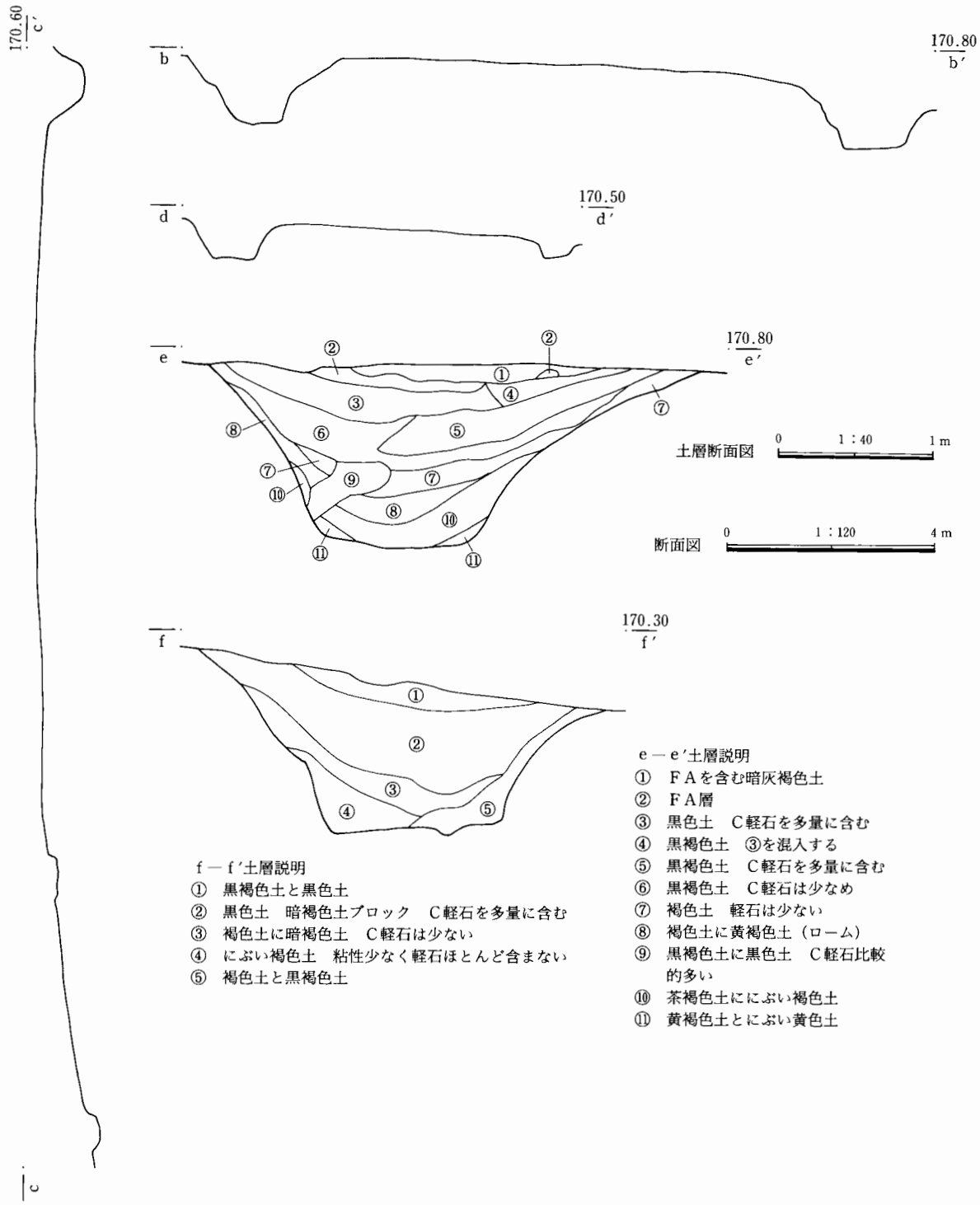
方台部形状は検出面においてやや歪んだ方形状を呈する。溝外周の形状のほうが整った方形状を呈するようである。周溝は北溝西端部で途切れるが、浅く続いていたのを掘り残した可能性がある。南西隅部は攪乱が激しかったが、検出面では周溝が途切れるようである。南溝と北溝は中央部が深くなっているが、西溝はほぼ一定の深さで掘られている。規模は方台部長が南北7.5mを測り、東西は調査範囲内で7.5mあるため、東西方向に若干長いと思われる。周溝を含めると南北約10.5m、東西９m以上である。周溝の深さは最深部で検出面から約60cmほどである。

主体部は検出されていない。

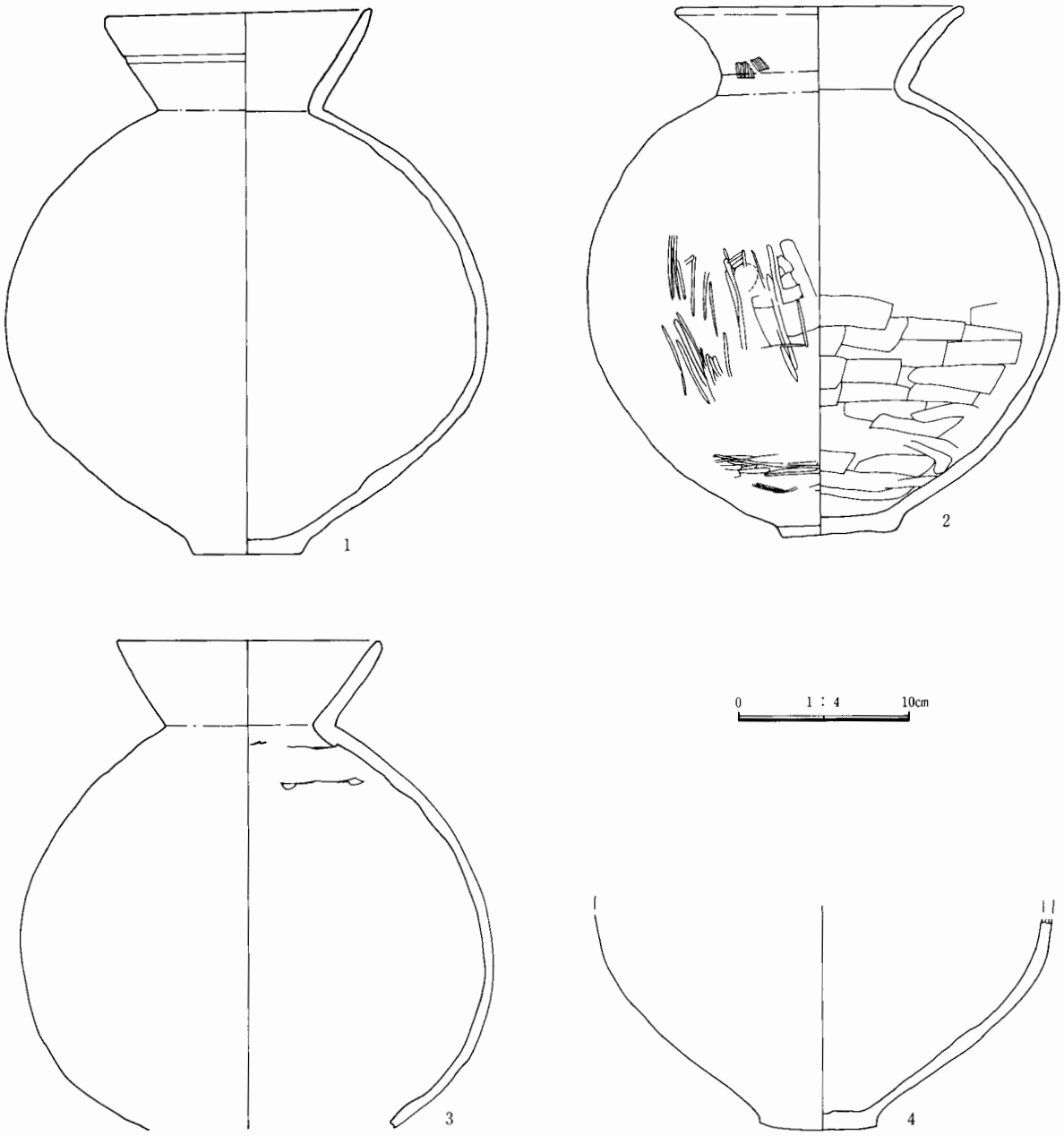
遺物は南溝から器台及び土器細片が少量出土しただけである。



第5図　下庄司原東遺跡1号方形周溝墓全体図(1)



第６図　下庄司原東遺跡１号方形周溝墓全体図(2)

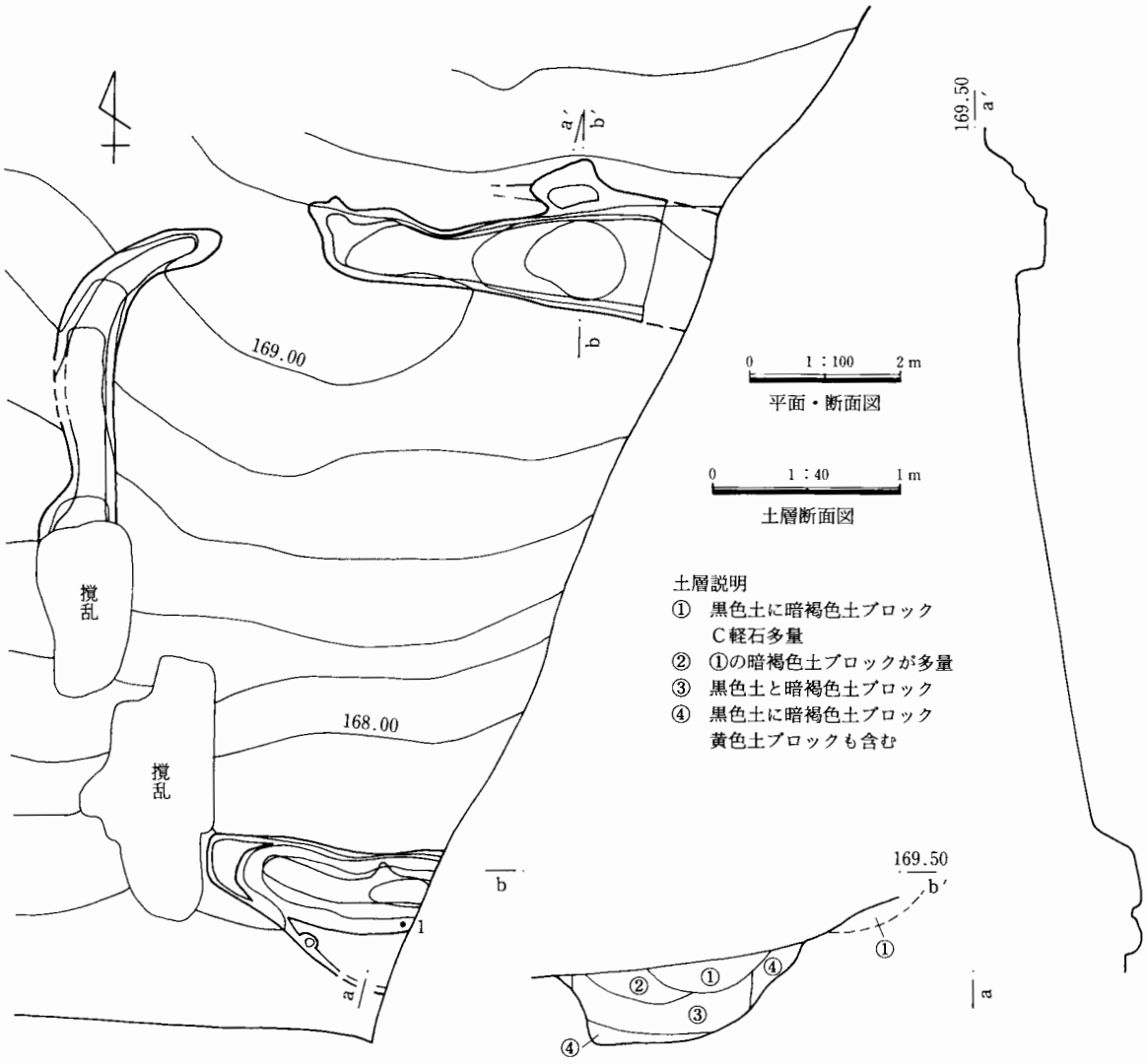


第７図　下庄司原東遺跡１号方形周溝墓出土遺物

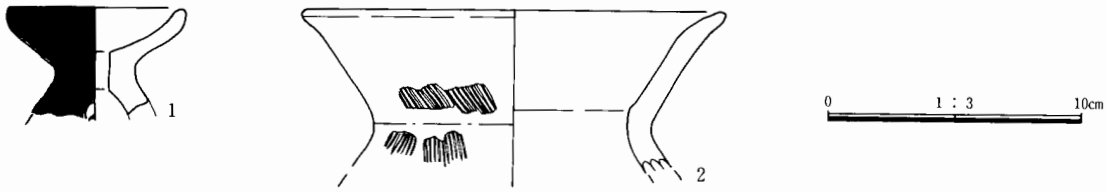
(3)　下庄司原東遺跡３号方形周溝墓（遺構第10図、遺物第11図、PL ４・５・28）

２号方形周溝墓の西側に位置している。北溝と南溝の西端部、南溝の東端寄りは攪乱を受けている。西辺部の周溝は検出されていないが、この周辺は攪乱が激しく、また傾斜地のため削平されてしまったことも考えられ、原状も巡っていなかったという確証はない。標高は167.70～168.80mを測る。

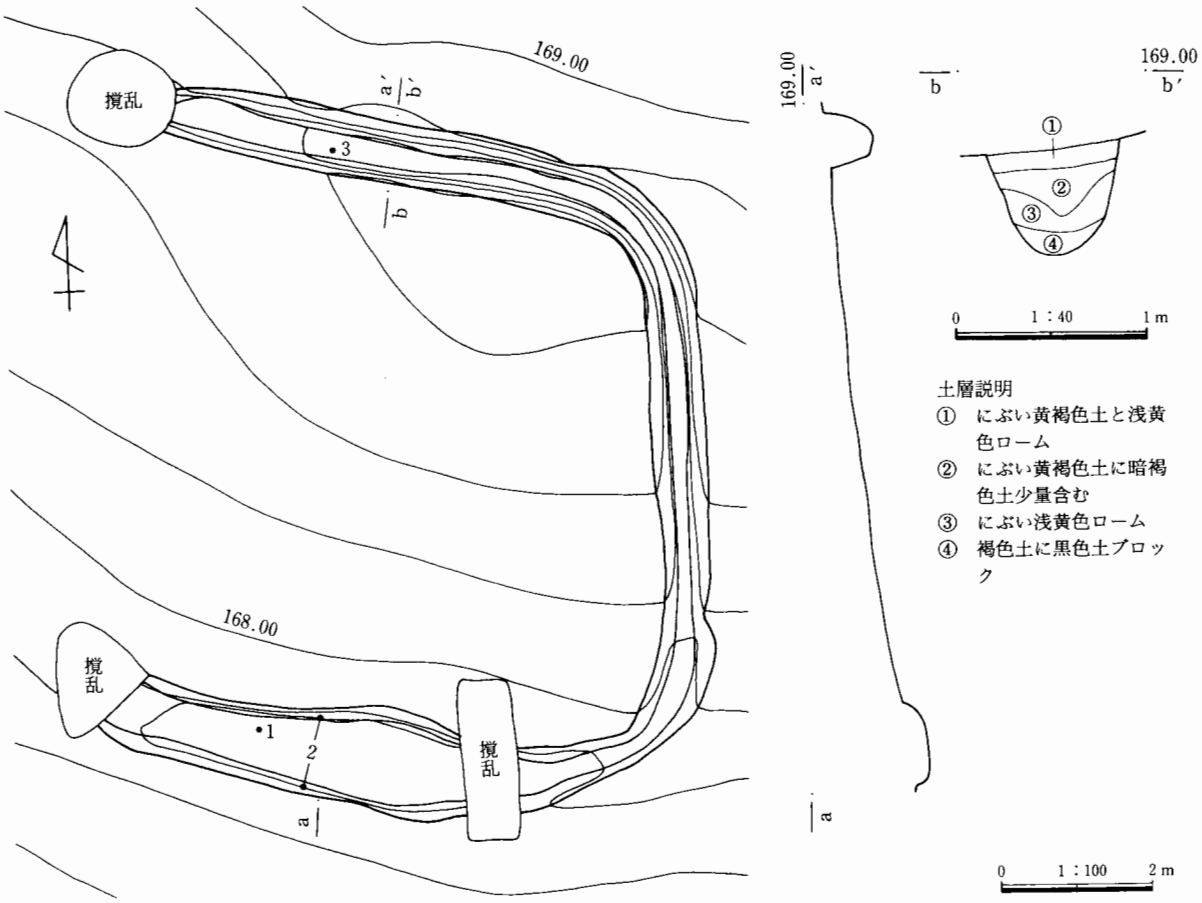
南辺と北辺はほぼ平行するが、全体が歪んでおり菱形状を呈している。北溝と東溝は上幅に比較して深いが、南溝は他の部分に比較して広く浅い。方台部及び溝外縁形状ともにほぼ相似形である。方台部は南北7.0mを測り、東西は7.5m以上である。周溝を含めて南北8.9m、東西8.0m以上である。周溝は北溝～東溝が上幅50～80cm、深さ60cm、南溝が上幅1.4m、深さ30cmを測る。埋土は特に北・東溝はローム主体の黄褐色土



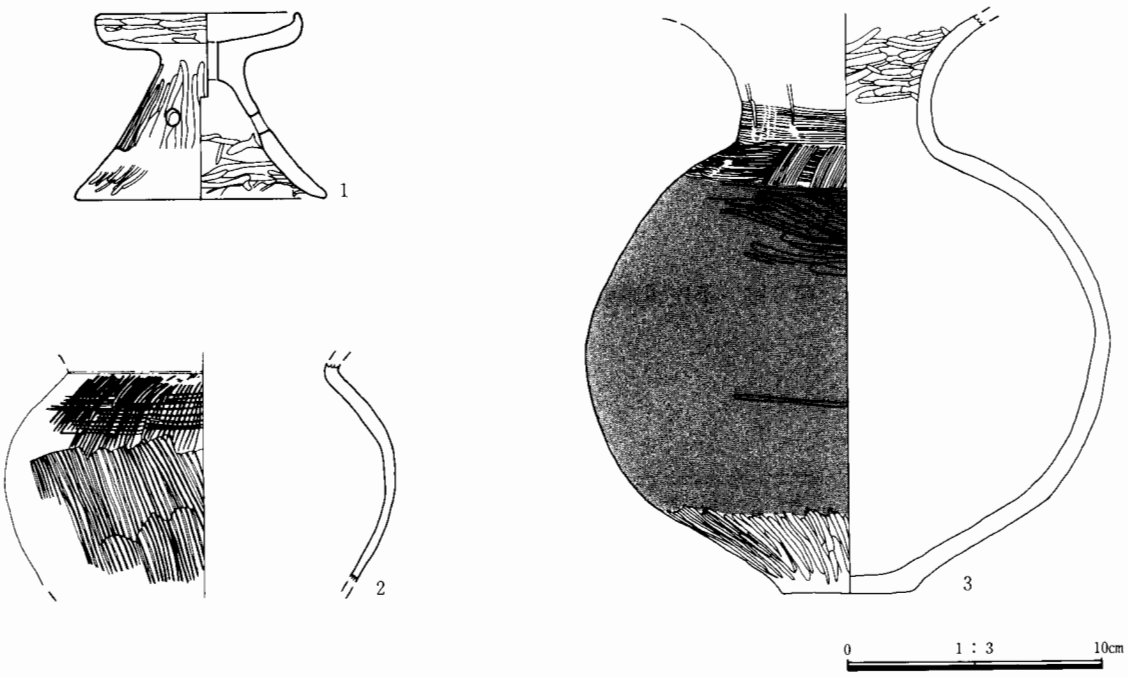
第8図　下庄司原東遺跡2号方形周溝墓全体図



第9図　下庄司原東遺跡2号方形周溝墓出土遺物



第10図　下庄司原東遺跡３号方形周溝墓全体図



第11図　下庄司原東遺跡３号方形周溝墓出土遺物

で、地山との判別が困難であった。南溝はC軽石含みの黒褐色土が堆積している。

主体部は検出されていない。

遺物は南溝から器台とS字状口縁台付甕の胴部破片が、北溝のほぼ中央底部から口縁部を欠失する朱彩の壺が出土している。

(4) 下庄司原東遺跡4号方形周溝墓（遺構第12・13図、遺物第14図、PL 6・29）

1～3号方形周溝墓から1基だけ離れ、台地の東縁辺部中央に位置する。但し、調査区域外に他の方形周溝墓が存在する可能性もある。南東部は崖際のため調査を行わなかった。構築場所の地形は南傾斜面であるが、多少東にも傾いている。標高は171.40～172.00mを測る。

北溝の中央部をブリッジ状に掘り残し、前方部の小さな前方後方形状を呈する。後方部は調査部分から判断すると多少の歪みはあるもののほぼ正方形状を呈すると思われ、南北10.8m、東西約11.4mを測る。周溝の南西隅部は浅くなっているが全体的に深く、特にブリッジを掘り残す北溝は深い。ブリッジ部分(前方部)の最小幅約2.5m、長さ約3.4mを測る。溝の上幅は最大で約3.5m、深さは北溝で最大1.2mを測る。周溝も含めた規模は南北17.1m、東西16.2m以上である。表土剝ぎを行った時点で方台部上にわずかな高まりが認められ、周溝中にも方台部側から黄褐色土の流入が認められることから盛土されていたものと思われる。

主体部は検出されていない。

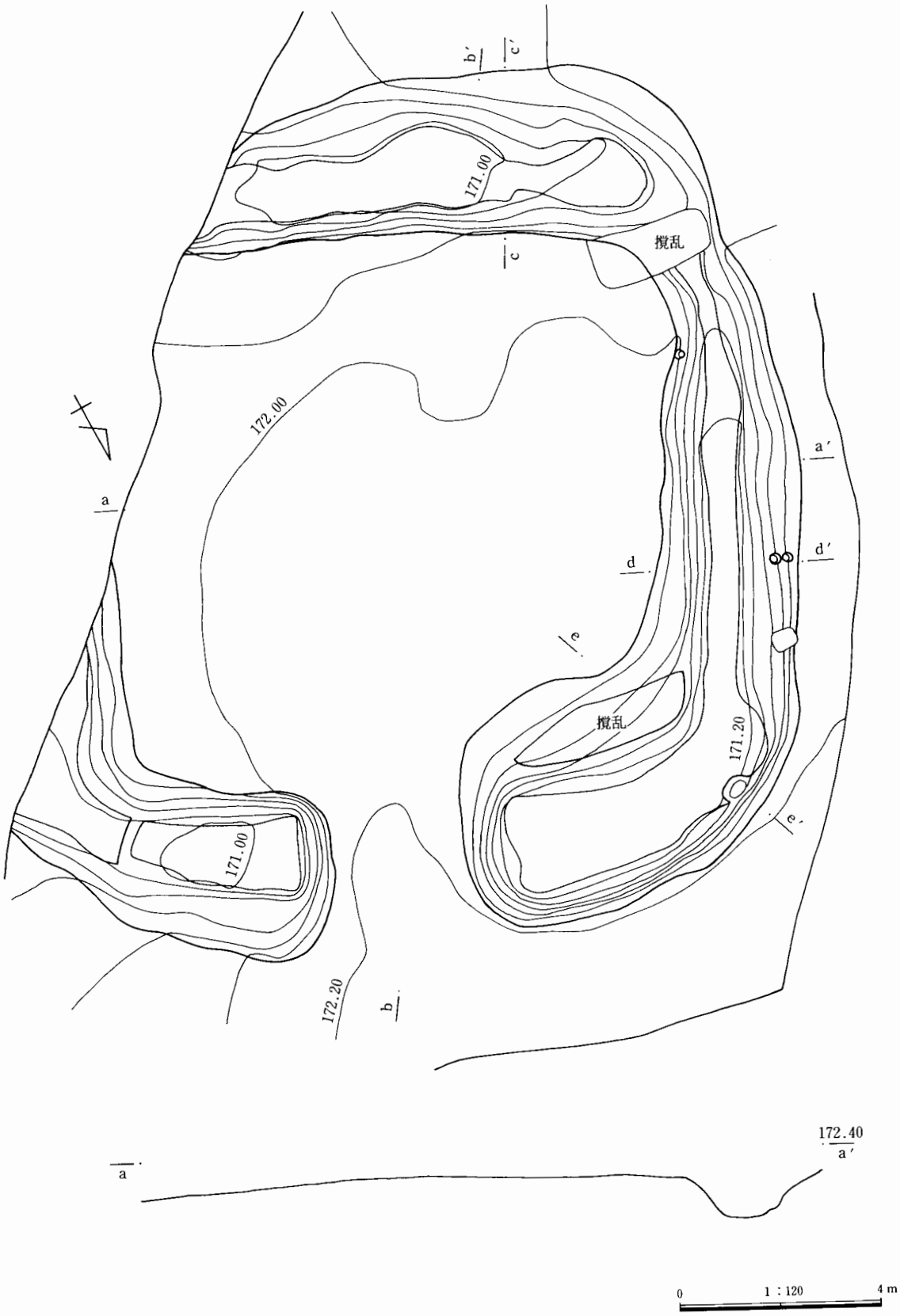
遺物はブリッジの西側周溝に集中して、埋土上～下位から高坏、小型壺、小型甕等が出土している。周溝北西隅の底部には小ピットが検出され、壺の胴下半部で蓋をした甕が出土しており甕棺墓と思われる。

(5) 上庄司原西遺跡1号方形周溝墓（遺構第15図、遺物第16図、PL 7・28）

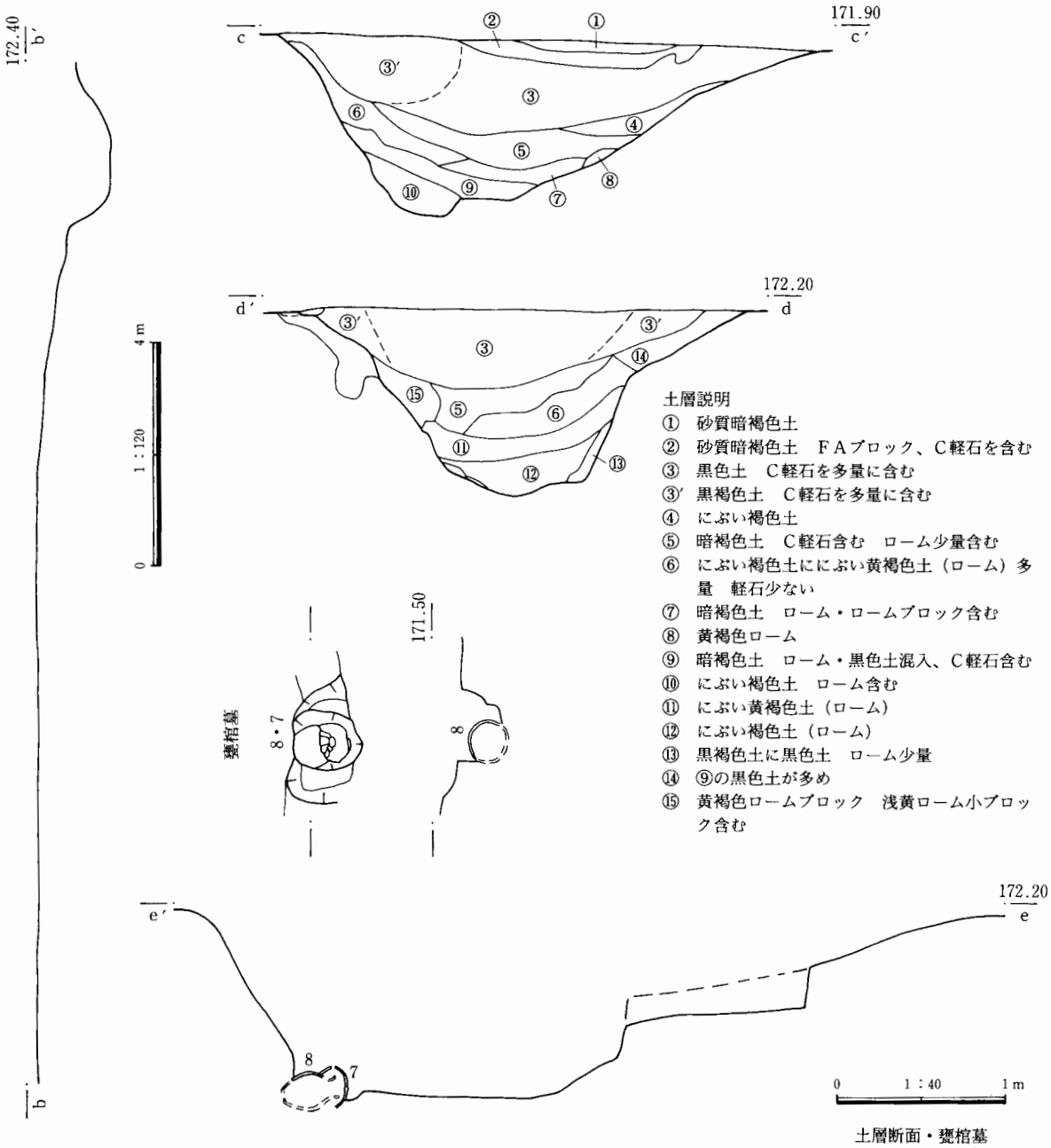
上庄司原西遺跡の乗る台地東端部に位置する。構築場所は北から南に緩傾斜している。標高は174.90～176.10mを測る。周辺には平安時代の集落跡が広がるが、調査区域内に同時期の遺構は検出されていない。上庄司原4号古墳がほぼ真西50mに近接する。

方台部の形状は東西が若干長く、ややいびつな隅丸方形状を呈する。周溝の掘り方は東溝と南溝は外側に孤状に膨らみを持ち中央部が深くなっており、北東隅部・南東隅部・南西隅部が幅狭く浅い。北溝から西溝にかけてはほぼ一定の幅であるが、西溝の中央部は外方から溝中位までの掘り残しがあり、この部分が最も深くなっている。溝埋土はC軽石を多量に含む黒色土であるが、上層にはFA火山灰層がレンズ状に堆積する。規模は方台部が東西13.7m、南北約10mを測る。溝の規模は東溝の上幅3.0m、深さ1.2m、北溝の上幅4.2m、深さ1.0m、南溝の上幅2.9m、深さ1.2m、西溝の上幅2.4m、深さ1.4mを測る。西溝の掘り残し部分は幅2.4m、長さ1.2mであり、この部分での溝の上幅は1.7mである。溝の立ち上がりは北溝は内側が比較的なだらかで、外側が急傾斜で立ち上がるが、他は方台部側が急傾斜で立ち上がる。溝を含めた全体の規模は東西18.6m×南北18.5mである。主体部は検出されていない。

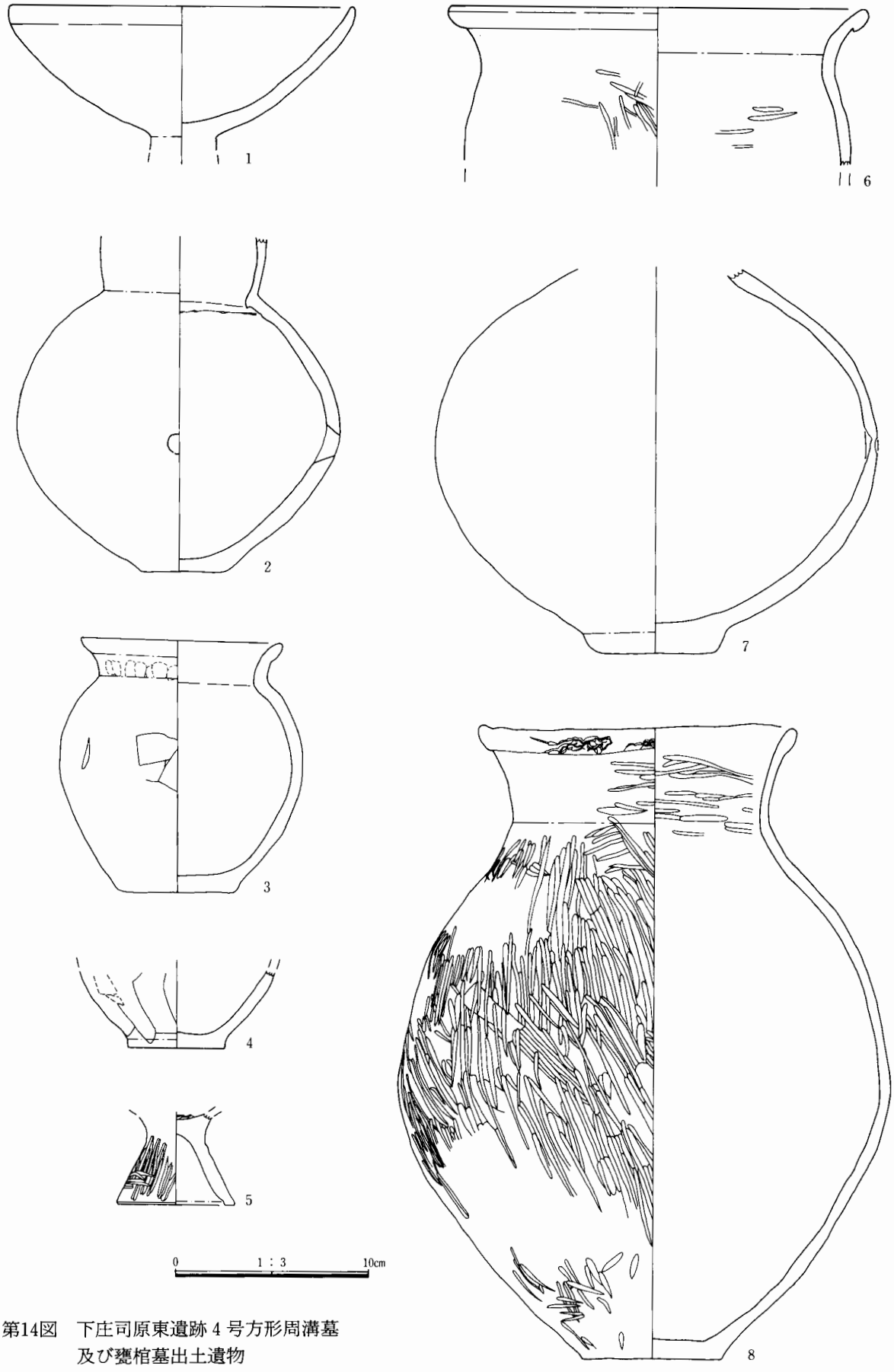
遺物は北溝の西端から壺上半部が、東溝の南寄りから赤色顔料を入れた壺下半部が出土した。また、東溝埋土中から坩口縁部が出土した。



第12図　下庄司原東遺跡４号方形周溝墓全体図



第13図　下庄司原東遺跡４号方形周溝墓及び甕棺墓



第14図　下庄司原東遺跡４号方形周溝墓
及び甕棺墓出土遺物

2．古　　墳

(1)　陣場１号古墳（遺構第17～21図、遺物第22・23図、PL 8～10、30）

①調査前の状況など

『上毛古墳綜覧』富士見村第12号である。

陣場遺跡北端に位置する。陣場２号古墳が南100mに近接する。縄文時代及び平安時代集落の中にあるため、縄文時代の住居跡、土坑と重複し、平安時代の住居跡が南約10mに近接する。また、榛名山二ツ岳FA火山灰を純層堆積する溝が墳丘のほぼ真下に重複している。

調査時点において周辺は桑畑・野菜畑となっていた。墳丘の北側半分弱は既に削平されていたが、墳丘の残り約半分強は林地となっており、比高２mほどの高まりが認められた。この高まりの中央部から南側にかけては細長い凹地となっており、石室は既に崩壊しているものと推察された。

②墳丘および外部施設

墳丘は上記のとおり既に北側約半分がほとんど削平されおり、残存する南側も西側はかなり破壊されていたが、東側は比較的旧状を留めていた。いわゆる「付け基壇」に類する構造を有し、見かけ上は二段築成の円墳である。石室前面には前庭が付設され、右袖壁の石積みが残っていた。この右袖壁の最上段から墳丘東側にかけてはテラス（中段）となっており、テラスの内側には石室入口から続く石積が残存していた。この石積の根石レベルは、前庭部右側壁の位置から徐々にテラスに向かって上がっており、やがてテラス面から葺石が始まるようになる。つまり、墳丘南東部では付け（以下略）基壇の土盛によって石積は隠れている。テラスより外側にも前庭部右袖壁から続く葺石の存在が予想されたが、多量の円礫が検出されたものの原位置を留めるものはなかった。墳丘西側には前庭部左袖壁の石積は残存せず、基壇の土盛りも大幅に削平されていたが、石室入口から続く墳丘部の石積が残存しており、また、基壇部分の葺石も若干残存していた。現状の残存部分では東西ともに基壇が認められるが、東側のテラスは北に行くに従って徐々に幅を狭めるような様相も認められており、墳丘の北側には基壇が巡っていなかった可能性もある。

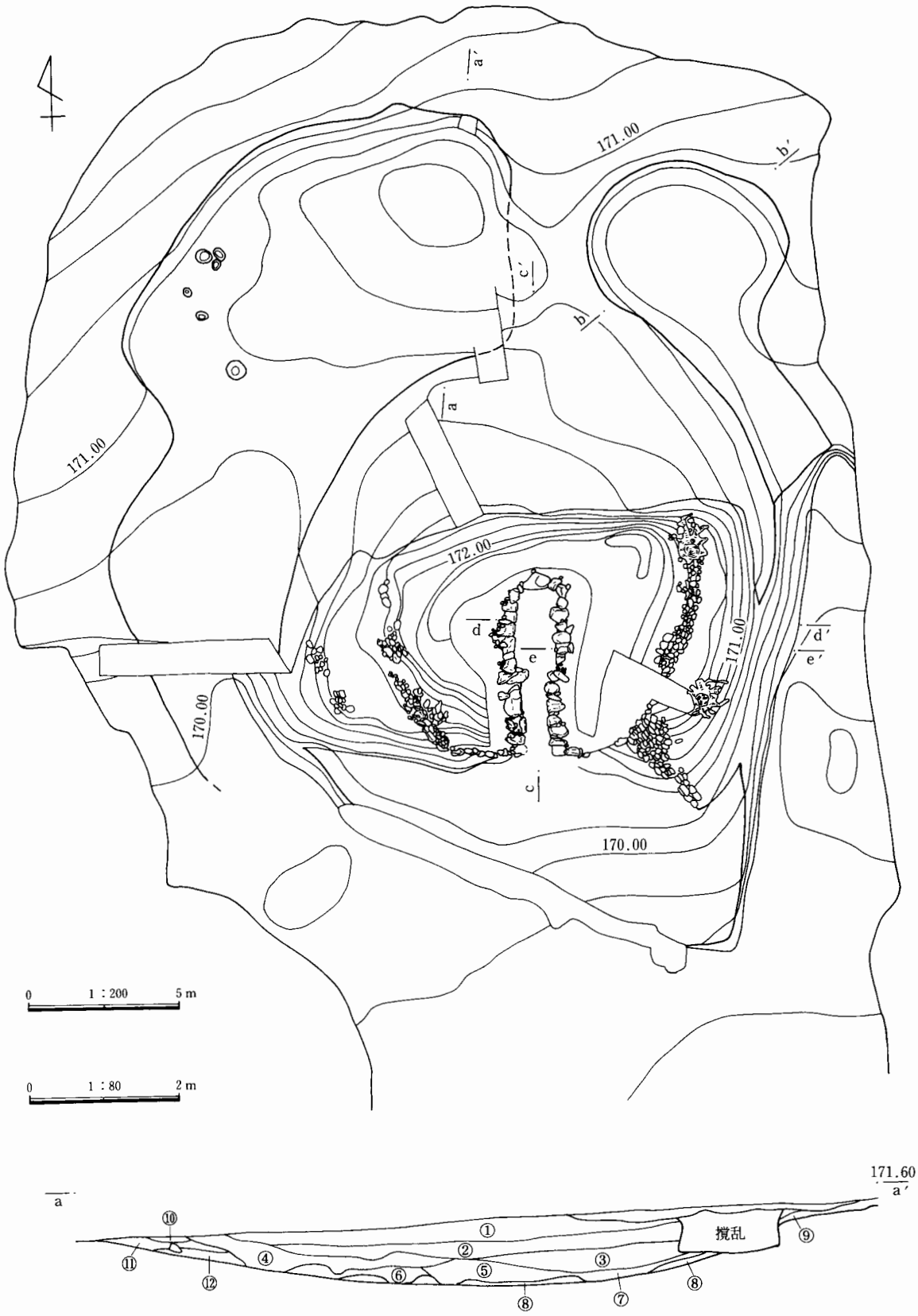
墳丘の規模は残りが悪く明確に計測できないが、基壇を含めて径約16m、高さは整地面上の盛土高1.8mを測る。中段はテラス内側の葺石部分で径約11mを測る。

周堀は墳丘の北側にほぼ石室の主軸延長上にある掘り残し部分を挟んで、東西に円形・長円形に比較的深く掘られた部分があり、そこからさらに浅く南側に続いているが、墳丘南半部周辺は耕作による削平が深く及んでおり、周堀がどこまで続いていたかは明瞭でない。しかし、墳丘南側の残存状況からみれば、石室前面までは及んでおらず、墳丘の南東・南西にわずか認められる凹み部分までは巡っていたものと思われる。東側は深掘り部分で径約７m、深さ0.7m、南に続く部分で幅約２m、深さ約0.2mを測る。西側は深掘り部分で長径15m×短径９m、深さ0.9mを測る。南に続く部分で幅約３m、深さ約0.3mが計測できる。

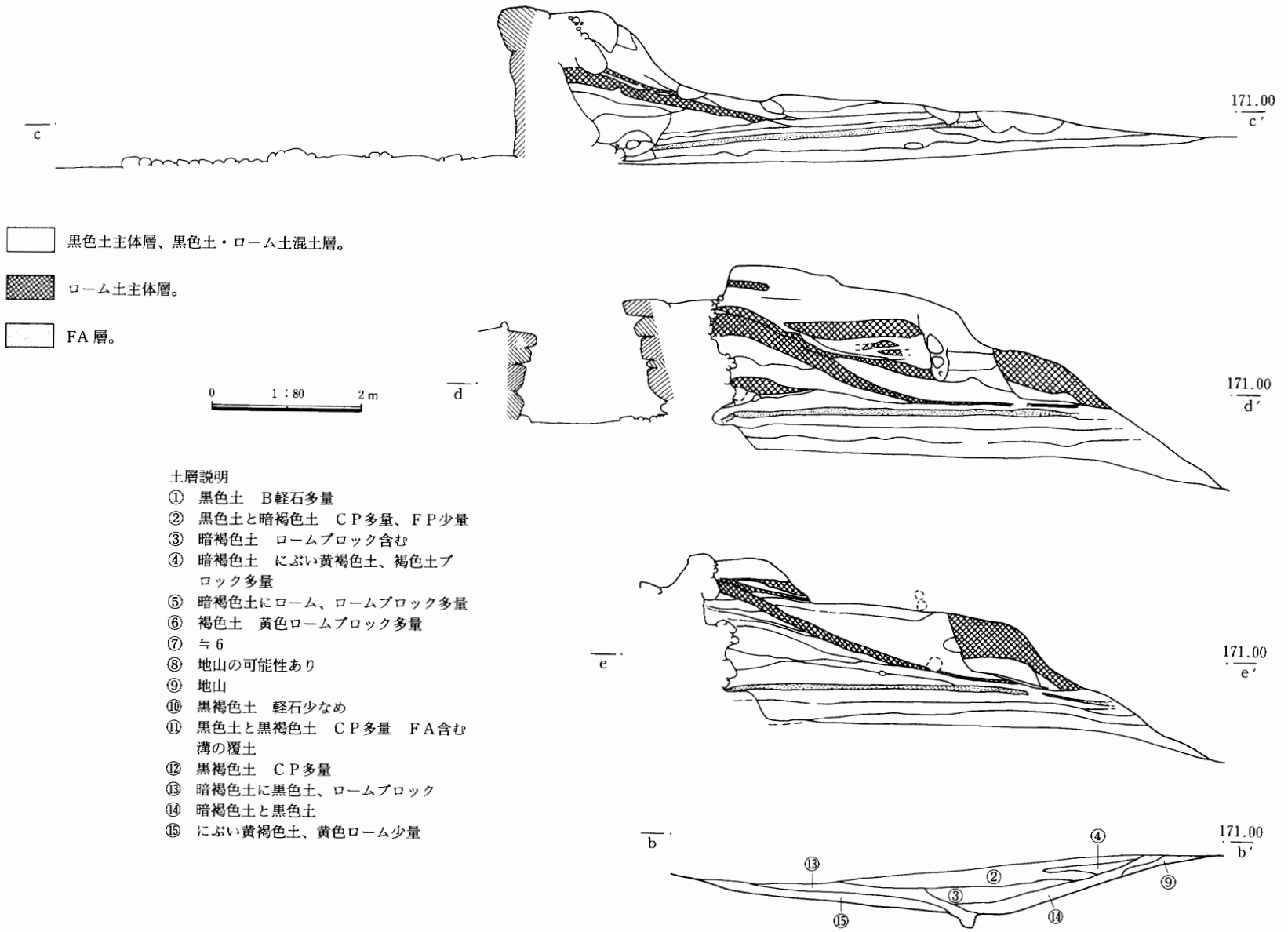
③前　　庭

右側壁の石積は比較的良く残っている。奥側１/２弱はほぼテラス面まで残存するものの、先半部は根石を含め２～３段が残存するだけである。側壁の先端がどこまで続くかは不明であるが、出土状況等から考えれば、現状の先端が旧状に近いと考えられる。根石は長さ20～30cm、それより上段は10～20cmの河原石を主体とし、数石の山石を混えた石材を横積みにしている。

石室入口右側の石積は、後世の攪乱により数石を残すだけで根石まで除去されている。石室入口のすぐ右側（裏込に続く部分）は20cm前後の石材を用いているが、それより先は40～50cmの石材を根石としている。



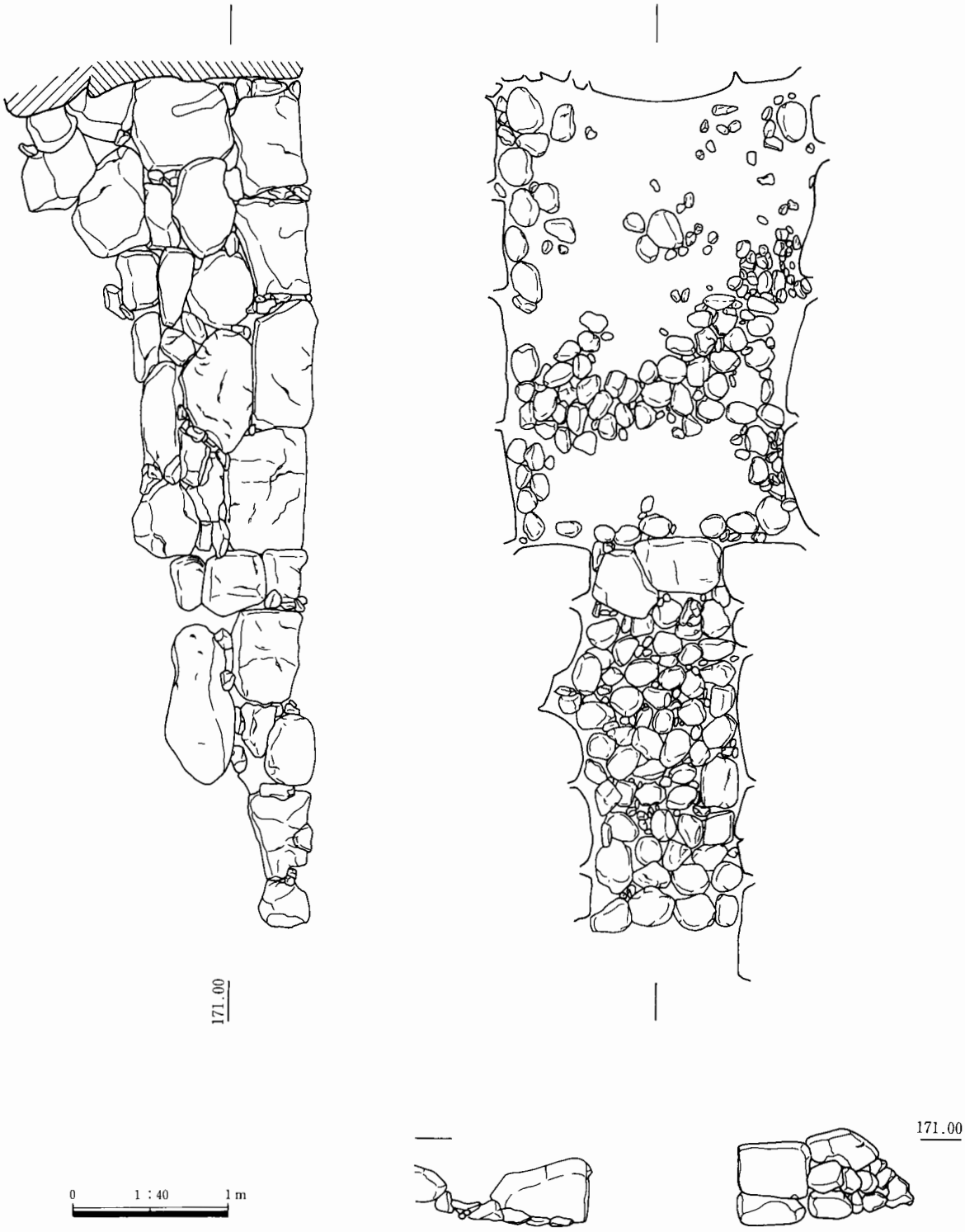
第17図　陣場１号古墳全体図(1)



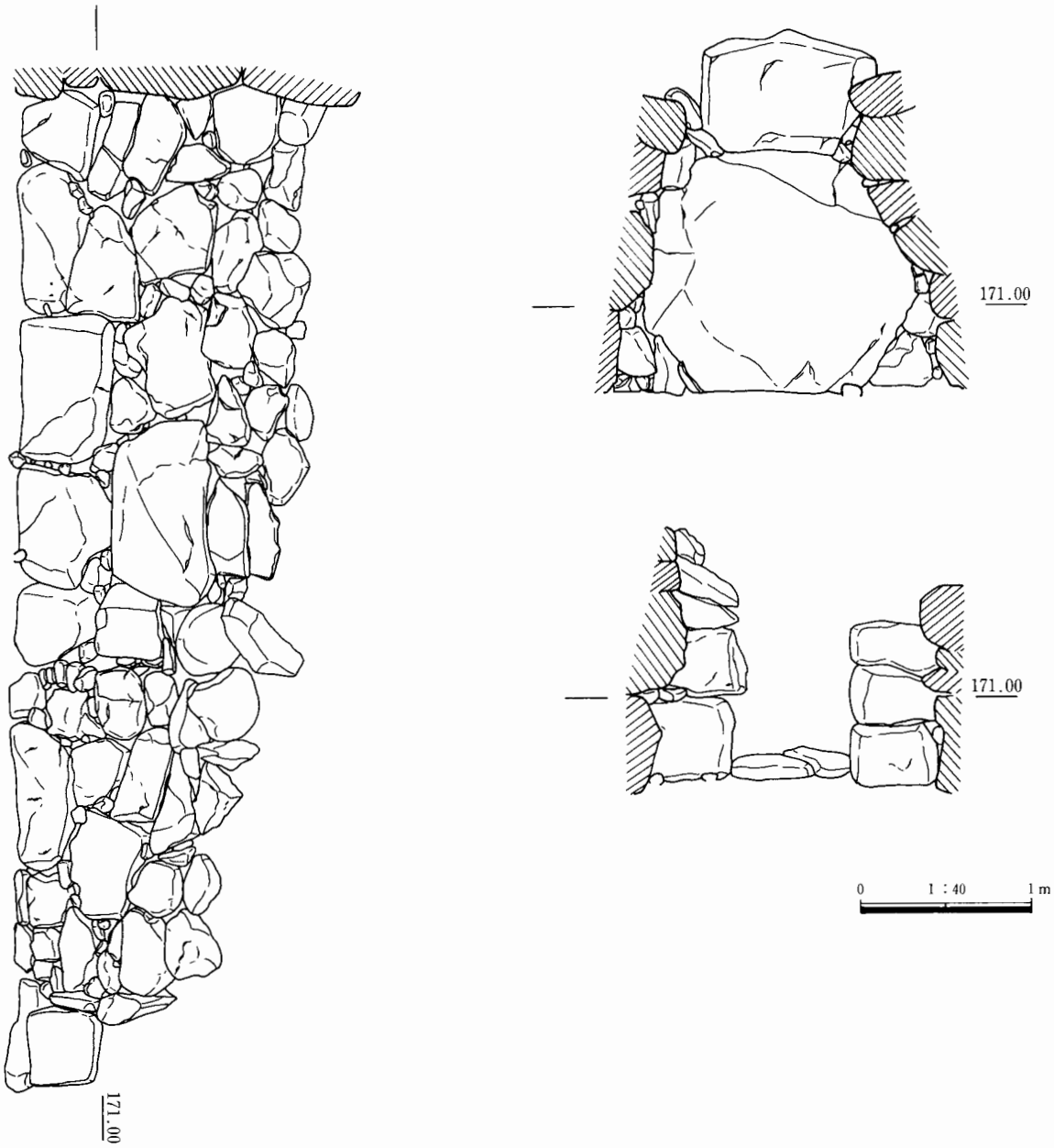
土層説明

① 黒色土　B軽石多量
② 黒色土と暗褐色土　CP多量、FP少量
③ 暗褐色土　ロームブロック含む
④ 暗褐色土　にぶい黄褐色土、褐色土ブロック多量
⑤ 暗褐色土にローム、ロームブロック多量
⑥ 褐色土　黄色ロームブロック多量
⑦ ≒6
⑧ 地山の可能性あり
⑨ 地山
⑩ 黒褐色土　軽石少なめ
⑪ 黒色土と黒褐色土　CP多量　FA含む溝の覆土
⑫ 黒褐色土　CP多量
⑬ 暗褐色土に黒色土、ロームブロック
⑭ 暗褐色土と黒色土
⑮ にぶい黄褐色土、黄色ローム少量

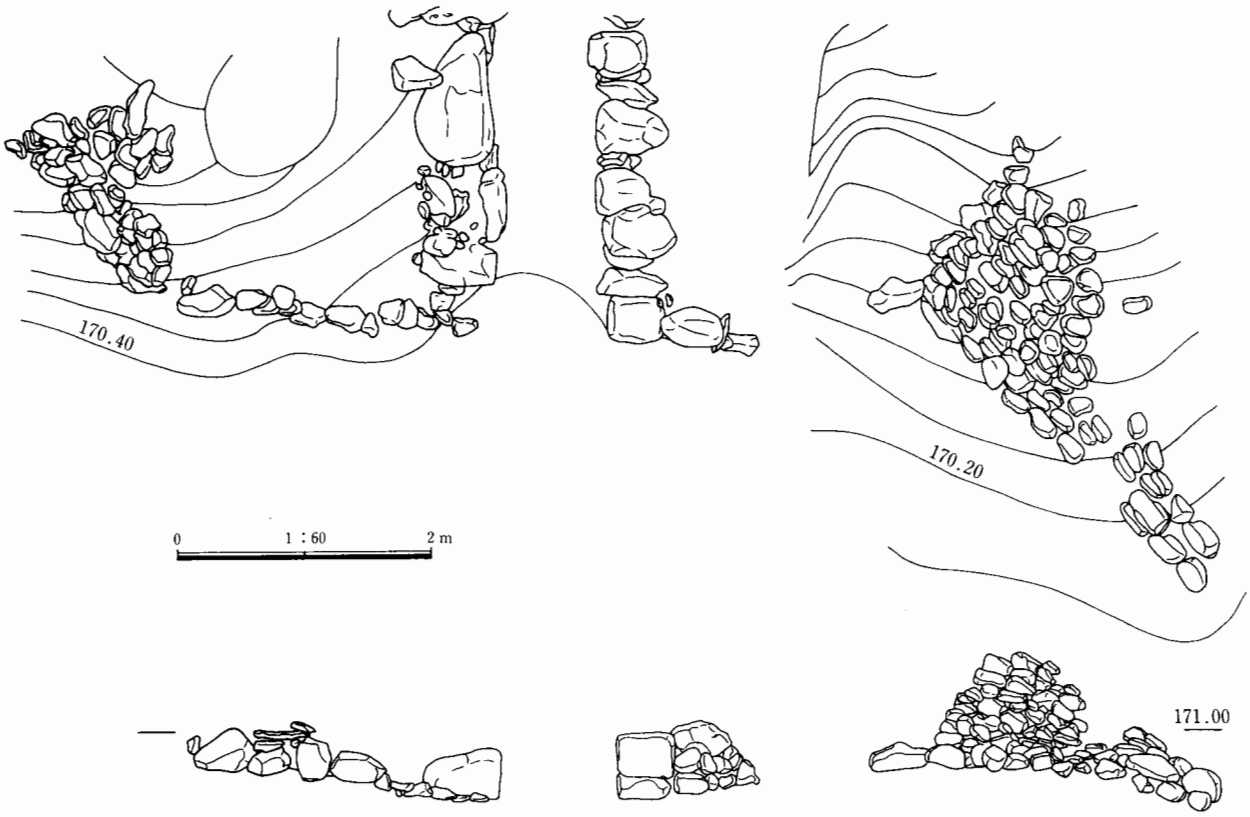
第18図　陣場1号古墳全体図(2)



第19図　陣場１号古墳石室展開図(1)



第20図　陣場１号古墳石室展開図(2)



第21図　陣場１号古墳前庭部

石室入口から右袖壁までの長さ2.5m、袖壁の長さ3.2mを測る。石積の高さは約80cmである。左側壁は全て削平されており、根石も残っていない。石室入口の左側の石積も根石が残存するだけである。前庭部の規模・形状は、左側が不明確であるが、根石から推定される石室入口から壁までの長さは右側とほぼ同じ2.5mであり、石室入口に対してほぼ左右対称に構築されていたとすれば、かなり底辺の長い台形若しくは扇形の形状であったと思われる。但し、石室入口左右の根石の配列は、左側は直線的であるが、右側は孤を描いており、必ずしも左右対称に作られているわけではない。ほぼ左右対称形として前庭の規模を推定すると、奥幅約６m、前幅約10mとなる。前庭内部は平坦な土面で外方（南方）に向かって緩やかに傾斜している。赤城山南麓の該期の古墳に一般的にみられる前庭部の土坑状の掘り込みは認められない。

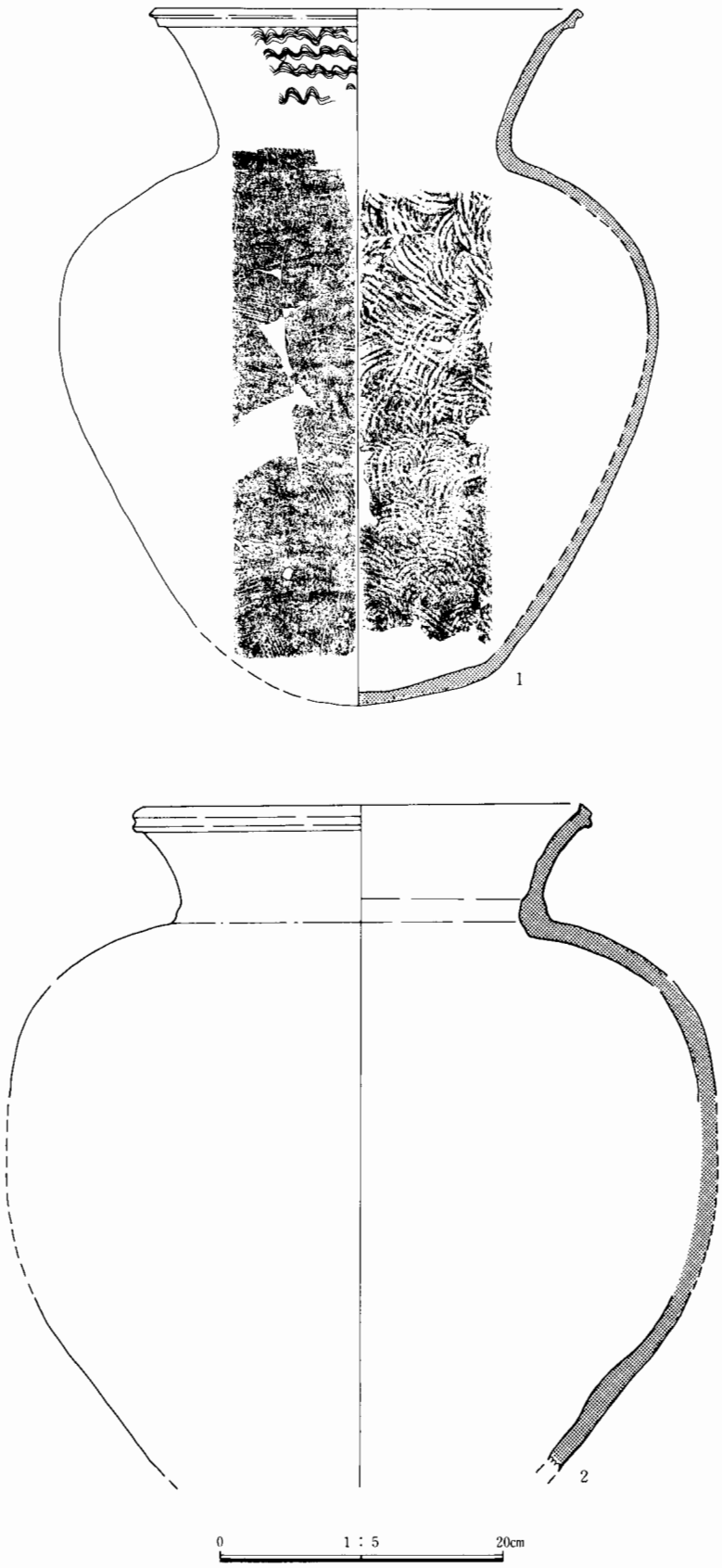
④主体部の構造

自然石（赤城山の地石―輝石安山岩割れ石）を主に利用した両袖型の横穴式石室であるが、一部に榛名山二ツ岳起源の角閃石安山岩の転石および切石も用いて構築している。

天井石は崩落もしくは除去されていたが、奥壁はほぼ旧状を留めている。右壁も入口部分を除けばほぼ旧状に近い状態と思われる。左壁は入口の石材は全て抜き取られ、羨道から玄室にかけては上部の石積みが欠失している。全体としてみれば比較的残りの良い石室と言える。

玄室の平面形は左壁は直線的であるが、右壁は袖際を除いて多少胴張り傾向にあり、また、奥壁近くに最大幅があり、入口に向かって幅を減ずるため、歪な羽子板状を呈している。羨道部はほぼ一定の幅である。

石室の規模は全長5.8m、玄室（右壁）長約2.9m、玄室奥幅約2.0m、羨道（右壁）長約2.9m、羨道幅約1.0mを測る。



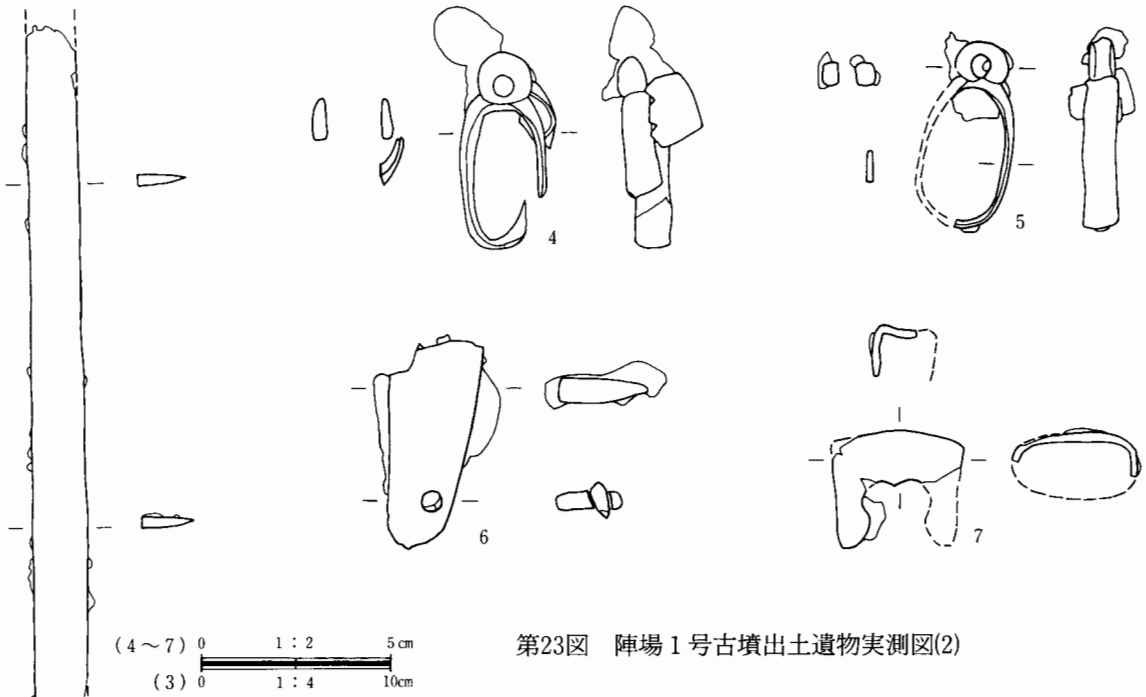
第22図　陣場１号古墳出土遺物実測図(1)

奥壁は基本的に２石で構成されている。特に根石は径が1.6mを超える大きな石材を用いており、その上に１石を乗せている。奥壁全体の残存高は約２mを測る。根石は石室内に向かってわずかに傾きをもっている。上段の石材も内部に向かってせりだしている。

玄室右側壁は根石とその上１～２段に大振りの石材を用い、それ以上は小振りな石材を用いている。現状で４～５段が残存するが、原状でもあと１段が乗る程度と思われる。全体的に横方向の目通りを意識して積んでいる。なお、床面レベルのプランは矩形に近いが、奥壁根石の中位より上では根石の肩部から徐々に曲を描いて右壁へと移行するような積まれ方になっている。玄室左壁も根石は４石からなるが、石材の大きさは右壁よりも揃っている。奥壁との接合は右壁と異なり、ほぼ直に組まれている。

玄室の床面は敷石となっているが、東西壁際と中央部のわずかな範囲を除いて敷石下まで攪乱されている。

玄室入口は羨道よりも若干内側に張りだしており、石材の積み方も異なっていることから、明らかに玄門を意識しているものと思われる。また羨道最奥部には扁平な角閃石安山岩を用いて梱石が設置されている。羨道部は玄室よりも更に大きさの不



第23図　陣場１号古墳出土遺物実測図(2)

揃いな石材を用いて構築している。特に右壁の根石は長さ、厚さが全く異なったものを用いている。右壁は５段前後、左壁は１～２段が残存するだけである。羨道部の床には敷石が完存しており、わずかではあるが閉塞石も残っていた。閉塞石には20cm前後の河原石および５cm程の小さな山石が用いられている。

石室入口の用材は、ほとんど抜き取られ右側に残存するだけである。板状の地業石（山石）の上に角閃石安山岩の切石が１石残存しており、入口は切石で構成されていたものと推定される。また、入口部分の床面の用材も欠失しているが、ここにも切石が使われていた可能性がある。

⑤遺物出土状態

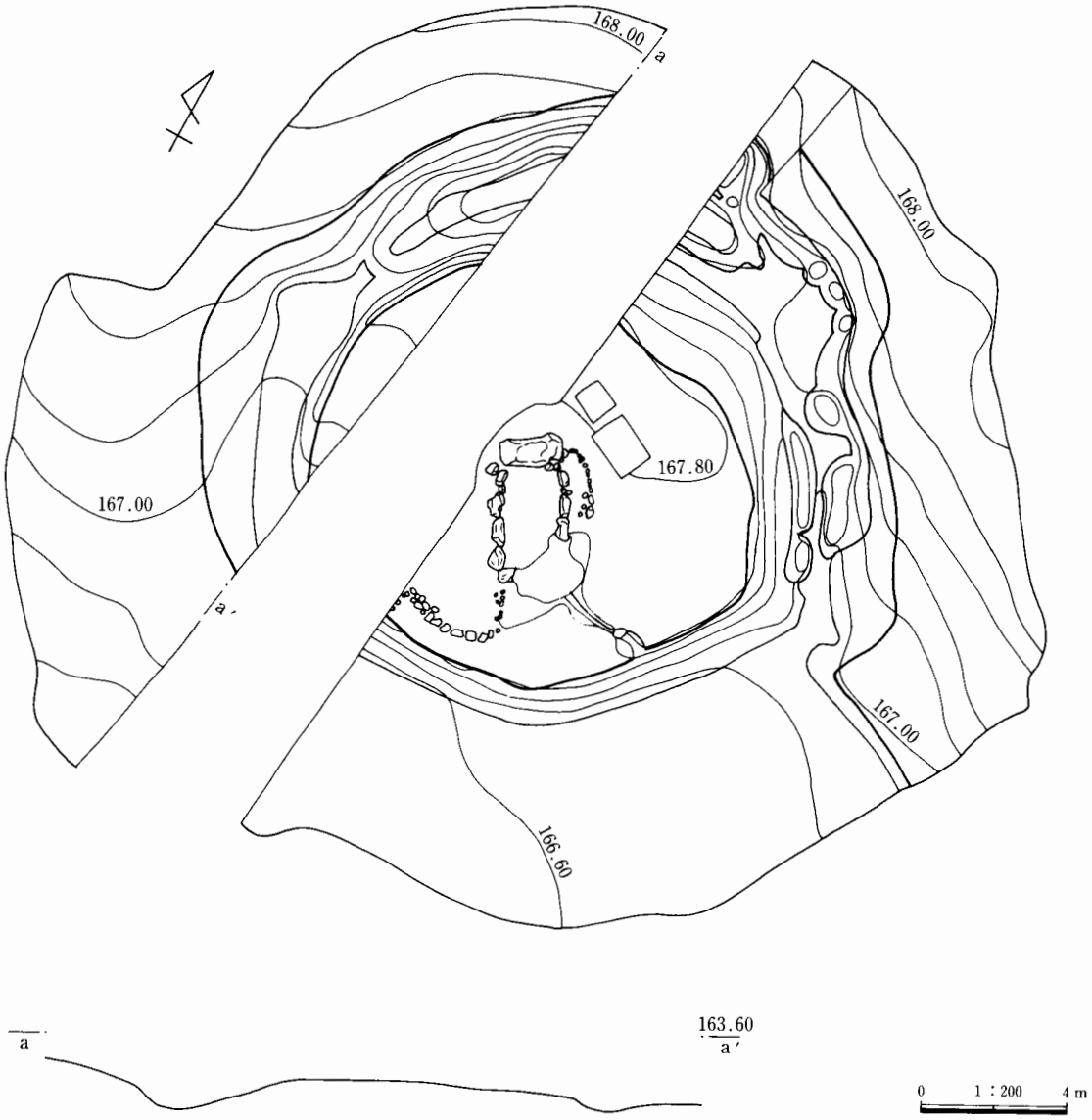
石室からは直刀１振りが出土しただけである。出土位置は玄室右壁際の床面直上で、鞘金具等が付帯している。墳丘からは須恵器甕が出土している。出土位置は前庭右袖部直上のテラス面から石積にかけて比較的まとまって１個体分が出土したほか、西側墳丘斜面に散在して１個体が出土している。

(2)　陣場２号古墳（遺構第17～21図、遺物第22・23図、PL ８～10、30）

①調査前の状況など

陣場１号古墳の南方約100mに位置する。墳丘西側には農道が通っており、この部分は未調査である。東側は現状で50cm前後の段差がある畑の境に位置していた。墳丘は上段の畑の耕作面と平坦になるまで削平されており、南側は下段の畑に墳形なりに突出していた。『上毛古墳綜覧』には記載されていない。

陣場１号古墳と同様に縄文時代の遺構と重複しており、また１号古墳とも重複していた埋土上層にFA火山灰を純層堆積する溝も墳丘のほぼ中央に重複している。なお、墳丘の北東部から平安時代の須恵器・灰釉陶器などがまとまって出土しているが、追葬に伴うものか、別の遺構が重複するのかは判然としない。



第24図　陣場２号古墳全体図

②墳丘及び外部施設

先述したように墳丘は耕作等により平夷されていた。残存部分についても耕作に伴う溝や礫を埋めた土坑等でさらに深く攪乱されており、盛土は最大でも20cm前後の厚さが残るだけである。盛土整地面直下にはFA火山灰層が堆積している。

葺石は石室の入口から西側にかけて残存しており、農道の下にも続いている可能性があるが、西～北～東には検出されておらず、墳丘全体に巡っていたかどうか不明である。石室寄りは長さ30cm前後の山石を用いた根石だけが残存し、その先は小振りな山石で２～３段が残存する。この西端には葺石とほぼ直交する石列が検出されており、これより西側は一段高くなっている。石室入口の右側の葺石根石は１石だけが残存しており、やはりこれより東側は一段高くなっている。石室前面は平坦であることから、定型的な台形状ではないが、前庭に類似する墓前祭祀施設の可能性が考えられる。

第25図　陣場２号古墳石室及び葺石検出状況

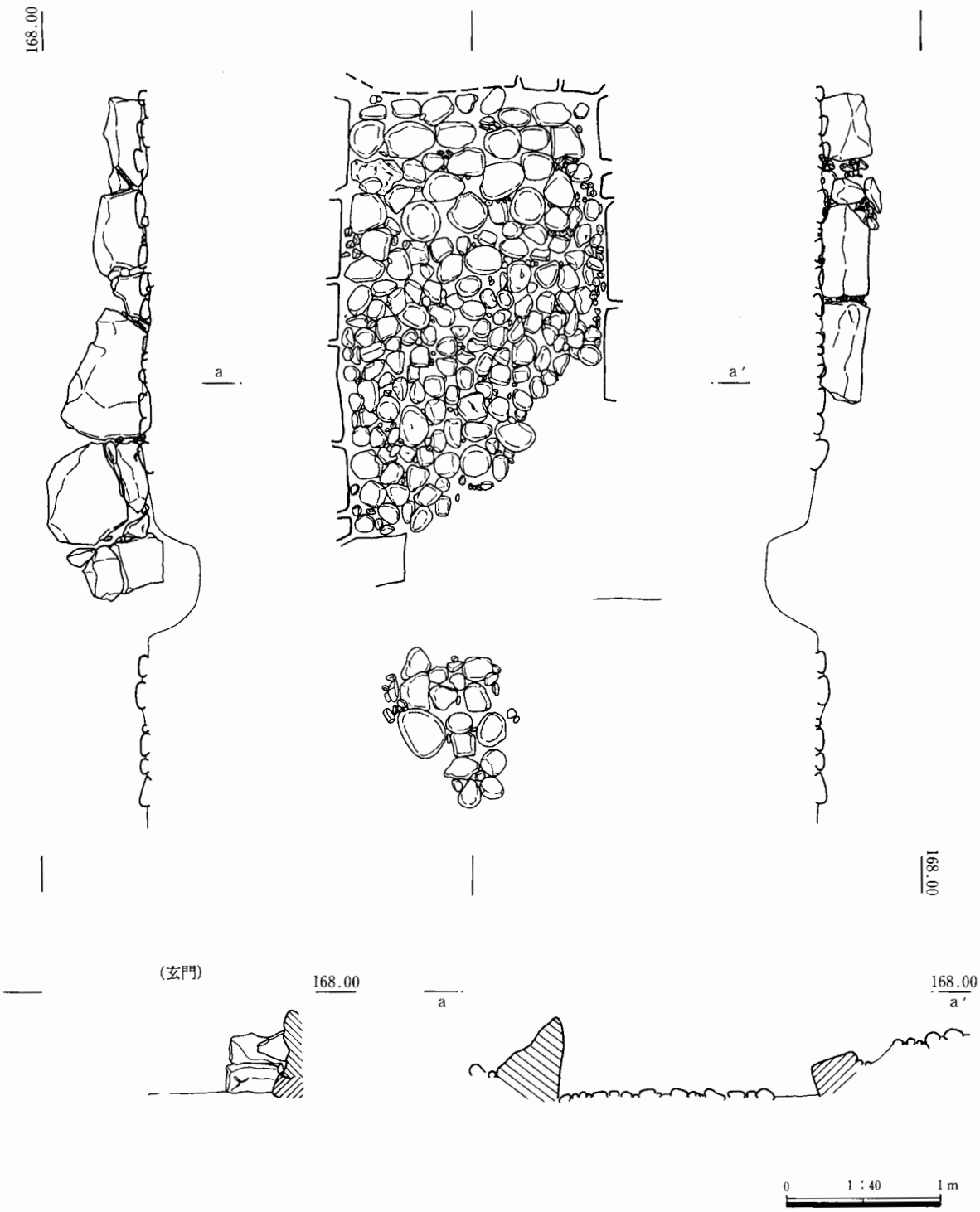
周堀は南側約１/４が畑の深耕により不明であるが、東～北～西に巡っている。西側は浅いが、北～東側は深く、特に外周の側壁や底面には古墳の周堀としては不自然な程凹凸が著しい。この部分は墳丘側の立ち上りにも崩落が認められており、古墳構築以後に攪乱されたものと考えられる。また、この部分も含め周堀の上層には浅間Ｂ軽石が堆積していることから平安時代以前の行為と思われる。

墳丘の形状は北側が崩落しており、南側も多少耕作の影響を受けていると考えられるものの、比較的整った円形を呈している。規模は周堀の内側で約12m、葺石根石の位置で約９ｍである。周堀を含めると18m前後の規模である。周堀は突出部を除いて上幅３～４ｍ、深さは西側30cm、北側1.2m、東側60cmである。

③主体部の構造

赤城山系の山石を用いた自然石積みの両袖型横穴式石室である。玄室はわずかではあるが、胴張状気味である。かなり激しく攪乱を受けており、根石が残る程度であるが、残存する部分からある程度規模は推定できる。石室全長約5.0m、玄室長2.8m、幅は中位で1.65mを測る。

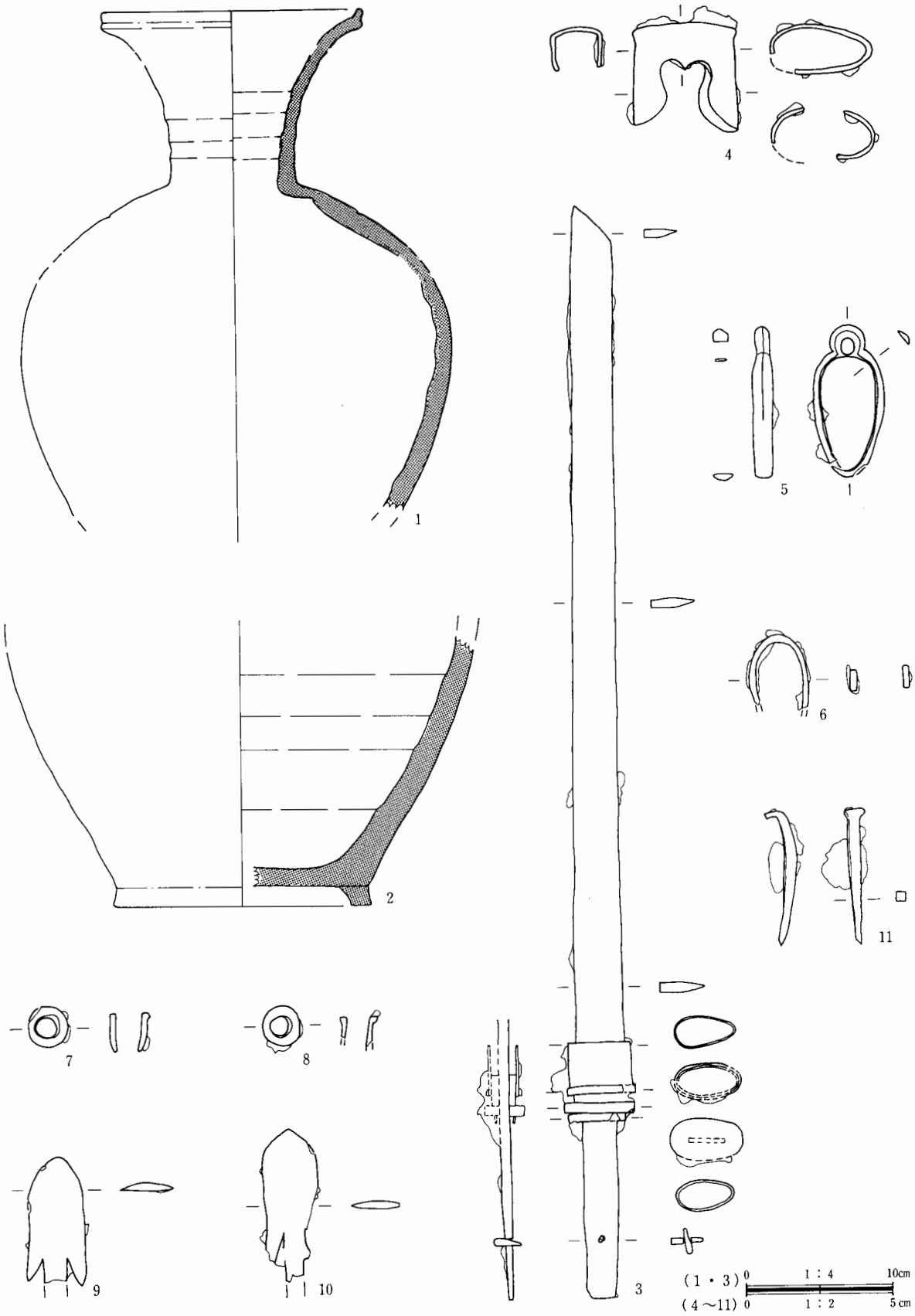
奥壁根石は既に倒壊していたが、基本的に１石で構成される。板状の用材を平積みしており、不足部分を補っていた石材が原位置に残存する。玄室側壁の根石は左右ともに基本的に４石で構成されると思われ、や



第26図　陣場２号古墳石室展開図

はり不足部分を小さな礫で補っている。右壁は入口側の１石が攪乱により欠失していると思われるが、左壁は完存する。右壁根石には内面長方形の割れ石を用いており、高さはほぼ一定であるが、左壁根石は入口側が大きく、高さは一定していない。玄室の南東部には土坑が重複しており、これより南側の右側壁材は全て抜き取られている。

左側袖石は２段が残存する。羨道部の他の石材は全て抜き取られているが、羨道部床面の舗石位置からみれば玄門状に突出していたものと思われる。また、羨道左壁の長さは約1.7mと推定される。



第27図　陣場２号古墳出土遺物　（２）0 1：3 10cm

玄室の床面には小礫が敷かれており、その下に扁平で不揃いな径５～30cmの河原石が敷かれていた。玄室入口部分の石材は抜き取られていたが、抜き痕の形状から梱石が付設されていたと推定される。羨道の床面は激しく攪乱されていたが、部分的に河原石の石敷が残存していた。

④遺物出土状態

遺物は玄室左壁際床面直上から直刀が出土した。これには鞘金具等が付いた状態で出土している。これ以外では鉄鏃・鉄釘が出土しているが、出土位置は不明である。

(3) 下庄司原１号古墳（遺構第17～21図、遺物第22・23図、PL ８～10、30）

①調査前の状況など

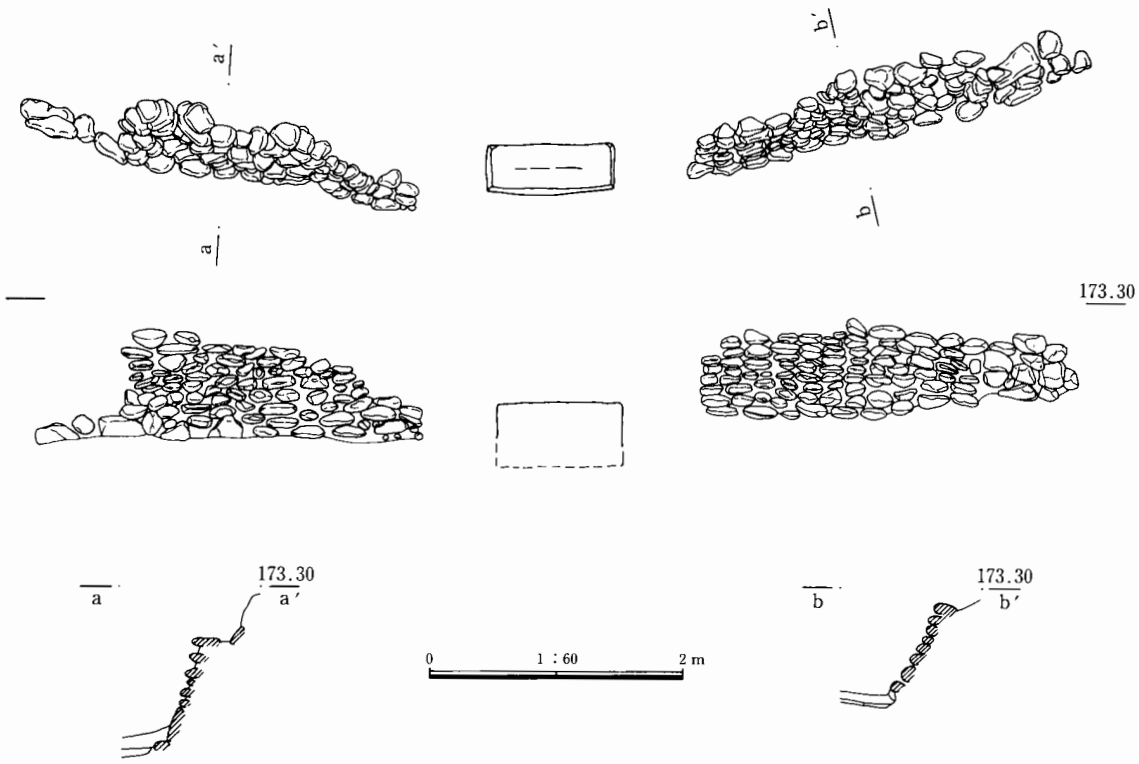
『上毛古墳綜覧』富士見村第10号である。通称は狐塚と呼ばれていた。

調査以前においても古墳と判る墳丘の高まりが認められていたが、西側はかなり削平されている様子が伺えた。また墳丘上部は特に石室攪乱等の痕跡は認められず平坦になっていた。現況からの高さは1.5mを測り、高さが低いものの、石室の残りが良いものと期待して調査を行った。地権者の話では、墳丘葺石の石材を多量に採取して石垣の用材としたとのことであった。

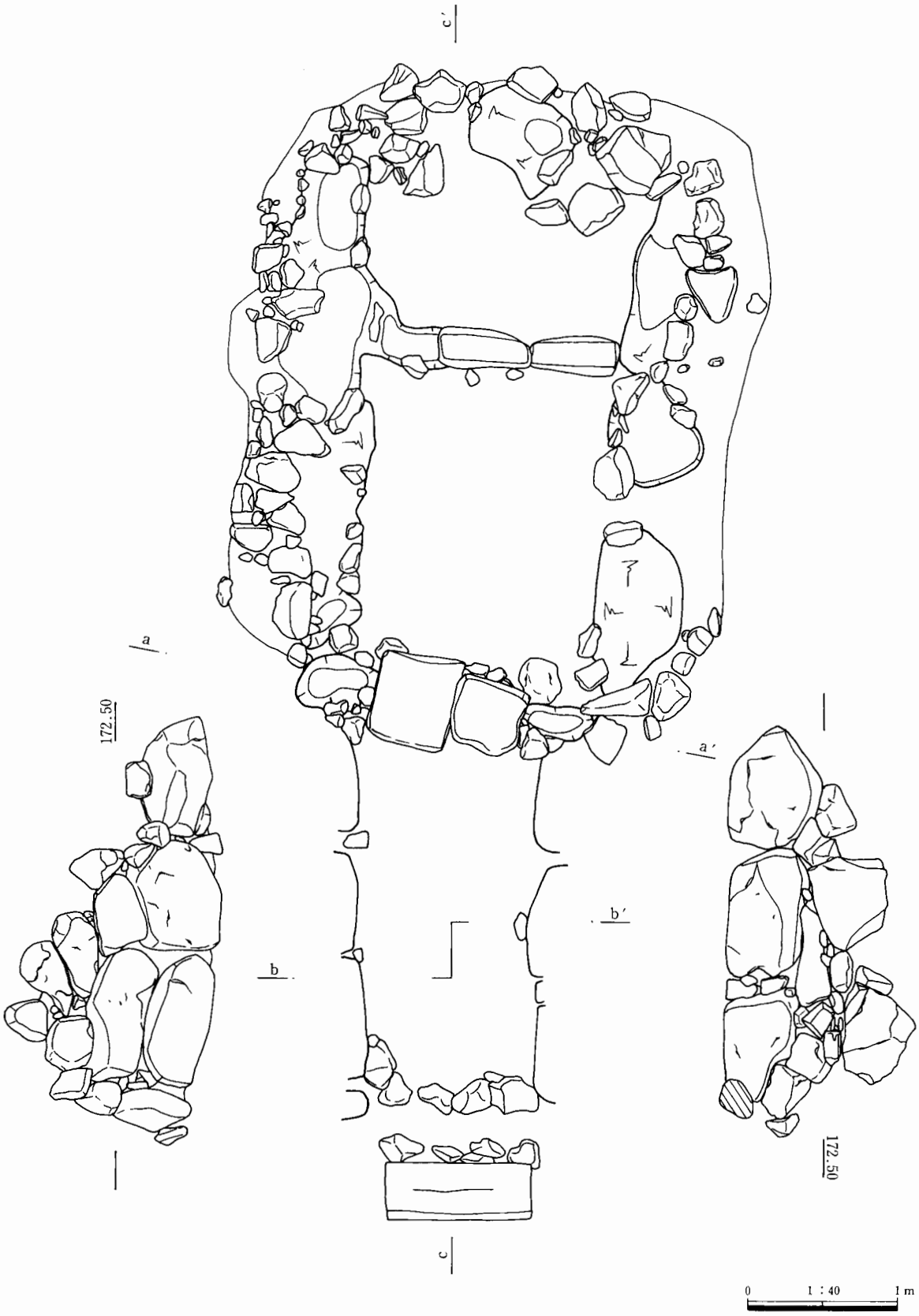
古墳の東側には平安時代の集落が近接しているが、同一台地上に古墳時代の遺構は検出されていない。

②墳丘と外部施設

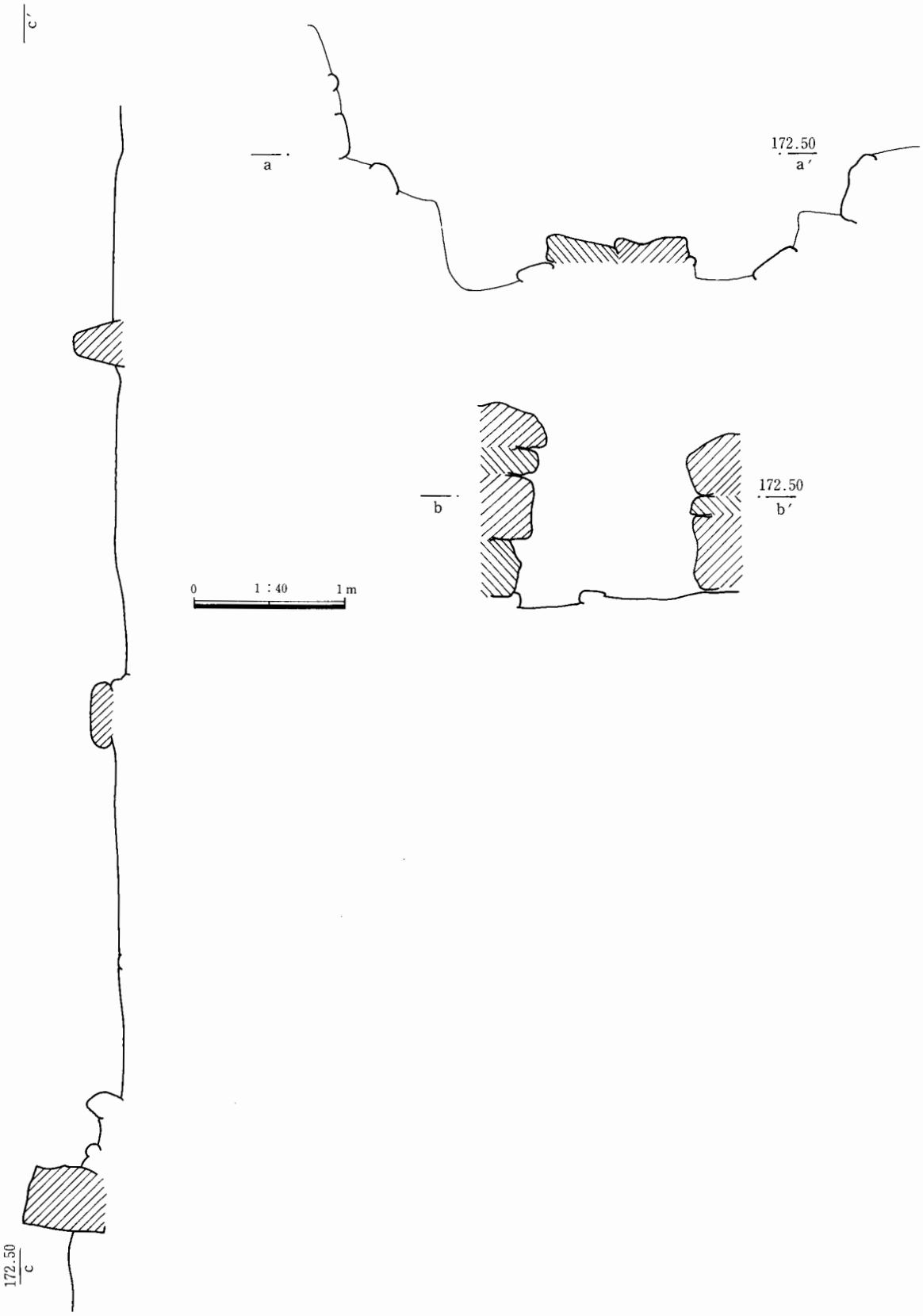
調査を行ってみると先述したように墳丘の西側は墳丘まで含めて削平されていた。また、北側・東側も地籍なりに墳裾部が浸食されていたが、南側は比較的原況を良く留めていた。墳丘の南側、石室の前面には前庭が付設されており、石室入口両側の石積みは良好に残存していたが、袖部側壁の石積みは全く残っていな



第29図　下庄司原１号古墳前庭部石積み



第30図　下庄司原１号古墳石室展開図(1)



第31図　下庄司原１号古墳石室展開図(2)

かった。陣場１号古墳と同様に「付け基壇」に類する構造と思われ、袖部から続く墳丘外側の土盛も一部に残存していたが、調査の過程で撤去してしまった。石室入口から続く葺石は東側に検出されているが、西側は前庭部以外には残存しない。また、北側は墳丘の残りがよいと思われる部分でも検出されなかった。墳丘の断割調査によると東側葺石の延長上に盛土の変換点が認められることから、この部分には東側のような葺石を行わずに土盛りを行った可能性もある。なお、東側に残存していた葺石の下部は原状では墳丘内部に隠れていたと考えられ、この外側にも前庭部右側壁から続く葺石が積まれていたと思われるものの現状では痕跡さえも残っていなかった。残存する墳丘の形状は、西側が削平されているものの根石の位置で南西から北東にかけて円形状を良く残しているが、北側は残存墳丘頂部においても突出している。墳丘の規模は残存する葺石の位置で約15～16m、前庭袖部と墳丘北側の残存状態から推定できる基壇の位置で約21mである。

周堀は西側と北東側の２ケ所に検出されている。西側は平面形が三日月状で長さ24.8m、幅8.4m、深さ1.6mを測る。北東側は長さ19m、幅10m、深さ1.8mを測り半月状を呈している。

③前　　庭

定型的な台形状プランの前庭と思われるが、残存状況が悪く不明確な点が多い。石室入口左右の石積は比較的良好に残存するが、袖部側壁は根石も僅かしか残っていない。しかし、前庭部分の石積みは基壇によって隠れる部分の石積とは形状・大きさが異なっており、また、基壇の盛土もある程度残存していたため、規模・形状等が推測できる。前庭部の石積は根石も含めて長さ20cm前後の河原石を丁寧に横積みしており、基壇に隠れる部分では多少大振りな河原石主体に雑に積んでいる。石室入口の石材（羨門）が抜き取られているため推測値であるが、入口左右の石積の長さは左右ともに約2.1mを測り、奥幅は約6.6mである。側壁の長さは左右ともに３m前後、前幅は9.6m前後と推定される。前庭部床面は土面であり外方に向かって緩傾斜している。前庭部の床面直上には葺石は崩落しておらず、覆土中層以上にまとまって検出されている。全体図中の石室前面には崩落した葺石を記載しているが、位置的には前庭入口（外縁部）に接して外側の位置になる。石室入口前面の底面直上（整地面上）には石室石材の一部（恐らく羨門）と思われる輝石安山岩切り石が３点散在しており、構築後の早い段階に石室が破壊されたと推察された。なお、底面下の断割調査を行ったところ、石室石材を加工した際の切端・切屑が薄い層状に敷設されていることが確認できた。

④主体部の構造

一部に切り石を用いた自然石（赤城山の輝石安山岩割れ石）乱石積み両袖型横穴式石室である。

玄室壁材は根石も含めて全て抜き取られており、若干の裏込め被覆の用材だけが原位置を留めているだけの状態であった。抜き痕から玄室の根石の構成を推測すると、奥壁は基本的に１石である。側壁は左右ともに大振りな石２石と小振りな石１～２石で構成すると思われる。側壁の配列は直線的で、入口側よりも奥壁側の幅が広いため長台形状の矩形を呈する。玄門も抜け痕の形状から自然石を用いていたものと思われ、羨道壁から20cm前後突出している。玄室入口の床面には輝石安山岩切石の梱石が２個置かれている。また玄室奥寄りの床面には、やはり輝石安山岩切石の間仕切が埋置されていた。床面は土面であり、他の石室のような礫敷は検出されていない。床下には石材を加工したときの切屑（小粒・粉末状）が層状に敷き込まれている。玄室の埋土中からは、裏込め用材とともに石材の切端が多量に検出されているが、裏込め用材中に元々有ったものか、攪乱時点の加工屑なのかは不明である。

石室入口の石材は欠失するが、これ以外の羨道部の壁材は多少残存する。根石は左右とも基本的に３石で構成される。石室入口には框石状に輝石安山岩切石が埋置されている。羨道部の床面も土面であり、床面下には切屑が敷き込まれている。閉塞材はまったく残っていない。羨道部の幅はほぼ一定であるが、若干奥の

方が広いような傾向もある。尚、前記したように羨門と思われる石材が入口前に散在していた。

石室全体の形状は、玄室と羨道部の左壁がほぼ直線的に配置されているため、玄門が無ければ片袖型の横穴式石室のような形状を呈している。

石室の規模はほとんど推定値であるが、玄室は長さ約3.2m、奥幅約1.8m、前幅約1.5m、羨道部の長さは玄門部を加えて約3.7m、奥幅1.2mを測る。全長約6.9mである。

遺物は墳丘の周辺から須恵器甕の小破片等がごくわずか出土しただけである。

(4) 上庄司原1号古墳（遺構第32～40図、遺物第41～44図、PL14～17・29・31）

①調査前の状況など

『上毛古墳綜覧』富士見村第8号である。

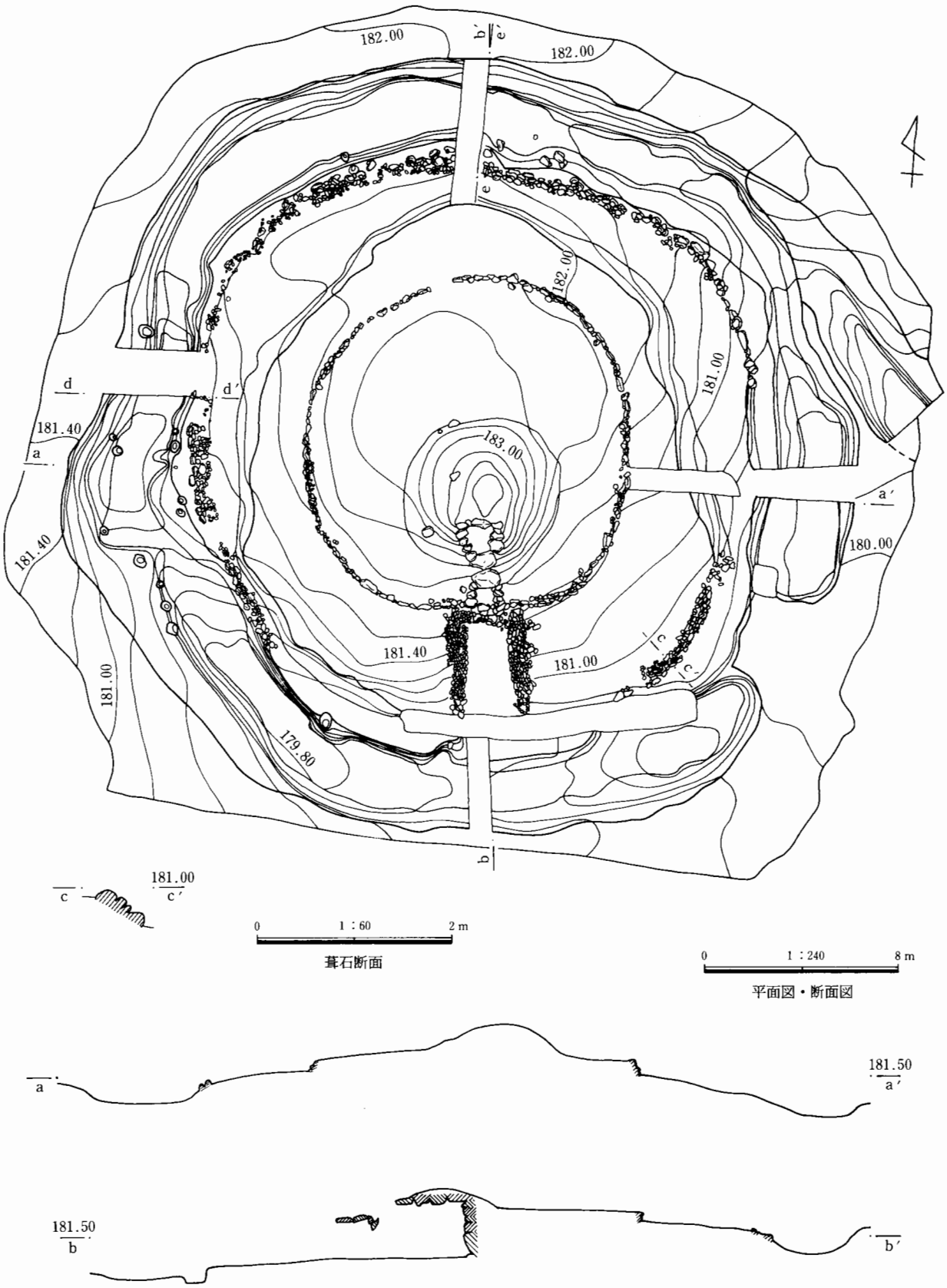
古墳は石室巡りを除いて桑畑・野菜畑として利用されていた。石室は芋窯として利用されており、石室のまわりには多量の礫が集められていた。

今回調査した古墳の内で最も墳丘・石室の残りの良い古墳であるが、細部ではかなり耕作等による後世の破壊を受けている。墳丘は石室巡りを除いて盛り土上部が大幅に削平されていた。テラス部は縁辺部、特に東側と南側は畑の境となっており削平が激しい。また、前庭部先端からテラス南端には耕作溝が深く掘られており、畑の境には石積みがあった。周堀の北東部には農道が通っていた。

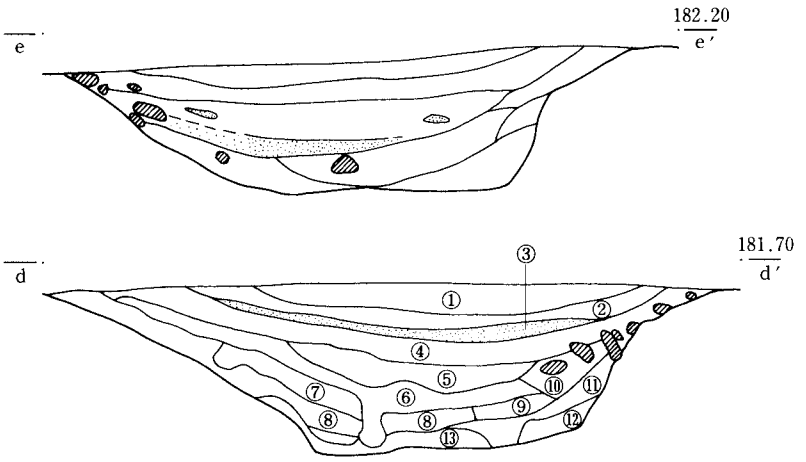
縄文時代の集落跡の中にあるため、土坑等が多数重複している。東側周堀南端には中世の土坑墓が1基重複する。西方約50mに上庄司原2号古墳が近接する。また南側に平安時代の集落が展開する。

②墳丘と外部施設

墳丘の形状は多少の歪みがあるが円形である。墳丘の裾には石室入口から続く葺石がほぼ一周している。葺石は残存する範囲では直に立ち上がる。葺石はある程度の間隔をおいて大振りな山石を配し、その間は根石も大振りな山石を用いてその上に小振りな山石を積み上げる区画と、根石も含めて小振りな山石を積み上げる区画があり、作業の単位を表すと思われる。葺石の残高は60cm前後で、それより上は削平されているため、葺石の高さや葺かれた角度などは不明である。石室巡りは盛土が半球状に残っているが、奥壁と左壁側の裏込め押さえの礫が露出していた。墳丘の外側は周堀までの間がテラス状になっている。現況では墳丘から外側に向かって傾斜面となっており、北半部の周堀寄りはローム層まで削平されている。墳丘寄りは地山（FA層・黒色土層など）が残っており、その上面にはローム土を含む褐色土が覆っていたが、墳丘の崩落によるものか、あるいは盛り土されたものかは不明瞭であった。但し、この土層中からは礫がほとんど出土せず、墳丘葺石の立ち上がり方も併せて考えると、ある程度盛り土されていたことも考えられる。テラス部の外側には南東の一部分を除いて周堀が巡っており、その内縁には石積が検出されている。この石積は部位により石材の大きさや、積み上げ方が異なっている。南西部は小振りな山石を数段積み上げているが、北西部は周堀法面の上端寄りに雑然と並べたような状況（或いは崩落した状況か？）である。北側から東側にかけては東側になるほど大きな山石を根石に据えており、北側には根石の上に数段残存するが、削平の関係もあり東側は根石だけが残存する。周堀の切れる南東部から南側にかけては小振りな山石を用いて角度を付けて丁寧に葺いており、耕作溝によって攪乱されてはいるが、この葺石が前庭右側袖部側壁の石積みに続くと思われる。この葺石の外側は周堀の掘り残し部分よりも約20cm高くなっており、周堀南東端の深掘り部分で多少幅を狭めるが、1.5m前後の幅で平坦になっている。この平坦面は前庭部の底面と同レベルであり、周堀を掘り残したブリッジ部分から始まると推定されることから、通路としての役割が考えられる。前庭部西側の



第32図　上庄司原１号古墳全体図(1)

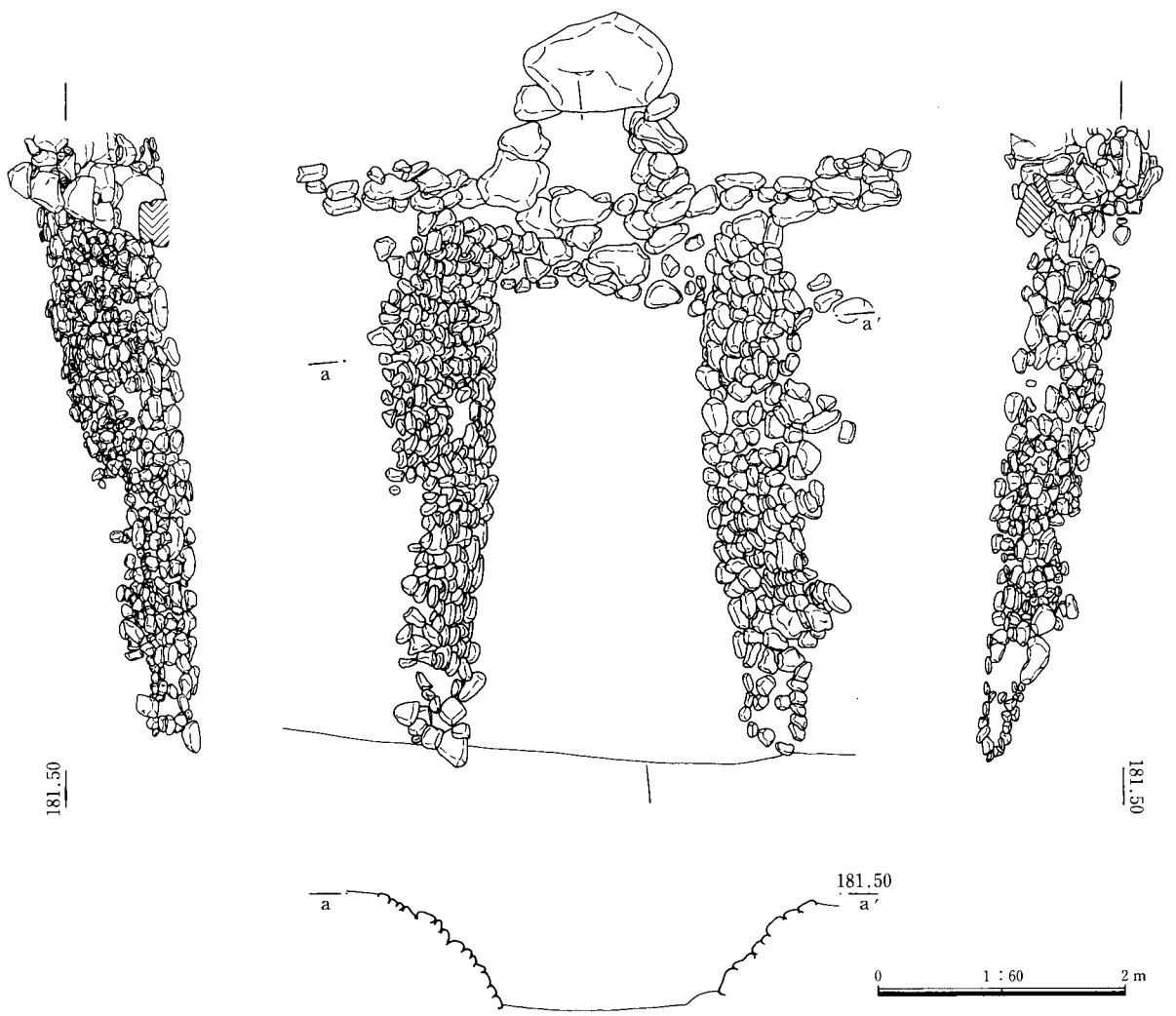


d－d′土層説明

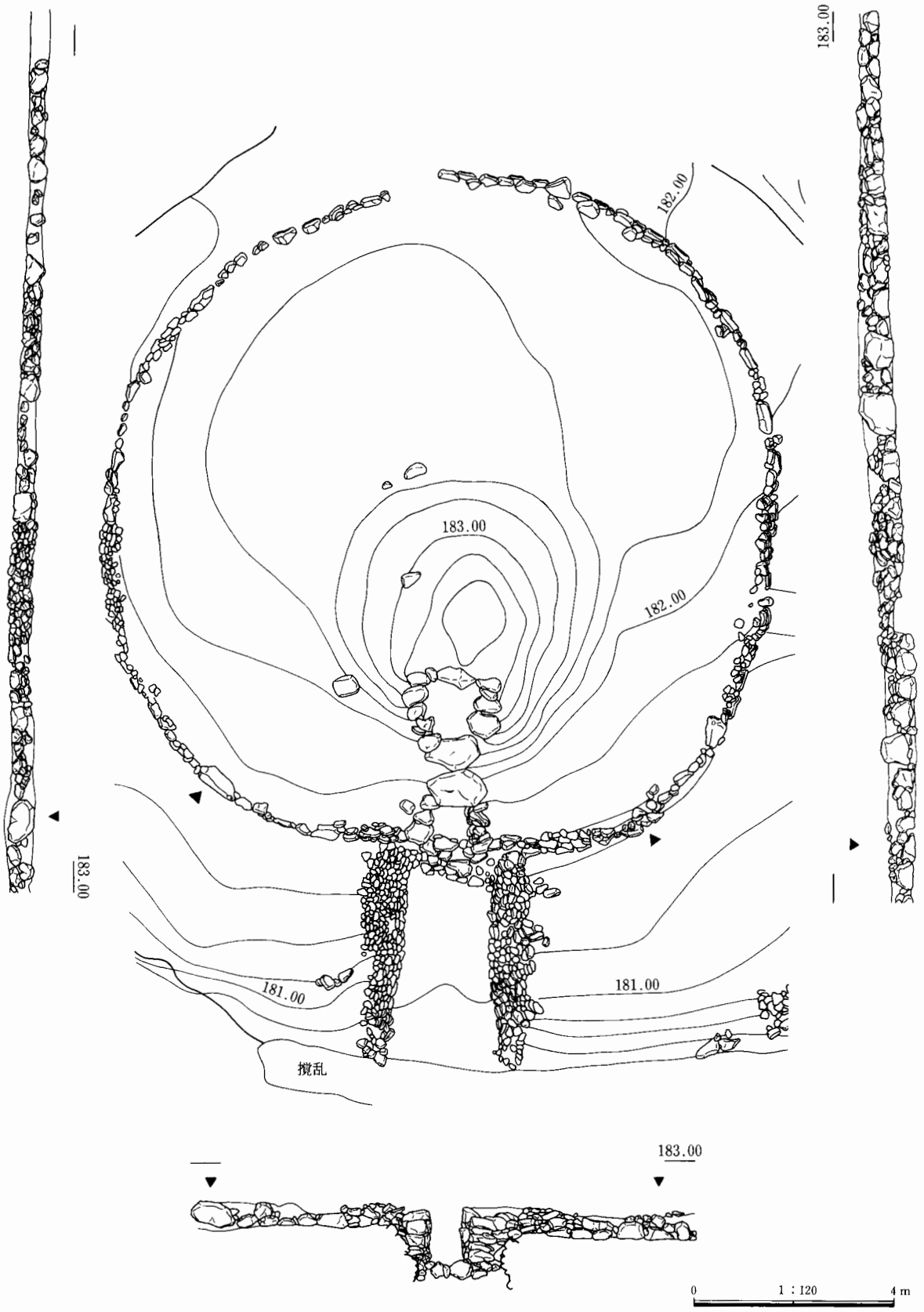
① 黒色土ににぶい褐色土ブロック　C軽石含む
② B軽石を多量に含む黒色土
③ B軽石純層
④ 黒褐色土ににぶい褐色土ブロック　C軽石多量
⑤ 黒褐色土ににぶい褐色土
⑥ 黒褐色土と黒色土ににぶい黄褐色土　C軽石、FP含む
⑦ にぶい褐色土とにぶい黄褐色土に黒褐色土少量　軽石少量
⑧ 黄褐色土とにぶい黄褐色土
⑨ にぶい黄褐色土と暗褐色土に黄褐色土
⑩ にぶい褐色土　粘性あり
⑪ にぶい褐色土に黄褐色土
⑫ 黄褐色土　黄色パミス含む

0　1：60　2 m

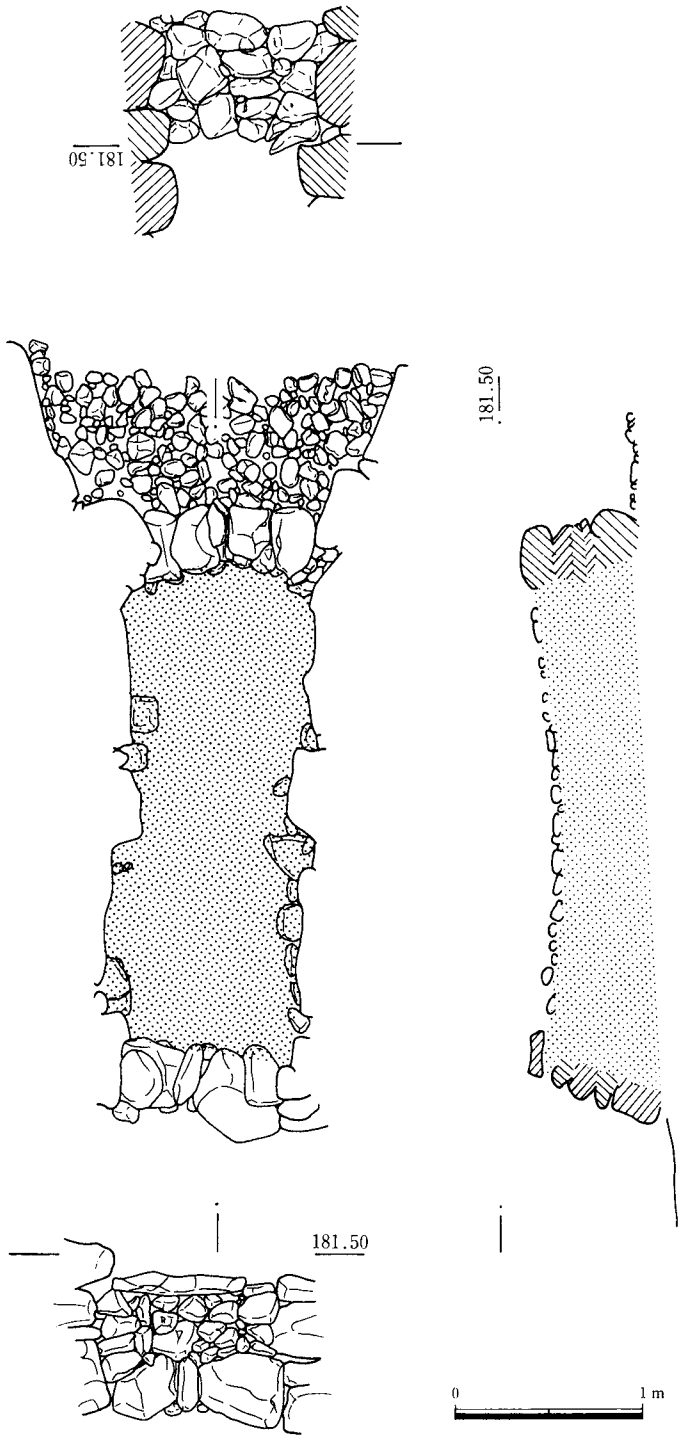
第33図　上庄司原１号古墳全体図(2)



第34図　上庄司原１号古墳前庭部



第35図　上庄司原１号古墳墳丘葺石展開図



第36図　上庄司原１号古墳羨道部閉塞状況

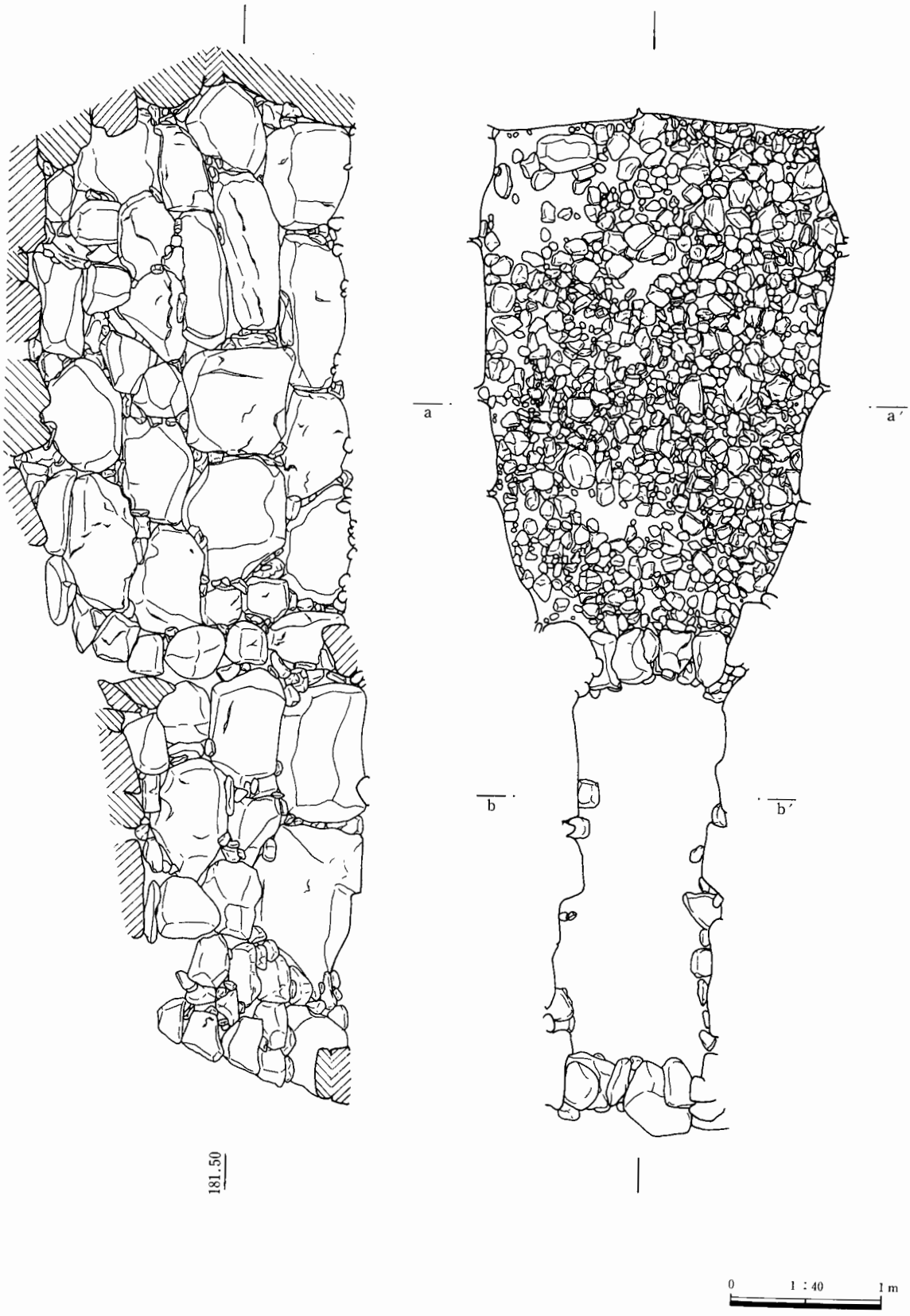
テラス部南端にも段があるが、耕作の影響を受けており、どの程度原状を留めるかは不明である。しかし、いずれにしても前庭部底面よりも高く、前庭部の左右で構造を違えていることは明白である。墳丘の規模は径約13.6m、テラス部は周堀内側の石積で径約24mを測る。

周堀は北半部はほぼ一定の幅・深さで巡るが、東側は浅くなっている。またほぼ真西も幅が広くなっており、それより南側は深さが深くなっている。この部分の内側立ち上がりはかなり急角度である。南側は入口部分の高さから見ると相対的に浅い。尚、周堀西側の底部の際及び肩部に柱穴が穿たれており、中には柱穴部分を避けて周堀を掘削している部分もあることから、古墳構築に関係する柱穴の可能性がある。周堀の幅は４～５ｍ、深さは最大で1.2mを超える。周堀を含めた墓域の規模は31m強である。

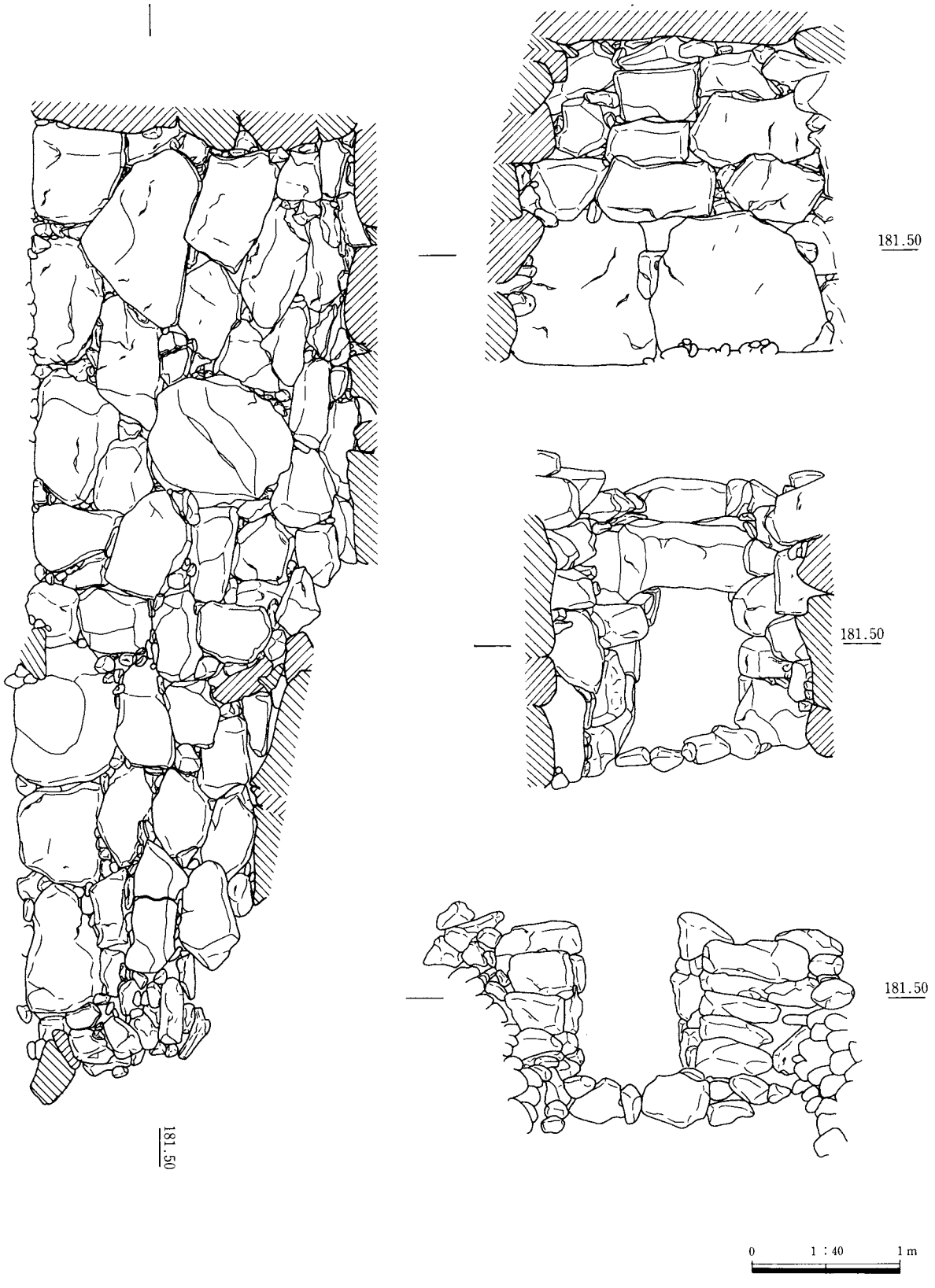
③前 庭 部

石室前面にはテラス部分の地山を掘り込んで前庭を設けている。主軸方向に長い狭長なプランを有し、袖部側壁には小礫を積んでいる。小礫はすべて山石を用い、横積み或いは小口積みで乱雑に積んでいる。先端は耕作に伴う溝によって完全に破壊されており、残存する部分の先端も部分的に石が抜かれている。石室入口左右の石積の幅で中程まではほぼ平行しているが、そこから先は弱いハの字状に開く。底面は平坦であるが、外側に向かってわずかに傾斜している。

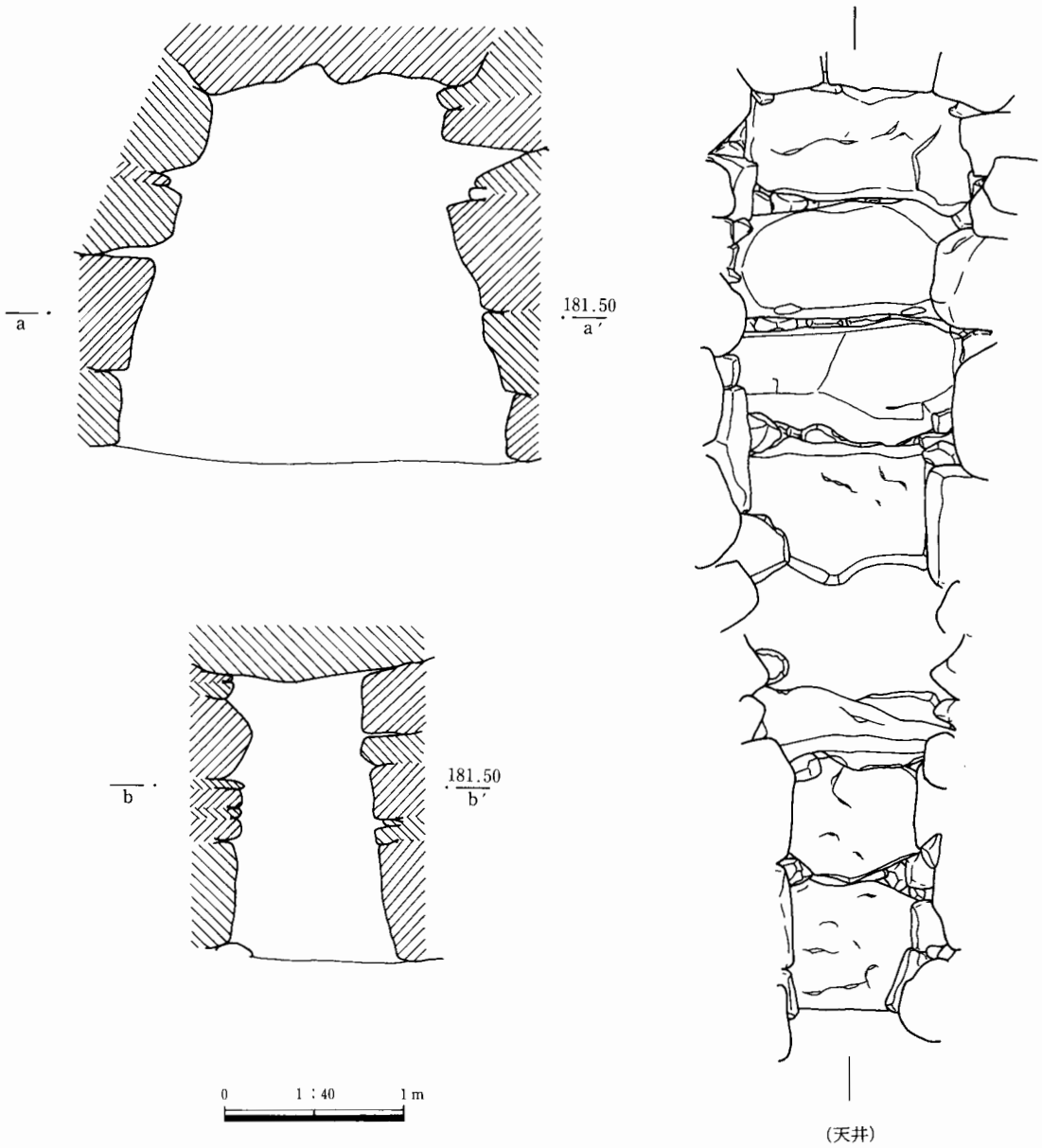
石室入口の羨道閉塞施設には外側から多量の礫を寄せかけている。また、前庭の入口部分には雑ではあるが石積が施され、内部は大小の礫混じりの土が埋塡されていることから、前庭部分もある程度閉塞していたものと思われる。袖部側壁の長さは左右とも現状で4.4m、奥幅1.6m、前幅は現状で2.4mを測る。袖部側壁の高さは石室寄りで約１ｍである。



第37図　上庄司原１号古墳石室展開図(1)



第38図　上庄司原１号古墳石室展開図(2)



第39図　上庄司原１号古墳石室展開図(3)

④主体部の構造

赤城山の山石を使用した割れ石積みの横穴式石室である。両袖型石室であるが、玄室の側壁は胴張り状を呈しており、入口に向かって徐々に幅を減じて羨道部に移行するため、明瞭な袖の構造にはなっていない。

石室の規模は全長約6.6m、玄室長約3.3m、玄室中幅約2.2m、羨道長（左壁、玄門を含む）約3.2m、羨道幅（奥寄りで）約1.0mを測る。

奥壁の根石は２石で、その上に３列３段に積み上げている。右側の根石は内側にずれて傾いており、裏込めの小礫が崩れ、奥壁背面に空間部ができていた。左右壁の根石はいずれも４石で、その上に４～５段が積まれている。左壁は比較的横の目が通っているが、右壁は石材の大きさが不統一で目は通らない。

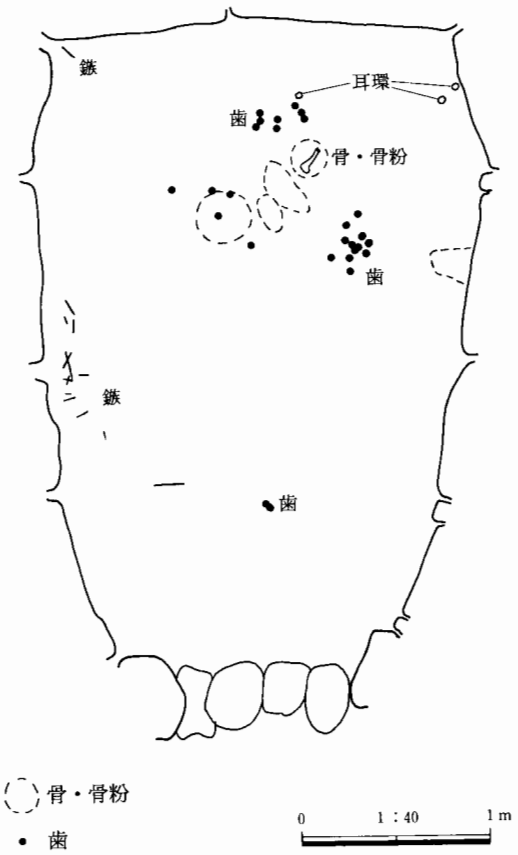
玄室床面は大振りな山石を敷き詰め、更にその上に小振りな山石を敷いている。床面の数ケ所は土面まで

の攪乱を受けており、礫敷き面もかなり乱されている状況であった。

玄室入口は小振りな石材を内側に突出させて積み上げており、玄門状に構築している。実測図には玄室入口の床面に梱石状の配石を載せているが、実質的には閉塞押さえの根石である。

羨道の最奥部には楣石が付設されている。平板な礫を斜めに2石が接するように架け渡している。羨道部は右壁の根石が3石で、その上にさらに3段積んでいる。左壁は根石2石で、その上に2段積んでいる。石室入口はこの壁の先に小振りな礫を雑然と積み上げている。石室入口右側の上段は平板な礫を積んでおり、外方にずれかかっている。羨道部の側壁は入口部分を除けば比較的目が通っている。

羨道部には閉塞が完存している。閉塞の入口側と玄室側には30～40cmの山石を堅固に積んでおり、その中に10～20cmの山石を詰め込んでいる。閉塞の上面は床状に平坦にならされており、両端には框石状の平坦で大振りな山石が置かれていた。羨道部には特に床面状の石敷きは認められておらず、構築面である土面まで閉塞石が詰まっていたような状況であった。なお、この閉塞上の最奥部から人骨の一部が出土しているが、古墳との関係や置かれた時期は不明である。



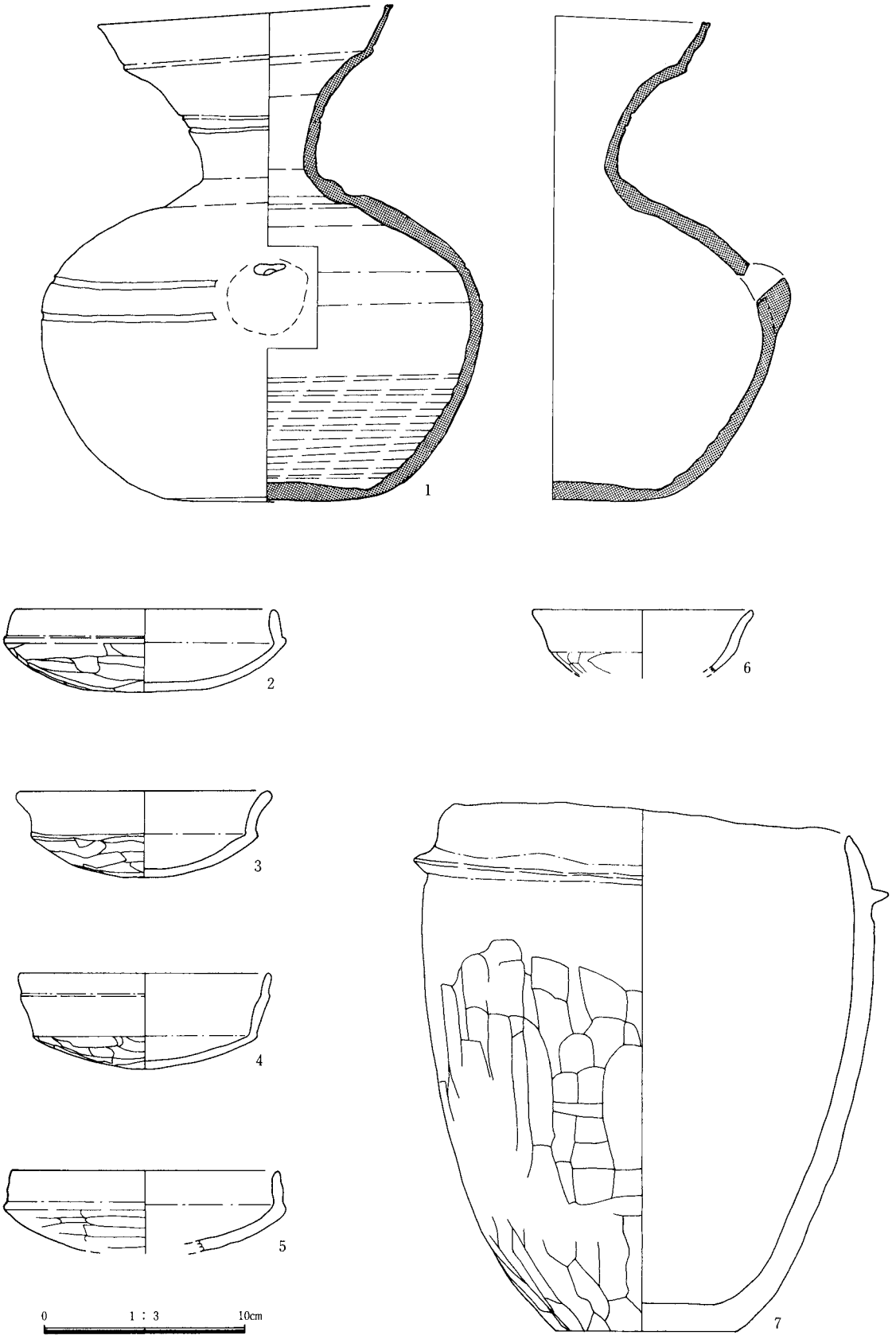
第40図　上庄司原1号古墳遺物出土位置図

天井石は玄室部4石、羨道部2石が残存しており、羨道部との境の2～3石は抜き取られ、あるいは石室に落ち込み、石室入口部分の天井石も崩落していた。本墳は現状保存となったために断ち割り・解体調査は行っていないが、前庭部の検出状況や石室のレベルから、地山面に1m前後の深い掘り方を穿って石室を構築したものと推測される。石室壁材の背面には中小の山石を用いて裏込めを施し、天井部はローム粘土で覆っていた。

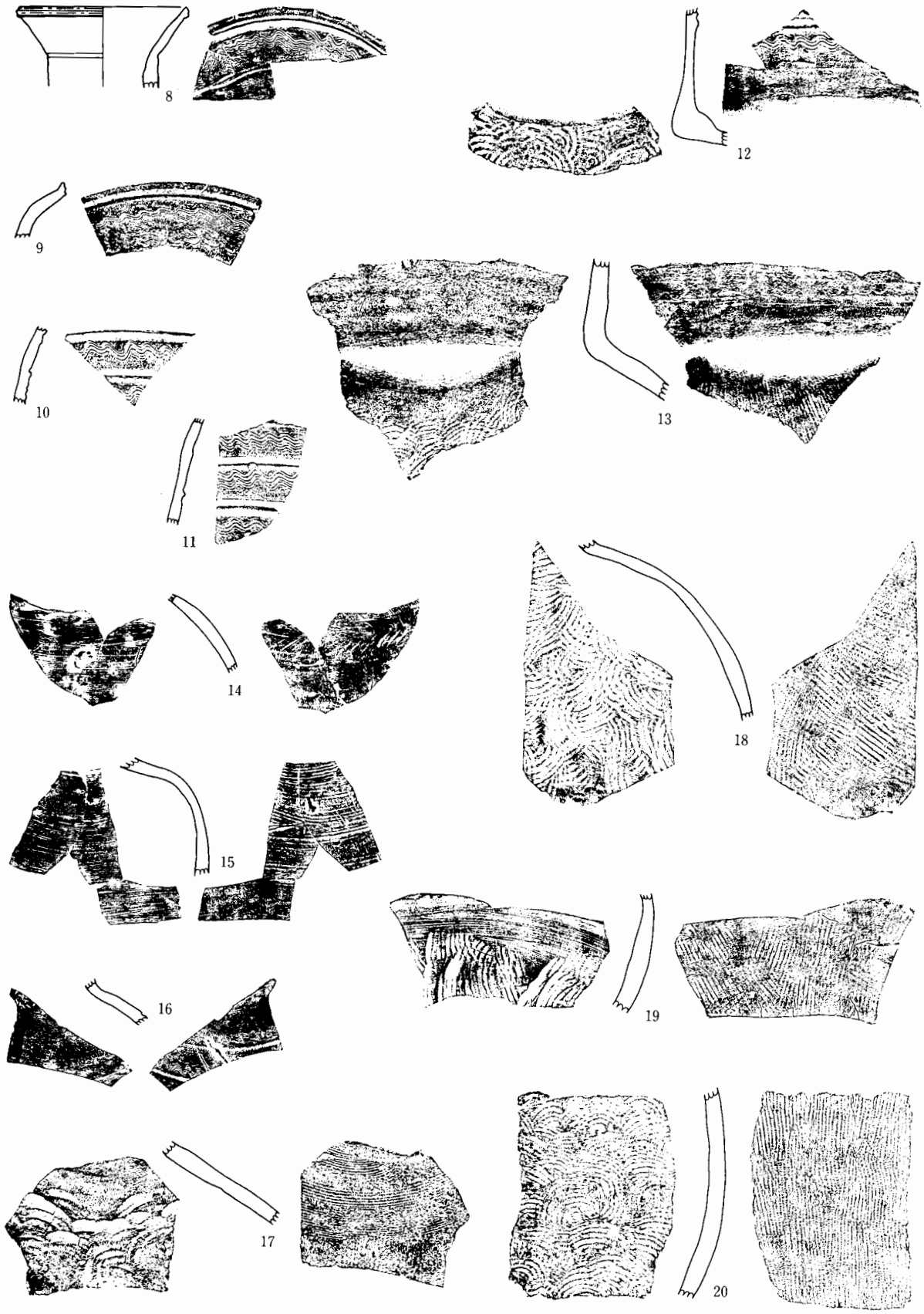
⑤遺物出土状態

玄室からは、奥半部の右壁寄りに耳環3個、左奥隅と左壁際南半部に鉄鏃、左袖部から馬具が出土している。また、人骨は奥半部からほぼ3ケ所に別れて出土しているが、殆どは骨粉状である。歯は人骨周辺以外に入口付近からも出土している。

前庭からは、入口の右側袖部石積み上から落ち込むような状態で須恵器甕、埋土上層に羽釜、左袖側壁際のテラス上に土師器の坏5個体以上が出土している。また、前庭部周辺から須恵器甕類の破片が多く出土しており、さらに平安時代頃と思われる坏・甕類の破片も出土しているが、埴輪は出土していない。

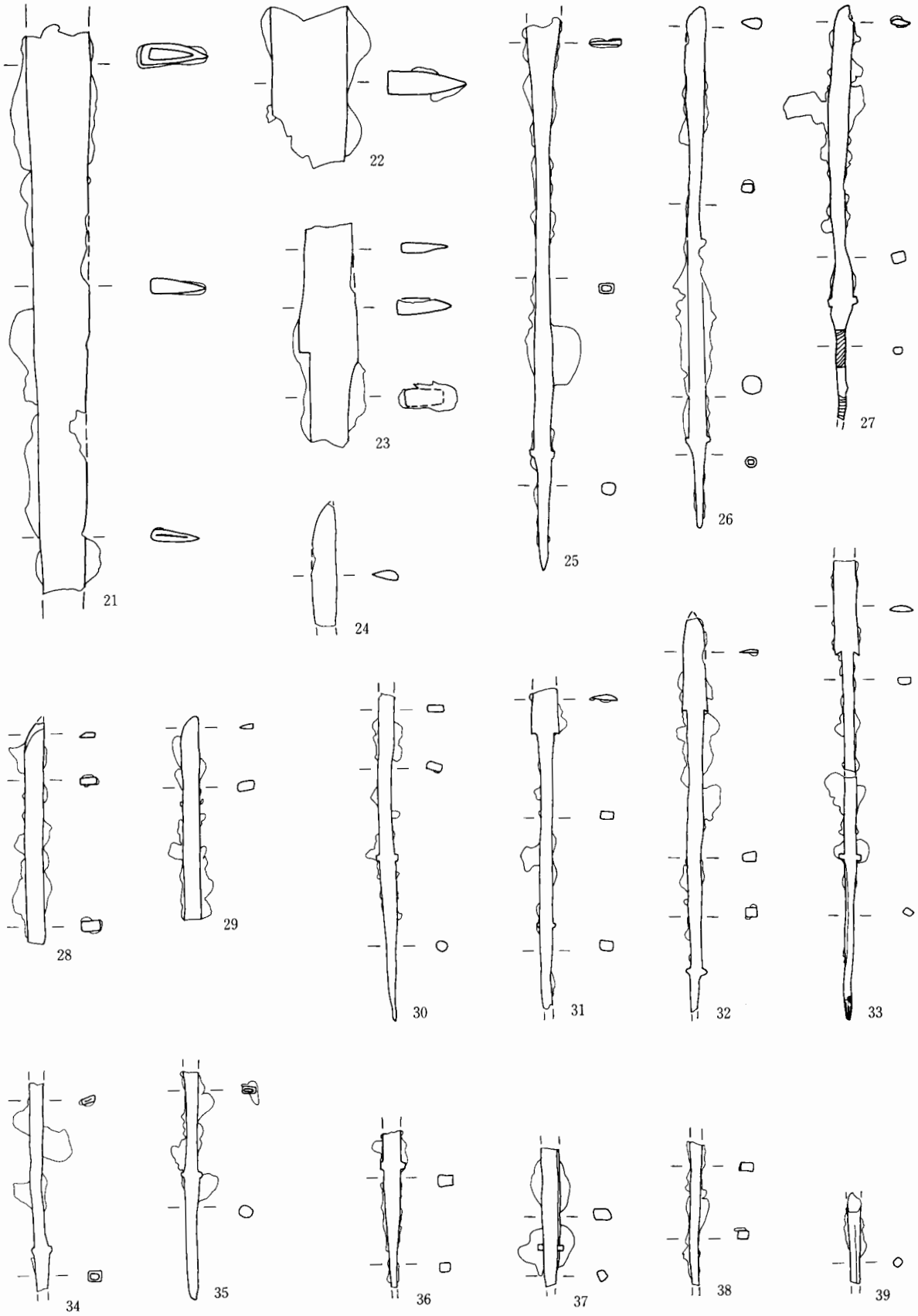


第41図　上庄司原１号古墳遺物実測図(1)



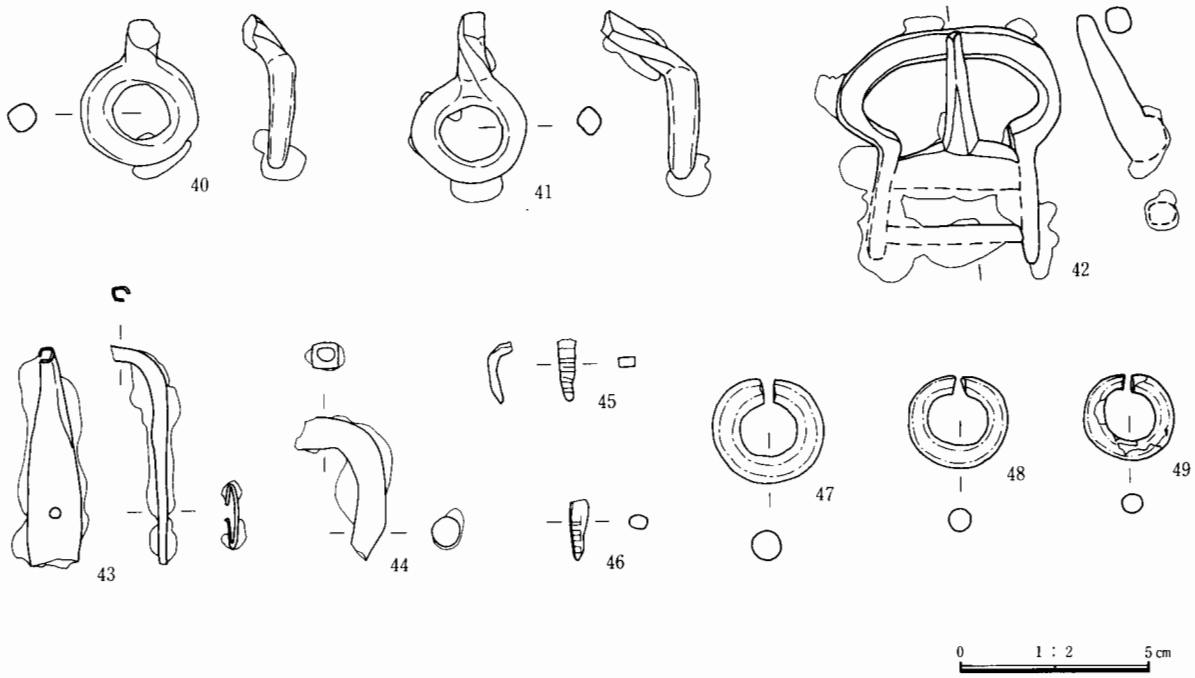
第42図　上庄司原１号古墳遺物実測図(2)

0　1：4　10cm



第43図　上庄司原１号古墳遺物実測図(3)

0　1：2　5cm



第44図　上庄司原１号古墳遺物実測図(4)

(5)　上庄司原２号古墳（遺構第45～49図、遺物第50～55図、PL18～21・30・32）

①調査前の状況など

『上毛古墳綜覧』富士見村第９号である。

調査地の現況は桑畑であるが、以前は山林となっていたとのことであり、周堀北側の肩部には抜根跡が激しかった。周辺に比べて全体的にわずかな高まりが認められ、石室周辺は小山状になっていた。頂部の南には崩落した天井石２石の先端が露出していた。

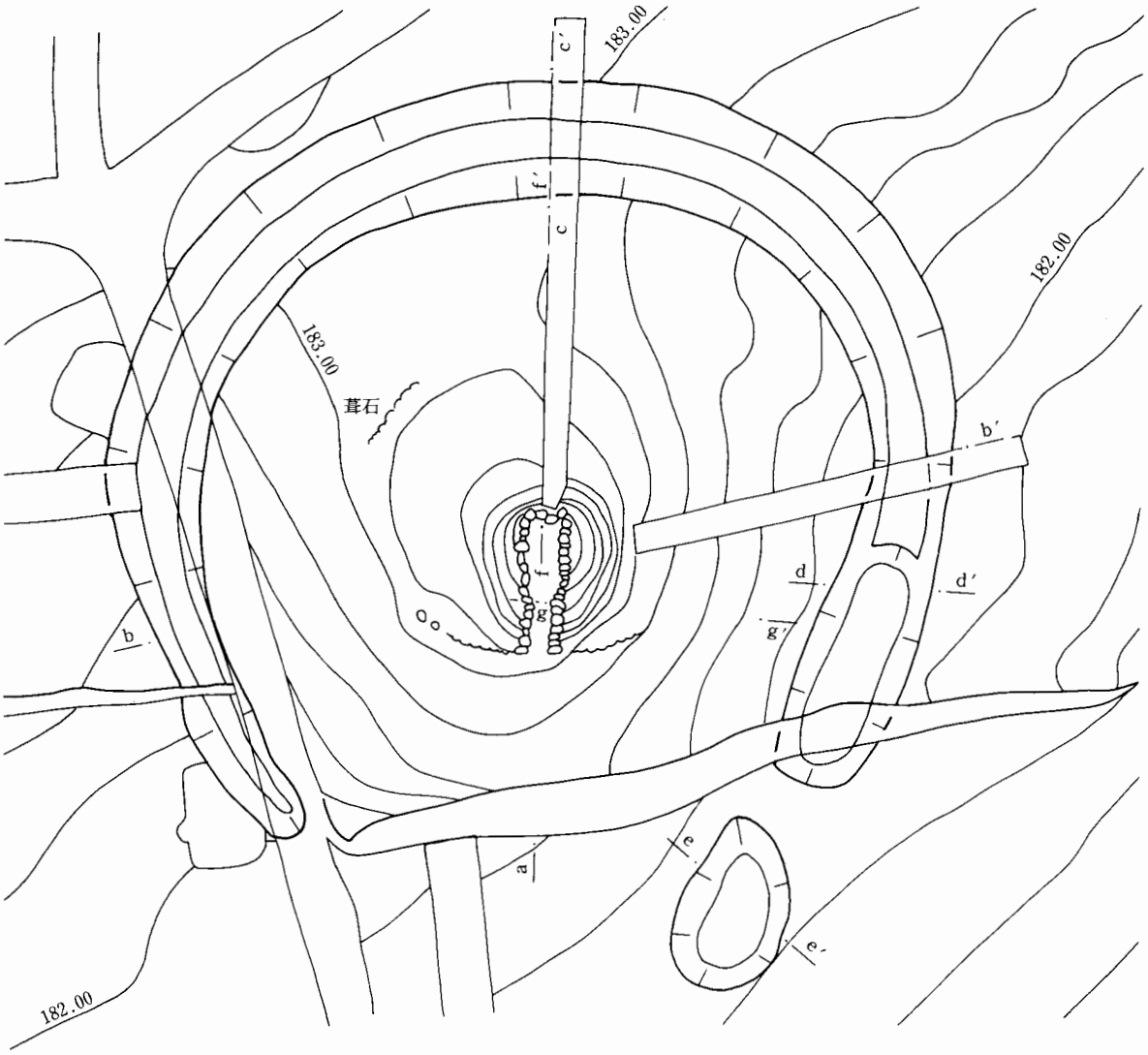
１号古墳の西側約50mに近接する。周堀北西に縄文時代前期の竪穴住居跡、西側周堀上には平安時代の竪穴住居跡が重複する。また、畑（墳丘）の段下に平安時代の土坑墓が近接している。一帯には縄文時代前期と平安時代の集落が広がっている。

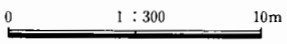
尚、全体図については実測図を紛失してしまったため、現況測量図を元に作成した概念図しか提示できないことをお詫びしたい。

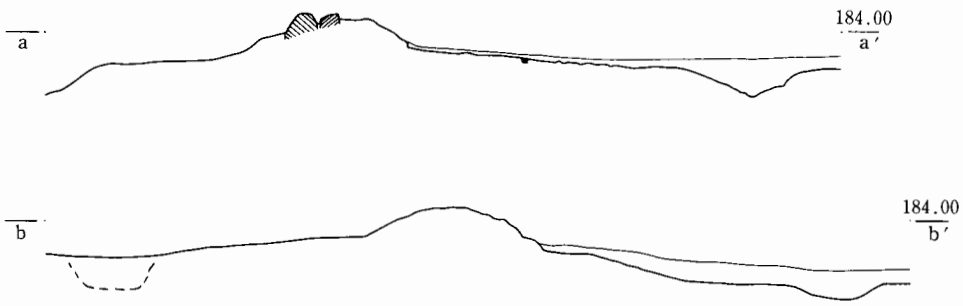
②墳丘および外部施設

墳丘は耕作により大幅に削平されているが、石室入口の左右と墳丘の北西部には葺石が残存する。墳丘南側の葺石根石は石室入口から４石ずつは左右とも大きさを揃え、長さ50～60cmの角閃石安山岩の紡錘状の転石を横積みに用いており、この上に小振りな山石を小口積み或いは横積みしている。残りの良い石室左側で４段程度が残存する。葺石根石はさらに西方では長さ30～40cmの角閃石安山岩の紡錘状の転石を用い、底面レベルをほぼ揃えて据えているが、東方では30～40cmで丸みのある角閃石安山岩の転石を設置レベルを揃えずに据えている。但し、傾向的には元々の地形に沿って東～北に向かうに従い設置レベルを徐々に上げているような様相も伺われる。北西の葺石は南面と異なり、根石も含めて20cm前後の山石を小口に積んでおり、１～２段が残存するだけである。

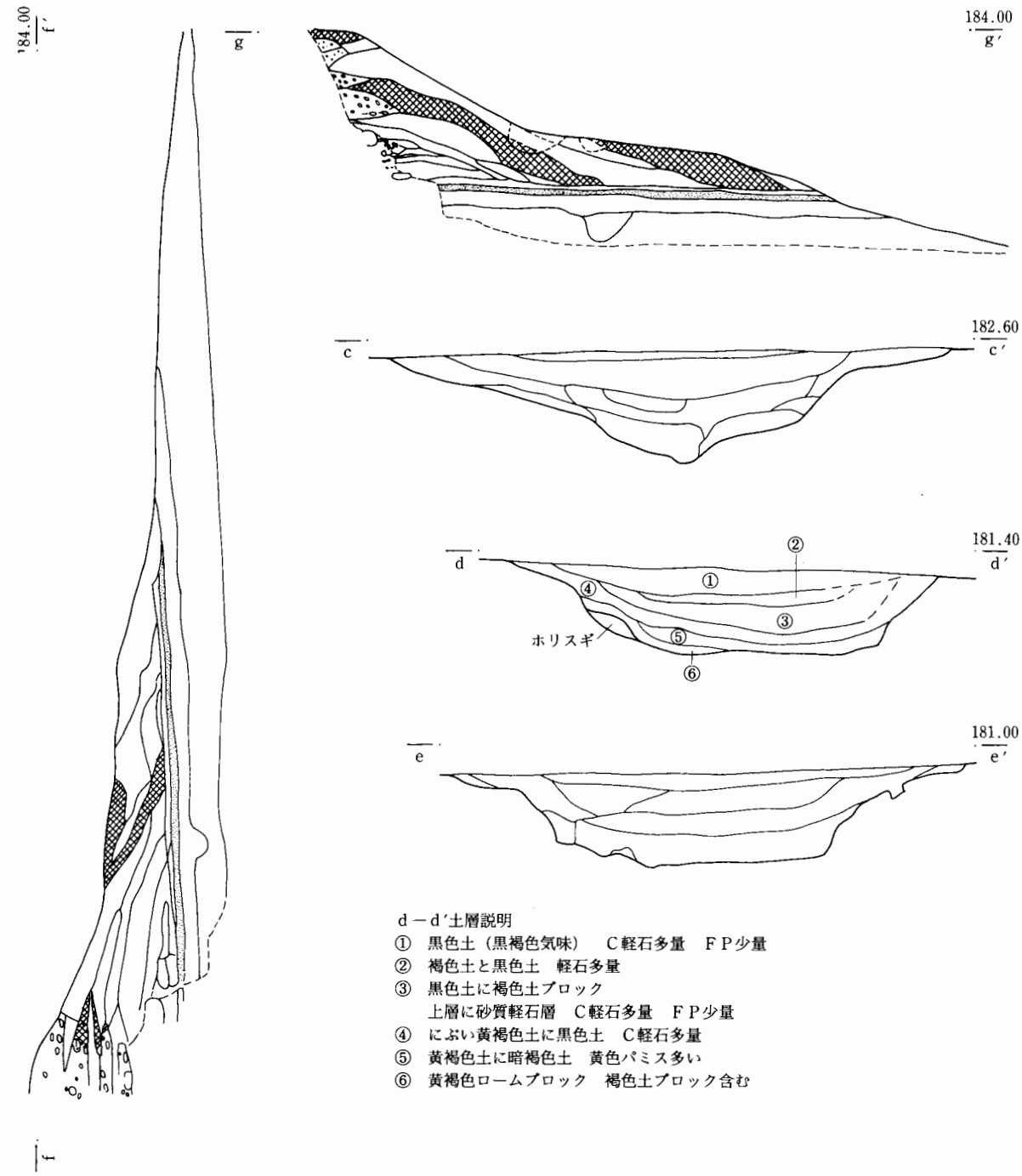
墳丘の盛土は石室巡りを除くと大幅に削平されているが、葺石より内側にはある程度の厚さで残存する。







第45図　上庄司原２号古墳全体概念図



黒色土主体層、黒色土・ローム混土層。

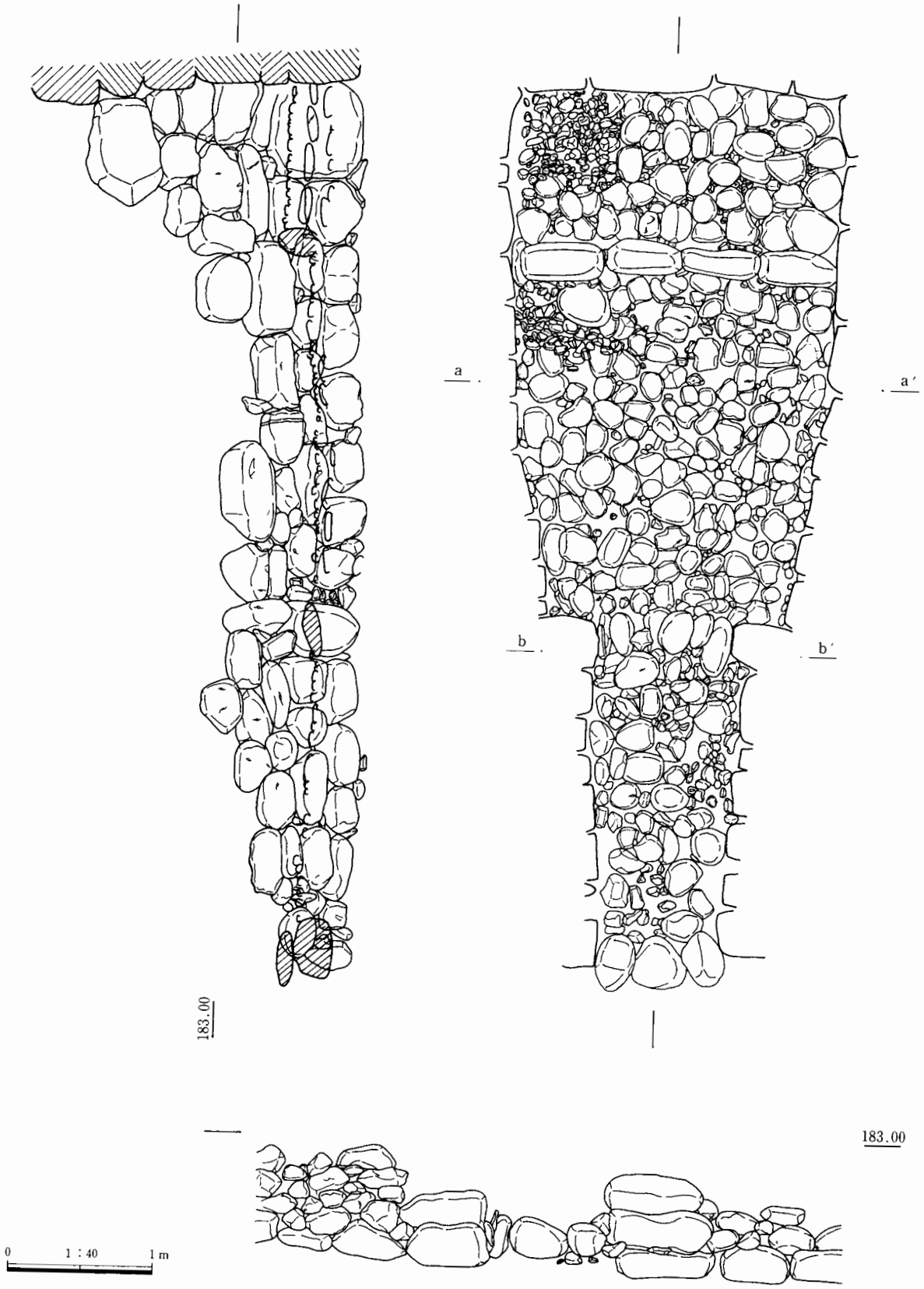
黄褐色ローム主体層。

FA 層。

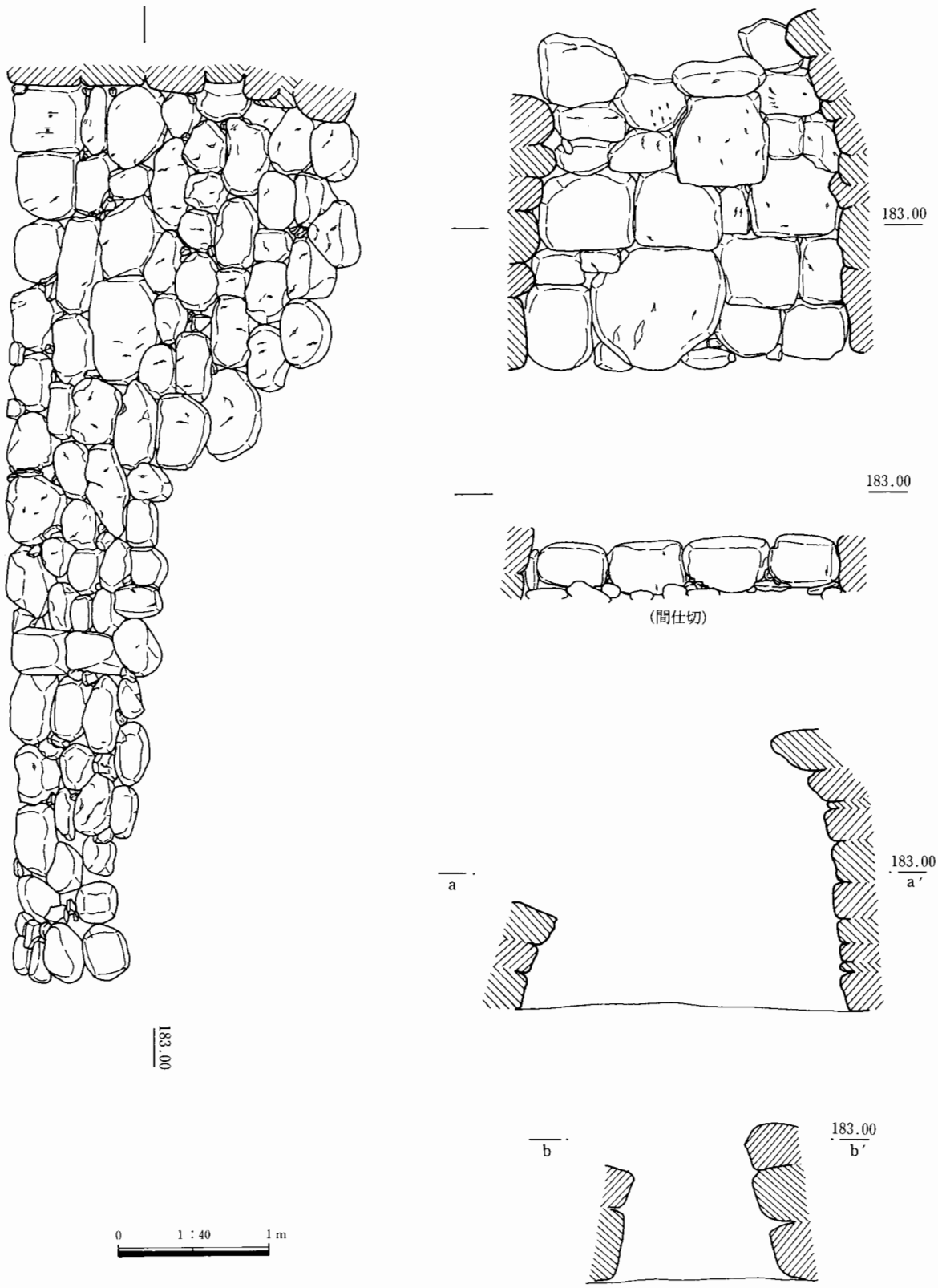
0 1：80 2 m

0 1：60 2 m

第46図 上庄司原２号古墳墳丘断ち割り、周堀土層断面図



第47図　上庄司原２号古墳石室展開図(1)



第48図　上庄司原２号古墳石室展開図(2)

葺石（及び推定される葺石位置）と周堀との間は傾斜なりに平坦なテラス面となっているが、特に東側は墳丘側から周堀に向かってかなり急傾斜で、地山深くまで耕作による削平が及んでいるため、構築当初において葺石の外側に盛土されていたかどうか、地山整地面のままであったかは不明であるが、断ち割り調査その他の状況からすれば、多少の盛土を行っていた可能性も考えられる。

周堀は南端を除いて馬蹄形に巡っているが、一旦途切れて南東部にも楕円形の掘り込みがある。馬蹄形の周堀は、北半部はほぼ一定の幅・深さであるが、西側では徐々に幅狭く、浅くなっており、東側端部では逆に一段深く掘り込んでいる。周堀覆土上層には浅間B軽石層の堆積が認められる。周堀の規模は北側で上幅4.5m前後、深さ1m以上を測る。掘り足し部分は長径約7m、短径約4m、深さ1.1mである。尚、周堀中からはほとんど礫が出土していないことから、テラス縁辺に葺石が施されていた可能性はないと思われる。

墳丘の規模は葺石の位置で径15m前後、ここから幅6m前後のテラスが巡り、周堀内側の立ち上り部分での直径が27～28m、周堀を含めた規模は34mを前後する。

墳丘南側、石室前面のテラス上には墳丘から崩落したと思われる多量の小礫があった。この大半は在地の山石であり、残存する葺石と同様のものであったが、石室入口の前面約2mの位置には1.5m四方の方形の範囲に小振りな河原石が敷き並べられたような状況で検出された。石積みによって台形状に区画する定型的な前庭とは異なるものの、石室入口寄りの左右の葺石根石が形を揃え大振りな角閃石安山岩を用いていたこととも合わせ、類例には乏しいが墓前祭祀施設と考えられる。

石室入口の手前右側には須恵器の甕が置かれていたが、墳丘上、テラス面、周堀内を含め本墳に関係するような遺物はほとんど出土していない。また、埴輪も1点も出土していない。

③主体部の構造

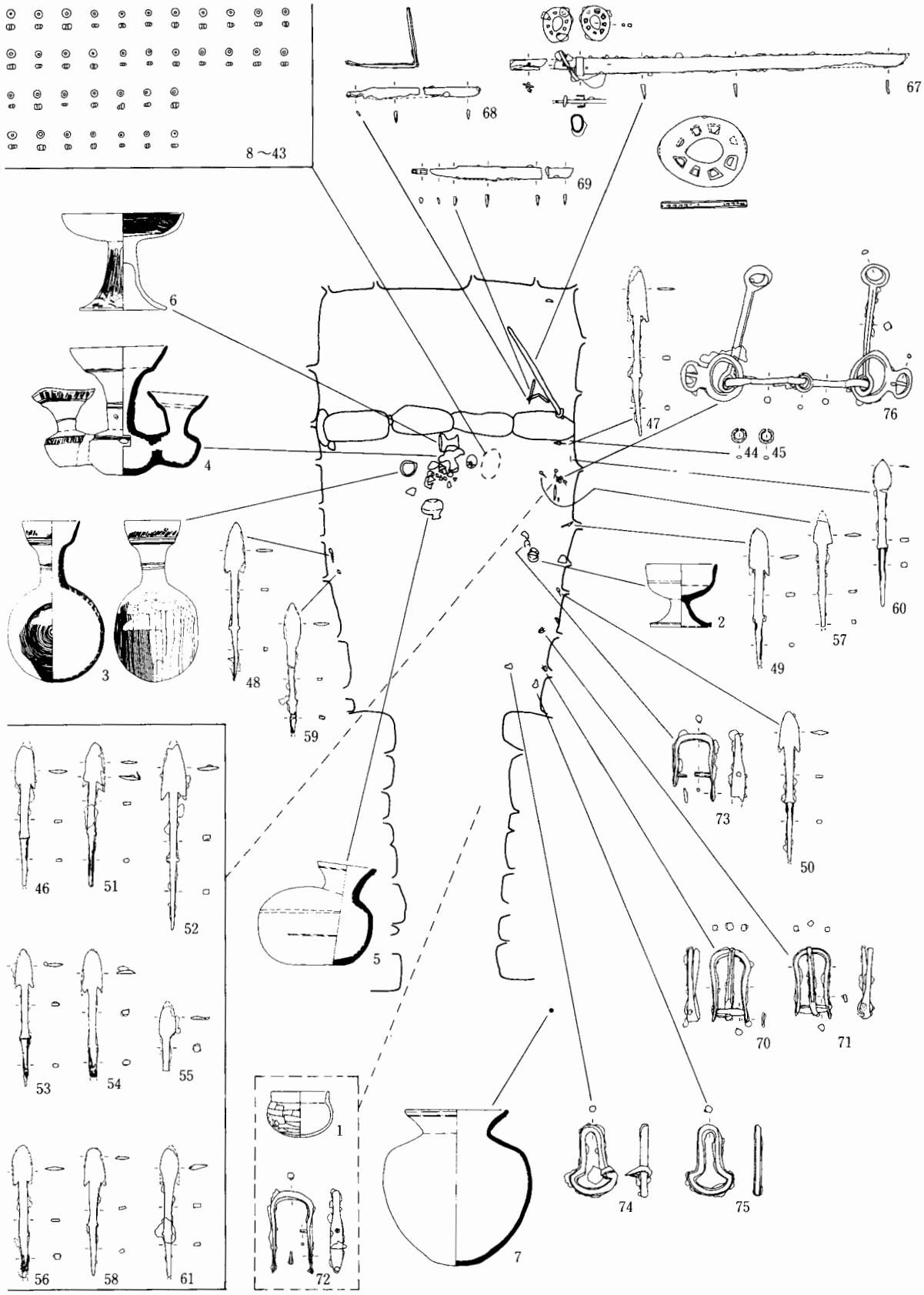
榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩削石を使用した両袖型横穴式石室である。天井石は調査以前に残丘上に露出していた。調査を行ってみると長さ2m前後、幅1m超の2石が左壁の崩落により石室内にほぼ垂直に落ち込んでいる状況であった。天井石及び上層の土砂を取り除くと石室内には主に左壁の壁材が崩れ落ちていた。玄室床面に崩落した壁材を取り除くと土砂に汚れていない奇麗な小礫が一面に敷かれており、構築後殆ど時間を置かずに左壁が崩れたものと思われた。

玄室は間仕切り付近に最大幅があり、奥壁部分でわずかに絞り込まれる。また間仕切り付近から入口に向かって徐々に幅を減じており、弱い胴張りの傾向を呈する。実測位置での玄室平面形状は羽子板状を呈するが、奥壁付近の側壁の立ち上がりは急角度であり、入口側は持ち送りの程度が大きいため、根石位置ではより矩形に近く、上位程入口付近が絞り込まれた長台形状となる。羨道はほぼ一定の幅である。玄室入口は羨道壁よりも若干内側に張り出しており、玄門を意識したものと思われる。

石室の規模は全長約5.9m、玄室長約3.6m、玄室幅（間仕切り部分で）約2.2m、羨道長約2.35m、羨道幅（奥寄りで）約1.0mを測る。

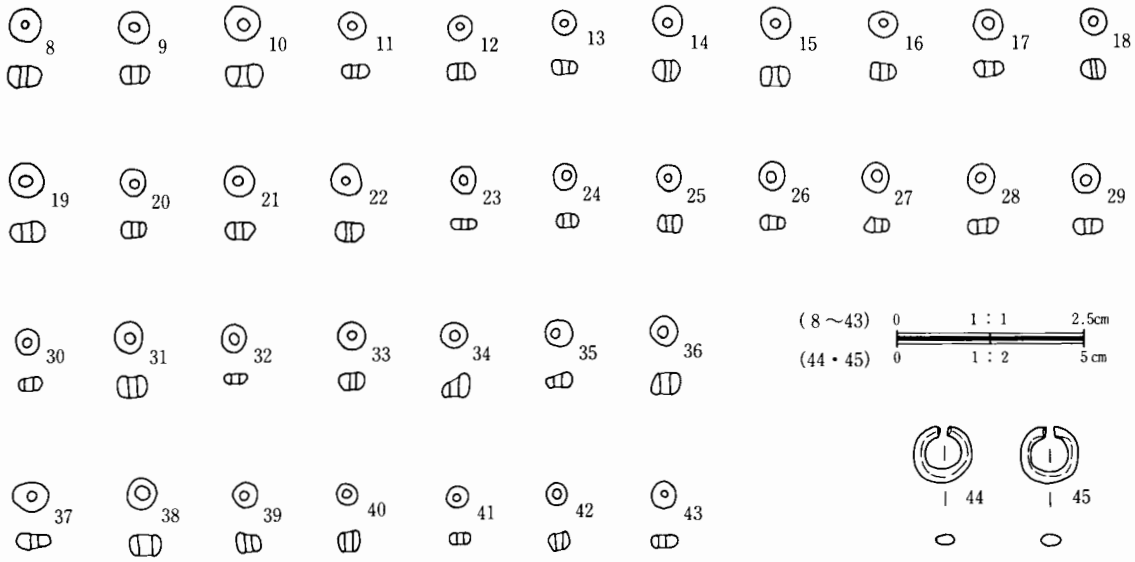
玄室の奥壁から約1/3の位置には、直方体状を呈する角閃石安山岩の削石を4石用いて間仕切りが設けられている。玄室の床面には小礫が敷かれており、その下に径10～30cmの扁平な河原石が敷かれている。間仕切り石はこの上に設置されており、棺台は間仕切り石の上面を床面としてやはり小礫を一面に敷いている。この下に20～30cmの扁平な河原石が数段敷かれ、これ以下は前室の床下構造につながっている。床面下の礫石の積層構造の厚さは前室において約30cmを測り、玄室部の根石のほとんどが床面下に隠れている。敷石の下には3～5cmの厚さに壁材加工時の切端が敷かれており、その下が石室構築時の整地面となっている。

羨道部は閉塞されているが、上面は耕作等により多少の攪乱を受けているようである。閉塞は現状で上層



第49図　上庄司原２号古墳遺物出土位置図

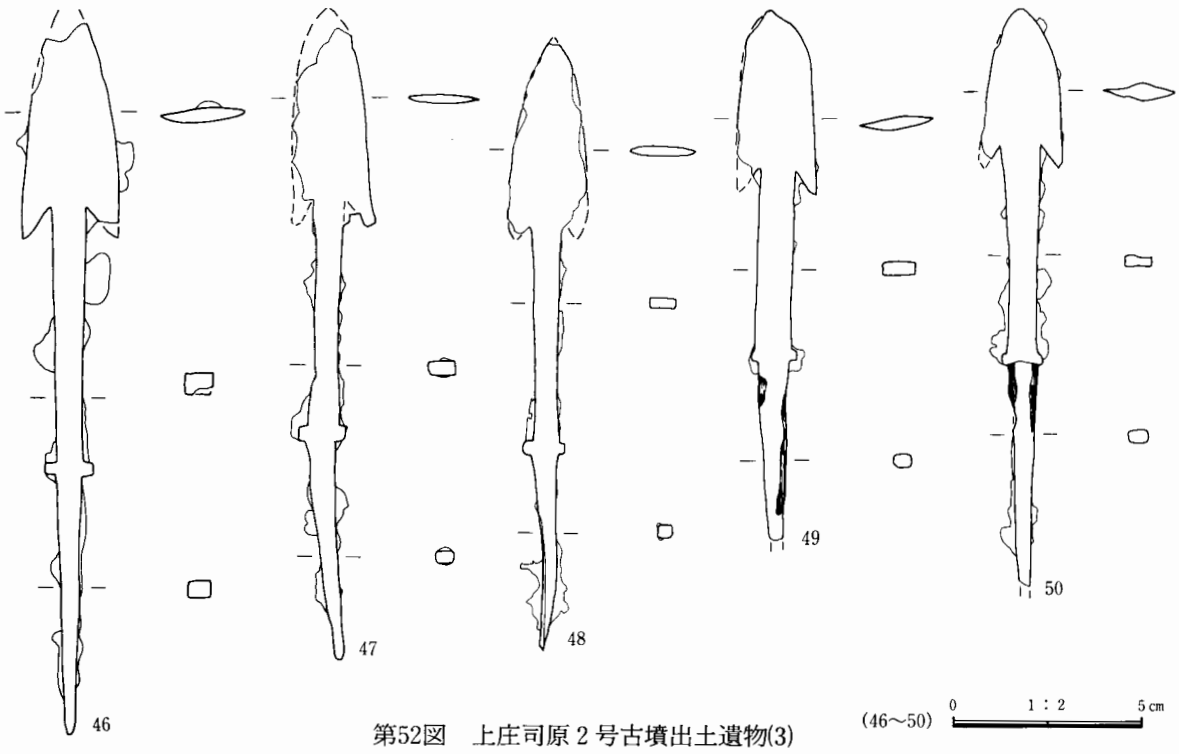
第50図　上庄司原２号古墳出土遺物(1)



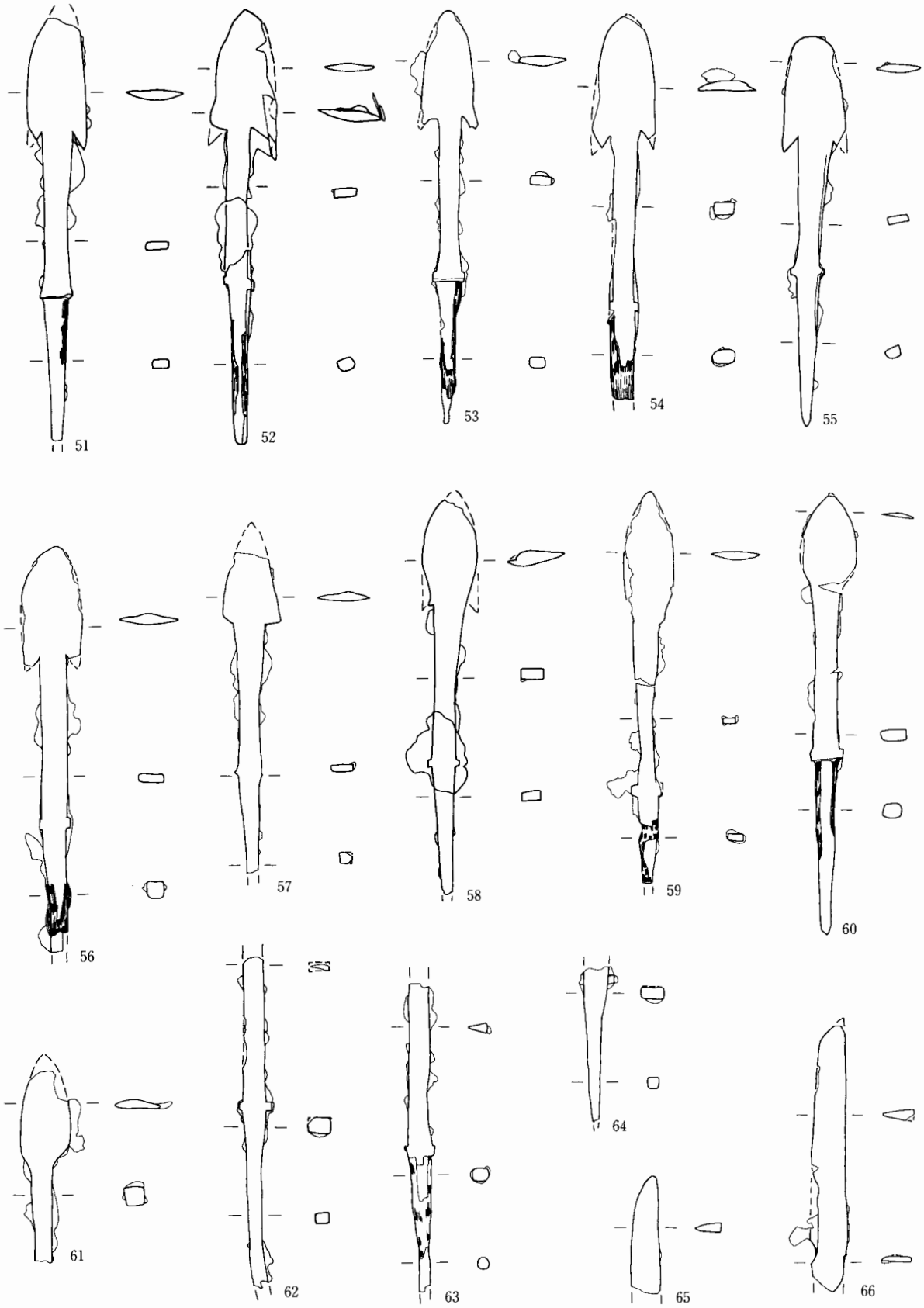
第51図　上庄司原２号古墳出土遺物(2)

に５～10cmの小礫を10cm前後敷き、以下に径５～20cmの不揃いな礫を埋塡している。玄室入口には長さ20～30cmの扁平な河原石、石室入口には更に大きな30～40cmの河原石を積んで閉塞押さえとしている。なを、羨道部には敷き石等、床面としてとらえられる構造はなく、整地面上の切端層まで閉塞石が詰まっていた。

壁材の残存状態は右壁の玄室奥半部と奥壁は良好であり、ほぼ原状に近いと思われる。右壁南半と左壁は壁材上半が欠失しており、特に左壁の玄室南半は崩落の影響のせいか上部が急激に内側に傾いている。右壁奥部を観察すると下半部は比較的直に積み、上半部で急激に持ち送りして玄室幅を狭めて天井石を架したも

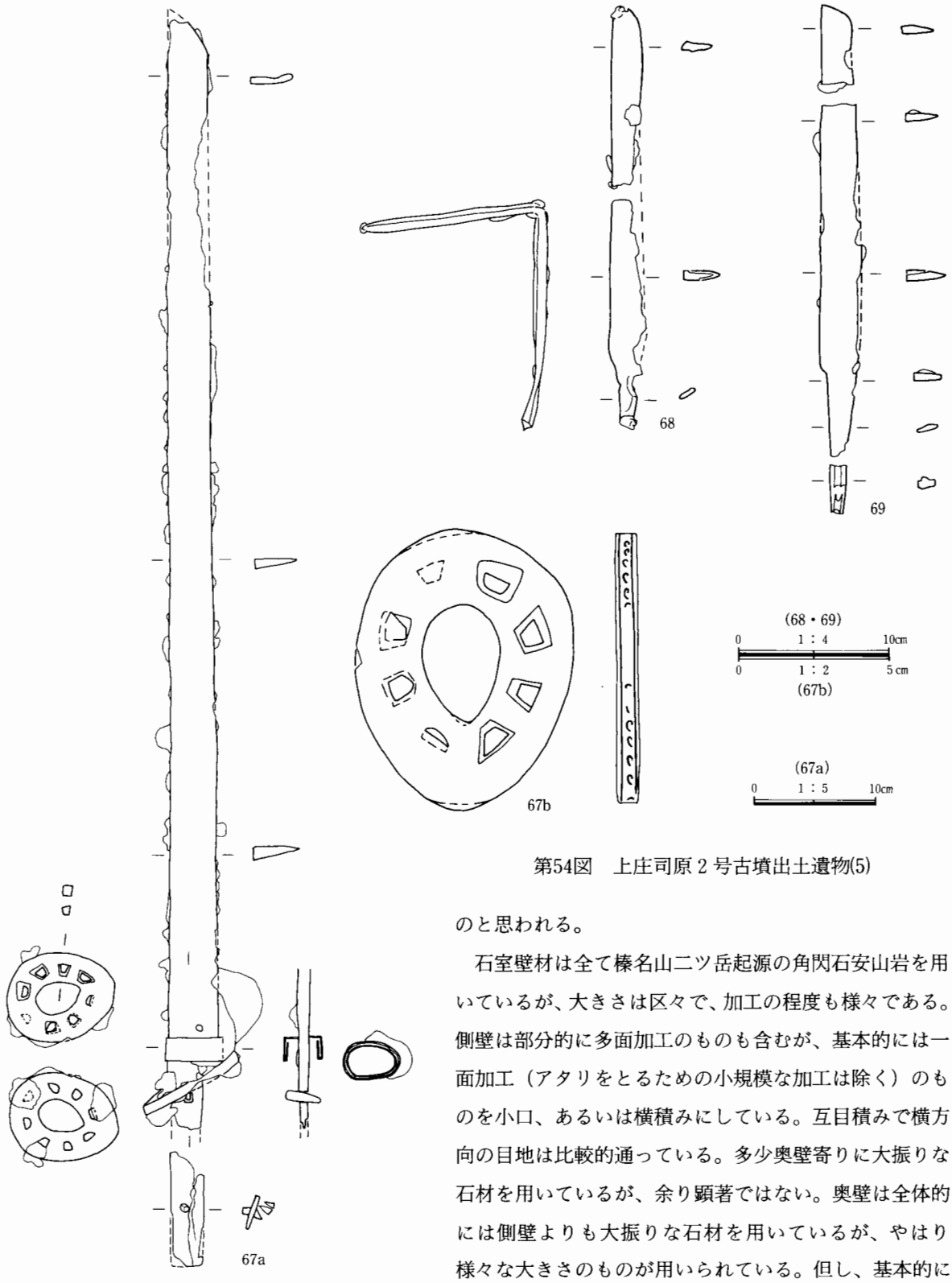


第52図　上庄司原２号古墳出土遺物(3)



第53図　上庄司原２号古墳出土遺物(4)

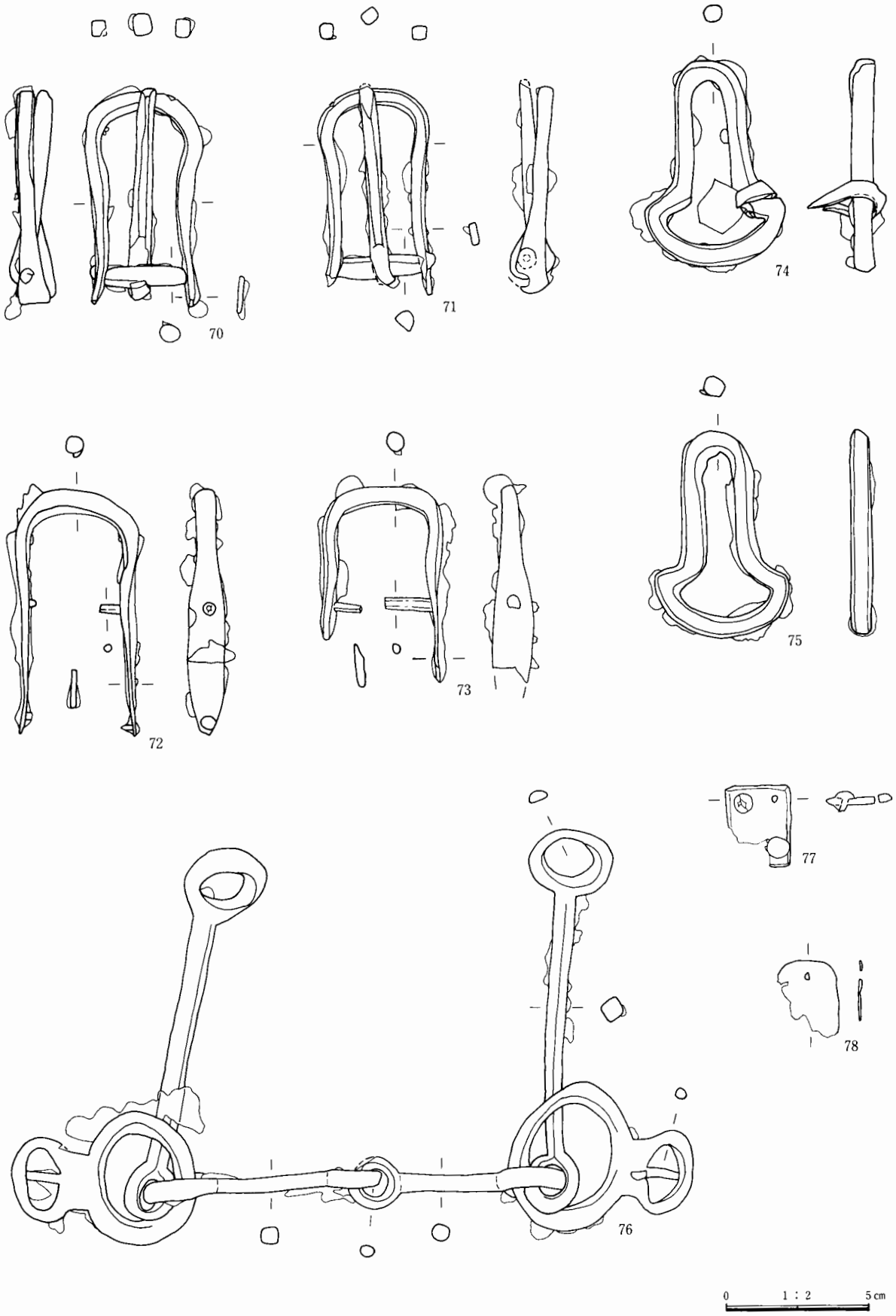
0　1：2　5cm



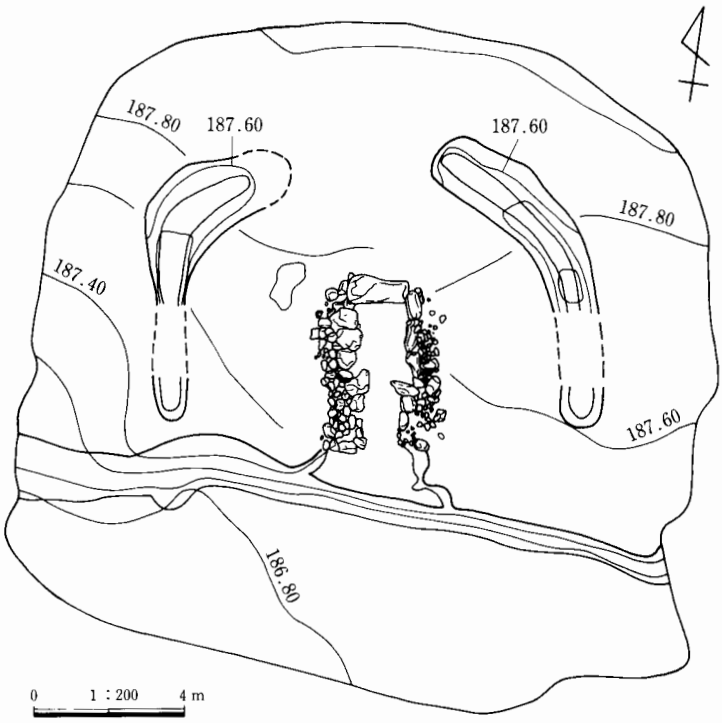
第54図　上庄司原２号古墳出土遺物(5)

のと思われる。

石室壁材は全て榛名山二ツ岳起源の角閃石安山岩を用いているが、大きさは区々で、加工の程度も様々である。側壁は部分的に多面加工のものも含むが、基本的には一面加工（アタリをとるための小規模な加工は除く）のものを小口、あるいは横積みにしている。互目積みで横方向の目地は比較的通っている。多少奥壁寄りに大振りな石材を用いているが、余り顕著ではない。奥壁は全体的には側壁よりも大振りな石材を用いているが、やはり様々な大きさのものが用いられている。但し、基本的には５面削りにしており、切組も認められる。側壁と奥壁の組み合わせは、左側は根石を除いた上部は隅石を奥壁との間に斜めに組んでいる。右側は多少斜めに開き気味に組むものもあるものの、ほぼ直に組むが、根石から４段目は石室内面に向かって「く」の字の加工が



第55図　上庄司原２号古墳出土遺物(6)



第56図　上庄司原３号古墳全体図

施され、側壁と奥壁の両者にまたがって組み込まれている。玄室の袖部分は左右２段は玄室側に向かって平積みされている。右壁はこの上にさらに１段残存するが、これは横積みである。この袖部分の石積みは前述したように、玄門を意識していると思われる。羨道部も玄室同様互目積みで横方向の目は比較的通っている。石材の大きさも玄室との間に顕著な差はない。

⑤遺物出土状態

玄室では棺台上の右壁際から直刀１振と刀子２本が出土した。直刀には銀象眼の鍔が付き、茎の先半分は欠けて離れ、奥壁際から出土した。１本の刀子は中央部でほぼ直角に折り曲げられた状態で出土している。中央部の間仕切り直下からは土器類（須恵器の瑠・平瓶・フラスコ形提瓶・土師器の高坏）とその東側からガラス小玉がまとまって出土した。右壁際の間仕切直下からは一対の耳環と轡、鉄鏃多数が出土し、中央部から南半部にかけて須恵器の高坏、馬具、鉄鏃がまばらに出土している。左壁際のほぼ中央部からも２点の鉄鏃が出土した。羨道部では閉塞石中から土師器の小型甕、左壁奥部の壁石の間から馬具が出土した。石室以外では石室入口の右側から須恵器甕が出土しただけである。人骨・歯、埴輪は出土していない。

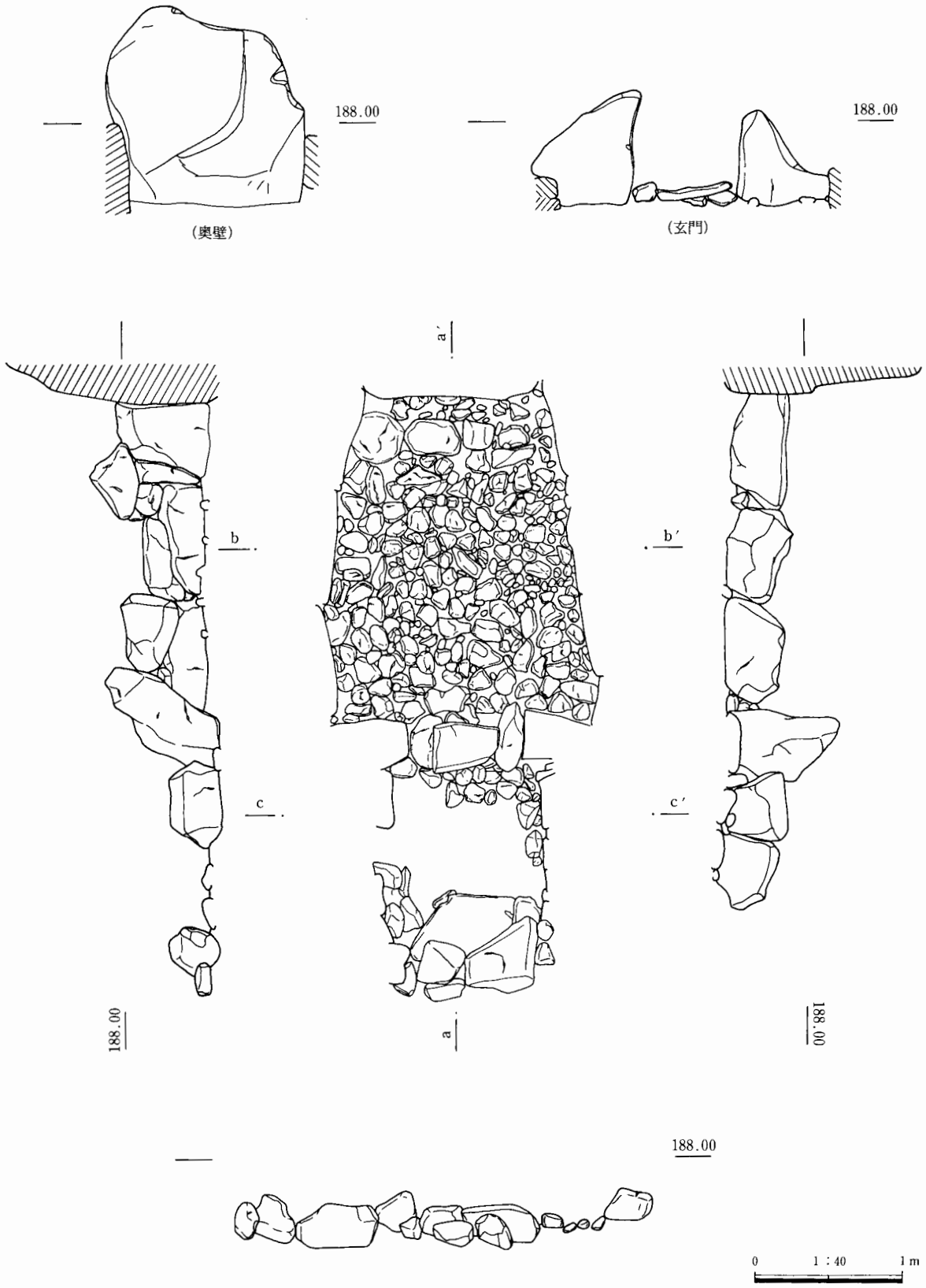
第57図　上庄司原３号古墳石室及び裏込検出状況

⑹　上庄司原３号古墳

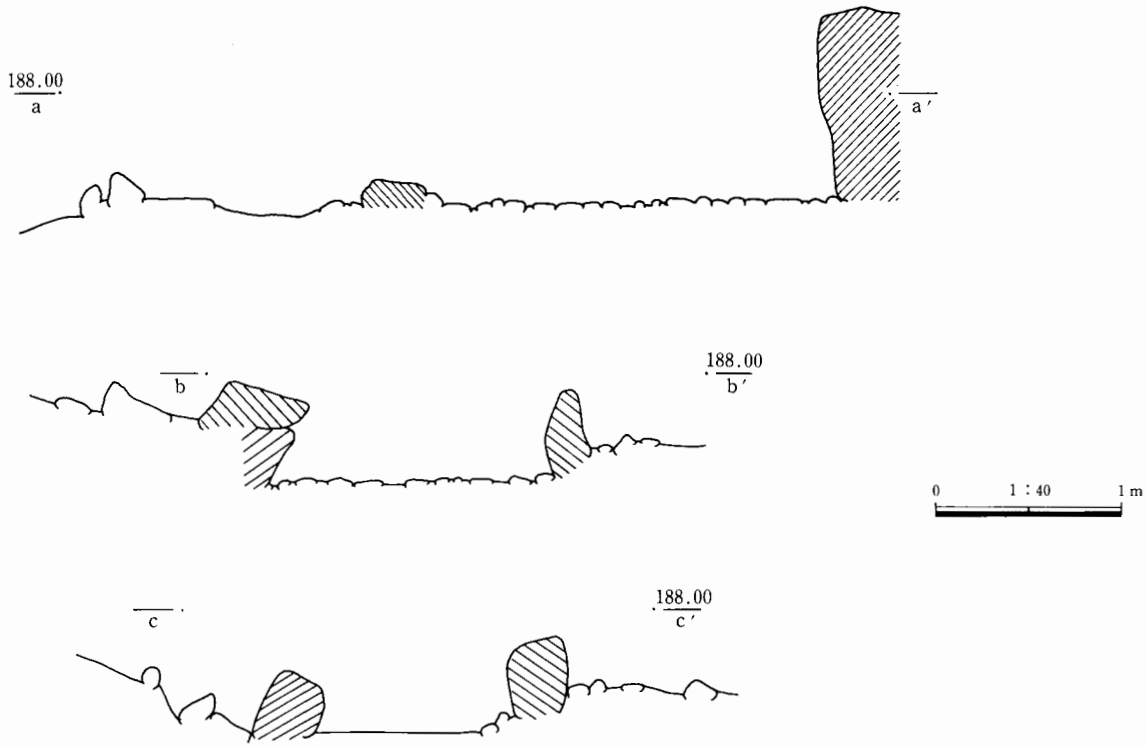
（遺構第56～59図、遺物第60図、PL22・31）

①調査前の状況など

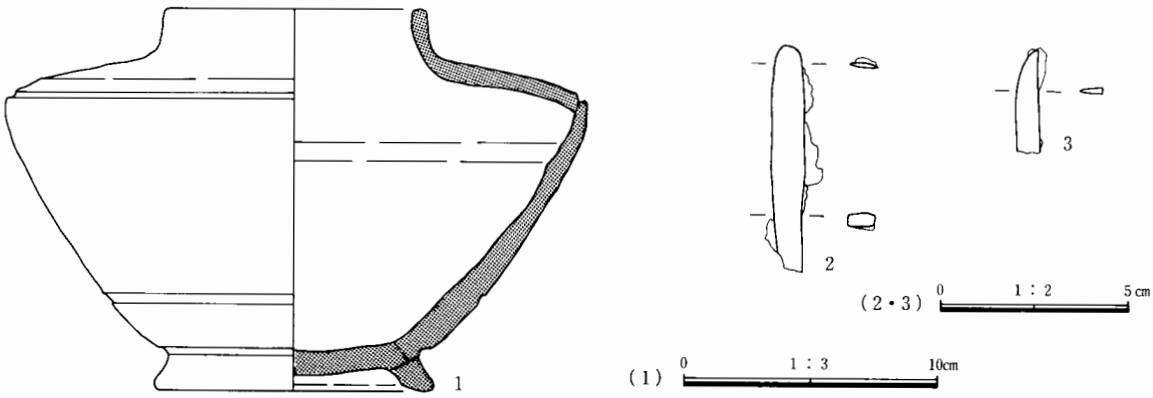
未周知の古墳である。遺物散布調査の際に平坦な畑地の一角に多量の礫石が集積していたことにより、古墳の存在が予想されたため調査を行った。墳丘の南側には農道が走っており、さらにその南側は段下の畑となっている。



第58図　上庄司原３号古墳石室展開図(1)



第59図　上庄司原３号古墳石室展開図(2)



第60図　上庄司原３号古墳出土遺物

古墳時代の墳墓としては、台地の最も奥まった地点に単独で位置している。但し、この南方には埋土中から小礫を出土した古墳の周堀の可能性のある溝跡が試掘調査の時点に検出されており、単独占地ではない可能性もある。墳丘・石室の東側には縄文時代の住居跡が重複していたが未調査である。また、試掘調査の際に南側の近接地の数ケ所から古墳時代前～中期の可能性がある住居跡が検出されている（未調査）。

尚、全体図は石室調査時点の図面に周堀（断ち割り調査時点―10cm前後検出面を下げている）部分を組み合わせているため、等高線などが整合していない。

②墳丘と外部施設

すでに墳丘は完全に削平されていた。表土を除去するとすぐに地山（浅間C軽石を含む黒色土）となり、盛り土・葺石は全く検出されていない。周堀についても、当初地山と埋土の判別がつかず、掘削されなかったかあるいは浅いために底面まで削平されてしまったものと思っていたが、墳丘の断割り調査の時点で掘り込みを確認して調査を行った。確認面では東西に別れて掘削されているが、原状は馬蹄形に巡る可能性もある。いずれにしても、現状では幅が狭く浅いため、墳丘規模もごく小規模であったと推察される。周堀の規模は東側が長さ8.3m、上幅最大1.7m、深さ約30cmを測り、一定した規模で掘り込まれているが、西側は北側が幅広く深いものの南側は急速に幅と深さを減じている。西側の長さ7.2m以上、上幅は最大で2.0m、深さ約30cmである。墳丘の形状は円墳と思われるが、構造・規模は不明である。周堀内縁の計測値では径約9.7mを測るが、周堀の検出面がかなり下がっていることを考慮すると、最大でも直径９m以下、辛うじて石室全体が覆われる程度の墳丘であったと思われる。周堀中から礫は出土しておらず葺石が葺かれていたかどうか不明である。

石室入口の前面は台形状に周辺より低くなっており、石積はないが前庭が付設されていたと思われる。

③主体部の構造

小型の自然石乱石積み両袖型横穴式石室である。石材はすべて赤城山の山石（割れ石）を使用している。

玄室の形状は奥壁側が狭く、入口側が広いために長台形状を呈する。側壁の胴張り傾向は顕著でない。羨道部はほぼ一定の幅で推移するが、入口が多少狭まる傾向にある。

石室の規模は全長約3.9m、玄室長約2.2m、玄室前幅1.7m、羨道長（玄門を含む）約1.8m、羨道幅約1.0mを測る。

壁石材の大半は取り去られており、１～２段が残存するだけである。奥壁根石は１石で構成されている。玄室は左右とも３石の根石が設置されている。右壁は根石だけであるが、高さは揃っている。左壁は奥石に比較して南２石は高さが低く、上にさらに１～２段が乗っている。床面は大きさの不揃いな小振りの山石を敷き詰めているが、奥壁寄りの１/３ほどは比較的大きめで平板なものを用いて差を付けている。玄室入口には直角三角形状を呈する山石の長辺を内面にして立てた玄門が付設されている。玄門は羨道部壁面よりも内部に突出している。玄室床面の礫敷きは羨道の奥部まで続いており、玄門の間の床面上には板状の礫を３石置いて梱石としている。羨道部壁材は右側に２石の根石が残存するが入口の石材は抜かれている。左側は奥と入口の２石が残存するが間が抜かれている。羨道部にも全体的に礫が敷かれていたと思われるが、かなり激しく攪乱を受けており、中央部には残存しない。石室入口にはやはり板状の礫を１石置いて梱石としているが、これは地業面上である。閉塞施設は内外とも閉塞押さえの１段目が残存するだけで、充填された礫はほとんど確認されなかった。

石室壁石の外側には人頭大までの山石を中心として裏込めが施されているが、現状では奥壁裏には認められない。厚さは50～60cmである。調査時には人頭大以上の角礫も裏込上から数点出土しているが、崩落した石室壁石材と思われる。

石室掘り方の調査は行っていないが、前庭底面が浅間C軽石を含む黒色土中にあることから、山側である石室北側でもローム面に達する程度の深さ（40cm前後）の掘り方に石室が構築されたものと思われる。

④遺物出土状態

玄室からは鉄鏃破片が２点出土しただけである。また攪乱土中からも須恵器の短頸壺、甕の破片が少量出土しただけである。

(7) 上庄司原4号古墳（遺構第61～65図、遺物第66図、PL23～27・31）

①調査前の状況など

『上毛古墳総覧』富士見村第11号である。『富士見村誌』によれば大きさ12.0m、高さ3.3mの規模で、「切石積であったという、現存せず」の但し書きがある。地元古老からの聞き取りによれば、石室壁材は古く道普請の用材として解体・搬出されているとのことであった。

調査前の現況は桑畑、野菜畑として利用されていた。地形的には北から南、東から西へと僅かに下る緩斜面であり、畑の境にわずかな高まりは認められるものの、古墳の存在を確信できるような状況ではなかったが、奥壁の頂部がわずかに頭を覗かせており、その北方に小礫を集めた小山があるため、かろうじて古墳の可能性が伺える程度であった。墳丘の南側は別筆となるが、余り大きな段差となってはいなかった。

試掘調査は先の現地調査に基ずき、地表面に露出していた奥壁を中心に東西・南北にトレンチを設定して行ったところ、特に北側と西側では表面観察から想像する以上に良好な盛土の高まりと周堀の掘り込みを検出することができた。

周堀にはFA火山灰層を純層堆積する溝が重複しているが、この溝は陣場1・2号古墳に重複している溝と同じ可能性がある。東方50mには上庄司原西遺跡1号方形周溝墓が近接する。

②墳丘および外部施設

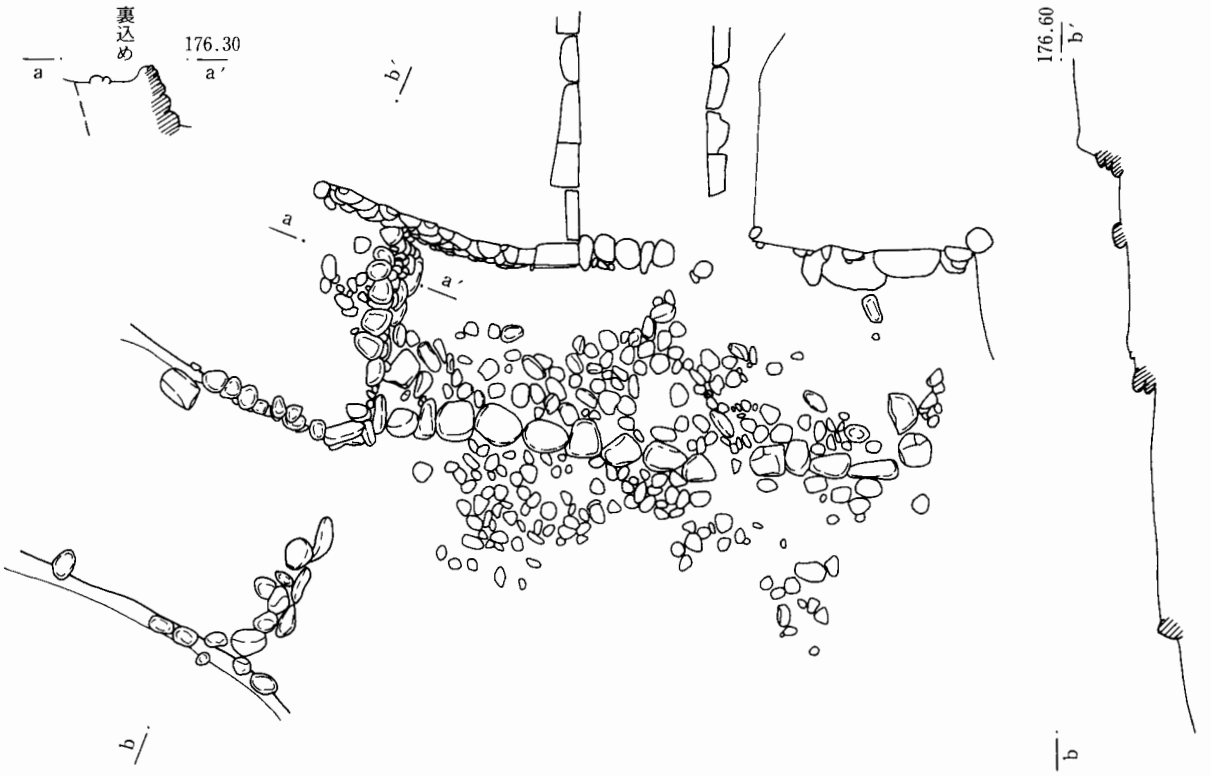
墳丘は耕作などにより全体的に削平されていると思われるが、円墳としての形状をよく残している。墳丘の西側と東側の裾部には攪乱坑が重複している。西側はごく最近掘削されたものと思われるが、東側の時期は比較的古いと思われるものの明確な時期は不明である。墳丘頂部の北西寄りは調査以前に周辺の礫が多量に寄せ集められていたこともあり、最も原状に近い高さを残している。盛土は最も残りの良いところで構築面上約90cm残存していた。南東部には前庭側壁から続く盛土が残存していた。葺石は墳丘の南東部で大振りの河原石、角閃石安山岩転石を用いた根石列が検出されたが、北および西側では認められなかった。東側は石室入口から葺石根石が連続しているのに対し、西側では前庭の石積み部分にのみ存在し、墳丘へは連続しないことが確認されている。しかし、北側周堀の覆土中からも多量の河原石が出土していることから、根石は残存していないもののある程度は葺かれていたと思われる。墳丘の規模は現状の盛土の残存範囲で東西15.2m、南北は奥壁裏込から約8mを測る。現況断面の変換点で計測すると、東西・南北（前庭袖部側壁は内側の石積まで）共に約17mを測り、16～17mが原状の規模と思われる。

周堀は墳丘の北側から西側にかけて巡るだけである。北側は墳丘に接するが、西側は墳丘から徐々に離れていき、最大で10mも離れて掘削されている。幅4m前後（最大約6m）、深さ40cm前後（最大60cm）を測り、断面形状は鍋底状を呈する。

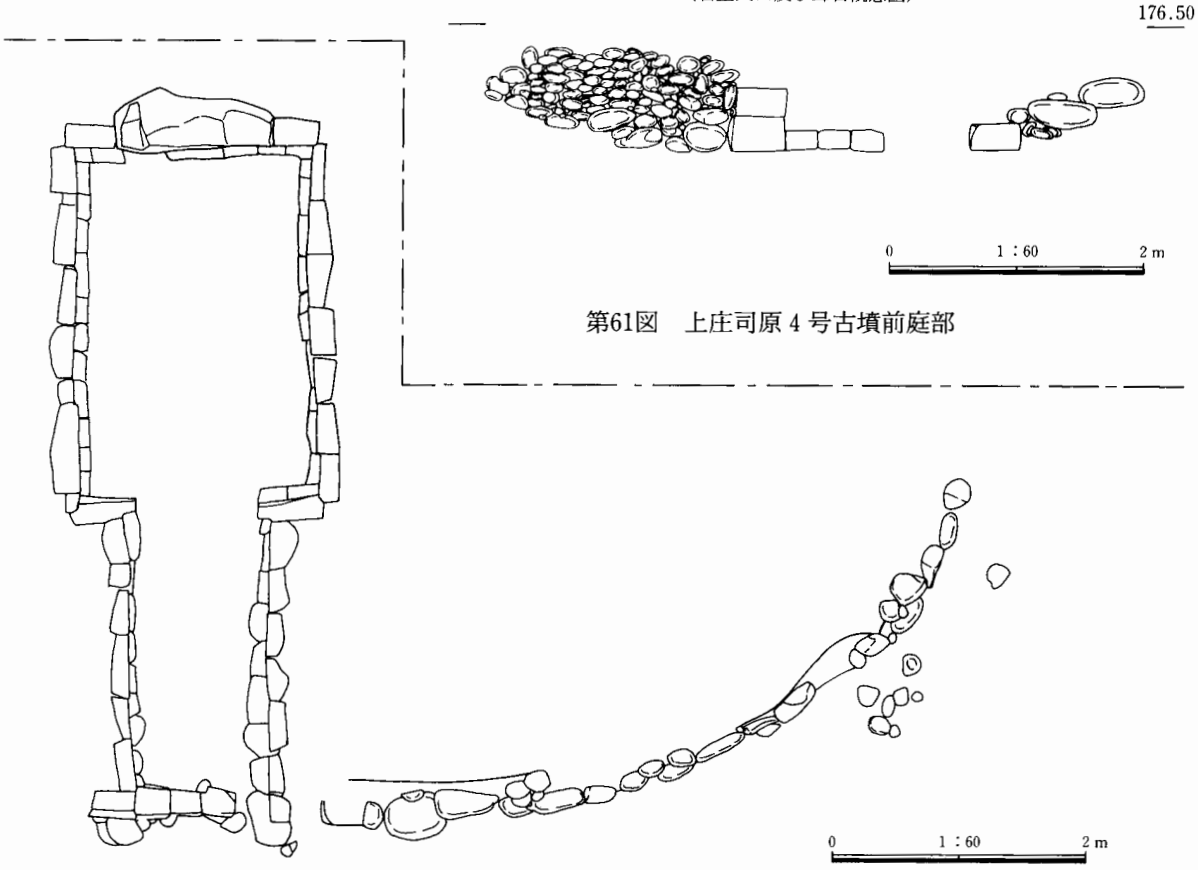
③前　　庭

石室の入口前には前庭が付設されている。東側部分の石積は耕作等でほとんど壊された状態であるのに対し、西側は比較的良く原状を留めていた。石室の入口から墳丘に沿って扁平な円礫もしくは棒状の河原石を積み上げ、羨門から約1.2mいったところで墳丘外側に向けて左右にハの字状に開くものである。

前庭の左側奥壁の石積は根石及び前庭部底面下になる部分には大振りの河原石と角閃石安山岩の円礫を横積みするが、側壁との交差部分には意識的に大振りの河原石を置いている。この上に小振りな河原石を積み上げているが、この石積は側壁を越えて約1m先まで続いており、側壁位置から徐々に根石レベルを上げている。この端部に1点だけ角礫が置かれるが、石積み範囲の目安と思われる。この石積の背面には川砂主体の小礫を用いて20～30cmの厚さの裏込めを施している。

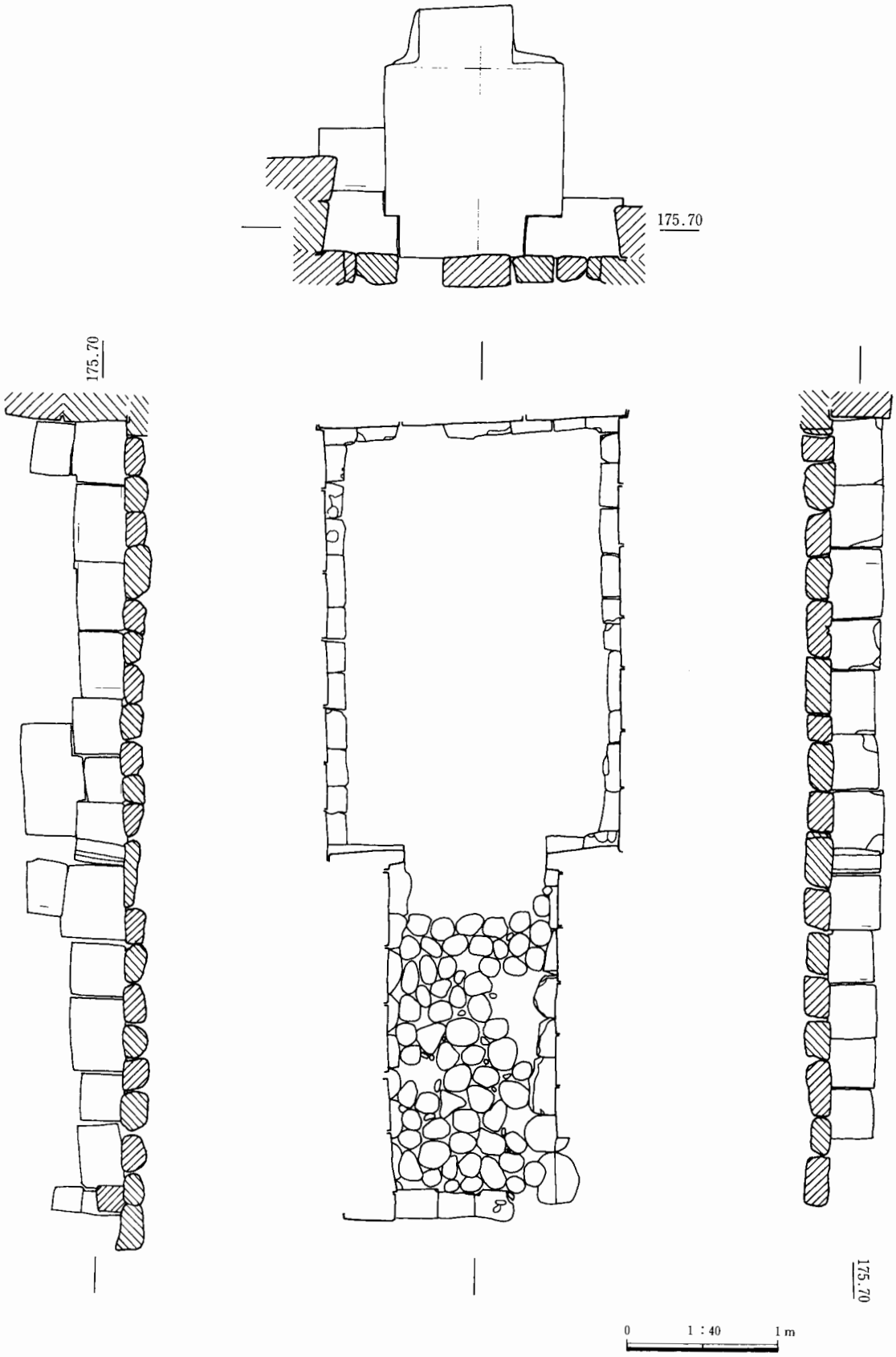


(石室入口及び葺石概念図)



第61図　上庄司原４号古墳前庭部

第62図　上庄司原４号古墳石室及び葺石検出状況



第64図　上庄司原４号古墳石室展開図

前庭部の左側側壁は2段に構築している。奥の段の石積の根石はやはり多少大振りな河原石を横置きにしており、その上に小振りな河原石を積み上げている。この南端にも多少大振りな河原石を斜めに横積みし、そこから墳丘に沿って約1.2mの長さに石積みを施しており、この端部にも角礫を据えている。側壁の背面には円礫と河原砂を用いた裏込めを50cm程の厚さで施している。前段の石積は残りが悪いものの、奥段と同様に根石を横置きし、上に小口主体に積み上げていると思われるが、残りの良い部分で1石が乗るだけである。側壁端部から墳丘に沿った石積みは数石残るだけであるが、奥壁と側壁奥段の標石をつないだ延長上に円礫が残存することから、これが側壁前段の石積の範囲を規定する標石と思われる。

前庭部の右側奥壁はほとんど残存しておらず、かろうじて横置きにした根石(角閃石安山岩の截石と原材)と河原石数石が検出されただけである。この角閃石安山岩の原材から先は墳丘南東部の葺石へと続く。側壁は左壁の奥段に対応する部分に根石が数石残存するだけで、石積は残存しないが、高さ80cmほどの盛土が残存している。尚、前段の石積の痕跡や盛土は確認されないため、施設されていたかどうかも不明である。

前庭の底面には小振りの河原石が平らに敷き詰められたような状態で出土しているが、残りが悪く、奥壁際にも認められないことから、前庭部石積が崩落したとも考えられる。左右の側壁の奥の段の端をつなぐ形で大振りで扁平な河原石を並べて、前庭内を前後に区画している。なお、前庭部底面下には小礫とともに角閃石安山岩の削り屑が敷き込まれており、ここで石室使用用材の加工を行っていたものと思われる。

④主体部の構造

石室はほぼ南に開口するいわゆる截石切組積の両袖型横穴式石室で、玄門、羨門が設けられている。石室の平面形は、玄室・羨道部とも多少のゆがみはあるが、ほぼ長方形で左右対称に近い形状となっている。

石室の規模は全長5.2m、玄室長約2.8m、玄室幅1.96m、羨道長約2.4m、羨道幅(奥寄りで)1.12mを測る。

石室の残存状況は余り良好ではなく、側壁は一部で2段に残存している部分もあるが、大半の部分は基底の1石のみである。奥壁は基本的に1石で全体をカバーしようとしており、その鏡石が残っていたために、当初に近い壁面の状態を残していた。羨道部は閉塞のための河原石による塡塞の下半部とその下の床面をほぼ残していた。

側壁の第1段を構成する石材は、羨道左壁が5石、右壁が6石で、玄室は左右とも7石である。2段目以上の構成は、1段目の石材の上端に切り込みのあるものや、高さに多少の変化を持たせているものが認められるが、2段目をわずかに残していた左壁の状況から基本的には横方向の目地を通そうとしていると思われる。奥壁は、壁面の中心の大部分を1石でまかない、これを左右から小振りのものを4段以上に積み上げて挟み込むようにしている。

壁体を構成する石材の積み上げの各所に切組積の手法が認められる。また、玄室側壁と奥壁、側壁と前壁の接合部分でもこの手法を取り入れて、両壁を巧みに組み合わせていた。石材の積み上げには、基本的にいわゆる「間知積」の手法が取られており、上下、左右に隣り合う石材の内側の接合面には全くといってもよいほど隙間をつくっていない。石材を側面から見るといずれも台形を呈しており、背後に生ずる石材相互の隙間に角閃石安山岩のハツリ屑を差し込んで調整をはかっている。

玄門は松本浩一氏の分類によるC類[注1]で、羨道壁から造り出すタイプである。板状を呈する石材を2段以上に横積みにしていると推定されるが、奥行きが約10cmとかなり短いものである。羨門は6面すべてを加工した小型の截石を使用しており、左壁で2段目まで残る。門柱石の前面は奥側へ約10度前後傾けた加工が施されている。右壁は欠失する。入口下面には框石が設置されている。やはり小型の6面加工の角閃石安山岩截

石を４石並べるが、右端は欠失する。框石の設置レベルは羨道部床面上であるが、河原石の礫敷きは框石の下には続いていない。框石の上面が前庭部の底面に連なり、前庭から一段下がって石室に入ることになる。

壁石に使用されている石材は、左壁の玄門が輝石安山岩であるのを除いてすべて角閃石安山岩である。

石材の加工法については羨道部と玄室部との間で基本的な違いはない。いずれの石材も、正面および上下左右の５面について加工が施されている。また、今年度の石材調査により、点数的には少ないものの、水磨きが施されているものが確認された。

石材の表面には朱線を残しているものも認められた。発掘調査の時点では奥壁と側壁の数ケ所の正面に認められただけであったが、今年度の石材調査により、見落としていた正面に加え側面からも確認できた。石材調査の詳細は別稿[注2]に譲るが、総数33点の壁材のうち23個の37ケ所に検出されている。朱線の描かれた部位は、石材の正面内部・端部、側面の端部に分けられ、右島和夫氏による吉岡村南下Ｅ号古墳での朱線の分類[注3]によるＡ種（石材の端部に沿って認められるもの）、Ｂ種（切り欠きの延長上に残るもの）、Ｃ種（石材の内面にきり面とは関係なく描かれる）のいずれもが認められている。

床面は特に玄室の攪乱が著しい。羨道の床面は扁平な円礫を敷き詰めたものである。その下は角閃石安山岩の削り屑を間層として土を固めて平坦にしている。この羨道の床下の土層面は玄門部まで続くが、ここまでは礫敷は続かない。玄室の床面は現状では客土による平坦面である。この面は、羨道部の礫敷下の土層に連なるものであることから、これと同様の礫敷面が存在したか、截石の敷石が存在した可能性も十分考えられる。この土層の下には羨道部と同様に角閃石安山岩の削り屑が層状に敷かれており、さらにその下に扁平な河原石の円礫が敷かれていた。

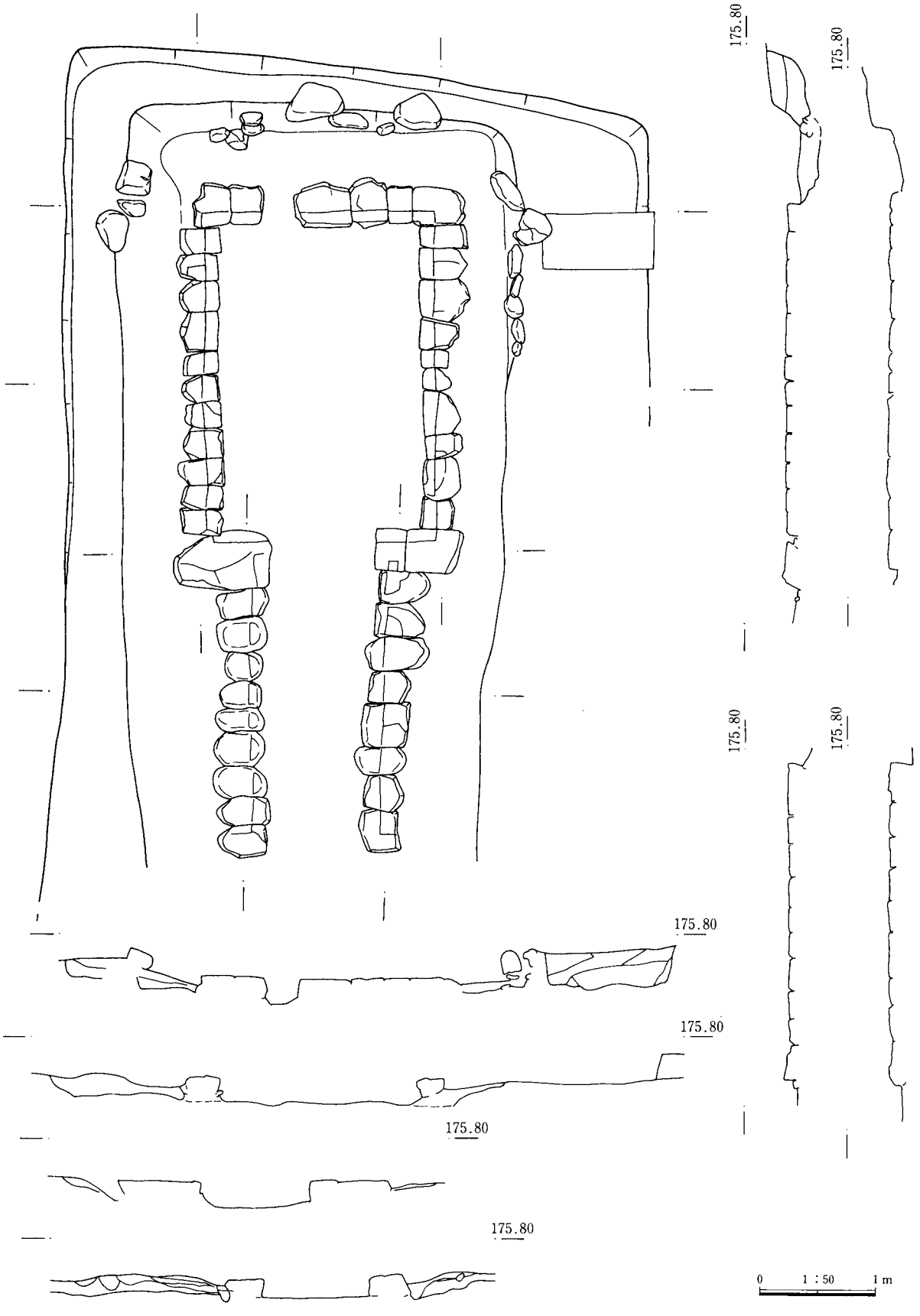
壁石の最下段の石を据え付ける部分は、これを受けるために浮石質の角閃石安山岩および輝石安山岩の一部を加工した地業用の石材が敷き並べられている。石の形状を見ると、壁石が載る部分を約１cmほど削り込み、側面から見てＬ字型に造っている。この形が沓のようであることと、あたかもこの石を履くように壁石の根石が設置されることから、本書では「沓石」と仮称する。

沓石は石室の掘り方内に設置されており、その下はローム地山面となるが、厳密には両者の間には粉状の角閃石安山岩の削り屑を敷き、２～３片の小振りなハツリ屑を用いて個々の石の安定をはかっている。その上面のレベルは全体がほぼ水平である。壁石の設置面から一段高くなって玄室内にはみ出す部分の長さは、玄室及び羨道部左側壁下のものはおおむね12cm前後でほぼ壁石に平行しているが、羨道部右側壁下のものには認められない。石材の大半は小型の原材を用いている。玄室は内面・上面・側面の４ケ所を主体に、背面或は下面を加えた５～６ケ所までに加工を施すが、羨道左壁下は入口部分を除いて上面の一面だけを加工しており、設置部位による差別化の意図が伺える。しかし、羨道右側壁下は石材の大きさや加工度が区々であり、上記のことや平面プランも考え合わせると、この部分を最後に設置したものと思われる。尚、奥壁部の左から３番目の石材が欠失するが、盗掘の際に奥壁の解体を試みた痕跡と思われる。

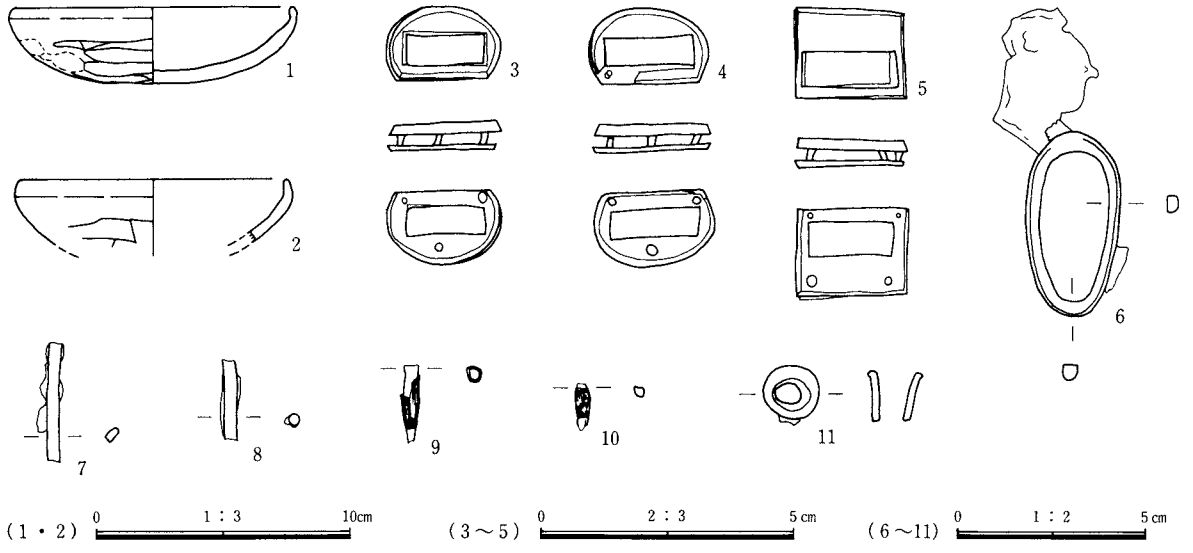
玄室内部に面する沓石の上面はほぼ平坦になるように丁寧な加工が施されており、この面に接して刀の鞘金具が出土していることや、数カ所に鉄錆が付着していることから、石室使用時には床面の一部として露出していたものと思われる。

石室の掘り方は、北から南への緩斜面を掘り下げて造成しており、南側には立ち上りが認められない。平面形は長方形で、幅5.2m、長さ７ｍ、最も深い北端で深さ0.8mを測り、底面は平坦である。この掘り方の内側にさらに石室プランに沿って最深部で10cmほどに掘り下げて沓石を設置している。

掘り方と壁石材との間にはこれを背後から補強する裏込めとその崩落を防止するための裏込め被覆があっ



第65図　上庄司原４号古墳沓石及び掘り方



第66図　上庄司原４号古墳出土遺物

た。裏込めには砂礫とともに多量の角閃石安山岩のハツリ屑が用いられており、裏込め被覆は河原石、山石とともに多量のハツリ屑が用いられて葺石状を呈し、その最上部には大振りの石材（径20～50cm）を押さえのためにおいている。これには、角閃石安山岩の原材や、石室壁材と同じ程度にまで加工されたものも用いられており、石材加工の過程で生じた失敗品や、用意はしたものの余ってしまったものを転用したものと推測される。

⑤遺物出土状態

石室内は床下まで大幅に盗掘を受けていたため、遺物・遺骨等はほとんど残っていなかった。わずかに玄室の右壁際のほぼ中央寄りから鉄製の鞘金具が１点、前庭部左側の石積直下から土師器の坏が１点出土した他、出土位置不明の坏が１点ある。また、玄室床面下の攪乱部分から、銅製の巡方１点、丸鞆２点が出土している。墳丘や周堀からは古墳に直接伴う遺物は出土していない。

注１：松本浩一「末期古墳の特質たる玄門に関する一考察」『群大史学』九号　1963

注２：右島和夫・津金澤吉茂・羽鳥政彦により『群馬県史研究』第33号に掲載予定

注３：松本浩一・桜場一寿・右島和夫「截石切組積横穴式石室における構築技術上の諸問題」『群馬県史研究』11・13号　1980・1981

第2表　下庄司原東遺跡1号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	壺 土師器	南溝くびれ部 埋土中位 完存	口：15.6 底：6.4 高：32.2 胴：28.3	粗砂 にぶい橙～暗褐色	器：胴部―若干扁平気味の球形、口縁部―内湾気味に開く、底部―小さく突出 外：口―斜めのナデ後ヨコナデ、胴・底―ナデ 内：口―ヨコナデ、胴―ナデ	口縁部外面に沈線
2	壺 土師器	南溝くびれ部 埋土底位 胴下半部	底：7.0 高：(12.6) 胴：26.8	粗砂 浅黄橙～にぶい褐色	器：突出する小さな底部から外反気味に立ち上がり、球形の胴部に至る。底部はわずか上げ底気味、内外面ともナデ。	黒斑あり
3	壺 土師器	北溝くびれ部 埋土中位 完存	口：16.9 底：6.8 高：31.4 胴：27.5	粗砂 にぶい浅黄橙 黒色 焼成一軟	器：胴部―球形、口縁部―外反、底部―突出 外：口―刷毛ナデ後上半ヨコナデ、胴―刷毛ナデ後粗いミガキ、底―ヘラケズリ 内：口―ヨコナデ、胴―上半なで、下半ハケナデ	ほぼ器面全体が黒斑で被われる。 胴部に穿孔途中で止めた痕？
4	壺 土師器	北溝後方部 胴部下端・底部欠損 3/4	口：15.6 高：28.7 胴：28.0	粗砂 にぶい橙～暗褐色	器：口縁部―直線的に開く、胴部―下半に最大径 外：口―ヨコナデ、胴―ナデ 内：口―ヨコナデ、胴―ナデ	焼成後底部穿孔 黒斑あり

第3表　下庄司原東遺跡2号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	器台 土師器	南溝 受け部ほぼ完存、台部上端	受：7.2 高：(4.4)	細砂粒 赤	器：受部は内湾気味に開き立ち上がる。 受部―内外面ともナデ、台部―外面ナデ	赤色塗彩 4孔
2	壺 土師器	南溝 口縁部 1/4	口：16.8 高：(6.4)	赤褐色粒・砂粒 浅黄橙～橙	器：直線的に開き上端で外反り。 外：刷毛後ヨコナデ 内：ヨコナデ	

第4表　下庄司原東遺跡3号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	壺	北溝 口縁部欠損 他はほぼ完存	底：5.3 高：(22.7) 胴：20.6	粗砂・石英粒 浅黄橙 赤色塗彩	器：球形の胴部から口縁部が直に立ち上がり大きく外反り。 外：口縁部―縦ミガキ、頸～肩―櫛ガキ、胴―横ミガキ、下端―縦ミガキ、底部―一定方向ミガキ 内：口―横ミガキ、胴―ナデ	櫛ガキ部分と胴下端部は赤色塗彩されない。 内面に砂粒脱痕多い。
2	器台 土師器	南溝 一部欠損	受：8.1 脚：9.9 高：7.2	粗砂 浅黄橙	器：受部底面は比較的平坦、脚部を含め、内外面ともミガキ。	台部内面に黒斑 3孔
3	甕 土師器	南溝 胴上半部 1/3	胴：15.2 高：(8.7)	砂粒 にぶい橙	外：櫛ガキ、肩―左下がり後横、胴中央―右下がり	(S字口縁) 二次焼成を受け器面は荒れている。

第5表　下庄司原東遺跡4号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高坏 土師器	ブリッジ西側 北溝覆土 坏部のみ完存	口：17.9 高：(7.3)	粗砂 橙	器：内彎 外：ナデ（後ミガキ） 内：ナデ（後ミガキ）	小黒斑 内面に砂粒脱痕 二次焼成
2	小型壺 土師器	ブリッジ西側 北溝覆土 口縁端部欠損 他は一部欠損	底：4.4 高：(17.2) 胴：16.7	砂粒 にぶい褐色～ 赤褐色	器：球形の胴部から口縁部が内湾気味にほぼ直立、底部は突出気味。 外面および内面：口縁部ミガキ 内面：ケズリ後ナデ	小黒斑 焼成後胴部中央に 小孔穿孔
3	小型壺 土師器	ブリッジ西側 北溝覆土 完形	口：10.4 底：6.1 高：13.1 胴：12.6	細砂粒 赤褐色	器：底部一大きめの平底、胴部一卵型、口縁部外反気味に立ち上がり、上半で内彎。 内外面ともナデ（後ミガキ？）	胴部中位外面の2ケ所に穿孔を試みた痕跡
4	小型甕 土師器	ブリッジ西側 胴下端～底部 1/2	底：5.0	砂粒 褐灰色	器：底部は突出した平底。 外：胴一弱い刷毛ナデ、底一ナデ 内：ナデ	
5	脚付き甕 土師器	ブリッジ西側 脚部のみ 一部欠損	脚：6.2 高：4.8	細砂粒 暗赤褐色	器：直線的に開く。脚端平坦。 外：縦ミガキ 内：底部ミガキ、脚部ナデ	
6	甕 土師器	ブリッジ西側 口縁～肩部 1/6	口：21.7 高：(7.9)	砂粒 赤褐色	器：口一外反り、折り返し口縁。 外：頸一刷毛後ヨコナデ、肩一ナデ後ミガキ 内：口一粗いミガキ、胴一密なミガキ	
7	壺 土師器	周溝北西隅 甕棺墓 口縁部欠損 1/2	胴：22.7 底：6.5 高：(19.9)	細砂粒 浅黄橙	器：扁平な胴部から小さな底部が突出。 外：胴一ナデ後粗いミガキ、底一ナデ 内：ナデ	焼成後内外から穿孔を試みた痕 甕棺蓋部 縦方向に2分割
8	甕	周溝北西隅 甕棺墓 完形	口：16.3 底：7.1 高：32.9 胴：25.2	砂粒 橙～浅黄橙	器：口縁部一外反、口縁端折り返し、胴一卵型、底部一突出した平底 外：口一縦ミガキ・折り返し部櫛描波状文、胴一上半斜めミガキ、下半縦ミガキ、底一ケズリ 内：口一横ミガキ、胴一横ミガキ	二次焼成 黒斑 胴部外面煤付着 甕棺棺部

第6表　上庄司原西遺跡1号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坩 土師器	東溝 口縁部 ほぼ完存	口：11.6 高：(6.8)	砂粒 にぶい橙	器：内湾気味に開く。 外：縦刷毛後ナデ、口縁端部ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ後縦ミガキ	小黒斑
2	壺 土師器	東溝中央 下半部 ほぼ完存	底：7.0 高：(13.5) 胴：27.6	粗砂・白色粗粒 にぶい橙～橙	器：底部は小さな平底。 外：胴一細かい刷毛ナデ、底一ケズリ後ミガキ 内：ケズリ後ナデ	赤色顔料容器 接合部から打ち欠
3	壺 土師器	北西隅周溝 上半部 3/4	口：14.8 高：(24.4) 胴：30.7	砂粒多量 浅黄橙～橙	器：口縁部は直線的に開く。 外：口一ヨコナデ、胴一上半ナデ、中央刷毛後ナデ 内：口一ヨコナデ、胴一ナデ	胴部に煤付着

第7表　陣場1号古墳出土土器観察表

番号	器　種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
1	甕 須恵器	墳丘東側中段 2/3	口：36.6 胴：50.8 高：58.2	粗砂、小礫 灰色	器：底部は丸底で焼歪みがある。そこから直線的に開き肩部で丸みを持つ。口縁部は緩やかに外反する。口縁端は段をもち口唇部は面取りされる。 外：口縁部―波状櫛画文、胴部―並行タタキメ。 内：口縁部―ヨコナデ、胴部―青海波状タタキメ。	胴部に大黒斑 肩部外面自然釉
2	甕 須恵器	墳丘西側中段 1/5	口：39.0 胴：60.0 高：(56.6)	粗砂、小礫 灰色	器：胴部下半は直線的に開く。胴部上半は球状に丸みを持つ。口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は段を持ち外面に1条の沈線がはいる。口唇部は面取りされる。 外：口縁部―ヨコナデ、胴部―ナデ、部分的にハケメ残存。 内：口縁部―ヨコナデ、胴部―タタキ後ナデ。	胴部に黒斑

第8表　陣場1号古墳出土鉄製品計測表

番号	種　別	出土位置	残存状態	法　量　等（単位cm）	備　　考
3	直刀	右壁際	一部欠損	全長(73.6)　刃部幅3.3　刃部厚0.8	両関
4	足金物	右壁際	ほぼ完形	長さ5.2　幅2.2　厚さ0.9	3に付帯
5	足金物	右壁際	1/2	長さ5.0　幅(2.0)　厚さ0.9	3に付帯
6	直刀	右壁際	破片	残存長5.7　幅2.3	3の茎尻　目釘孔1　目釘残存
7	鞘尻金具	右壁際	1/2	長さ3.0　幅3.4　厚さ1.8	

第9表　陣場2号古墳出土土器観察表

番号	器　種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
1	細頸瓶 須恵器	周堀東側覆土上層	口：17.8 胴：29.2 高：(34.2)	砂粒 灰色	器：丸みのある胴部から口縁部が立ち上がり、外反する。口縁端は段を経て短く立つ。 内外面とも回転ナデ。	
2	細頸瓶 須恵器	周堀東側覆土上層	台：13.2 高：(13.6)	砂粒 灰色	器：高台はハの字状に開く。胴下部は直線的に開く。 内外面とも回転ナデ。	

第10表　陣場2号古墳出土鉄製品計測表

番号	種　別	出土位置	残存状態	法　量　等（単位cm）	備　　考
3	直刀	左壁際南半部	完形	全長74.4　刃部長61.4　刃部幅3.2	両関　隅切尻　カマス切先　喰出鍔
				刃部厚0.8　茎部長12.8	目釘孔1　目釘残存　刀装具付帯
	喰出鍔			長さ4.8　幅2.9　厚さ0.7	
	鉛			長さ3.9　幅1.9　厚さ2.0	
	縁金具			長さ3.9　幅2.1　厚さ0.5	
	鞘口金具			長さ4.6　幅2.4　厚さ3.4	

番号	種　　別	出土位置	残存状態	法　量　等（単位cm）	備　　考
4	鞘尻金具	左壁際南半部	一部欠損	長さ3.4　　幅3.6　厚さ1.7	
5	足金物	左壁際南半部	完形	長さ5.1　　幅2.3　厚さ0.7	3に付帯
6	足金物	左壁際南半部	1/2	長さ(2.5)　幅2.1　厚さ0.7	3に付帯
7	鵐目	左壁際南半部	ほぼ完形	径1.4　長さ1.3	
8	鵐目	左壁際南半部	先端欠損	径1.4　長さ1.0	
9	鉄鏃	玄室	鏃身部	鏃身長4.4　鏃身幅2.0　鏃身厚0.2	
10	鉄鏃	玄室	鏃身部	全長(5.1)　鏃身幅1.8　鏃身厚0.2	
11	鉄釘	玄室	完形	長さ4.5　幅0.4　厚さ0.4	

第11表　上庄司原1号古墳出土土器観察表

番号	器　種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
1	瑳 須恵器	前庭東側テラスからの崩落 一部欠損	口：14.8 底：10.7 高：24.5 胴：22.1	砂粒、白色粒 小礫、 黒灰色、灰色	器：平底、胴部扁平、頸部外反、稜と稜上の沈線を経て口縁部が外反気味に開く。肩端と頸部中央に2条の沈線、口唇部面取り。孔部は突出。 外：底部―ケズリ後ナデ、胴部下端―ヘラケズリ、胴部～口縁部―回転ナデ。 内：回転ナデ。	自然釉付着
2	坏 土師器	前庭西側テラス上 一部欠損	口：12.9 底：13.8 高：4.1	細砂粒 にぶい橙～赤黒色	器：丸底の底部から段を経て口縁部が小さく内傾。 外：底部―ヘラケズリ、口縁部―ヨコナデ。 内：ヨコナデ、ナデ。	煤付着？
3	坏 土師器	前庭西側テラス上 3/4	口：12.7 底：11.2 高：4.2	砂粒、赤色粒 浅黄橙	器：丸底の底部から段を経て口縁部が外反。 外：底部―ヘラケズリ、口縁部―ヨコナデ。 内：ヨコナデ、ナデ。	
4	坏 土師器	前庭西側テラス上 3/4	口：12.6 底：11.1 高：4.7	砂粒 にぶい橙～褐灰色	器：丸底の底部から段を経て口縁部がわずか外反し、さらに稜を経てほぼ直立する。 外：底部―ヘラケズリ、口縁部―ヨコナデ。 内：ヨコナデ、ナデ。	
5	坏 土師器	前庭西側テラス上 1/5	口：(13.4) 底：(13.9)	砂粒 にぶい橙	器：丸底の底部から段を経て口縁部が直線的にわずか内傾する。 外：底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内：ヨコナデ、ナデ。	
6	坏 土師器	前庭西側テラス上 1／4	口：10.9 底：9.0	砂粒 にぶい橙	器：小径坏である。口縁部は外反する。 外：底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内：ヨコナデ、ナデ。	
7	羽　釜	前庭埋土上部 ほぼ完形	口：19.5 底：9.0 高：26.0	砂粒、白色粒 浅黄橙～暗赤灰色	器：平底、歪み多い。鍔部―三角 外：底部ヘラケズリ、胴部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内：ヨコナデ、横方向ナデ。	煤付着 黒斑
8	長頸瓶？ 須恵器	1/3	口：	黒粒少・白粒少灰白色	口縁部：外面波状文、内面ナデ。	

番号	器　種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
9	甕 須恵器	破片		白色粒多量 黒色	口縁部：外面波状文、内面ナデ。	断面暗赤褐色
10	甕 須恵器	破片		白色粒、褐色粒黒色	口縁部：外面波状文、内面ナデ。	断面灰色
11	甕 須恵器	破片		白色粒 灰色	口縁部：外面波状文、内面ナデ。	
12	甕 須恵器	破片		白色粒 灰色	口縁部：外面波状文、内面ナデ。 胴部：内面青海波。	
13	甕 須恵器	破片		白多、黒・褐少 極暗褐～褐色	口縁部：外面ナデ、内面ナデ。 胴部：外面平行タタキメ、内面青海波。	断面外側灰色、内側褐色
14	甕 須恵器	破片		夾雑物少ない 灰色	肩部外面にキザミ。 外面ナデ、内面ナデ。	断面褐色
15	甕 須恵器	破片		夾雑物少ない 褐灰～灰色	肩部：外面ハケメ、内面ナデ。	断面にぶい褐色
16	甕 須恵器	破片		黒色粒少量 灰白色	肩部外面に沈線。 外面ナデ、内面ナデ。	
17	甕 須恵器	破片		白色粒多量 褐灰色	胴部：外面平行タタキメ、ハケメ、内面青海波。	断面褐灰色～暗赤褐色
18	甕 須恵器	破片		白色粒少量 灰色	胴部：外面平行タタキメ、内面青海波。	断面灰白色
19	甕 須恵器	破片		黒色粒少量 灰白色	胴部：外面平行タタキメ、内面青海波。	
20	甕 須恵器	破片		白多、粗砂少 褐灰色	胴部：外面平行タタキメ、内面青海波。	断面外側灰色、内側褐色

第12表　上庄司原1号古墳金属製品計測表（鉄鏃以外）

番号	種　　別	出土位置	残存状態	法　　量　　等（単位cm）
21	小刀？	玄室	刃部	全長(19.2)　刃部長(19.2)　刃部幅(2.1)　刃部厚1.0　茎部長(17.0)
22	直刀	玄室南半部	刃部破片	刃部長(5.5)　刃部幅(2.6)　刃部厚0.8
23	小刀	右壁際南寄り	刃部～茎部	全長(7.6)　刃部長(5.0)　刃部幅(1.9)　刃部厚0.4　茎部長(2.6)
24	刀子？	玄室	刃部	刃部長(4.1)　刃部幅（0.8）　刃部厚0.4
40	馬具　引手	左玄門寄	引手壺	捩くの字引手、引手壺　縦2.7　横3.0　断面方形　0.7×0.7
41	馬具　引手	左玄門寄	引手壺	捩くの字引手、引手壺　縦2.6　横3.0　断面方形　0.6×0.5
42	馬具　鉸具	右壁際南寄り	完形	長さ6.1　幅5.9　厚さ1.1　刺金2.8　断面方形
43	馬具　鞍	右壁際南端	1/2弱	長さ(5.8)　幅(1.5)　厚さ1.6　断面方形～扁平　中空
44	馬具　鉸具？	玄室		長さ(2.2)　幅(3.2)　厚さ0.7　断面方形～円形

番号	種　　別	出土位置	残存状態	法　　量　　等（単位cm）
45	留金具	玄室	1/2？	長さ(1.6)　幅0.4　厚さ0.2
46	留金具	玄室	1/2？	長さ(1.5)　幅0.4　厚さ0.3
47	耳環	奥壁寄右壁際	完形	長さ2.8　幅2.9　断面円形0.7　銅製品
48	耳環	奥壁寄右壁際	完形	長さ2.4　幅2.6　断面円形0.6　銅製品
49	耳環	奥壁寄右壁際	完形	長さ2.2　幅2.4　断面楕円形0.5×0.4　銅製品

第13表　上庄司原1号古墳出土鉄鏃計測表

（単位cm）

番号	出土位置	残存状態	全　長	鏃身～頸部長	鏃身厚	頸部幅	頸部厚	茎部長	分　　類
25	中央部左壁寄	鏃身先端欠	(18.8)	(15.0)	0.2	0.5	0.3	3.8	長頸棘篦被
26	奥壁左端	完形	17.8	(14.9)	0.3	0.4	0.3	2.9	長頸棘篦被片刃箭式
27	左壁際中央部	茎先端欠損	(14.1)	(10.3)	0.2	0.4	0.3	(3.8)	長頸棘篦被片刃箭式？
28	左壁際中央部	鏃身～頸部	(7.5)	(7.5)	0.2	0.6	0.3	—	片刃端刃箭式
29	左壁際中央部	鏃身～頸部	(6.8)	(6.8)	0.2	0.5	0.3	—	片刃端刃箭式
30	左壁際中央部	鏃身欠損	(11.1)	(5.7)	—	0.5	0.3	5.4	棘篦被
31	左壁際中央部	身茎先端欠	(10.9)	(8.2)	0.2	0.4	0.3	(2.7)	長頸棘篦被柳葉式？
32	左壁際中央部	身茎先端欠	(13.4)	(12.2)	0.1	0.6	0.3	(1.2)	長頸棘篦被腸抉柳葉式？
33	左壁際中央部	鏃身先端欠	(15.6)	(10.1)	0.2	0.4	0.2	5.5	長頸棘篦被腸抉柳葉式？
34	左壁際中央部	頸部～茎部	(7.1)	(5.9)	—	0.5	0.2	(1.2)	棘篦被
35	左壁際中央部	頸部～茎部	(7.8)	(3.6)	—	0.5	0.2	4.2	棘篦被
36	左壁際中央部	頸部～茎部	(5.4)	(1.3)	—	(0.5)	0.3	(4.1)	棘篦被
37	左壁際中央部	頸部～茎部	(4.7)	(3.5)	—	0.5	0.3	(1.2)	棘篦被
38	左壁際中央部	茎部	(4.9)	—	—	—	—	(4.9)	
39	左壁際中央部	茎部	(3.2)	—	—	—	—	(3.2)	

第14表　上庄司原２号古墳出土土器観察表

番号	器　種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
1	小型甕 土師器	羨道部閉塞上 一部欠損	口：　8.9 胴：10.0 高：　7.0	細砂粒 橙色	器：底部丸底で扁平な体部から口縁が短く直立。 外：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	
2	高　坏 須恵器	右壁際中央部 ほぼ完形	口：10.9 脚：　9.4 高：　9.5	細砂粒 灰色	器：坏部は丸底で体部深い。沈線を経て口縁部がほぼ直立する。脚接合部は細く外反して大きく開く。裾端は外方が面取りされる。 内外面とも回転ナデ。	
3	フラスコ型提瓶 須恵器	中央部間仕切南 一部欠損	口：　8.8 胴：14.8 胴厚：12.9 高：24.5	粗砂粒、白色粒 灰～黒色	器：厚めの扁平胴部。細い頸部から一旦大きく開き、段を経て口縁部が直線的に立ち上がる。 内外ともに回転ナデ、胴部1/2にハケメ、胴部1/3程は回転ヘラケズリ後ナデ。 頸部中央に２条の沈線、稜直下に１条、口縁部下端に２条の沈線。口縁部中央に櫛歯刺突文。	口縁部内面と口縁部～胴部外面に自然釉付着
4	子持ち瑕 須恵器	中央部間仕切南 一部欠損	高：19.6 幅：27.0 孔：　1.4 中央 口：15.1 胴：11.3 底：　5.0 右 口：　9.4 胴：　7.2 底：　3.0 高：11.2 左 口：　9.7 胴：　7.4 底：　3.2 高：12.0	粗砂粒、黒色粒 灰白色	器：中央の瑕の両側に同型の小型の壺を接合。 中央―扁平な胴部から細長い頸がわずか開き気味に立ち上がり、上端で大きく開く。稜を経て口縁部が外傾する。胴部肩と頸部中央に２条の沈線、口縁部下端に１条の沈線。底部は小さな平底。内外面回転ナデ、底部外面ナデ。 右小型壺―扁平な胴部から頸部が外反して立ち上がり、稜を経てさらに口縁部が外反気味に開く。口唇部面取り。底部は小さな平底。肩部に櫛歯状工具による連続刺突と１条の沈線。頸部中央に２条の沈線。口縁部下端に１条（部分的に２条）の沈線。口縁部に縦位の櫛書き文。胴部外面ヘラケズリ後ナデ、他は回転ナデ。 左小型壺―基本的に右側と同型。頸部の沈線は弱く１条に見える。口唇部内面に１条の沈線。口縁部の歪み激しい。 接合部ナデ。	自然釉付着 中央の瑕の中に粘土玉が２個あり、振るとカラカラと音がする。 子器接合部の穿孔時の粘土塊が残ったものか？
5	平　瓶 須恵器	中央部間仕切南 完形	口：　9.1 胴：17.5 底：　7.9 高：15.8	粗砂、黒色粒 灰白～灰色	器：底部は平底で、胴部は扁平であるが丸みがある。口縁部は短く外反し、端部に段がある。口唇部は弱く面取される。 外：胴部肩に沈線１条、胴部中央に２条の沈線があるが全周しない。底部ヘラケズリ後ナデ。	頸部内面に刻み記号
6	高　坏 土師器	中央部間仕切南 一部欠損	口：18.6 底：13.4 高：14.7	細砂粒 赤褐色	器：坏部は浅く、底部はわずかな丸みを持つ。口縁部は内湾して立ち上がる。脚部―脚柱部は細長く裾部で大きく外反する。 坏部内外面と脚部外面はミガキ、脚部内面は脚柱部ヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	坏部内面内黒
7	甕 須恵器	入口前面東側 2/3	口：21.1 底：10.0 高：32.0 胴：30.6	粗砂、黒色粒 灰白～灰色	器：肩部から頸部は直線的に内傾し、口縁部はくの字状に開く。口縁端に段があり、口唇は面取りされる。 口縁部内外面ナデ。胴部内面タタキ。	比較的焼きが甘い

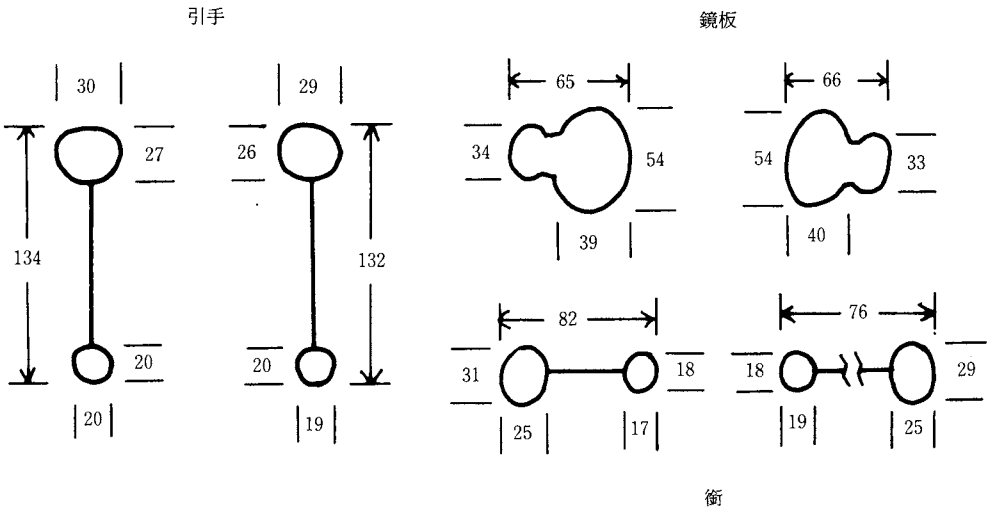
第15表　上庄司原２号古墳出土ガラス小玉計測表

番号	長径	短径	高さ	色　調	番号	長径	短径	高さ	色　調	番号	長径	短径	高さ	色　調
8	4.6	4.6	3.0	紺色	20	3.7	3.6	2.4	紺色	32	3.6	3.5	1.9	薄紺色
9	4.25	4.15	2.6	紺色	21	4.0	4.0	2.5	紺色	33	3.6	3.6	2.2	薄紺色
10	4.7	4.55	3.15	紺色	22	3.8	3.5	2.4	紺色	34	3.8	3.4	3.4	青色
11	3.6	3.5	2.1	紺色	23	3.7	3.7	1.9	紺色	35	3.7	3.4	2.3	青色
12	3.6	3.5	2.35	紺色	24	4.2	4.0	3.0	紺色	36	4.4	3.7	2.3	青色
13	3.7	3.7	2.1	紺色	25	3.8	3.6	2.6	紺色	37	3.7	3.6	3.4	青色
14	4.0	4.0	2.7	紺色	26	3.6	3.6	1.8	紺色	38	4.3	4.1	2.8	青色
15	4.7	4.1	2.6	紺色	27	3.9	3.7	2.3	紺色	39	4.3	4.0	3.2	青緑色
16	3.7	3.7	1.9	紺色	28	3.8	3.7	2.1	紺色	40	3.1	3.1	3.2	緑色
17	4.0	3.8	2.2	紺色	29	3.9	3.8	2.1	紺色	41	3.3	3.2	1.7	薄緑色
18	3.8	3.8	3.2	紺色	30	3.5	3.3	2.0	紺色	42	3.4	3.3	2.5	黄色
19	4.7	4.7	2.6	紺色	31	3.8	3.8	3.1	紺色	43	3.9	3.7	1.9	淡黄色（銀化）

第16表　上庄司原２号古墳金属製品（鉄鏃以外）計測表

番号	種　別	出土位置	残存状態	法　量　等（単位cm）
44	銅　耳環	右壁間仕切南	完形	長さ1.4　幅1.5　断面楕円形0.4×0.3
45	銅　耳環	右壁間仕切南	完形	長さ1.4　幅1.5　断面楕円形0.4×0.3
65	刀子	玄室	刃部	全長(4.0)　刃部長(4.0)　刃部幅(1.0)　刃部厚0.3
66	刀子	玄室	刃部～茎部	全長(9.0)　刃部長(7.9)　刃部幅(1.1)　刃部厚0.4　茎部長(1.1)
67	直刀	棺台東端	一部欠損	全長(100.0)　刃部長(83.0)　刃部幅(4.0)　刃部厚1.0　茎部長(17.0)
				片関一文字尻、目釘孔２、刃関孔、鎺：長さ4.5　幅3.0　厚さ1.8
	鍔			倒卵形、八窓、銀象眼、長さ9.0　幅7.2　厚さ0.8
68	小刀	棺台東端	一部欠損	全長(26.4)　刃部長(22.4)　刃部幅(2.4)　刃部厚0.6　茎部長(4.0)
69	小刀	棺台東端	一部欠損	全長(32.0)　刃部長(23.2)　刃部幅(2.6)　刃部厚0.7　茎部長(8.8)
70	馬具　鉸具	右壁際南端	完存	長さ7.5　幅4.2　厚さ1.1　断面方形　刺金7.5
71	馬具　鉸具	右壁際南端	一部欠損	長さ7.1　幅3.9　厚さ1.2　断面方形　刺金7.5
72	馬具　鐙靼	羨道部壁石間	軸欠損	長さ8.6　幅4.2　厚さ1.2　断面方形
73	馬具　鐙靼	中央部右壁寄	先端欠損	長さ6.8　幅4.2　厚さ1.4　断面方形
74	馬具　鞍	右壁際南端	完存	長さ7.2　幅4.8　厚さ0.6　断面方形
75	馬具　鞍	右壁際南端	ほぼ完存	長さ7.3　幅4.7　厚さ0.6　断面方形
76	馬具　轡	右壁間仕切際	完存	鉸具立聞素環鏡板付轡、法量は別記
77	馬具　辻金具	玄室	一部欠損	長さ2.5　幅2.1　厚さ0.2　４ケ所で鋲留めか
78	飾金具？	玄室	一部欠損	長さ(2.2)　幅(2.1)　厚さ0.1

上庄司原２号古墳No.76計測図



第17表　上庄司原２号古墳鉄鏃計測表　（単位cm）

番号	出土位置	残存状態	全　長	鏃身長	鏃身幅	鏃身厚	頸部長	頸部厚	茎部長	茎部厚	分　　類
46	右壁間仕切南	身先端欠損	(18.9)	(5.6)	2.6	0.4	7.0	0.4	7.0	0.5	短頸棘箆被腸抉長三角形式
47	右壁間仕切南	身一部欠損	(16.6)	(5.2)	(2.2)	0.2	6.3	0.4	5.8	0.3	短頸棘箆被腸抉長三角形式
48	左壁中央部南	身一部欠損	(16.0)	(5.0)	(2.1)	0.2	6.0	0.3	5.1	0.3	短頸棘箆被腸抉長三角形式
49	右壁中央部	茎先端欠損	(13.9)	(4.8)	(2.1)	0.3	5.0	0.4	(4.7)	0.4	短頸棘箆被腸抉長三角形式
50	右壁南半部	茎先端欠損	(15.2)	4.2	2.2	0.5	5.7	0.3	(5.8)	0.3	短頸棘箆被腸抉長三角形式
51	右壁間仕切南	身茎先端欠	(14.3)	(4.4)	2.0	0.3	5.1	0.2	(4.8)	0.3	短頸関箆被腸抉長三角形式
52	右壁間仕切南	逆刺欠損	14.8	4.4	2.2	0.4	5.4	0.3	5.3	0.4	短頸棘箆被腸抉長三角形式
53	右壁間仕切南	ほぼ完存	14.0	(3.9)	(2.0)	0.3	5.6	0.3	4.8	0.4	短頸関箆被腸抉長三角形式
54	右壁間仕切南	茎先端欠損	(13.0)	(4.5)	(2.1)	0.3	6.1	0.4	3.0	0.5	短頸棘箆被腸抉長三角形式
55	右壁間仕切南	身先端欠損	(13.1)	(3.8)	(2.1)	0.3	4.7	0.3	5.1	0.4	短頸棘箆被腸抉長三角形式
56	右壁間仕切南	茎先端欠損	(13.7)	(4.0)	2.0	0.4	5.8	0.3	(4.1)	0.5	短頸棘箆被腸抉長三角形式
57	右壁間仕切南	身茎一部欠	(10.8)	(2.4)	(2.1)	0.3	5.1	0.3	(3.2)	0.4	短頸棘箆被長三角形式
58	右壁間仕切南	身茎一部欠	(13.4)	(3.6)	(1.9)	0.4	5.5	0.3	(4.4)	0.3	短頸棘箆被腸抉長三角形？
59	左壁中央部南	身茎一部欠	(13.2)	(4.5)	(1.7)	0.3	(5.8)	0.2	(3.0)	0.2	短頸棘箆被腸抉長三角形？
60	右壁間仕切南	身一部欠損	(14.9)	(3.0)	(1.8)	(0.2)	(5.9)	0.4	5.9	0.5	短頸棘箆被腸抉長三角形？
61	右壁間仕切南	身部～頸部	(6.5)	(3.1)	(1.7)	0.3	(3.4)	(0.3)	—	—	短頸腸抉長三角形式？
62	右壁間仕切南	頸部～茎部	(11.4)	—	—	—	(5.3)	0.5	(6.1)	0.3	棘箆被
63	右壁間仕切南	頸部～茎部	(10.5)	—	—	—	(5.9)	0.3	(4.6)	0.5	棘箆被
64	右壁間仕切南	茎部	(5.3)	—	—	—	(0.6)	—	(4.7)	0.4	棘箆被

第18表　上庄司原３号古墳出土土器観察表

番号	器　種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
1	短頸壺 須恵器	壁石攪乱中 1/3	口：10.4 胴：22.9 台：11.0 高：15.0	砂粒 灰色	器：高台部はハの字に開く。胴部の立ち上りは直線的で、肩部で急激に内屈する。口縁部は短く立つ。 肩部・胴部下半・胴部と高台部との境に沈線が各１条巡る。内外面とも回転ナデ。	

第19表　上庄司原３号古墳出土鉄製品計測表

番号	種　別	出土位置	残存状態	法　量　等（単位cm）
2	鉄鏃	玄室	鏃身～頸部	鑿箭式、残存長5.8　鏃身幅0.8　鏃身厚0.1　頸部幅0.8　頸部厚0.3
3	鉄鏃	玄室	鏃身部	無関片刃箭式、残存長2.7　鏃身幅0.6　鏃身厚0.2

第20表　上庄司原４号古墳出土土器観察表

番号	器　種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
1	坏 土師器	前庭部西石積 直下 1/4	口：11.1 高：3.0	砂粒 橙色	器：浅い丸底坏。 外：底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内：ヨコナデ・ナデ。	
2	坏 土師器	前庭部西石積 直下 破片	口：10.6 高：(2.7)	砂粒 橙色	器：浅い丸底坏。１よりは深め。 外：底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内：ヨコナデ・ナデ。	

第21表　上庄司原４号古墳金属製品計測表

番号	種　別	出土位置	残存状態	法　量　等（単位cm）
3	丸鞆	玄室攪乱中	完形	縦1.4　横2.2　厚さ0.5　表孔1.65×0.65　裏孔1.55×0.55　表板0.2　裏板0.1
4	丸鞆	玄室攪乱中	一部欠損	縦1.5　横2.4　厚さ0.55　表孔1.8×0.7　裏孔1.8×0.6　表板0.2　裏板0.1
5	巡方	玄室攪乱中	完形	縦1.7　横2.2　厚さ0.6　表孔1.9×0.7　裏孔1.7×0.7　表板0.2　裏板0.15
6	責金具	右壁沓石上	完形	長さ4.8　幅2.4　厚さ0.4
7	鉄鏃？	玄室攪乱中	頸部破片？	残存長3.1　断面0.4×0.2
8	鉄鏃？	玄室攪乱中	頸部破片？	残存長2.1　断面0.3×0.3
9	鉄鏃	玄室攪乱中	茎部破片	残存長2.0　断面0.3×0.3　木質残
10	鉄鏃	玄室攪乱中	茎部破片	残存長1.2　断面0.2×0.2　木質残
11	鵐目	玄室攪乱中	完形	径1.4　長さ1.3

VI　発掘調査の成果と課題

1．方形周溝墓のまとめ

陣場・庄司原古墳群からは古墳時代前期の方形周溝墓5基が富士見村で初めて検出された。

下庄司原東遺跡では舌状台地の先端部に1～3号方形周溝墓の3基がまとまって占地し、ここからある程度の距離を置いた台地縁辺に単独で4号方形周溝墓が占地していた。但し、4号方形周溝墓の北側は未調査であり、ここに別の方形周溝墓が存在する可能性はある。上庄司原西遺跡では1号方形周溝墓が単独で占地するが、これも部分的な調査のため周辺に別の方形周溝墓が存在する可能性は否定できない。

検出された方形周溝墓はすべてタイプが異なる。下庄司原東遺跡1号方形周溝墓は前方後方形、下庄司原東遺跡4号方形周溝墓は一辺の中央部を掘り残すタイプ(一種の前方後方形)、上庄司原西遺跡1号方形周溝墓は一旦掘り残したブリッジの方台部側を断ち切るタイプである。下庄司原東遺跡2・3号方形周溝墓は全体形状が不明瞭であるが、2号方形周溝墓は隅或いは隅寄りの一部を掘り残すタイプ、3号方形周溝墓は全周するか、部分的に解放するタイプの可能性がある。

方形周溝墓の規模は下庄司原東遺跡2・3号方形周溝墓が一辺7.5m前後と小型でほぼ同一規模である。他の3基は比較的大型で、下庄司原東遺跡1号方形周溝墓を後方部の規模で比較すると、下庄司原東遺跡1号方形周溝墓が12×9.6m、下庄司原東遺跡4号方形周溝墓が11.4×10.8m、上庄司原西遺跡1号方形周溝墓が13.7×12.0mを測りこの順序で大きくなる。これに下庄司原東遺跡1号方形周溝墓の前方部、下庄司原東遺跡4号方形周溝墓のブリッジ部分の面積を加え3者の台状部の面積全体で比較しても上庄司原西遺跡1号方形周溝墓が最も大きい。しかし、方形周溝墓の規模をどの部位で計測するか問題であり厳密には計測していないが、周溝からの内側立ち上り部分で大型の3者の台状部全体の規模を比較した場合には3者ともが概ね170㎡前後となり、本遺跡群内では方形周溝墓の台状部全体での規模に何らかの規範が存在した可能性も考えられる。

方形周溝墓すべてから遺物が出土しているが数量的には少ない。共通する器種や組み合わせも少なく、明確な比較はできないが、多少の時間差が認められるようである。しかし、群馬県域での古墳時代前期の土器編年は未だ確定しておらず、本遺跡群の方形周溝墓についても現段階では明確な変遷案を提示し得ない。

方形周溝墓の規模や形状の相異が時期差や階層差をどのように反映しているのか、或いは3ケ所に別れて墓域が営まれていることの意味なども解明しなければならないが、現段階では既出資料の検討も行っていないため、これらの課題については既出資料の収集・検討と土器編年の進展を待って改めて考えてみたい。

2．古墳の構築工程について

陣場・庄司原古墳群で調査した7基の古墳のうち5基は盛土が残存しており、このうち4基については断ち割りを行い、古墳の構築工程に関してある程度の資料が得られた。本来は第Ⅴ章で個別に報告するべきであるが、上庄司原4号古墳以外は殆ど触れられなかったので、改めて本章でまとめを兼ねて報告したい。

盛土や葺石の残存状況は、規模や構造の差も含めて様々であるが、基本的な部分では同様であるともいえる。ここでは、最も基本的な構築過程を示すと思われる陣場1号古墳についてまず報告し、その他の古墳に

ついては陣場１号古墳との相違点を中心に報告を行いたい。なお、古墳の構築はすべての古墳が当時の地表面であるFA火山灰層上のFP軽石混じりの黒褐色土を整地して行っている。

陣場１号古墳

本古墳の構築面は南傾斜面であり、東から西へも若干傾斜している。

本墳の構築工程を一部推定を交えて以下に示したい。

① 構築面の整地：地表面を地形なりにならす程度と思われる。

② 掘り方の掘削：本墳では石室プランよりも奥壁で２m弱、玄室側壁で１m程度大きく掘削している。また、本墳の場合主眼は石室の構築面を水平にすることが目的と思われ、石室入口部分はほぼ地山面か若干掘り込む程度であり、最も深い奥壁側でも40cm程度掘り下げているだけである。

③ 根石の設置

④ 裏込め押さえ┐：奥壁裏は２段目にだけ施す。裏込めは河原の砂礫である。

⑤ 裏込め　　┘

⑥ 壁石の積み上げ

⑦ 盛土→④→⑤→⑥→⑦：この作業を繰り返す。この段階の盛土は墳裾から石室に向けて斜めに積み上げられる。また、黒色土系統主体土層、黒色土系統とローム土の混土、ローム主体層が互層を呈する。尚、現況で最上段の壁石の下面の位置に厚いローム主体層が盛られていることが注目される。

⑧ 天井石の架構

⑨ 天井部分を中心としてローム粘土で覆い、引き続き墳丘部の土盛りを行う。この場合の盛土は水平に積み上げる。

⑩ 手順は確認できていないが、石室入口左右の石積もある程度はすでに③の段階から石室構築、墳丘盛土の積み上げに並行して行われているものと思われる。

⑪ 墳丘部を整形しながら葺石を施す。：逆に言えば、葺石を葺く予定位置までの整形を行う。

⑫ （付け）基壇部に土盛りを行う。：当初の盛土の上に積み上げる。

⑬ （付け）基壇部を整形しつつ葺石を施す。同時に前庭袖部側壁にも葺石を施す。

この後、石室の床下・床面の敷設作業を行い完成となる。石室構築に際して石室内に土砂を埋塡・排除する作業も想定されるが、この作業を示す資料が得られていないため、工程からは除外した。

下庄司原１号古墳

本墳の構築面は北から南への緩傾斜面で、東西方向は水平か若干西から東へ傾斜している。

石室の掘り方は陣場１号古墳と同様に石室プランに対して奥壁側は２m前後、右側壁側は１m前後大きめに掘り込むが、左側壁側は６～７m以上の範囲まで掘り下げ、立ち上りも明瞭ではない。このような掘り方の構造は周辺地域にもほとんど認められず、その機能や効果は不明であるが、石室構築上の利便を考慮しての所作と思われる。深さは奥壁側で約70cmである。入口付近から前庭部底面下も多少の掘り下げを行っているがかなり凹凸が多く、既述のように前庭部底面の仕上げに際しては多量の切端・切屑を敷き込んでいる。石室の構築手順は陣場１号古墳と同様と思われるが、本墳の場合は盛土上層にローム主体土を多量に盛り上げているのが特徴である。天井石や壁石の位置は不明であるが、陣場１号古墳と同様に上位の壁石に向かうローム主体土層が伸びている。

上庄司原２号古墳

本墳の構築面は北から南への緩傾斜面で、西から東へも若干傾斜している。

掘り方の調査は行っておらず詳細は不明であるが、石室壁石根石の設置レベルと整地面のレベルに余り差がないことから、掘り方を深く掘り込むような状況ではなく、予定した石室プランに沿って浅い掘り方を穿ち、ロームを含む褐色土を客土し、角閃石安山岩の削り屑と小礫（山石）を敷き込み地業を行って、この上に根石を据えたものと思われる。根石の固定には角閃石安山岩の切端を用いて安定化を図っている。

本墳で特徴的なのは裏込および裏込押さえの施工の方法である。裏込め構造の明確な陣場１号古墳などでは石室壁材の上位まで裏込め押さえが施されていたが、本墳はごく下位にだけ施され、それより上は積み上げた盛土の層位（壁材積み上げの段階）ごとに雑然と裏込めを寄せかけただけの状態で検出されている。この構造と石室（左壁）の崩壊が直接結び付くかどうか不明であるが、非常に脆弱な感じを受ける。尚、裏込め押さえには大振りな河原石及び角閃石安山岩の転石を用いており、裏込めには小振りな河原石、砂礫、角閃石安山岩の切端・切屑が用いられている。

上庄司原４号古墳

本墳の構築面は南傾斜面で東から西へも傾斜している。

石室の掘り方等については既に第Ⅴ章で報告したとおりである。石室の構築手順は陣場１号古墳と同様であり、壁石の最上段近くまで裏込め、裏込め押さえが施されている。

本墳で特筆されることは盛土中に角閃石安山岩の切屑層が認められたことである。これは、奥壁側では奥壁内面から約3.6mの地点から1.2mの範囲、左壁側では内面より約５mの地点から２mの範囲にほぼ水平に薄く検出されている。奥壁側の断面ではこの切屑層を覆う盛土が壁石の上位まで延びていることから、上段の壁石（或いは天井石）の仕上げを行った作業面と思われる。トレンチ調査の右側壁側には検出されていないが、盛土除去の際に確認を怠ったため、東側で石材加工作業を行っていないと断定することはできない。

３．陣場・庄司原古墳群の変遷について

(1) はじめに

群馬県では古くから先学諸氏の努力により古墳の調査が行われ資料が蓄積されている。また近年の大規模開発に伴って古墳群の面的な調査も行われ、新たな資料も日々蓄積されつつある。

このような状況の中、首長墓の石室についてはかなり編年的な整備が進んでいるが、中小の古墳の石室、特に終末期のものについては地域的な差もあり、また、地域による調査の進展度も様々であるため、現時点では地域ごとの編年の確立に向けての資料蓄積の段階にあるともいえる。

富士見村では、村誌編さんの際に群馬大学学芸学部史学研究室によって、古墳分布調査と墳丘・石室の実測調査が行われている。この成果や群馬県内他地域での調査の成果も基にして横穴式石室の構造、特に石室平面企画と使用尺度とを検討し、構築時期の推定に及んでいる。本来ならばこの群大史学研究室の調査成果や尾崎喜左雄氏を始めとする先学諸氏の研究成果を基軸にし、広く群馬県域を見据えた上で陣場・庄司原古墳群の変遷を究明するべきであるが、いまだ未消化の状態であるため、ここではあくまで陣場・庄司原古墳群の調査成果に多少周辺地域の動向を加味して陣場・庄司原古墳群の変遷を考えてみたい。但し、周辺地域の動向も同様に未消化であり、既存の古墳の変遷観や名称等の出典を個別には提示できないことをお断りし

ておきたい。また、後期～終末期の中小規模の円墳を中心においての記述であることも念頭においていただきたい。

(2) 時期判断の要素

古墳の構築時期を判断する要素としては、①外部施設の構造・②石室の構造（使用石材及びその用法・加工方法も含む）・③埴輪の有無・④出土遺物及びその出土位置などがある。しかし、調査される古墳の多くは後世の破壊を受けているため特に①②については時期を判断する要素の多くを欠く。④の遺物についても大半の古墳が盗掘されているため、時期を判断する有効な手段となり得ないのが現状である。これには、追葬の問題も係わり、初葬・追葬時の副葬品を明確には分離し難いこともある。

①の外部施設では周堀が古墳全体を囲繞するものから馬蹄形(玦状)、さらには部分的に掘削されるものへと変化する。墳丘の構造については細部までの構造が判明する事例は少ないため比較検討できないが、全体的には石室の構築方法と連動し、低墳丘化の流れがある。外部施設で最も大きな目安は前庭部の有無で、墓道状或いは簡素な構造から定型的な台形（或いは扇型）の前庭となり、やがて古墳自体の縮小化傾向に合わせて縮小・消滅していく。

②については、まず大型古墳の動向を見ると、当初自然石積みの両袖型で導入された横穴式石室が自然石積みの袖無型になり、角閃石安山岩削石積石室（凝灰岩の切石積石室等も含む）から自然石積みの両袖型の巨石巨室横穴式石室、さらには截石切組積石室へと変化し、やがて古墳の終焉を迎える。これに対して中小古墳の場合は自然石積みの袖無型石室の段階から導入され、中小古墳のうちでも比較的大型の古墳については大型古墳に若干遅れる形で各段階の変遷を辿るが、群集墳を構成する大半の古墳の石室は自然石積みのまま構築されていたと考えられる。これらは袖無型から両袖型への変化はあるものの地域的な偏差（採取可能な石材の関係もある）も大きいと思われ、先述したように統一的な変遷観を現時点では提示できない。玄室の矩形から胴張りへの変化も必ずしも一方づいておらず、これも地域的な偏差が大きいようである。

③の埴輪の有無では、基本的に前方後円墳の消滅に合わせて樹立されなくなるとされているが、中小古墳ではこれにもある程度の地域性があり、消滅時期に多少の早遅があるようである。

④の出土遺物については前記したように良好な状態で遺物を残す古墳が少ないために、古墳の規模（階層差）による変化や時期的な変化、地域性なども不明瞭である。遺物の出土位置については、土器の石室内への副葬から石室外への副葬・設置が大まかな傾向としてあげられる。但し、これは墳丘の外部構造－墓前祭祀施設（前庭）の出現に伴う葬法の変化との関連が大きい。

これ以外にも石室の企画や尺度の問題も重要な要素と思われるが、今回は検討できなかった。

(3) 陣場・庄司原古墳群の変遷

陣場・庄司原古墳群の特徴はすべて両袖型横穴式石室であること、石室構造が変化に富むこと、すべて埴輪を樹立していないこと、適当な間隔を置いて１～２基がほぼ微地形ごとに占地すること等が挙げられる。

周堀の囲繞形態は墳丘全体に巡るものは無い。馬蹄形に巡るものは陣場２号古墳(推定)、上庄司原１号古墳、上庄司原２号古墳の３基である。左右に掘り分ける（石室の奥壁背面側を掘り残す）ものは陣場１号古墳、下庄司原１号古墳、上庄司原３号古墳の３基であり、前者が古く、後者が新しいと考えられる。上庄司原４号古墳は墳丘形状に沿って巡るわけではなく、周堀により墓域を外界から切り離すという意識の希薄化が伺えるが、一応馬蹄形の変種と考え、両者の中間と捉えたい。

前庭は陣場1号古墳、下庄司原1号古墳、上庄司原4号古墳の3基が定型的である。上庄司原1号古墳は墓道状の前庭で定型化以前の形態と思われる。上庄司原2号古墳は墓前に石敷の祭祀施設は予想されるものの、石積みによって区画されておらず、前庭出現以前の段階と考えられる。陣場2号古墳と上庄司原3号古墳は定型的な前庭ではないが墓前を区画しており、前庭出現以降の時期と考えられるが、これだけでは定型的な前庭との前後関係は決しがたい。但し、陣場2号古墳は周堀の要素も加味すれば定型化以前の形態と考えることができる。また、定型化以前の形態ということだけでは陣場2号古墳と上庄司原1号古墳の前庭の形状の違いを時期差とすることはできないが、石室の形態についてみると、同じ自然石積みの両袖型横穴式石室の範疇に属するとはいえ袖部の不明瞭な上庄司原1号古墳に対して陣場2号古墳の玄室はほぼ矩形で明瞭な玄門構造であり、上庄司原1号古墳の石室形状を袖無型横穴式石室からの過渡的な形態と捉えれば、上庄司原1号古墳→陣場2号古墳の変遷は明らかである。

陣場・庄司原古墳群の占地状況は一般的な群集墳のようには密集しておらず、古墳の規模も少なくとも群集墳を構成する内の小型古墳よりは大きい規模である。一般的な古墳時代後期～終末期の群集墳内の小規模古墳においては自然石積みの横穴式石室が作り続けられ、削石積石室や截石積石室と併行して築造されたと考えられるにもかかわらず、本古墳群に多様な石室形態が存在する点からは大型古墳の変化の影響をダイレクトに受けているものと考えられる。大型古墳の石室の変遷観に従えば上庄司原2号古墳→上庄司原4号古墳は明らかであり、周堀の変遷観にも符合する。

基本的に自然石積みで一部に切石を用いる陣場1号古墳と下庄司原1号古墳の位置付けは、これも同時期のすべての古墳に採用されるわけではなく、比較的上位階層の古墳に限られるとされている。出現の時期については削石の出現を契機とする考えもあるが、石室構造や切石の加工程度、さらに本古墳群の周堀の囲繞形態などの変遷からするならば、截石切組積古墳の出現を契機とし、截石切組積古墳の被葬者に次ぐ階層の被葬者の古墳に採用されたと考えられる。陣場1号古墳と下庄司原1号古墳の前後関係は下庄司原1号古墳の石室形態が両袖型であるにもかかわらず、平面的には片袖状を呈するという特異な形態の採用をどのように理解するか問題は残るが、一応片袖型の石室が古相であるという点と、下庄司原1号古墳の石材が陣場1号古墳の石材よりも大振りな石材を用いている可能性があるという点を巨石巨室墳の名残と捉えれば下庄司原1号古墳→陣場1号古墳の変遷が考えられる。

上庄司原3号古墳については、墳丘規模・石室規模ともに本古墳群中で最小であり、石室平面形状からみても終末期古墳の中でも最末期に位置するものと考えられる。

以上により陣場・庄司原古墳群の変遷は上庄司原2号古墳→上庄司原1号古墳→陣場2号古墳→上庄司原4号古墳→下庄司原1号古墳→陣場1号古墳→上庄司原3号古墳と推定できる。しかし、ごく限られた要素だけから単純に古墳の新旧関係を判断できないことはいうまでもない。以下では調査資料の中から上記の推定を補強する要素の有無を検証し、補足説明を行いたい。

(4) 上庄司原1号古墳と上庄司原2号古墳の比較

上庄司原2号古墳は、被葬者埋葬後ほとんど時間を置かずに石室が崩壊したものと思われ、結果的に単独葬、未盗掘となったものである。

石室は角閃石安山岩削石積両袖型横穴式石室で、高崎市の綿貫観音山古墳や前橋市の総社二子山古墳の後円部石室の系統に属するものである。これらの古墳は6世紀後半の構築とされている。

玄室内から出土した須恵器はTK43型式期の特徴を有しており、年代的には6世紀後半とされている。直

第22表　古墳概要表

古墳名	石室			外部施設			遺物		
	石材	壁体構成	施設	周堀	葺石	前庭	土器、出土位置	鉄器	装飾品
陣場 1号古墳	輝安 一部角安	自然石乱石積 一部切石使用	玄門・梱石	掘り分け	墳丘・基壇 前庭部	定型	須恵器 前庭部脇テラス上	直刀 刀装具	なし
陣場 2号古墳	輝安	自然石乱石積	玄門	馬蹄形	前庭部	定型前	須恵器？	直刀・鉄鏃 刀装具・鉄釘	なし
下庄司原 1号古墳	輝安	自然石乱石積 一部切石使用	間仕切 梱石・框石	掘り分け	墳丘・基壇 前庭部	定型	なし	なし	なし
上庄司原 1号古墳	輝安	自然石乱石積	玄門 楣石	馬蹄形	墳丘・基壇 前庭部	墓道状	須恵器・土師器 前庭部脇テラス上	直刀・小刀 鉄鏃・馬具	耳環
上庄司原 2号古墳	角安	削石積	玄門・棺台 (間仕切)	馬蹄形	墳丘	石室前面 石敷遺構	須恵器・土師器 玄室内・入口脇	直刀・刀子 鉄鏃・馬具	耳環 ガラス小玉
上庄司原 3号古墳	輝安	自然石乱石積	玄門 梱石	掘り分け	不明	小規模 土面？	須恵器 攪乱中	鉄鏃	なし
上庄司原 4号古墳	角安 一部輝安	截石切組積	玄門 框石	(馬蹄形)	墳丘・基壇 前庭部	定型	土師器 前庭部	刀装具 鉄鏃	帯金具

注：墳丘形状はすべて円墳、石室形態はすべて両袖型横穴式石室である。輝安は輝石安山岩の略、角安は角閃石安山岩の略である。

第23表　墳丘・石室規模一覧表　(単位：cm)

古墳名	墳丘規模	石室全長	玄室					玄門		羨道				前庭			
			右長	左長	奥幅	中幅	前幅	奥行	間口	右長	左長	奥幅	前幅	右壁	左壁	奥幅	前幅
陣場 1号古墳	基壇 16m 上段 11m	右 580	294	(296	204	192	188	右 38 左 36	85	244 288		98		(320		(600	1000
陣場 2号古墳	12m 葺石 9 m	左(500		280	150	165		左 40			(172 (207						
下庄司原 1号古墳	基壇 21m 上段 15m	左(690	(315	(315	(180	間仕切 (165	(150	右(20 左(30	(105	(320	(340	(120		(300	(300	(660	(960
上庄司原 1号古墳	墳丘 13.6m テラス 24m	右 662 左 650	315	330	212	222	155	右 42 左 42	85	305 347	278 320	100	85	(440	(440	160	(240
上庄司原 2号古墳	墳丘 15m テラス 28m	右 585 左 590	360	355	215	間仕切 220	165	右 30 左 35	90	192 225	200 237	100	84				
上庄司原 3号古墳	東西 9.7m	左 390	220	217	120	160	170	右 35 左 35	80		142 175	100					
上庄司原 4号古墳	墳丘16～17m	右 524 左 520	280	278	194	194	194	右 12 左 10	95	240 252	232 242	112	108		362	360	(600

注：スペースの都合により（　）の代わりに（だけで推定値・復元値を表す。羨道部長の下欄は玄門奥行を加えた数値。

第24表　石室構成比一覧表

構成比	陣場1号	陣場2号	下庄司原1号	上庄司原1号	上庄司原2号	上庄司原3号	上庄司原4号
玄室長/羨道長	0.97	1.35	0.95	1.03	1.5	1.24	1.14
玄室長/玄室幅	1.57	1.7	1.75	1.56	1.65	1.28	1.43

刀には古相が伺われるが、轡は鉸具立聞素環鏡板付轡であり、6世紀末葉には出現していたとされる。

首長墳の石室と中小古墳の石室を同列に扱えないのは当然である。規模的には格段の違いがあり、平面形状も異なる。石材の加工・積み上げ方法は綿貫観音山古墳とはかなり異なり、どちらかといえば総社二子山古墳に近いようである。石室規模の相違はある程度階層差を表すとして、平面形状の差異や石材の加工方法・程度や積み上げ方法にも時期差や階層差が反映するか、それとも地域差（技術者集団の相違）なのか、現時点では不明である。いずれにしても、石室や出土遺物から総合的に判断すれば綿貫観音山古墳や総社二子山古墳後円部石室よりも後の段階の6世紀後半から末葉までの時間幅内での構築と考えたい。この場合、最も問題となるのは埴輪が樹立されていなかったことである。これが本墳に特有であるか、それとも、当地域全体に認められるかどうかは不明（調査例が少なく判断材料が無いため）であるが、一応、当地域では他地域に比していち早く埴輪祭祀が終焉を迎えたと想定しておきたい。

上庄司原1号古墳は上庄司原2号古墳と隣接して構築されている。墳丘や石室の規模はほぼ同様である。陣場1・2号古墳も隣接しており（但し、規模的には差がある）、例がないわけではないが、下庄司原1号古墳や上庄司原4号古墳が微地形ごとに1古墳が築かれている状況からすれば奇異な感じを受ける。

上述した時期判断の要素を元に両者を比較すると、墳丘構造は墳丘の周りにテラスが巡り、ほぼ同様といってもよい。周堀は多少の相異点があるものの、両者ともが馬蹄形であり、明確な時期差を認められない。外部構造で最も異なるのは前庭部で、上庄司原1号古墳が定型化以前の墓道状の前庭とはいえ、明確に前庭を設けるのに対して、上庄司原2号古墳は石敷の墓前施設は予想されるものの、前庭の構造になっていないことである。前庭の敷設という点では上庄司原1号古墳のほうが新しいといえる。この前庭の敷設と密接な係わりを持つことであるが、石室構築面が上庄司原2号古墳は傾斜地を平坦にする程度の浅い掘り方であるのに対して、上庄司原1号古墳は最深部では1mにも達する深い掘り方を掘削していることである。墳丘構築の省力化の流れからすれば、この点においても上庄司原1号古墳のほうが新しいといえる。

石室の構造は上庄司原1号古墳は地石を使用した自然石乱石積両袖型石室であり、上庄司原2号古墳は角閃石安山岩削石積石室とまったく異なっている。時期的に近接すると考えられ、位置的にも近接する2古墳の石室構造がこれ程まで異なることは構築時期を判断する上で非常に重要である。

上庄司原1号古墳の石室は両袖型石室とはいうものの袖の構造は明瞭でない。上述したようにこの時期は自然石積みの横穴式石室が袖無型から両袖型へと変化する時期にあたっており、上庄司原1号古墳の石室の袖は両者の過渡的な形状と捉えることもできる。さらに、自然石積みの袖無型石室から両袖型石室への変化が削石積み石室の出現を契機としていることも十分に考えられる。

土器の出土位置は上庄司原2号古墳は石室内が主体で入口前からも出土している。これに対して上庄司原1号古墳はすべて前庭部周辺からの出土で、これは古墳の外部構造の変化－葬法の変化に対応したものと考えられる。上庄司原1号古墳は追葬が行われているため、出土土器をそのまま構築時期とはできない。また、土師器坏の年代観、6世紀後半～7世紀前半からの絞り込みは困難であるが、須恵器瑳は定型的ではないものの注口部の突出や口縁部の特徴からすれば上庄司原2号古墳出土須恵器に後出する様相が伺える。

以上のように全ての要素において上庄司原2号古墳→上庄司原1号古墳の変遷は明らかである。またこれは総社二子山古墳の後円部石室→前方部石室の変遷と対応関係にあるといえる。さらに、付言すれば、上庄司原1号古墳の石室は、奥壁の根石に2石を用いていることと、楣石を架け渡す点に総社二子山古墳前方部石室との共通点があり、袖部の不明瞭な点では総社愛宕山古墳石室に類似しているため、両者の中間の時期が考えられるものの、やはり総社二子山古墳前方部石室により近いと思われる。[注1]

陣場・庄司原古墳群はそれぞれがある程度の距離を置いて1～2基が占地している。その理由は厳密には不明であるが、集落を構成する複数の上位階層ごとに墓域が割り当てられたとも考えられる。仮にこの想定が妥当とすれば、近接した時期に同一規模の古墳が近接して構築されることは不自然である。これに合理的な理由を探すとすれば、上庄司原2号古墳の崩壊により追葬が行えないために、改めて上庄司原1号古墳が構築されたと考えるのが最も合理的と思われる。

角閃石安山岩が容易に手に入れられるにも係わらず、上庄司原1号古墳の全ての用材（石室の壁材・床材・閉塞材と葺石・裏込め石）が赤城山の山石によって賄われた理由は、すべて角閃石安山岩削石積石室（とその技術者集団）に対する不信感にあると思われる。さらに、上庄司原1号古墳の掘り方が陣場・庄司原古墳群の中で最も深いのは、単に墳丘構築の省力化のためだけではなく、上庄司原2号古墳の失敗を受けてより強固な支持基盤による石室の構築を目指したためと思われる。

(5) 下庄司原1号古墳について

古墳群の変遷ということでは余談になるかもしれないが、ここで下庄司原1号古墳の検出状況について考えてみたい。

第Ⅴ章で説明したように本墳は調査時点において玄室の石材がすべて盗掘されていた。羨道部の壁材や切石の梱石・框石・間仕切石がほとんど原位置に残存することから、自然石の大型の部材だけを選んで盗掘したものと考えられた。盗掘の時期は、羨門の用材の可能性のある切石が前庭部の床面に密着状態（耕作土等を挟まない）で散在しており、玄室埋土がかなり締まっていたことなどを考え合わせると、ある程度古い段階で盗掘されたものと推定された。さらに、石室の床面は土面のままで他の古墳のような石敷は施されておらず、遺物や人骨・人歯が1点も出土していない点も加味して考えると、本墳には埋葬が行われず、構築後間もなく破壊され、他の石室構築のために大型の石材だけを盗掘したとも考えられた。これには、前庭部側壁裏の盛土がある程度残存するにもかかわらず、側壁の石積はわずかな根石を残すだけで取り去られている（前庭外に投げ捨てたと考えられる）ことも尋常でない破壊の状態を示しており、何らかの事件の存在を示唆するものの、現段階ではこの盗掘行為の明確な時期や経緯は不明と言わざるを得ない。

古墳群の変遷観からすれば陣場1号古墳の石室に用いられた可能性もある。但し、奥壁の大きさはほぼ等しく、石室規模も同様であるが、下庄司原1号古墳の玄室石材の抜き痕の大きさと陣場1号古墳の玄室側壁根石の大きさが対応しているとは言い切れず、断定はできない。

(6) 陣場・庄司原古墳群の構築年代

最後に陣場・庄司原古墳群に大まかな年代観を与えてみたい。

上庄司原2号古墳は前記のように6世紀後半～末葉、上庄司原1号古墳は6世紀末葉～7世紀初頭、陣場2号古墳は7世紀前半、上庄司原4号古墳、下庄司原1号古墳、陣場1号古墳はこの順序で7世紀後半、上庄司原3号古墳は7世紀末葉～8世紀初頭の年代幅で考えたい。

4．古墳の外観（外部構造）について

群馬県内では近年の大規模開発事業に伴い、多数の古墳が調査されてきているが、墳丘・石室を含めてその上部構造を削平されているものが大半である。

古墳の墳丘の規模・外形・外部構造には被葬者の階層性や葬送儀礼の変化、さらには地域性等が反映していると思われるが、外部構造の細部まで判明する例はほとんど無い。陣場・庄司原古墳群の場合でも外部構造の細部まで残存するものはなかったが、7基のうち、比較的大型の5基はある程度盛土が残存し、葺石などの基礎構造を残しているので、それらを元に古墳の外部構造を推定復元してみたい。

陣場1号古墳

調査した古墳の中では比較的正面観が左右対称形に近い形状を呈すると思われる。定型的な前庭を付設しており、「付け基壇」に類する構造を有する外見上は2段築成の円墳である。但し、基壇部分が背面まで巡っていたかどうかは不明である。葺石は墳丘・基壇ともに施されているが、墳丘背面に施されていたかどうかは不明である。

復元図上では表現できなかったが、石室の入口左右の石積の根石ラインは右側が孤状、左側が直線と異なっており、前庭袖部側壁の開きも左右で異なっている可能性が高い。推測ではあるが、石室入口左右の石積に対してほぼ直角に側壁を積むとすれば、石室入口に対して右側は鈍角、左側はほぼ直角で、右側の方が開きが大きくなると思われる。これには、前庭部右側から石室に至る動線が想定され、南～東からの見た目をより重視した構造になっていることも考えられる。

上庄司原1号古墳

陣場・庄司原古墳群中で最も残りのよい古墳である。墳丘・葺石も下部構造は比較的良好に残存するが、特に葺石の変換点・接合部分が耕作により削平されており、復元上問題を残す。

墳丘に葺石、テラス外周（周堀縁辺）に石積を施し、外見上は2段築成の円墳である。テラス外周の南半部は小振りな山石を丁寧に葺いている。南東部の葺石は西側や東側の葺石ラインよりも内側に葺き、周堀掘り残し部分から前庭部までの墓道を設けている。前庭は墓道状の狭長なものである。

前庭部西側のテラス南端は現状では段になっているが、耕作の影響を受けており、原状も段になっていたか不明瞭であるが、復元図では先端まで一面として表現した。また、前庭部東側－テラス南東部の葺石とテラス東側外縁の葺石の接続関係もまったく不明であるが、明確に屈折する形で復元した。

上庄司原4号古墳

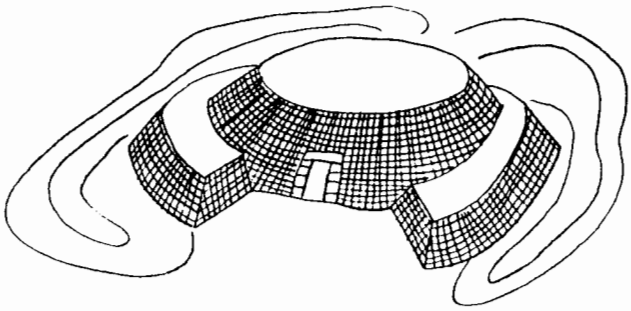
本墳を復元する上での問題点は、まず、石室入口から続く墳丘部の葺石（現状では盛土内に隠れている）が南東部だけに施されている点である。下部構造の違いは当然上部構造（墳丘の外観）に反映されると考えられ、2段築成の形状（南東部の形状で全周する）のままで根石の検出された部分だけに葺石を施したとも考えたが、外観上のまとまりがないことから、葺石根石が検出された部分だけ2段の形状にし、この部分だけに葺石を施した場合を想定して復元図を作成した。土木工学的にこのような形状が可能かどうか検証する必要があるが、1案として提示したい。但し、北側の周堀中からも葺石材と思われる礫が出土しており、実際には北側～西側にもある程度葺かれていた可能性がある。いずれにしても、南～東からの見た目を重視した外観である。

次に、前庭部の上部構造である。奥の段と前の段の接続状況が不明であり、前の段まで墳丘内に取り込まれるか、それとも墳丘から突出するかの2案が考えられた。また、前庭部東側の盛土は左側の奥の段よりも前方まで残存しており、右側側壁が2段に付設されていたかも不明である。これにもいくつかの復元が可能

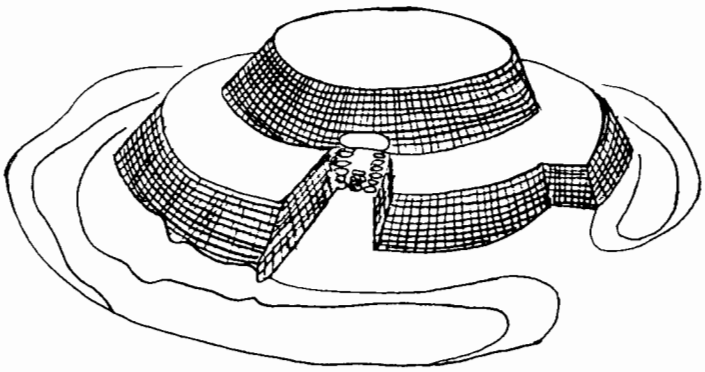
と思われるが、今回は両側とも前の段が突出する形状で復元してみた。

復元図は提示しないが他の古墳についても外観を推定してみたい。

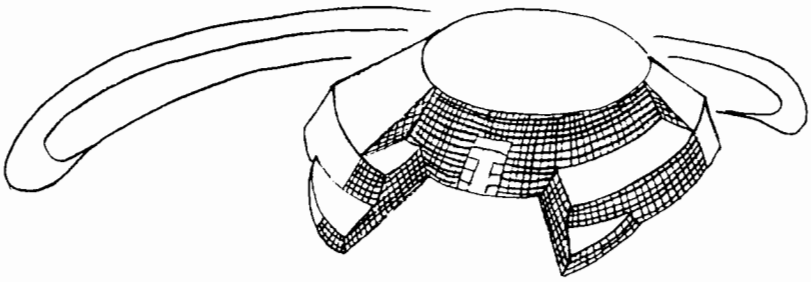
下庄司原１号古墳は、陣場１号古墳と同様に「付け基壇」に類する外見上は２段築成の円墳であり、定型的な前庭が付設される。また、墳丘の葺石（石室入口からテラス上に続く）は上庄司原４号古墳と同様に南東部から東側にかけての範囲だけに検出された。このことから、前庭部が前後２段の構造になっている点を除けばほぼ上庄司原４号古墳と同様な構造・形状になっていたと推察される。但し、本墳の場合北側から西側を円形に整形していなかった可能性があり、また、基壇部分の葺石は東側には葺かれていた可能性が高いものの、北側～西側に葺かれていたかどうかは不明である。



陣場１号古墳



上庄司原１号古墳



上庄司原４号古墳

第67図　墳丘推定復元図

陣場２号古墳の場合は基本的には１段の円墳と思われるが、低く狭いテラスが巡っていたとすれば、外見的には２段に見える。前庭部は袖部側壁の角度が違っていた可能性はあるが、比較的左右対称形に近い形状を呈していたと思われる。墳丘に葺石が巡っていた可能性は少なく、簡素な外観を呈していたと思われる。

上庄司原３号古墳は低墳丘で１段の円墳と思われる。前庭は側壁左右の開きが異なっており、左側の開きが大きいことから、南西側からの見た目を多少重視していた外観となっていた可能性はある。墳丘には葺石が施されていない可能性が大きく、前庭部も土面のままであったと思われる。

上庄司原２号古墳は墳丘の周囲に幅広のテラスが巡る円墳である。墳丘には法面全体に葺石が施されているが、テラス外縁には施されない。石室前には方形に川原石を配した祭祀遺構が存在するが、前庭は付設されず、全体的には比較的単純で簡素な外観を呈していたと思われる。

５．その他の問題と課題

(1) 遺物について

古墳からは下庄司原１号古墳を除いて遺物が出土している。このうち上庄司原２号古墳は石室崩壊により結果的に単独葬・未盗掘[注2]となったものである。これ以外はすべて盗掘されていると考えられ、追葬の有無は上庄司原１号古墳で確認できただけである。盗掘の可能性のある遺物をそのまま比較検討することはできないが、それぞれ近接する陣場１・２号古墳から刀装具付きの直刀が１振りずつ、上庄司原１・２号古墳から直刀・小刀（刀子）・馬具・鉄鏃・耳環がセットで出土していることは、被葬者の階層や相互の関係を考える上で重要と思われる。さらに、上庄司原４号古墳も盗掘されており、追葬の有無も不明であるが、群馬県で初めて截石切組積石室から銙帯金具が出土していることも被葬者の階層を考える上で重要である。これらの問題については今後の課題としたい。

上庄司原２号古墳は未盗掘・単独葬でありこの時期の中小古墳の大半が盗掘されている現状からするならば、ほぼ完全に副葬品の組成が判明した非常に希有な資料といえる。これは、追葬の行われている古墳や盗掘された古墳からの出土遺物を分析する上でも基礎的な資料になると考える。

上庄司原２号古墳の遺物を列記すると、玄室を主に石室から出土した遺物は須恵器瑞・フラスコ形提瓶（長頸瓶）・平瓶・高坏、土師器高坏・小型甕、直刀・刀子・馬具一組・鉄鏃、耳環一対、ガラス小玉で、石室入口前からは須恵器甕が出土した。このうち須恵器瑞は東国では希な子持ち瑞で、器形的には現在まで類例が出土していない。（但し、埼玉県内出土の土師器に須恵器を模倣したと思われる類似の資料が存在する。）この瑞はもちろんであるが、須恵器のフラスコ形提瓶や土師器の高坏、さらに、上庄司原１号古墳の須恵器瑞も類例に乏しく、生産地や流通経路も含めて究明する必要があるが、現在のところ着手できないでいる。

上庄司原２号古墳の出土遺物を、同時期の首長墳である高崎市の綿貫観音山古墳の出土遺物と比較すればはるかに見劣りがするのは、墳丘規模や石室規模の差から言っても当然である。逆にこのクラスの古墳の被葬者でもこれだけの内容の遺物が副葬されていたことに驚きを覚える。

では、上庄司原２号古墳の出土遺物が同時期の同一規模の古墳と同じであるかどうかを検証したい。先述したように、本古墳群は総社古墳群と密接な関係を有していたと考えられ、この点を重視するならば、墳丘や石室の規模で律し切れない内容をもっていた可能性もある。そこで、上庄司原２号古墳と同時期（かつ同種・同規模）の古墳例を探すと玉村町の萩塚古墳、伊勢崎市の清音１号古墳が挙げられる。これらの古墳は追葬が行われ、盗掘されてもいるため、同列には判断できないものの、器種組成的には非常に類似している

（清音１号古墳は石室の規模・形状も近似する）といえる。少なくともこの時期の古墳の規模と副葬品の内容が有機的な関係をもっていたことは明らかである。とすれば、上庄司原２号古墳クラスの古墳は群馬県内には相当数あったと推定され、盗掘されたそれらの古墳にも上庄司原２号古墳と同様な内容の遺物が副葬されていたと考えたとき、学問的な意味でも非常に残念でならない。

(2) 課　題

本章３で陣場・庄司原古墳群の古墳の変遷を検討した。その新旧を判断する要素として周堀の形状変化に主軸を置いたが、石室の変化要素と同様に一方づいて変化するかどうかの検証はできていない。また、７世紀後半とした３基の変遷（上庄司原４号古墳→下庄司原１号古墳→陣場１号古墳）についても前後関係を判断する根拠は曖昧と言わざるを得ない。仮に石室の一部に切石を用いる古墳が截石切組積古墳の出現を契機として出現したとしても、本古墳群が他地域と隔絶しているわけではなく、他地域の截石切組積古墳の影響によってまず下庄司原１号古墳或いは陣場１号古墳が構築された可能性も残る。これ以外にも根拠の曖昧な部分は多々有り、今回は余り行えなかった他地域の古墳群の変遷との比較検討をさらに進める必要がある。その意味で今回提示した変遷はあくまで１案でしかない。

陣場・庄司原古墳群の周辺には上庄司原１・２号古墳と法華沢川を挟んで対岸（十二山山麓）に位置する自然石乱石積の初室古墳（本年度調査）、十二山山頂にあったと伝えられ竪穴式石室と推定されている古墳、主体部は不明であるが十二山の南東に位置する道上古墳（２基が東西に並ぶ）、法華沢川を挟んで本古墳群の南東に位置する河原石積の中古墳などが近接して立地する。これらの古墳もそれぞれが適当な距離を置き、地形ごとに１～２基で占地しており、地理的にみて陣場・庄司原古墳群と一連で古墳群を形成していた可能性が高い（範囲は必ずしも明瞭ではないが、横室古墳群と呼称されている）。この横室古墳群全体の変遷過程を究明することが当地（概ね現在の大字横室の範囲）の古墳時代後期～終末期社会の動向を解明する上でまず必要なことと思われる。それとともに、この古墳群に係わる集落の究明が必要なことはいうまでもない。現在のところ陣場遺跡の南に法華沢川を挟んで位置する田中田遺跡と、本古墳群中に位置する下庄司原東遺跡が本期の集落と確認されているが、これ以外にも本古墳群の東方、十二山の南方台地にも十分集落の存在が予想されるところであり、居住地と墓域を有機的に関連させた上で変遷を辿る必要がある。とりあえずの課題としては、まず、田中田遺跡集落との時期的な関連を明確にする必要がある。さらに、下庄司原東遺跡の整理作業が未着手であり、報告書刊行の予定も立っていないが、できるだけ早い時期に整理を行い、本遺跡についても古墳群との時期的な関連を究明したい。

以上のことは古墳時代後期～終末期の古墳を念頭においてのことであるが、古墳時代前期の方形周溝墓もある程度の距離を置いて占地しており、何らかの墓域形成上の伝統（規範）が古墳時代を通して存在している可能性を伺わせる。また、陣場・庄司原古墳群以外にも方形周溝墓が構築されている可能性も示唆する。さらに、陣場・庄司原古墳群内では墳墓の造営が中断しているが、十二山山頂の古墳や中古墳の存在も考慮すると横室古墳群全体としては古墳時代を通して墳墓が造営されていた可能性をも示唆するものである。

これには（小）地域としてのまとまりをどのように把握するかという問題がある。横室古墳群の周辺には６世紀前半の前方後円墳である九十九山古墳、６世紀後半の角閃石安山岩削石積石室の塩原塚古墳、米野古墳群などが存在し、これらとの関係究明も必要と思われる。また、陣場・庄司原古墳群とその周辺の古墳（横室古墳群）の墓域が散在するあり方が当地に特有の存在形態であるのかどうか、少なくとも一般的な群集墳とは異なっていると思われるが、富士見村内でも時沢古墳群などではより密集したあり方をしており、地形

的な制約によるのか、ある程度地域性を表すのかは現在のところ不明である。さらに、陣場・庄司原古墳群の小規模古墳が少ないことをどのように理解するか、一般的な群集墳を構成する比較的上位の古墳だけで構成されているようなあり方は、当地では造墓を許された階層がごく限られていたとも考えられ、それが地域性とすれば、他地域と当地の集団構造の相違の反映と考えられ、この違いをもたらした原因についても究明する必要があるが、これも今後の課題としたい。

以上まとまり無く記述してきたが、今回の陣場・庄司原古墳群の調査成果は、当地だけに留まらず、群馬県全体の古墳時代社会を解明する上でも重要な資料を提供するものと思われる。

注1：右島和夫氏の截石切組積石室の検討により、本古墳群の截石切組積石室である上庄司原4号古墳の構造は総社古墳群や吉岡町の南下古墳群と同じ技術的な系譜のもとに築造されたと判明している。削石積石室である上庄司原2号古墳も総社二子山古墳の後円部石室との類縁性が伺えることから、陣場・庄司原古墳群全体が総社古墳群被葬者の影響下にあると推測される。

注2：未盗掘ということには若干の疑問点がある。第1点は土師器の小型甕（この場合には閉塞上に置かれていたとも考えられる）と鐙鞍の不自然な出土状態、さらに、直刀の茎の出土状態である。第2点は人骨・人歯がまったく出土していない点である。石室の崩壊により遺存する条件が悪化したことも考えられるが、被葬者が改葬された可能性も完全には否定できない。これを盗掘というかどうかは別として、仮にこのような行為があったとすれば、その際に副葬品の一部が持ち去られた可能性も考えられる。

参考文献

富士見村誌編纂委員会『富士見村誌』富士見村役場　1954

群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編3　群馬県　1982

坂本美夫『馬具』考古学ライブラリー　34　ニュー・サイエンス社　1985

尾崎喜左雄『横穴式石室の研究』吉川弘文館　1966

松本浩一・桜場一寿・右島和夫「截石切組積横穴式石室における構築技術上の諸問題」『群馬県史研究』11・13号　1980・1981

松本浩一「横穴式石室における胴張りに関する一考察」『古代学研究』53号　古代学研究会　1968

松本浩一「群馬県における横穴式石室の前庭について」『古代学研究』80号　古代学研究会　1976

松本浩一「群馬県における終末期古墳の諸相」『群馬県史研究』5号　1977

右島和夫「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」『群馬県史研究』22号　1985

右島和夫「総社愛宕山古墳の墳丘・石室測量調査」『群馬県史研究』28号　1988

右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』12集　九州古文化研究会　1983

石坂茂ほか『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

上原啓巳ほか『石原稲荷山古墳』高崎市教育委員会　1981

梅沢重昭ほか『奥原古墳群』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984

小川良祐ほか『八幡山古墳石室復元報告書』埼玉県教育委員会　1981

小島敦子ほか『下触牛伏遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

小島純一『西原古墳群』群馬県勢多郡粕川村教育委員会　1985

小島純一『西迎遺跡』群馬県勢多郡粕川村教育委員会　1990

小林敏夫ほか『滝沢古墳』吉岡村教育委員会　1986

徳江秀夫ほか『荒砥ニ之堰遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985

羽鳥政彦『田中田・窪谷戸・見眼遺跡』群馬県富士見村教育委員会　1986

松村一昭『赤堀村峯岸山の古墳1・2』赤堀村教育委員会　1976・1977

相京建史『清里・長久保遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

吉田章一郎ほか『神奈川県秦野市桜土手古墳群の調査』桜土手古墳群発掘調査団　1989

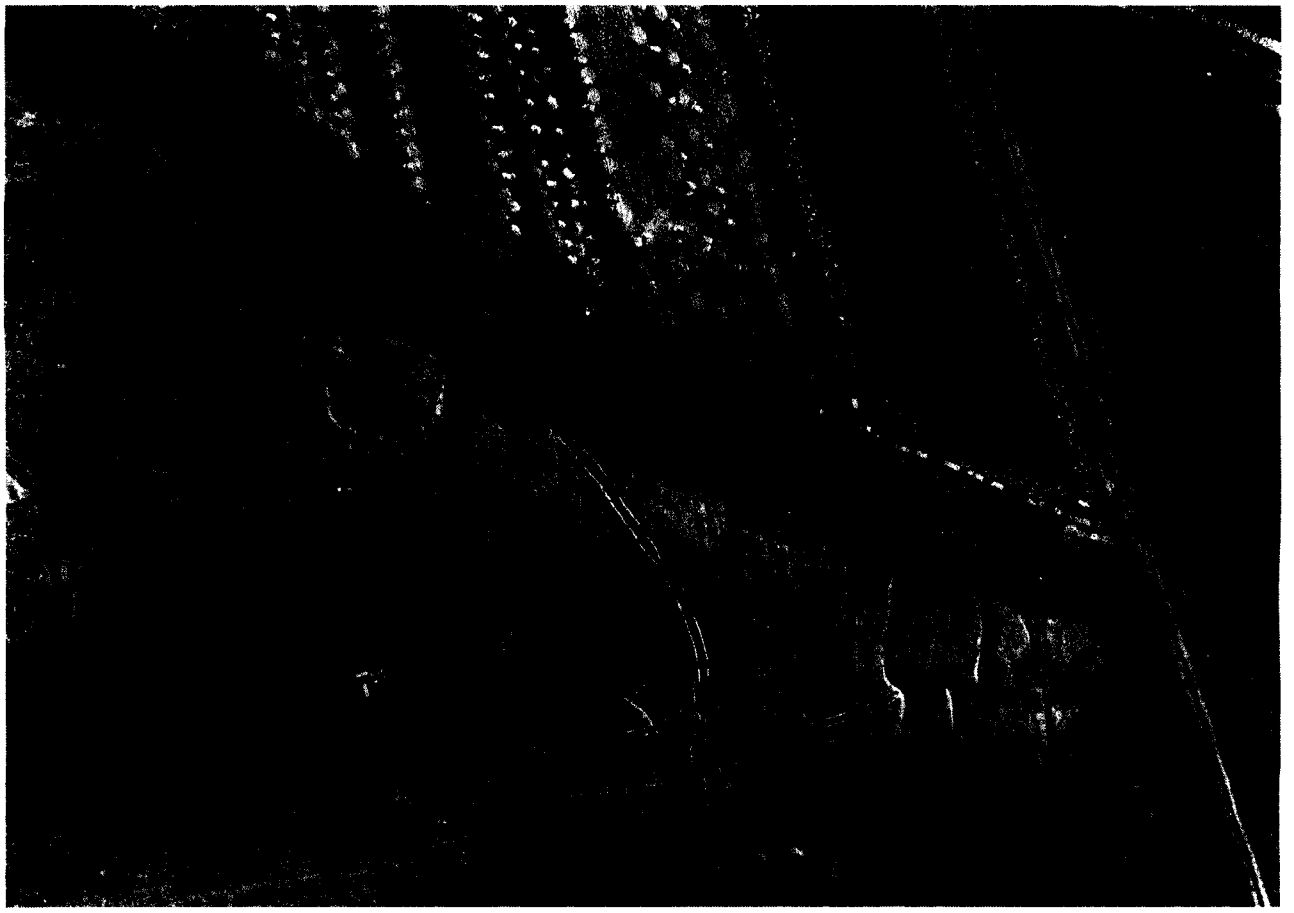
写　真　図　版

※注

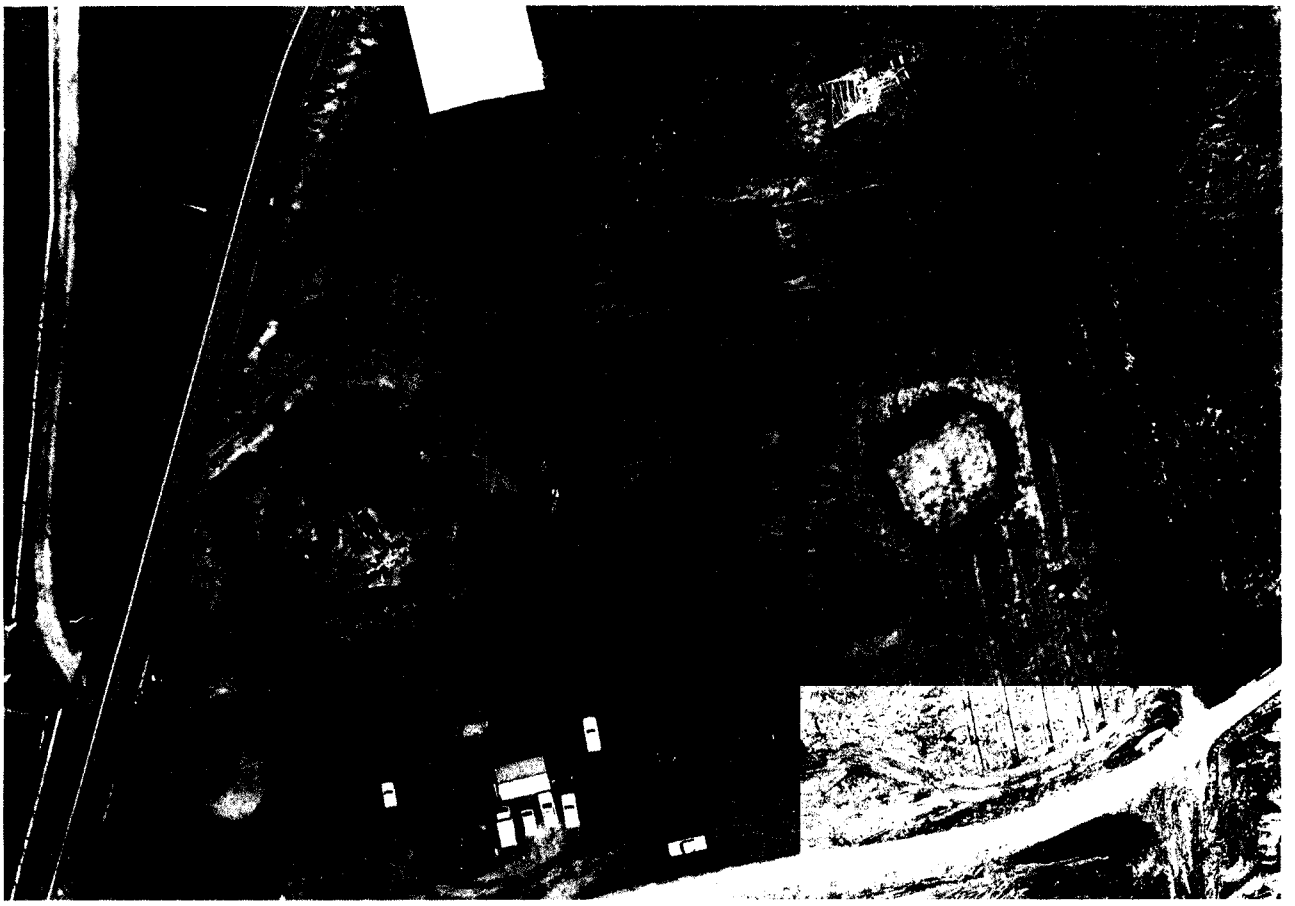
遺物写真図版では遺構名称を下記のように略記する。

下庄司原東遺跡１号方形周溝墓	→下１周
下庄司原東遺跡２号方形周溝墓	→下２周
下庄司原東遺跡３号方形周溝墓	→下３周
下庄司原東遺跡４号方形周溝墓	→下４周
上庄司原西遺跡１号方形周溝墓	→上１周
陣場１号古墳	→陣１
陣場２号古墳	→陣２
上庄司原１号古墳	→上１
上庄司原２号古墳	→上２
上庄司原３号古墳	→上３
上庄司原４号古墳	→上４

1．下庄司原東遺跡と下庄司原１号古墳（上空から－上が南）

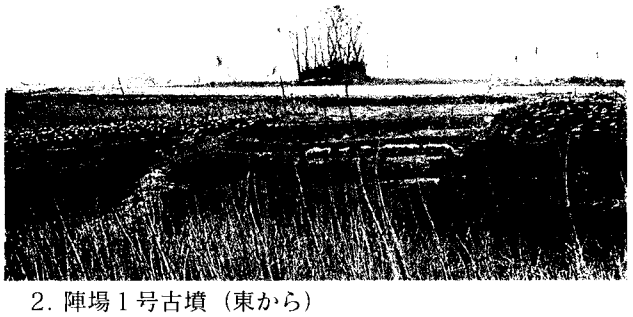


1．下庄司原東遺跡方形周溝墓群（上空から－上が東）



2．上庄司原４号古墳と上庄司原西遺跡（上空から－上が北）

1．上庄司原地区（十二山より－東から）



2．陣場１号古墳（東から）

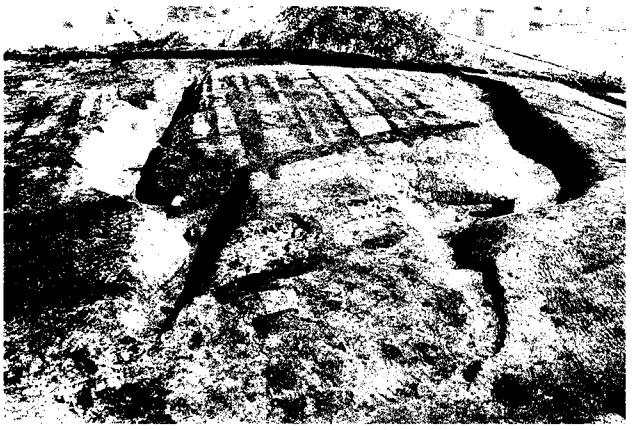
3．下庄司原１号古墳（北から）

4．上庄司原１号古墳（東から）

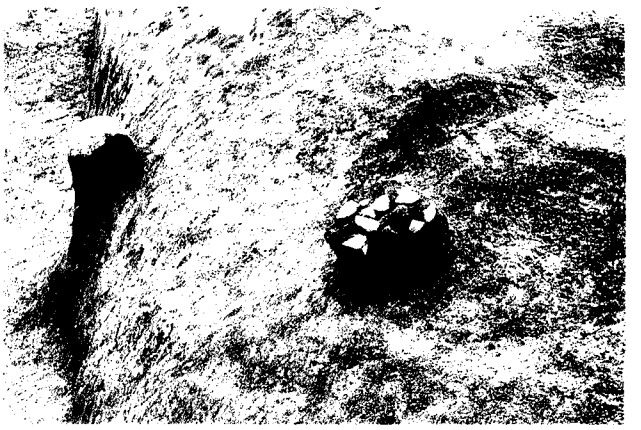
5．上庄司原２号古墳（東から）

PL 4　下庄司原東遺跡　1・2・3号方形周溝墓

1．1・2・3号方形周溝墓（上が東）

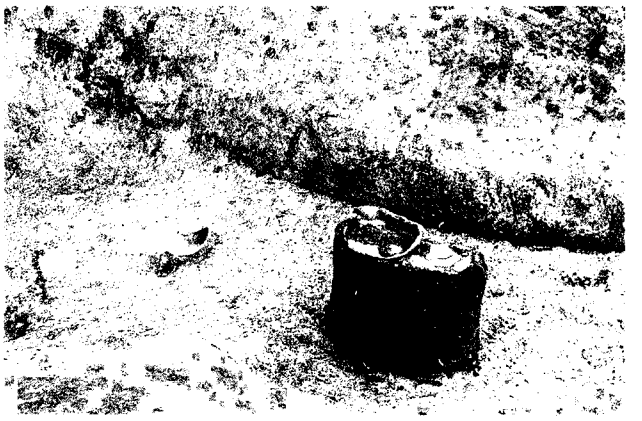


2．1号方形周溝墓　全景（西から）



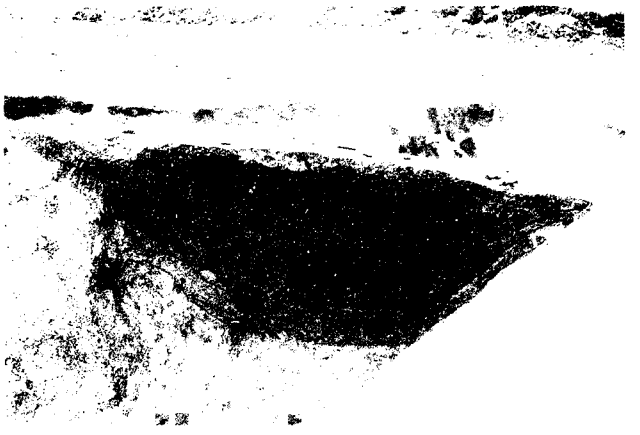
3．1号方形周溝墓　後方部北西端遺物出土状態

4．1号方形周溝墓　南側くびれ部遺物出土状態

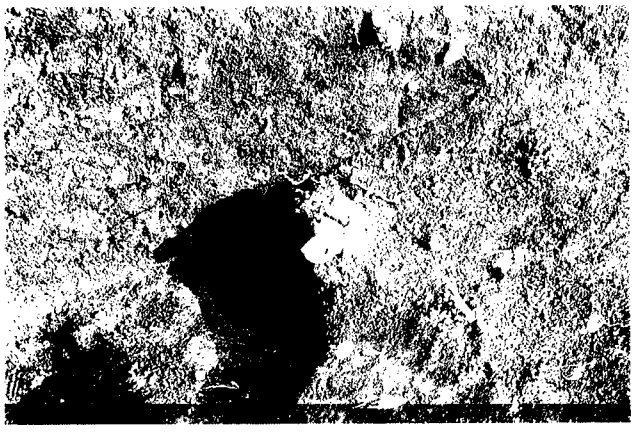


5．1号方形周溝墓　北側くびれ部遺物出土状態

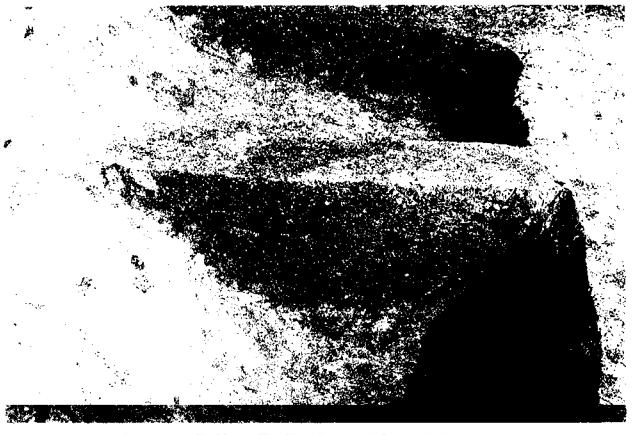
1．1号方形周溝墓　後方部北溝断面（西から）



2．1号方形周溝墓　前方部北溝断面（東から）

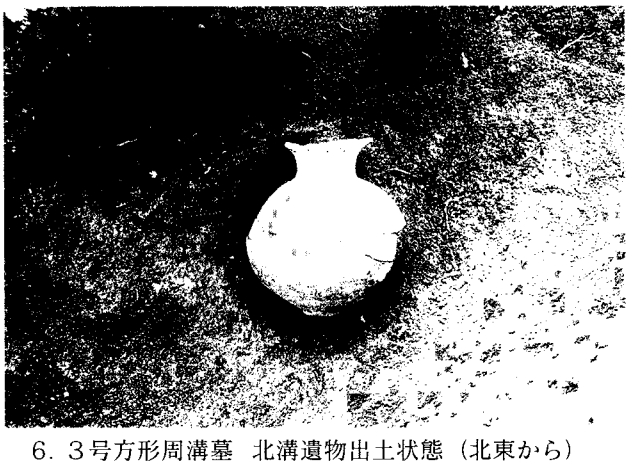


3．2号方形周溝墓　南溝遺物出土状態（西から）

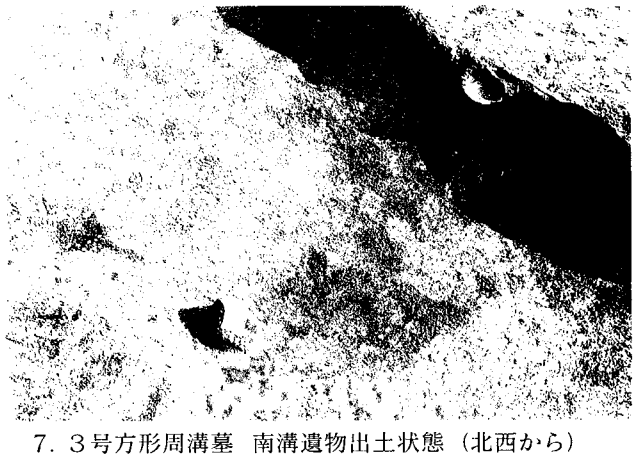


4．2号方形周溝墓　北溝断面（東から）

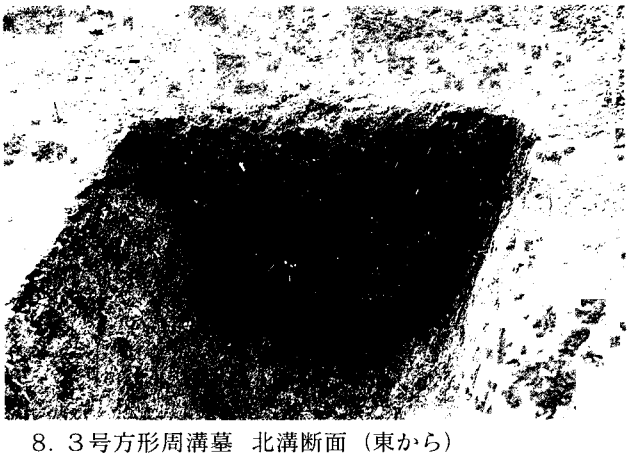
5．3号方形周溝墓　全景（西から）



6．3号方形周溝墓　北溝遺物出土状態（北東から）



7．3号方形周溝墓　南溝遺物出土状態（北西から）



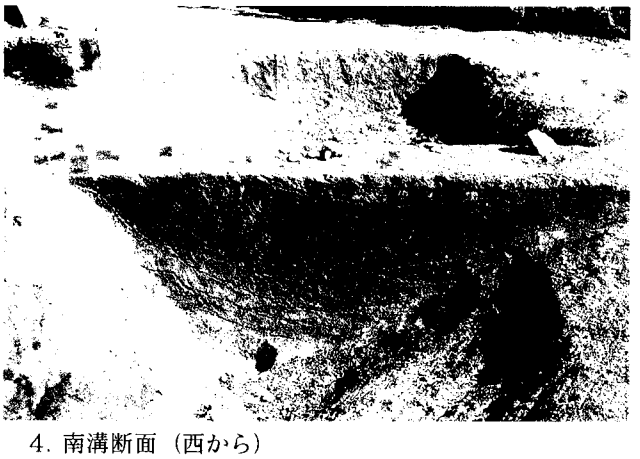
8．3号方形周溝墓　北溝断面（東から）

PL 6　下庄司原東遺跡　4号方形周溝墓

1．全景（北から）

2．全景（上が南）

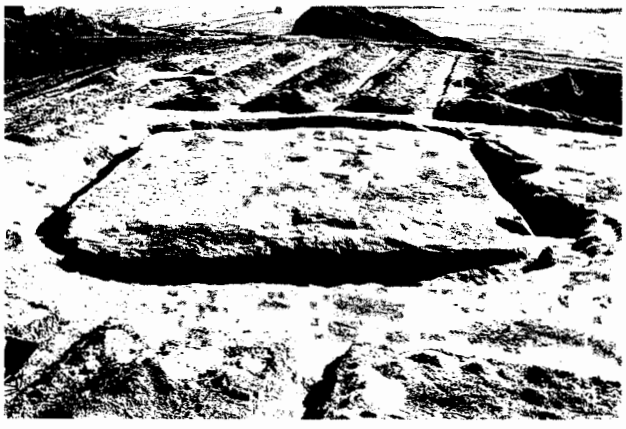
3．北溝西側遺物出土状態（東から）



4．南溝断面（西から）

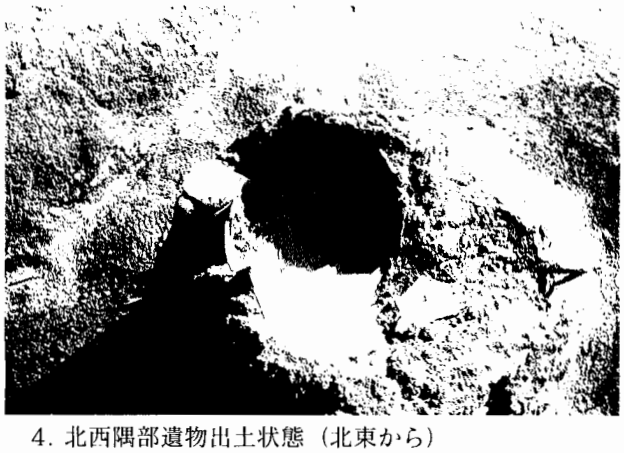
5．周溝底甕棺墓（東から）

1．全景（西から）

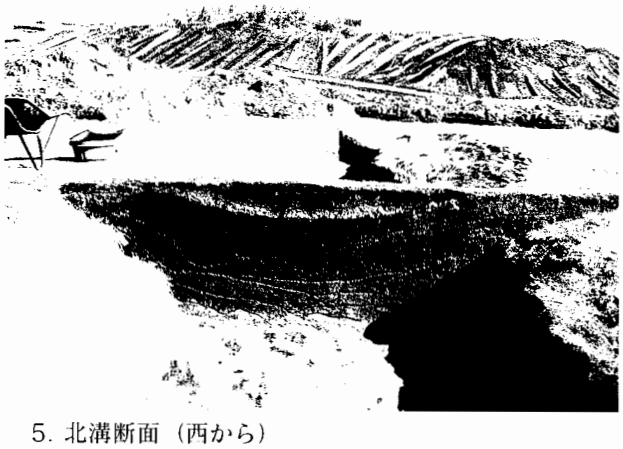


2．全景（北から）

3．西溝（北から）



4．北西隅部遺物出土状態（北東から）

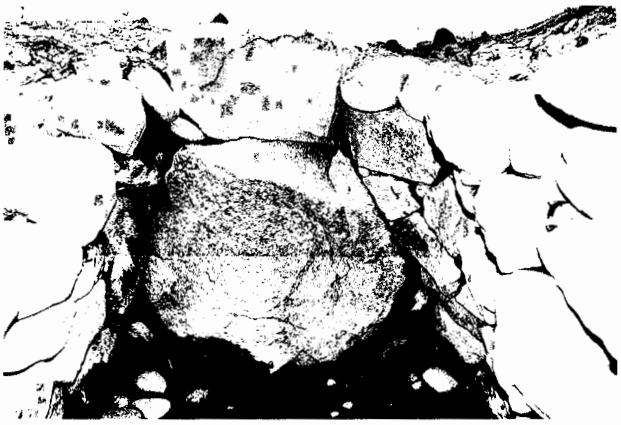


5．北溝断面（西から）

PL 8　陣場１号古墳

1．全景（上が北）

2．墳丘部全景（南から）

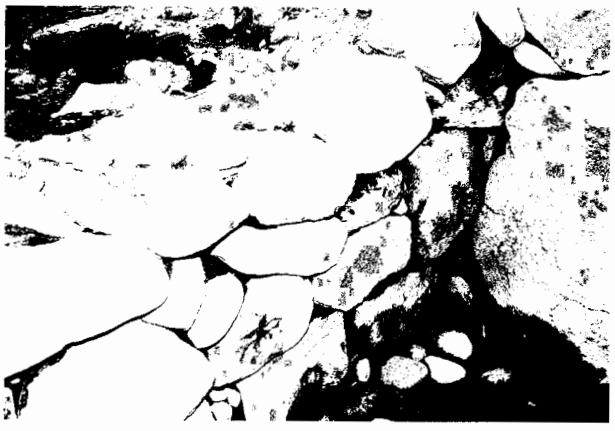

1. 奥壁

2. 玄室右壁

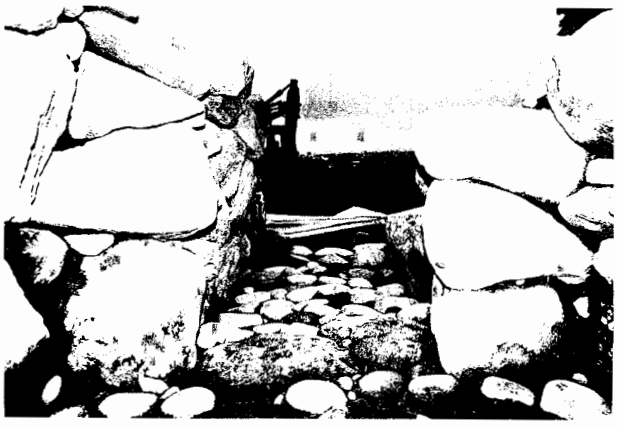
3. 玄室右壁

4. 羨道部右壁

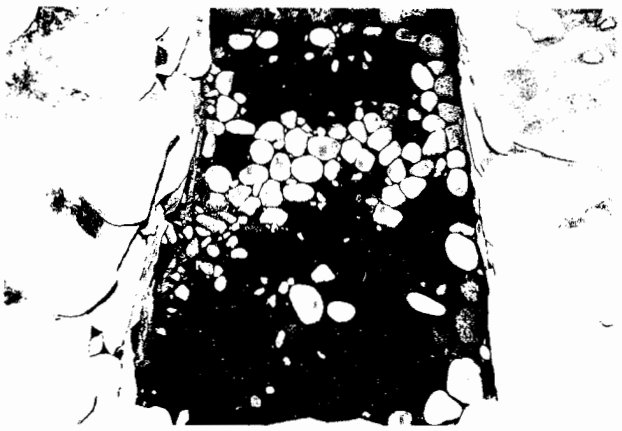
5. 玄室左壁


6. 玄室左壁

7. 石室入口


8. 玄室入口

PL 10　陣場１号古墳



1．玄室床面

2．玄室遺物出土状態

3．羨道部床面

4．前庭部石積

5．墳丘東側葺石

6．墳丘西側葺石

7．北側周堀断面（西から）

8．墳丘東側盛土断面（南から）

1. 全景（南から）

2. 玄室（南から）

3. 玄室（東から）

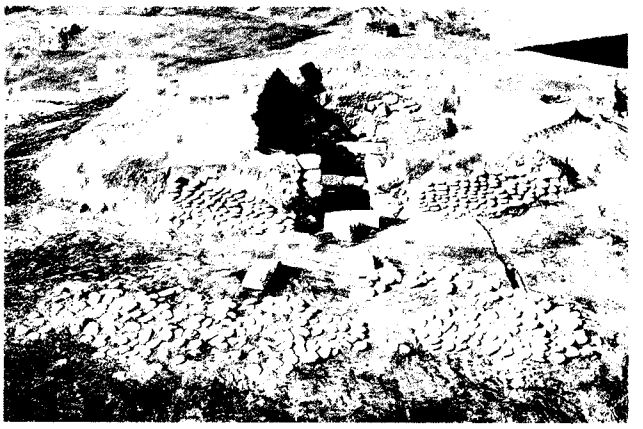
4. 遺物出土状態（東から）

5. 周堀断面（南西から）

PL 12　下庄司原１号古墳

1．全景（上が北）

2．全景（南から）



3．前庭部及び礫崩落状況（南から）

4．前庭部右側葺石（南東から）

5．墳丘東側葺石（東から）

1. 羨道部右壁

2. 羨道部左壁

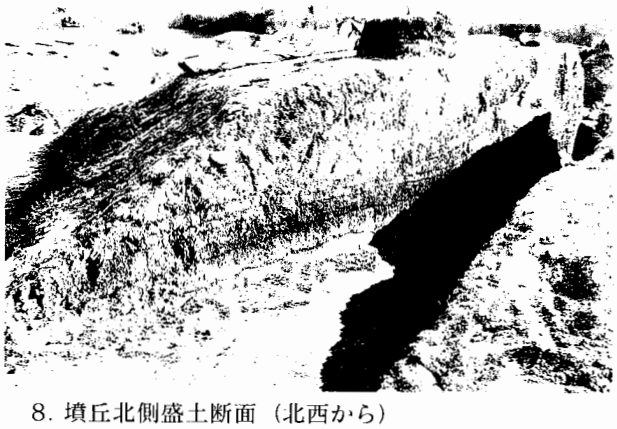
3. 玄室（北から）

4. 棡石（西から）

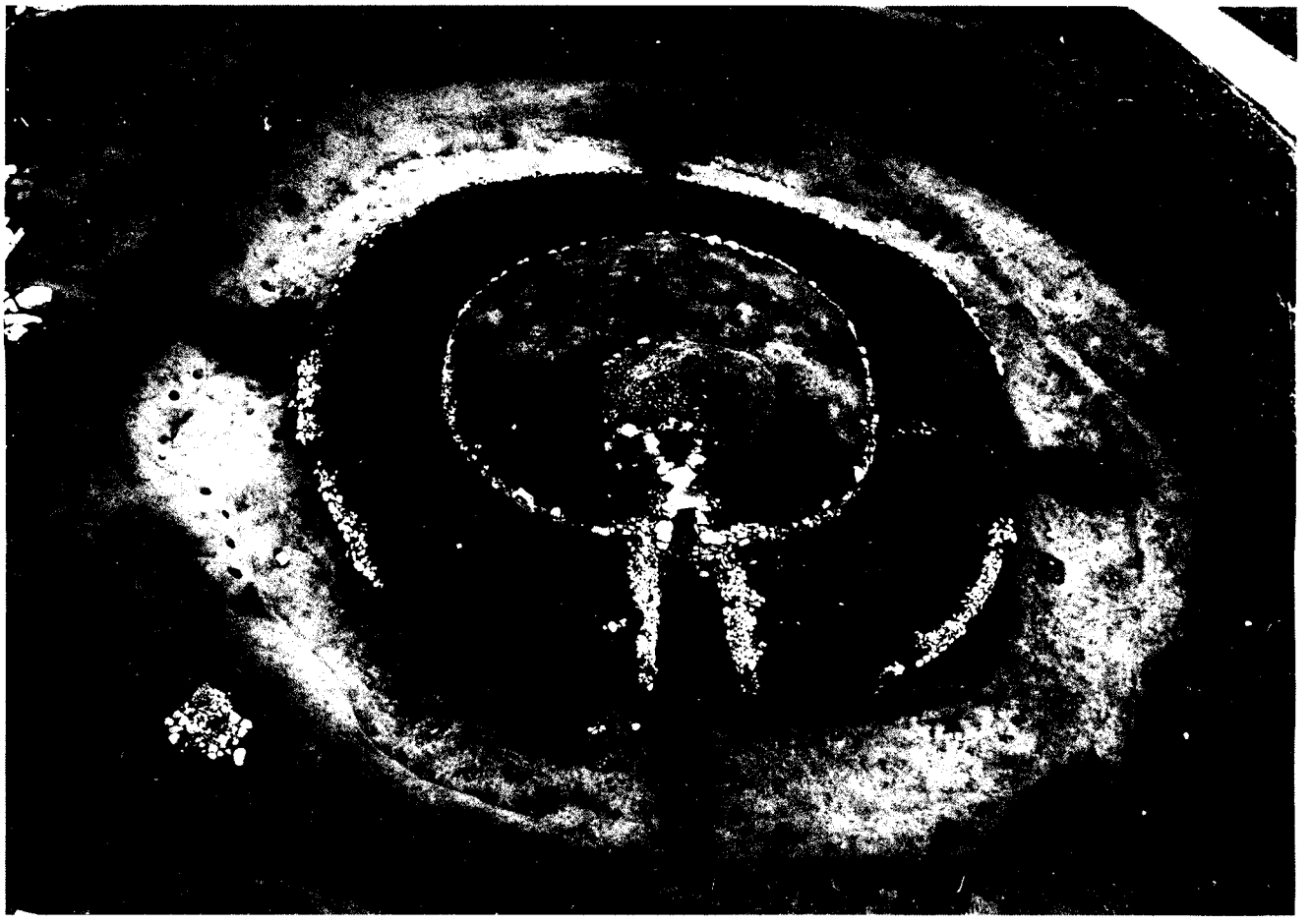
5. 玄室左壁の裏込め被覆（東から）

6. 切り石出土状況（石室入口前面）（西から）

7. 周堀断面（東から）


8. 墳丘北側盛土断面（北西から）

PL 14　上庄司原１号古墳



1．全景（南から）

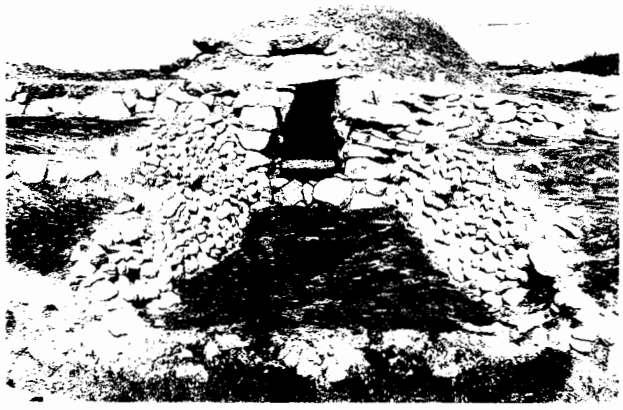
2．正面観（南から）

3．墳丘（北から）

4．墳丘（東から）

5．墳丘（東から）

1. 墳丘（北西から）



2. 石室入口及び前庭部

3. 前庭部左側石積

4. 前庭部右側石積

5. 石室入口閉塞状況

6. 石室入口閉塞状況

7. 羨道部閉塞状況上面（西から）

8. 前庭部遺物出土状況（南西から）

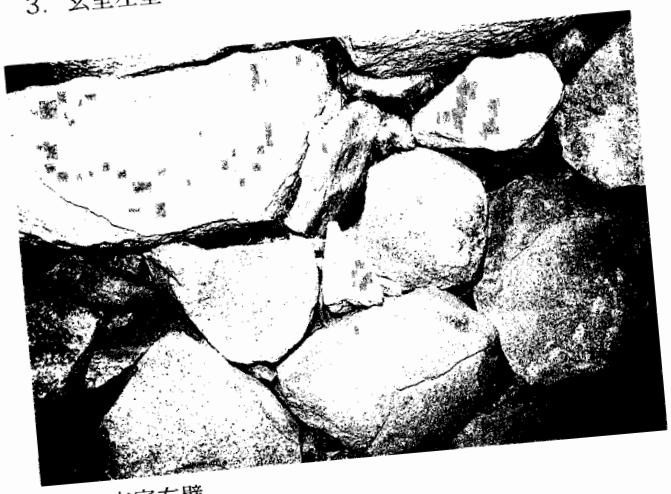
PL 16　上庄司原１号古墳

1．玄室左壁

2．玄室左壁

3．玄室左壁

4．玄室左壁



5．玄室右壁

6．玄室右壁

7．玄室右壁

8．玄室右壁

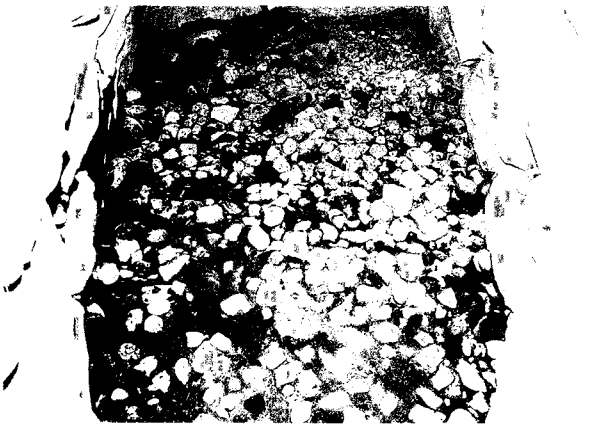
1. 石室入口

2. 玄室入口

3. 羨道部左壁

4. 羨道部右壁

5. 奥壁


6. 玄室床面

7. 玄室遺物出土状態

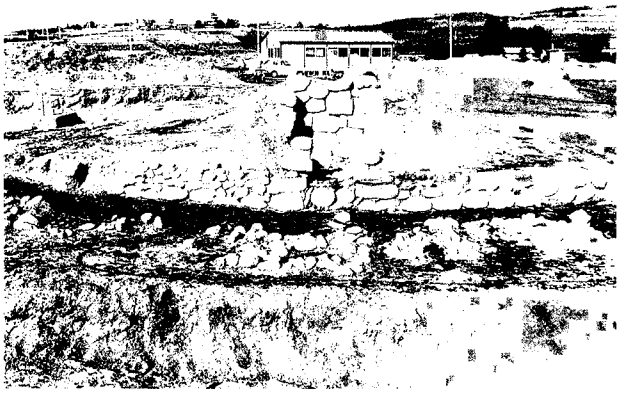
8. 玄室遺物出土状態

PL 18　上庄司原２号古墳

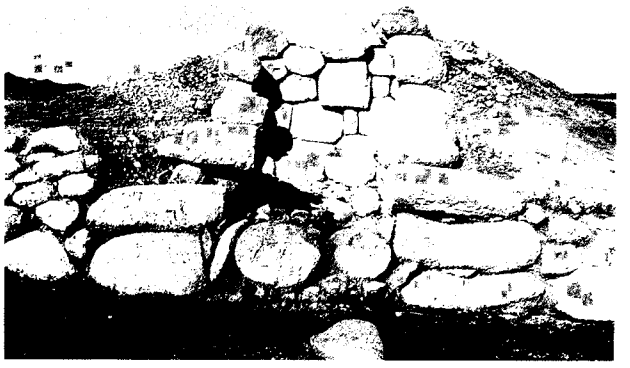
1．墳丘部全景　（南から）

2．全景（北西上空から）

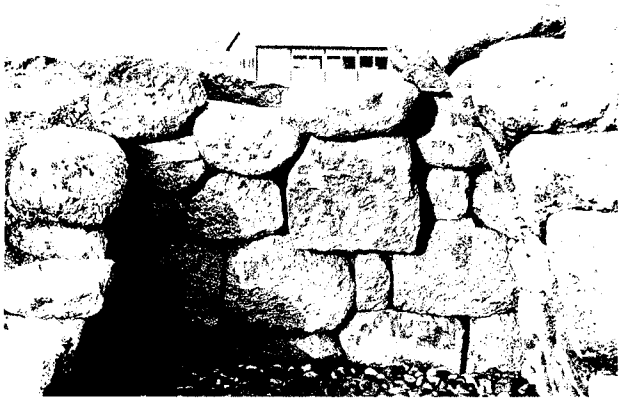
3．石室全景（上が北）



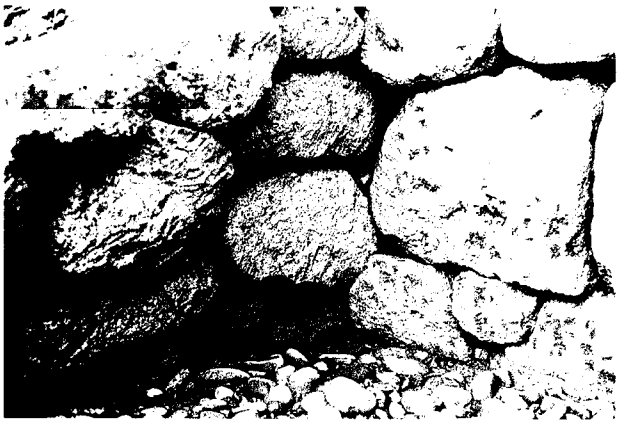
1. 正面観



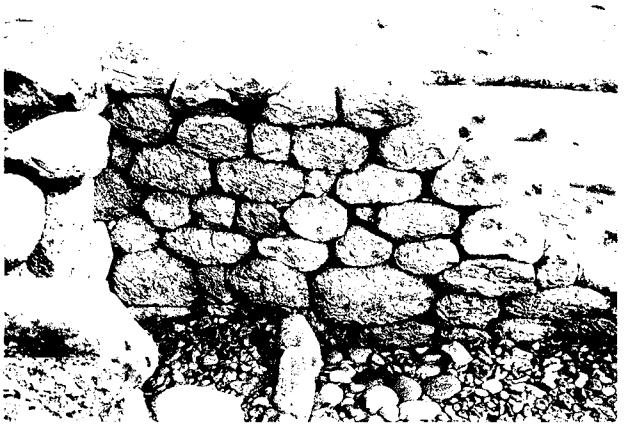
2. 石室入口



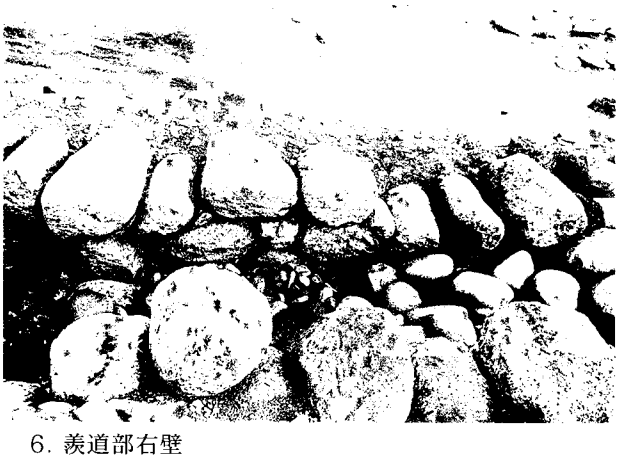
3. 奥壁



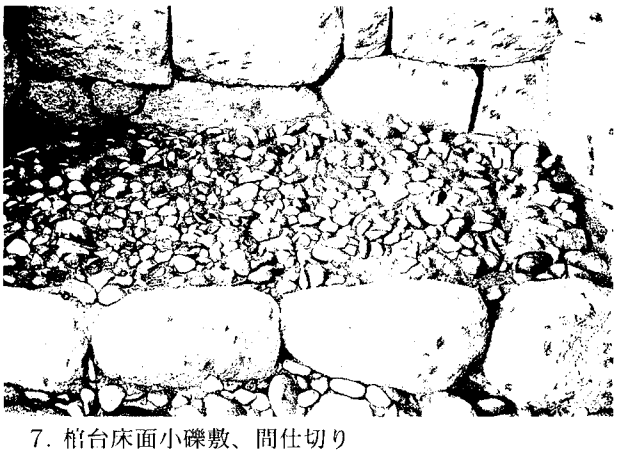
4. 石組の状況（奥壁～左壁）



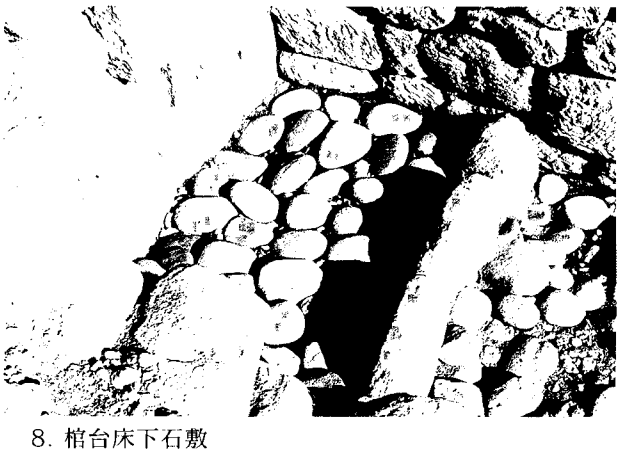
5. 玄室右壁



6. 羨道部右壁

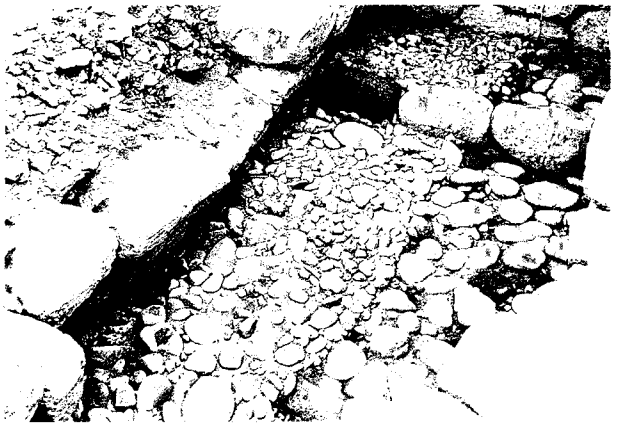


7. 棺台床面小礫敷、間仕切り

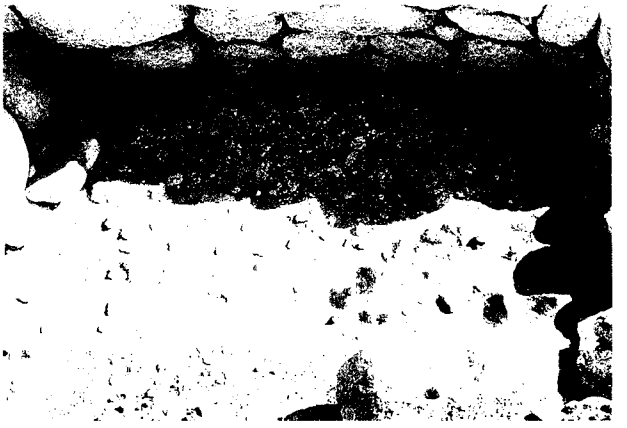


8. 棺台床下石敷

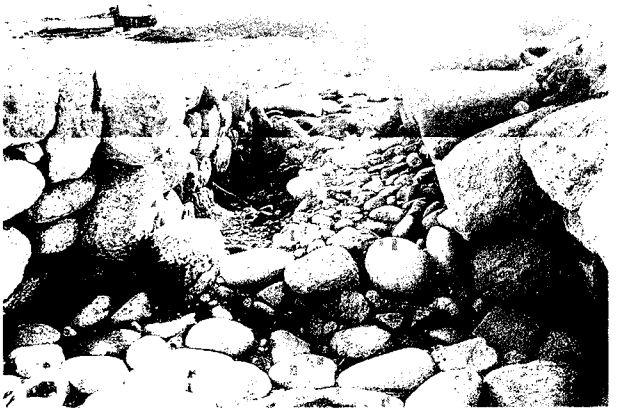
PL 20　上庄司原２号古墳



1．玄室床面、床面下石敷

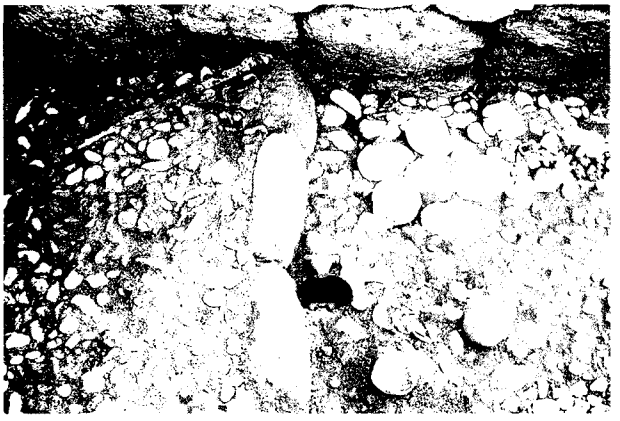


2．角閃石安山岩切屑出土状況

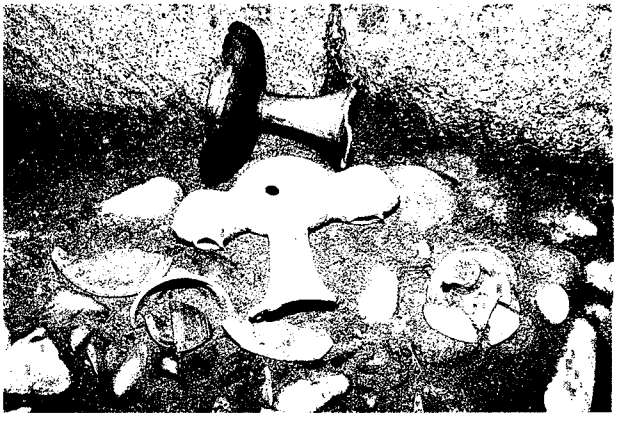


3．玄室入口

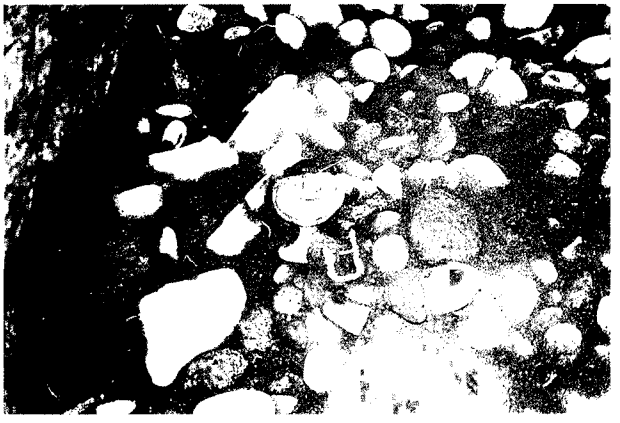
4．羨道部閉塞状況



5．玄室遺物出土状態



6．玄室遺物出土状態近接（瑯・高坏など）



7．玄室遺物出土状態近接（高坏・馬具など）

8．玄室遺物出土状態近接（鉄鏃・馬具など）

1. 墳丘北西部葺石（西から）

2. 石室前面礫出土状況（東から）

3. 東側周堀断面（南から）

4. 墳丘南側葺石崩落状況（東から）

5. 裏込めの状況（東から）

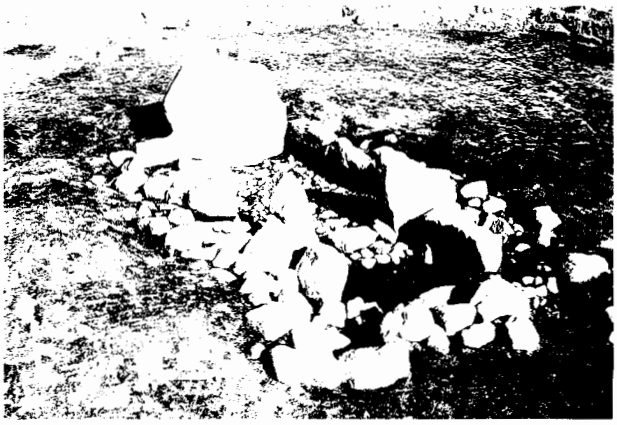
6. 墳丘西側盛土断面（北から）

7. 天井石崩落状況（西から）

8. 左壁崩落状況（北から）

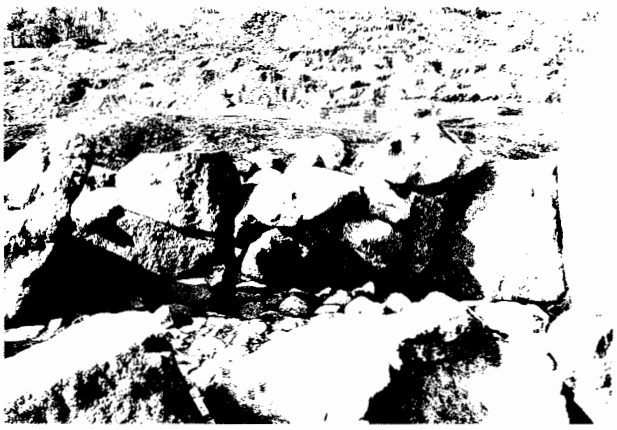
PL 22　上庄司原３号古墳

1．全景（南から）



2．石室全景

3．奥壁



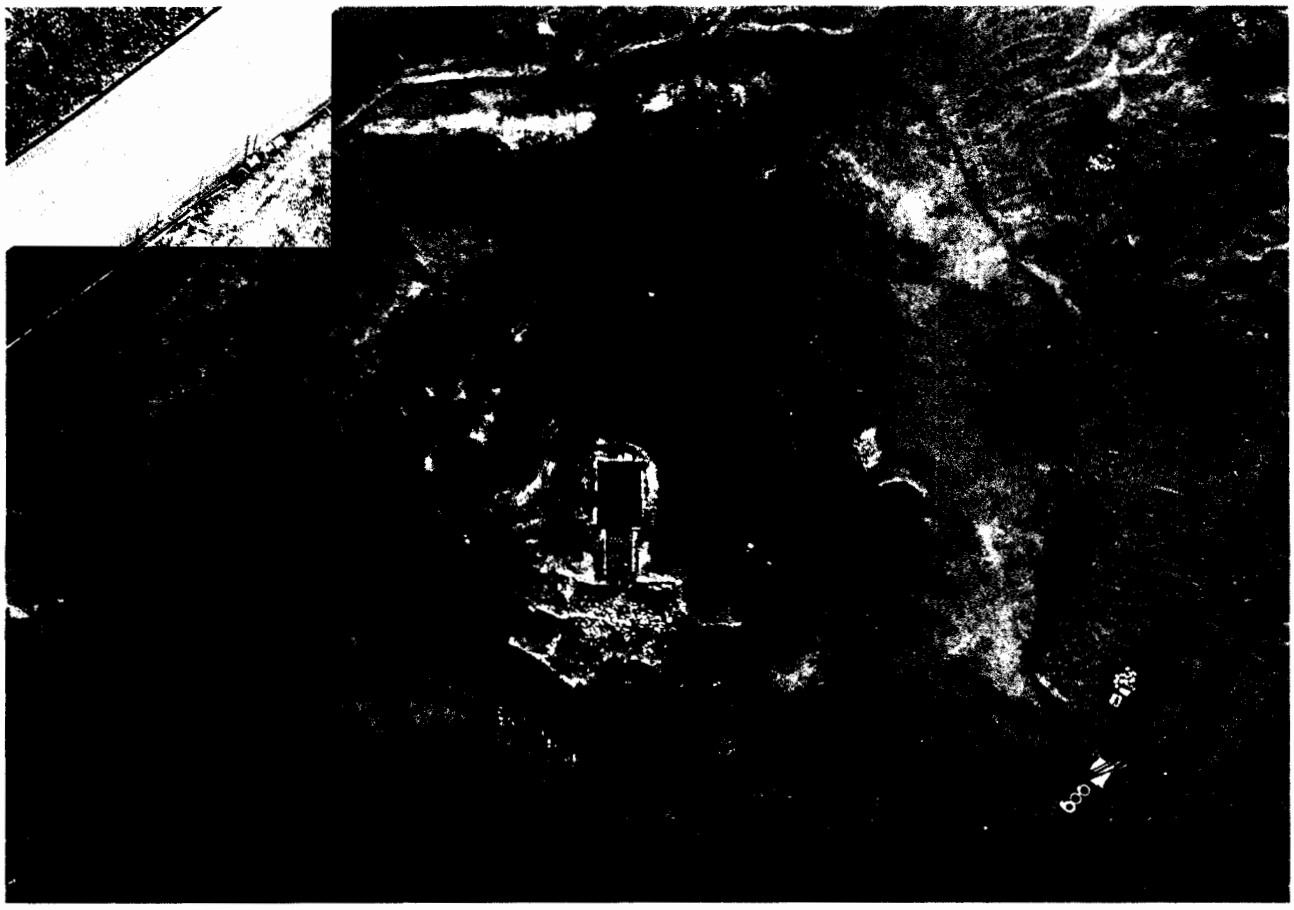
4．玄室左壁

5．玄室右壁

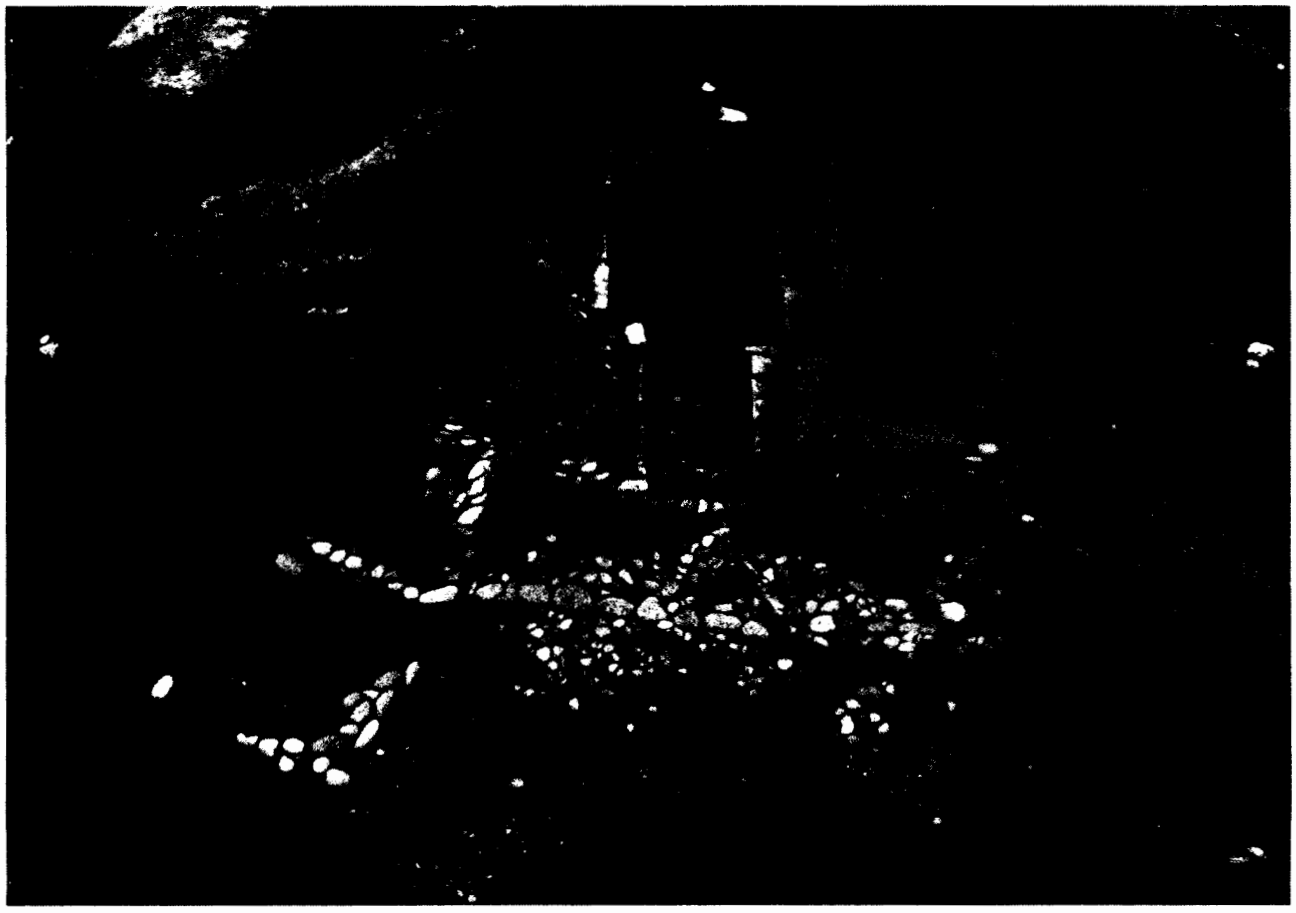
6．羨道部右壁

7．玄室床面

8．梱石（南西から）

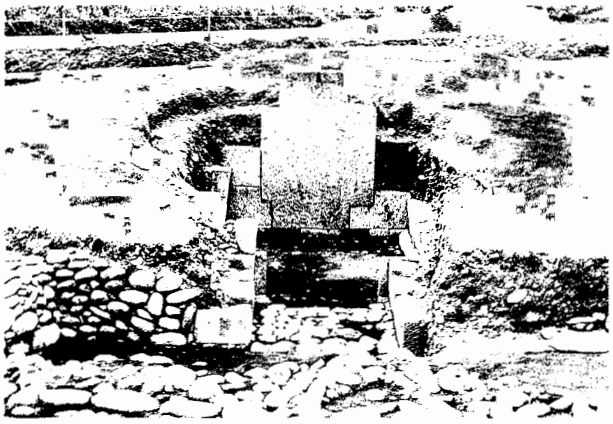


1. 全景（上が北）



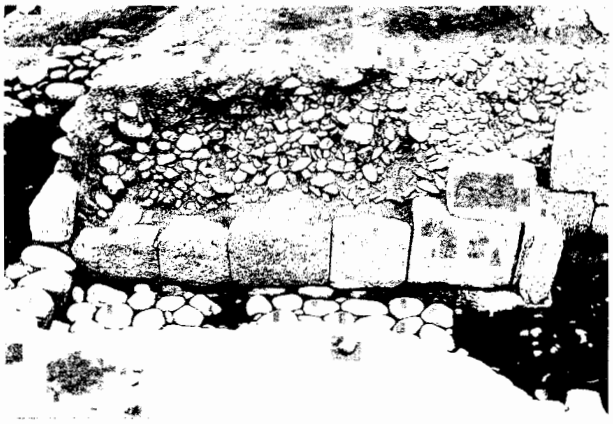
2. 石室・前庭部全景（南から）

PL 24　上庄司原４号古墳

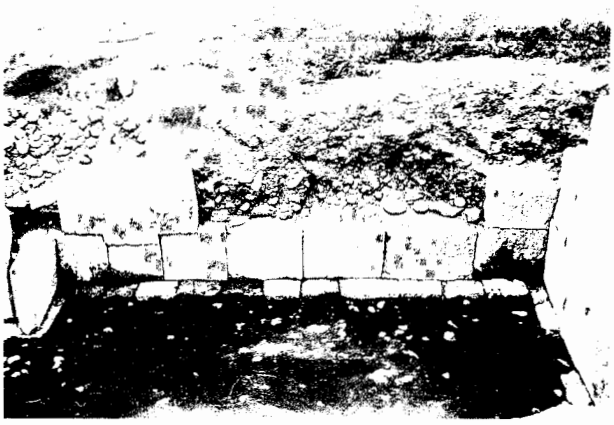


1．石室正面観

2．石室全景



3．羨道部左壁



4．玄室左壁

5．玄室右壁

6．羨道部右壁

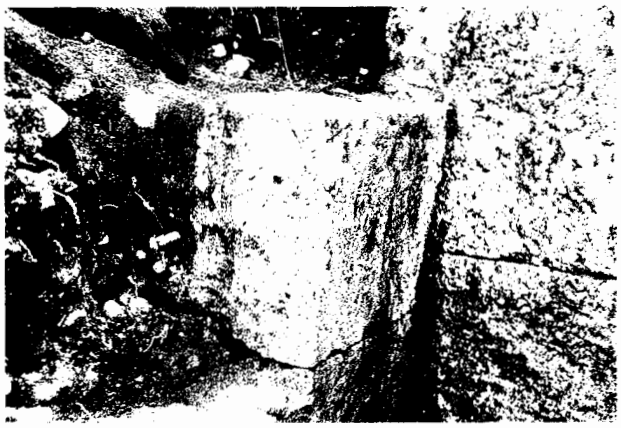
7．玄門

8．奥壁

1. 玄門（右側）

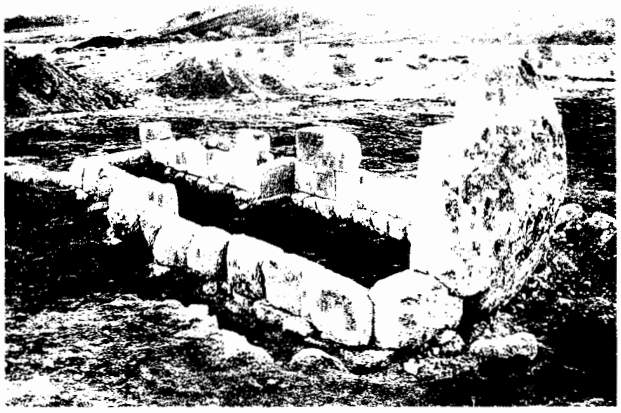
2. 玄門（左側）

3. 切組の状況（左壁）



4. 間知積みの状況（左壁）

5. 左側壁背面の状況、石室入口の造作



6. 右側壁・奥壁背面の状況

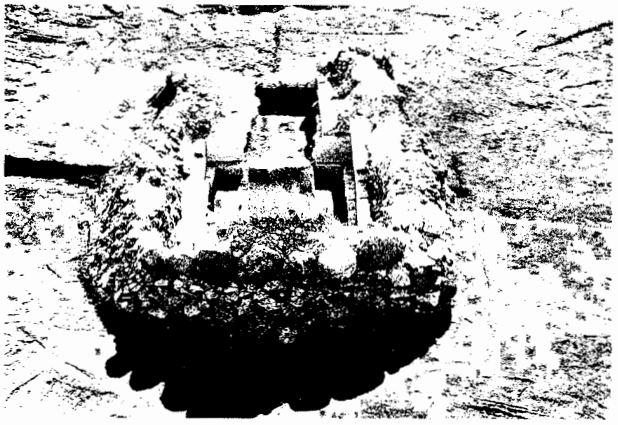
7. 奥壁～左壁の組み合わせ状況

8. 壁材背面の加工状況（左壁）

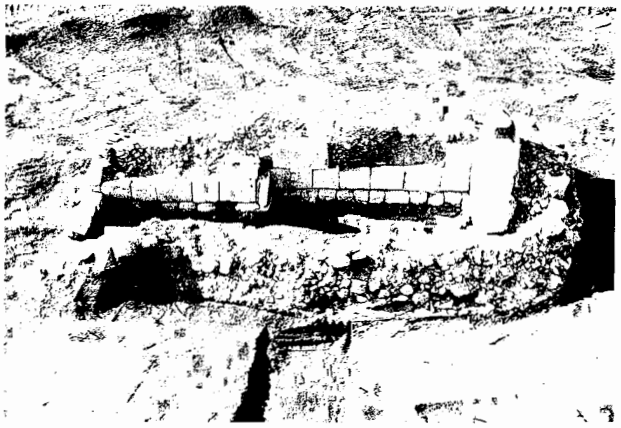
PL 26　上庄司原４号古墳

1．羨道入口

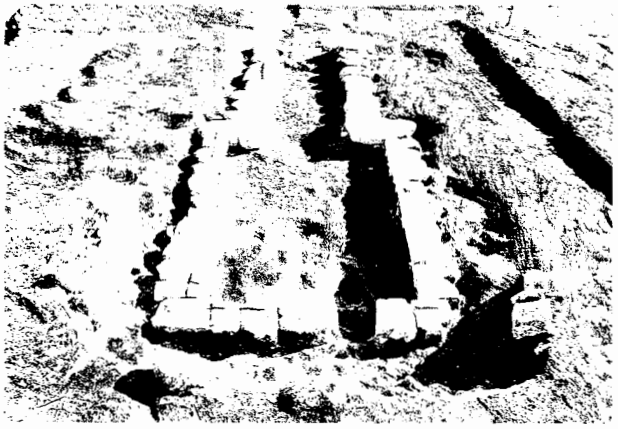
2．玄室床下石敷



3．石室裏込め、裏込め押さえ（奥壁側）

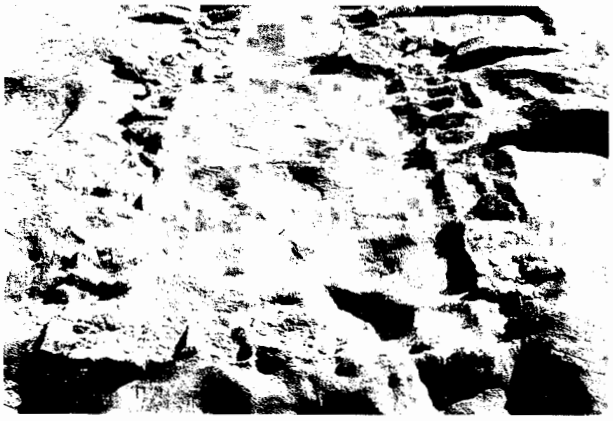


4．石室裏込め、裏込め押さえ（右壁側）

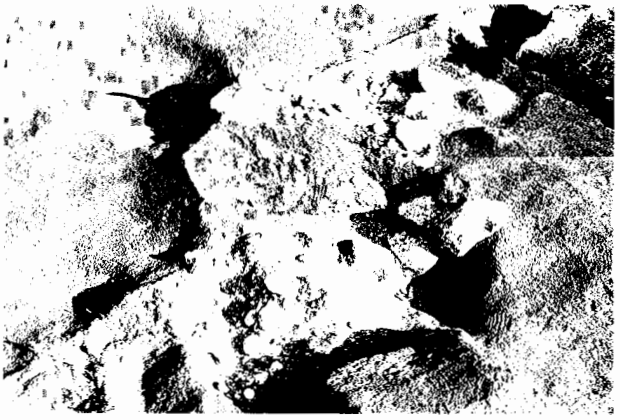


5．沓石全景

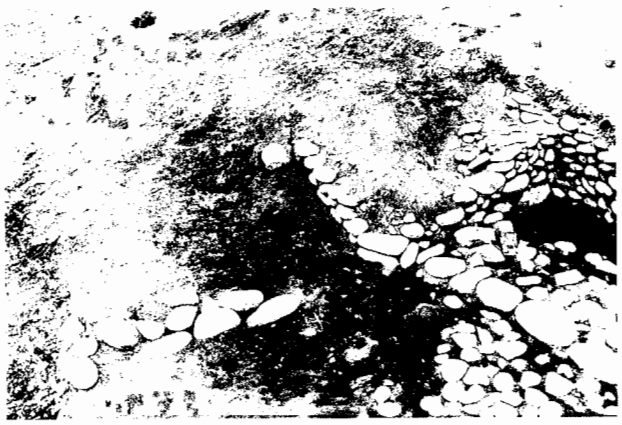
6．羨道部沓石



7．沓石の「かい石」出土状況（玄室）



8．沓石の「かい石」出土状況（左側玄門部）



1. 前庭部左側石積

2. 墳丘南東部葺石

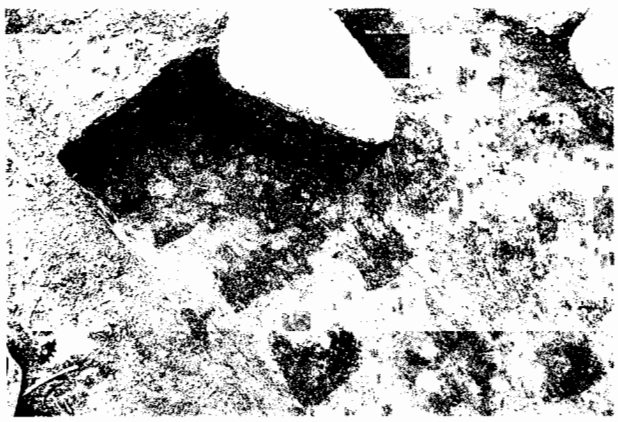
3. 西側周堀断面（南から）

4. 墳丘西側盛土断面（南西から）

5. 石室入口左側葺石

6. 石室入口左側葺石裏込（西から）

7. 石室床面下角閃石安山岩切屑出土状況



8. 石室掘り方底面工具痕検出状況

PL 28　方形周溝墓出土遺物

下1周－1

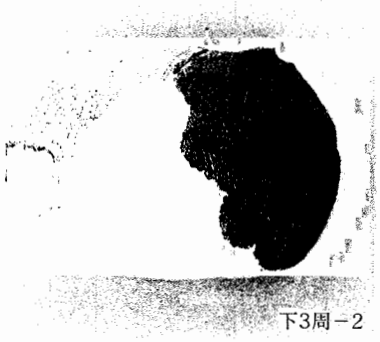
下1周－2

下1周－3

下1周－4

下2周－1

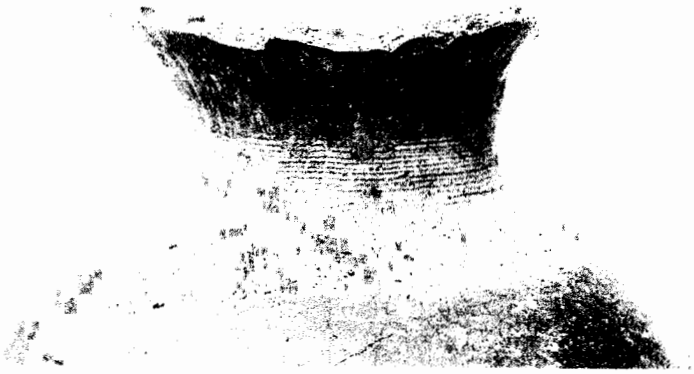
上1周－1

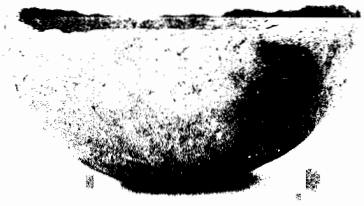

下3周－2

下3周－3

上1周－2

下3周－1




上1周－3

下4周－1

下4周－3

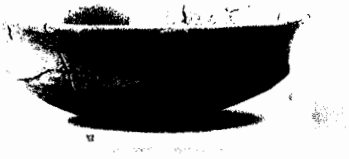
下4周－5

下4周－2

下4周－7

下4周－8

上1－2



上1－3

上1－4

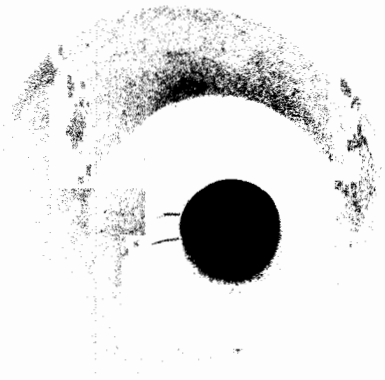
上1－1

上1－7

PL 30　陣場１号古墳・上庄司原２号古墳出土土器

陣1－1

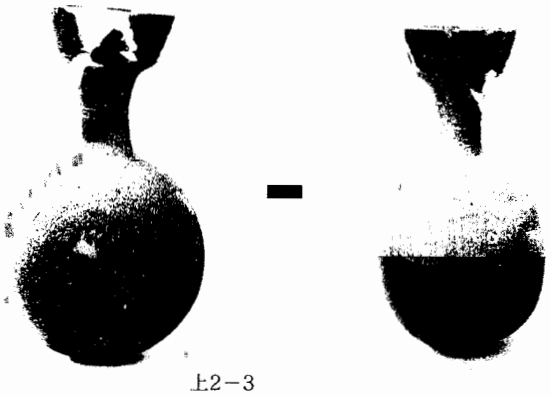
上2－1



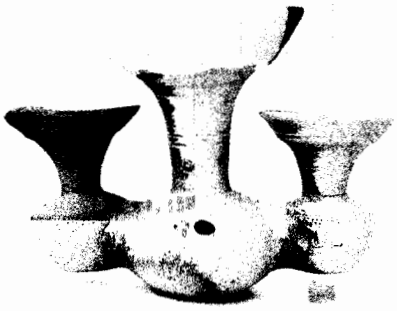
上2－6

上2－2

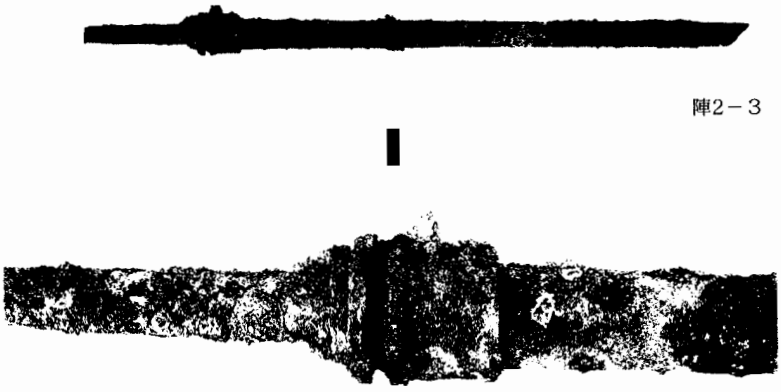
上2－5



上2－3



上2－4

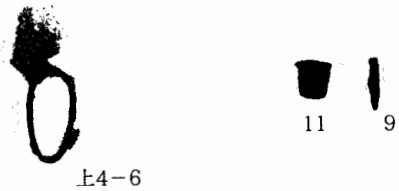


陣2－3

陣2

陣2－5

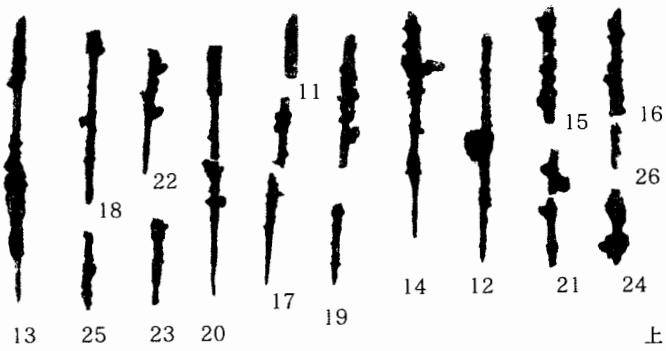
陣1－3



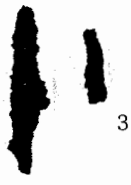
上4－6　　上4

陣1

上4



上1



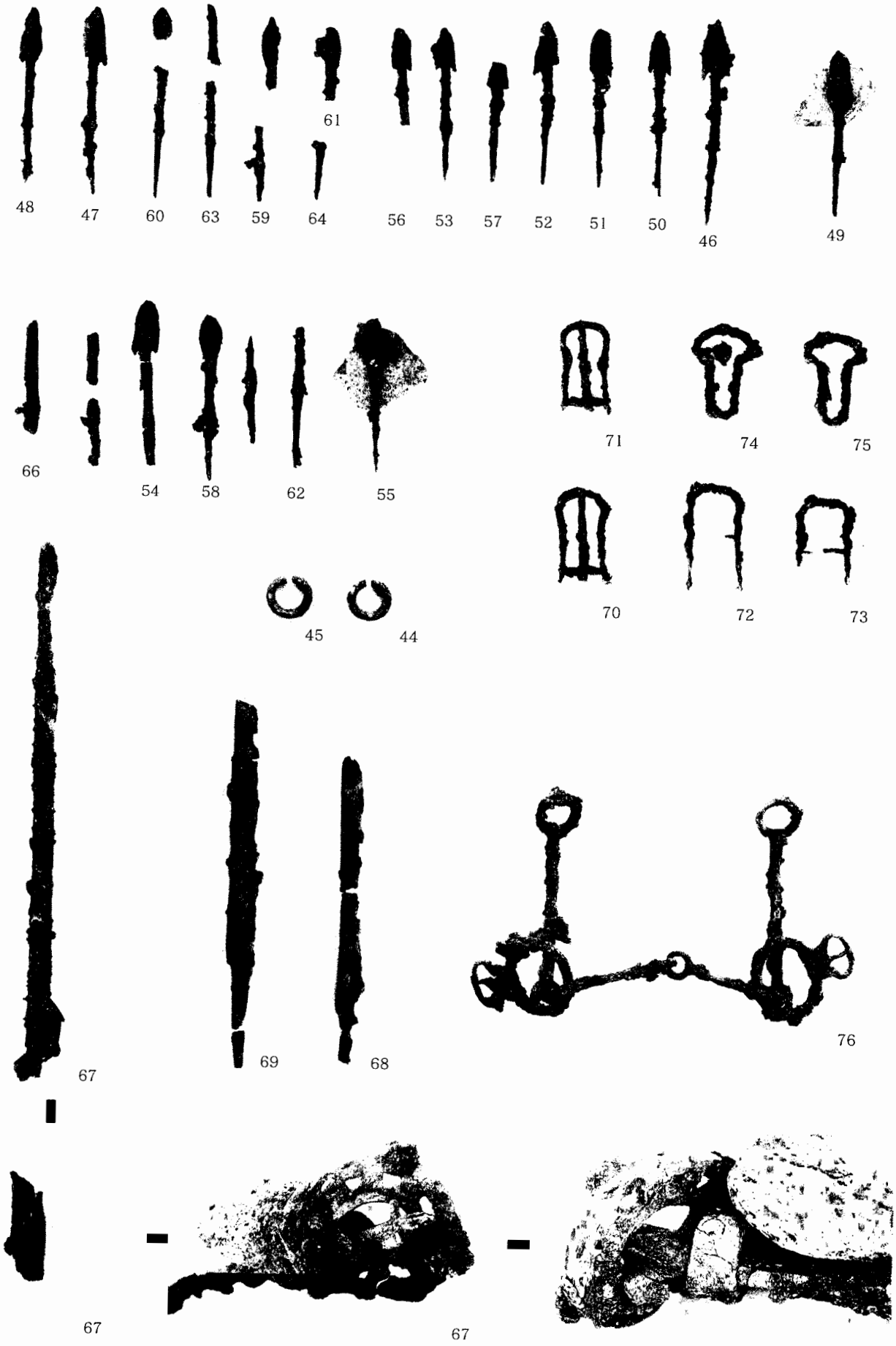
上3

上1

上1－29

上1

PL 32　上庄司原２号古墳出土遺物（鉄器等）



富士見地区遺跡群

陣場・庄司原古墳群

平成元年度県営圃場整備事業富士見地区
に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

平成３年３月24日　印刷

平成３年３月25日　発行

編集・発行／群馬県勢多郡富士見村教育委員会
群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1
電話（0272）88―6111

印　　刷／朝日印刷工業株式会社